IBM solidDB IBM solidDB Universal Cache バージョン 6.5

プログラマー・ガイド

IBM

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、375ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、バージョン 6 リリース 5 の IBM solidDB (製品番号 5724-V17) および IBM solidDB Universal Cache (製品番号 5724-W91)、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典: SC23-9870-01

IBM solidDB

IBM solidDB Universal Cache

Version 6.5

Programmer Guide

発行: 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当: トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2010.10

© Solid Information Technology Ltd. 1993, 2010

目次

図vii	ヒント	
	ODBC 拡張機能での追加の関数	
表 ix	ODBC API に対する solidDB 拡張機能	
変更の要約............xiii	行セットへのストレージの割り当て (バインディ	
	ング)	12
本書について xv	カーソル・サポート 4	
書体の規則 xv	ブックマークの使用 4	
構文表記法の規則 xvi	エラー・テキスト・フォーマット 4	
	エラー・メッセージの処理 5	
1 solidDB API 入門 1	トランザクションと接続の終了 5	51
solidDB ODBC ドライバー	アプリケーションの構成	52
solidDB ODBC ドライバー関数の使用 1	アプリケーションのテストとデバッグ 6	50
ODBC API での基本的なアプリケーション手順 2		
solidDB 接続ストリングのフォーマット 3	3 solidDB Light Client の使用 6	3
クライアント・サイド構成ファイル 5	solidDB Light Client とは	53
ODBC の非標準動作 6	solidDB Light Client の概要	53
solidDB JDBC ドライバー7	開発環境のセットアップとサンプル・プログラム	
solidDB Light Client	の作成	53
solidDB アプリケーション・プログラミング・インタ	開発環境セットアップの検証 6	
ーフェース (SA API)	サンプル・アプリケーションを使用したデータベ	
solidDB サーバー制御 API (SSC API) 8	ースへの接続6	55
クライアント・アプリケーションの作成 8	solidDB Light Client での SQL ステートメントの実	
クライアントとは	行	56
照会をサーバーに渡す方法8	solidDB Light Client の使用に関する考慮事項 6	
クライアントに結果を返す方法10	solidDB Light Client 関数のサマリー7	
ODBC ドライバーまたは Light Client ライブラリ	関数のサマリー	
一の使用	solidDB Light Client サンプル	
ステートメント・キャッシュ	solidDB Light Client 関数リファレンス	
77 1701 11704	SQLAllocConnect (ODBC 1.0, $\exists 7$)	
2 solidDB ODBC API の使用 13	SQLAllocEnv (ODBC 1.0、コア)	
solidDB ODBC ドライバーのインストール 13	SQLAllocStmt (ODBC 1.0、コア)	
solidDB ODBC ドライバー 3.51 機能のサポート	SQLConnect (ODBC 1.0、コア) 7	
Windows オペレーティング・システム上での使用法	SQLDescribeCol (ODBC 1.0、コア) 7	
の概要	SQLDisconnect (ODBC 1.0、コア) 8	
関数の呼び出し	SQLError (ODBC 1.0、コア) 8	30
データ・ソースへの接続	SQLExecDirect (ODBC 1.0、コア) 8	31
ネットワーク名と接続ストリングの構文19	SQLExecute (ODBC 1.0、コア) 8	32
論理データ・ソース名の使用	SQLFetch (ODBC 1.0、コア) 8	32
空のデータ・ソース名	SQLFreeConnect (ODBC 1.0、コア) 8	33
Windows 用の solidDB ODBC データ・ソースの	SQLFreeEnv (ODBC 1.0、コア) 8	33
構成	SQLFreeStmt (ODBC 1.0、コア) 8	34
unixODBC を使用した solidDB ODBC ドライバ	SQLGetCursorName (ODBC 1.0、コア) 8	35
一の使用	SQLGetData (ODBC 1.0、レベル 1) 8	35
ユーザー・ログイン情報のリトリーブ 26	SQLNumResultCols (ODBC 1.0、コア) 8	
ODBC ハンドル妥当性検査	SQLPrepare (ODBC 1.0、コア) 8	
トランザクションの実行	SQLRowCount (ODBC 1.0、コア) 8	
データ・ソースのカタログに関する情報のリトリー	SQLSetCursorName (ODBC 1.0、コア) 9	
ブ	SQLTransact (ODBC 1.0、コア) 9	
SQL に対する ODBC 拡張機能の使用	非 ODBC solidDB Light Client 関数 9	
プロシージャー 31		

4 apliand IDDC ドニノバ の休田 00	C-C
4 solidDB JDBC ドライバーの使用 99	SaCursorColTime
solidDB JDBC ドライバーとは99	SaCursorColTimestamp
solidDB JDBC ドライバーの概要	SaCursorDelete
solidDB JDBC ドライバーの登録102	SaCursorDescending
データベースへの接続	SaCursorEnd
solidDB および JDBC に関する特記事項 104	SacursorEqual
JDBC ドライバーのインターフェースおよびメソッ	SacursorErrorInfo
F	SaCursorFree
solidDB JDBC ドライバーの拡張機能 112	SaCursorInsert
WebSphere の互換性	
JDBC での接続タイムアウト	SaCursorLike
非標準の接続プロパティー	
JDBC 2.0 オプション・パッケージ API のサポート 118	SaCursorOpen
JDBC 接続のプーリング	SaCursorOrderbyVector
solidDB の接続済み RowSet クラス:	SaCursorPrev
SolidJDBCRowSet	SaCursorReSearch
Java Naming and Directory Interface (JNDI) 128	SaCursorSearch
コード例	SaCursorSearchByRowid
solidDB JDBC ドライバー型変換マトリックス 140	SaCursorSearchReset
- UIDD 04 0/HT	SaCursorSetLockMode
5 solidDB SA の使用 143	SaCursorSetPosition
solidDB SA とは	SaCursorSetRowsPerMessage
solidDB SA の概要	SaCursorUpdate
SQL を使用せずに solidDB SA を使用したデータ	SaDateCreate
の書き込み	SaDateFree
SQL を使用せずに solidDB SA を使用したデータ	SaDateSetAsciiz
の読み取り	SaDateSetTimet
solidDB SA を使用した SQL ステートメントの実	SaDateToAsciiz
行	SaDateToTimet
トランザクションと自動コミット・モード 150	SaDefineChSet
データベース・エラーの処理	SaDfloatCmp
solidDB SA に関する特記事項	SaDfloatDiff
solidDB SA 関数リファレンス	SaDfloatOverflow
SaArrayFlush	SaDfloatProd
SaArrayInsert	SaDfloatQuot
SaColSearchCreate	SaDfloatSetAsciiz
SaColSearchFree	SaDfloatSum
SaColSearchNext	SaDfloatToAsciiz
SaConnect	SaDfloatUnderflow
SaCursorAscending	SaDisconnect
SaCursorAtleast	SaDynDataAppend
SaCursorAtmost	SaDynDataChLen
SaCursorBegin	SaDynDataClear
SaCursorClearConstr	SaDynDataCreate 200
SaCursorColData	SaDynDataFree
SaCursorColDate	SaDynDataGetData
SaCursorColDateFormat	SaDynDataGetLen
SaCursorColDfloat	SaDynDataMove
SaCursorColDouble	SaDynDataMoveRef
SaCursorColDynData	SaDynStrAppend
SaCursorColDynStr	SaDynStrCreate
SaCursorColFloat	SaDynStrFree
SaCursorColInt	SaDynStrMove
SaCursorColLong	SaErrorInfo
SaCursorColNullFlag	SaGlobalInit
SaCursorColStr 173	SaSetDateFormat

SaSetSortBufSize	パラメーター・データ型
SaSetSortMaxFiles 209	ODBC のリテラル
SaSetTimeFormat	予約キーワードのリスト
SaSetTimestampFormat	사역 도 <i>그</i>
SaSQLExecDirect	付録 E. データ型 287
SaTransBegin	SQL データ型
SaTransCommit	C データ型
SaTransRollback	データ型 ID
SaUserId	SQL データ型
	C データ型
6 Unicode の使用 215	数値リテラル
Unicode とは	数値データ型の精度と位取りのオーバーライド用デ
Unicode データベースの設計	フォルト
Unicode での solidDB ツールの使用 219	データ型 ID および記述子
Unicode データベースと部分的 Unicode データベー	小数桁数
ス間の互換性	転送オクテット長
部分的 Unicode データベースの Unicode への変	グレゴリオ暦の制約
換	SQL から C データ型へのデータ変換 307
Unicode に対応したアプリケーションの開発 223	SQL から C へのデータ変換表 309
ODBC アプリケーション・データベースおよび	SQL から C へのデータ変換例 319
Unicode データベース	C から SQL データ型へのデータ変換 320
JDBC アプリケーション・データベースおよび	C から SQL へのデータ変換表 322
Unicode データベース	C から SQL へのデータ変換例 333
7 トランザクション・ログ・リーダーの	付録 F. スカラー関数 335
使用 229	ODBC および SQL-92 のスカラー関数 335
ログ・リーダーを使用したアプリケーション開発に	ストリング関数
関する考慮事項	数字関数
ログ・リーダーの構成	日時関数
ログ・リーダーを使用したログ・データの読み取り 232	システム関数
ログ・レコードのパーティショニングおよびフィル	明示的なデータ型変換
タリング	SQL-92 CAST 関数
パーティションの作成および削除234	
パーティション・フィルターの使用	付録 G. タイムアウト制御 351
トランザクション・バッチの設定235	クライアント・タイムアウト
	サーバー・タイムアウト
付録 A. solidDB がサポートする	HotStandby タイムアウト
ODBC 関数	
ODDO [A]\$X	付録 H. クライアント・サイド構成パラ
付録 B. solidDB ODBC ドライバー	メーター
3.5.1 属性のサポート 247	solid.ini 構成ファイルを使用したクライアント・サ
	イド・パラメーターの設定
付録 C. エラー・コード 255	Client セクション
門郵 C. エノ ・コード 233	Com セクション
付録 D. ODBC に関する SQL 文法の最	Data Sources
小要件	索引
SQL ステートメント	
制御ステートメント (論理条件) 278	特記事項
データ型のサポート	TARGET ALL I I I I I I I I I I I I I I I I I I

	_
ı	444
ı	
ı	2
ı	~

表

1.	書体の規則..............	. XV	49.	コンストラクター	. 118
2.	構文表記法の規則	xvi	50.	コンストラクター	. 119
3.	接続ストリングのオプション	. 3		setDescription	
4.	接続ストリングのオプション	. 20		getDescription	
5.	solidDB がサポートするヒント	. 34		setURL	
	ODBC 拡張機能での追加の関数			getURL	
	ODBC API に対する solidDB 固有の ODBC			setUser	
	関数	. 38		getUser	
8.	サンプル結果セット			setPassword	
	サンプル結果セット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			getPassword	
	サンプル結果セット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			setConnectionURL	
	サンプル結果セット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			getConnectionURL	
	サンプル結果セット			getLoginTimeout	
	データ・ソース内のエラー			getLogWriter	
14	サンプル・エラー・メッセージ	50		getPooledConnection	
15	SQLSTATE の値	50	64	getPooledConnection	124
16	関数のサマリー	71		setLoginTimeout	
	SQLAllocConnect の引数			setLogWriter	
	SQLAllocEnv の引数			addConnectionEventListener	
	SQLAllocStmt の引数			close	
	SQLConnect の引数			getConnection	
	SQLDescribeCol の引数			removeConnectionEventListener	
	SQLDisconnect の引数			Java データ型から SQL データ型への変換	
	SQLError の引数			挿入操作手順	
	SQLExecDirect の引数			甲	
	SQLExecute の引数			照会操作手順	
	SQLFetch の引数			solidDB SA 関数の戻りコード	
	SQLFreeConnect の引数			サポートしている SQL データ型	
	SQLFreeEnv の引数			solidDB SA パラメーター使用タイプ	
	SQLFreeStmt の引数			ポインターの戻り使用タイプ	
	SQLGetCursorName の引数			SaArrayFlush のパラメーター	
	SQLGetData の引数			SaArrayInsert のパラメーター	
	SQLNumResultCols の引数			SaColSearchCreate のパラメーター	
	SQLPrepare の引数			SaColSearchCreate のパラメーター	
	SQLRowCount の引数			SaColSearchNext のパラメーター	
	SQLSetCursorName の引数			SaColSearchNext の戻り値	
	SQLTransact の引数			SaConnect のパラメーター	
37.	SQLSetParamValue の引数	. 92		SaConnect の戻り値	
	cbColDef の差異化			SaCursorAscending のパラメーター	
	関連関数			SaCursorAtleast のパラメーター	
	C 変数データ型の省略形			SaCursorAtmost のパラメーター	
	データベース列型と C 変数データ型間の変換	96		SaCursorBegin のパラメーター	
	データベース列型と C 変数データ型間の変換	97		SaCursorClearConstr のパラメーター	
	標準 CallableStatement インターフェースとの	,		SaCursorColData のパラメーター	
15.	相異点	106		SaCursorColDate のパラメーター	
44.	標準 Connection インターフェースとの相異点	107		SaCursorColDateFormat のパラメーター	165
	標準 PreparedStatement インターフェースとの	10,		SaCursorColDfloat のパラメーター	
	相異点	108		SaCursorColDouble のパラメーター	
46	標準 ResultSet インターフェースとの相異点	109		SaCursorColDynData のパラメーター	
	標準 Statement インターフェースとの相異点	111		SaCursorColDynStr のパラメーター	
	標準 ResultSet インターフェースとの相異点	112		SaCursorColFloat のパラメーター	
					- , 0

100	SaCursorColInt のパラメーター	171	156	SaDynStrFree のパラメーター	205
	SaCursorColLong のパラメーター			SaDynStrMove のパラメーター	
	SaCursorColNullFlag パラメーター			SaErrorInfo のパラメーター	
				SaSetDateFormat のパラメーター	
	SaCursorColStr のパラメーター				
	SaCursorColTime のパラメーター			SaSetSortBufSize のパラメーター	
	SaCursorColTimestamp のパラメーター	175		SaSetSortMaxFiles のパラメーター	
	SaCursorCreate のパラメーター			SaSetTimeFormat のパラメーター	
	戻り値・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			SaSetTimestampFormat のパラメーター	210
	SaCursorDelete のパラメーター			SaSQLExecDirect のパラメーター	
	SaCursorDescending のパラメーター			SaTransBegin のパラメーター	
	SaCursorEnd のパラメーター			SaTransCommit のパラメーター	
	SaCursorEqual のパラメーター			SaTransRollback のパラメーター	
112.	SaCursorErrorInfo のパラメーター	178	168.	SaUserId のパラメーター	213
113.	SaCursorFree のパラメーター	179	169.	部分的 Unicode および Unicode データベース	
114.	SaCursorInsert のパラメーター	179		用の solidDB ツールのコマンド行オプション.	220
115.	SaCursorLike のパラメーター	180	170.	solidDB がサポートする ODBC 関数	237
116.	SaCursorNext のパラメーター	180	171.	001 環境レベル	247
	SaCursorOpen のパラメーター			002 接続レベル	
	SaCursorOrderbyVector のパラメーター	181	173.	03 ステートメント・レベル	250
	SaCursorPrev のパラメーター			04 列属性	
	SaCursorReSearch のパラメーター		175	エラー・コード・クラス値	255
	SaCursorSearch のパラメーター		176	SQLSTATE III	255
	SaCursorSearchByRowid のパラメーター	184		制御ステートメント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	SaCursorSearchReset のパラメーター			いくつかのタイプのパラメーターについてデ	213
	SaCursorSetLockMode のパラメーター	187	1/0.		200
			170	ータ型を判断する方法	
	SaCursorSetPosition のパラメーター			予約キーワードのリスト	283
	SaCursorSetRowsPerMessage のパラメーター	188	180.	一般的な SQL データ型の名前、範囲、および	200
	SaCursorUpdate のパラメーター			制限	
	SaDateCreate の戻り値			SQLGetTypeInfo が返すデータ型 (1)	
	SaDateFree のパラメーター			SQLGetTypeInfo が返すデータ型 (2)	
	SaDateSetAsciiz のパラメーター			SQLGetTypeInfo が返すデータ型 (3)	
	SaDateSetTimet のパラメーター			C と ODBC の名前の対応	
	SaDateToAsciiz のパラメーター	191		数値リテラルを伴う変換	298
	SaDateToTimet のパラメーター	192	186.	数値データ型の精度と位取りのオーバーライ	
134.	SaDefineChSet のパラメーター	193		ド用デフォルト値	301
135.	SaDfloatCmp のパラメーター	193	187.	日時ごとの簡易型 ID、詳細型 ID、および型	
136.	SaDfloatDiff のパラメーター	194		のサブコード	302
137.	SaDfloatOverflow のパラメーター	194	188.		303
138.	SaDfloatProd のパラメーター	195	189.	SQL データ型小数桁数	303
	SaDfloatQuot のパラメーター	195	190.	小数桁数に対応する記述子フィールド	304
	SaDfloatSetAsciiz のパラメーター			ODBC 関数の戻りパラメーター 10 進数属性	305
	SaDfloatSum のパラメーター			転送オクテット長	
	SaDfloatToAsciiz のパラメーター			グレゴリオ暦の制約	
	SaDfloatUnderflow のパラメーター			C データ型: データ型が以下の	200
	SaDisconnect のパラメーター		171.	SQL_C_datatype	308
	SaDynDataAppend のパラメーター		195	文字 SQL データから ODBC C データ型への	300
	SaDynDataChLen のパラメーター		1/5.	変換	211
	SaDynDataClear のパラメーター		106	数値 SQL データから ODBC C データ型への	311
	•		190.		212
	SaDynDataCreate の戻り値		107	変換	313
	SaDynDataFree のパラメーター		197.	~	215
	SaDynDataGetData のパラメーター		100	型への変換	315
	SaDynDataGetData のパラメーター		198.	日付 SQL データから ODBC C データ型への	2
	SaDynDataMove のパラメーター			変換	316
	SaDynDataMoveRef のパラメーター		199.	時刻 SQL データから ODBC C データ型への	
	SaDynStrAppend のパラメーター			変換	317
155.	SaDynStrCreate の戻り値	205			

200.	タイム・スタンプ SQL データから ODBC C	213.	数字関数引数
	データ型への変換		数字関数のリスト
201.	SQL から C へのデータ変換例 319		日時関数引数
	SQL データ型: データ型が以下の		日時関数のリスト
	SQL_datatype	217.	システム関数引数
203.	C 文字データから ODBC SQL データ型への	218.	システム関数のリスト
	変換		ログイン・タイムアウト351
204.	数値 C データから ODBC SQL データ型への		接続タイムアウト
	変換		照会タイムアウト
205.	ビット C データから ODBC SQL データ型へ	222.	SQL ステートメント実行タイムアウト 356
	の変換	223.	ロック待機タイムアウト356
206.	バイナリー C データから ODBC SQL データ	224.	オプティミスティック・ロック待機タイムア
	型への変換		ウト
207.	日付 C データから ODBC SQL データ型への	225.	表ロック待機タイムアウト
	変換	226.	トランザクション・アイドル・タイムアウト 358
208.	時刻 C データから ODBC SQL データ型への	227.	接続アイドル・タイムアウト
	変換	228.	接続タイムアウト
209.	タイム・スタンプ C データから ODBC SQL		ping タイムアウト
	データ型への変換		Client パラメーター
210.	C データから SQL データへの変換 333	231.	Com パラメーター
211.	ストリング関数引数		Data Sources パラメーター
212.	ストリング関数のリスト		

変更の要約

改訂 01 での変更点

- 接続タイムアウトのファクトリー値が 60000 ミリ秒から 0 (無制限) に訂正されました。このため、セクション『クライアント・タイムアウト』、『 solidDB® 接続ストリングのフォーマット』、および『Com セクション』で、パラメーター Com.ClientReadTimeout および Com.Connect (オプション -r) が更新されました。
- セクション『日時関数』で、関数 CURRENT_TIME、CURTIME、CURRENT_TIMESTAMP、および NOW での精度 のインプリメンテーションに関する情報が更新されました。ミリ秒の精度を引数 (0-6) として定義できます。
- セクション『Unicode に対応したアプリケーションの開発』が更新されました。 **SQL.CharPadding=yes** パラメーター設定は Unicode データベースにおいて無効です。CHAR 値内のブランク文字は必ず破棄されます。
- セクション『クライアント・タイムアウト』が更新されました。クライアント接続のタイムアウトの動作が変更されました。サーバーに接続できないことをクライアントが確実に検出できる場合は、SQL_ATTR_LOGIN_TIMEOUT などで指定されているタイムアウトの設定に関係なく、SQLConnect は直ちに戻ります。この状況は、例えばサーバーが同じホストで稼働することが予期されている場合に、サーバーが稼働していないことをクライアントが検出すると、発生する可能性があります。
- セクション『非標準の接続プロパティー』に、新規の JDBC 接続プロパティー「solid_catalog」および「solid_schema」が追加されました。
- セクション『ヒント』に、以下のオプティマイザー・ヒントが追加されました。
 - TRIPLE MERGE JOIN
 - UNION FOR OR
 - OR FOR OR
 - LOOP FOR OR
- セクション『ログ・リーダーを使用したログ・データの読み取り』で、トランザクション・ログ・リーダーの使用法に関する説明が更新されました。

本書について

本書には、共有メモリー・アクセス (SMA)、リンク・ライブラリー・アクセス (LLA)、または HotStandby を使用する場合、または使用しない場合の、さまざまな アプリケーション・プログラミング・インターフェースを介した IBM® solidDB の 使用に関する情報が記載されています。

solidDB ODBC ドライバー、solidDB Light Client、および solidDB JDBC ドライバーは、クライアント・アプリケーションから solidDB へのアクセスに役立ちます。

- solidDB ODBC ドライバーは、Microsoft® ODBC 3.51 API 規格に準拠しています。
- solidDB Light Client は、solidDB ODBC API の軽量バージョンであり、クライア ント・アプリケーションのフットプリントを非常に小さくする必要がある環境を 対象としています。
- solidDB JDBC ドライバーは、JDBC 2.0 標準の solidDB インプリメンテーションです。

本書は、リレーショナル・データベースと SQL に関する一般的な知識があることを前提としています。また、solidDB をよく理解していることも前提としています。ODBC ドライバーを使用する場合、本書は C プログラミング言語の実用上の知識を前提としています。JDBC ドライバーを使用する場合、本書は Java™ プログラミング言語の実用上の知識を前提としています。

書体の規則

solidDB の資料では、以下の書体の規則を使用します。

表 1. 書体の規則

フォーマット	用途
データベース表	このフォントは、すべての通常テキストに使用します。
NOT NULL	このフォントの大文字は、SQL キーワードおよびマクロ名を 示しています。
solid.ini	これらのフォントは、ファイル名とパス式を表しています。
SET SYNC MASTER YES; COMMIT WORK;	このフォントは、プログラム・コードとプログラム出力に使 用します。SQL ステートメントの例にも、このフォントを使 用します。
run.sh	このフォントは、サンプル・コマンド行に使用します。
TRIG_COUNT()	このフォントは、関数名に使用します。
java.sql.Connection	このフォントは、インターフェース名に使用します。

表 1. 書体の規則 (続き)

フォーマット	用途
LockHashSize	このフォントは、パラメーター名、関数引数、および Windows®レジストリー項目に使用します。
argument	このように強調されたワードは、ユーザーまたはアプリケー ションが指定すべき情報を示しています。
管理者ガイド	このスタイルは、他の資料、または同じ資料内の他の章の参照に使用します。新しい用語や強調事項もこのように記述します。
ファイル・パス表示	特に明記していない場合、ファイル・パスは UNIX® フォーマットで示します。スラッシュ (/) 文字は、インストール・ルート・ディレクトリーを表します。
オペレーティング・システム	資料にオペレーティング・システムによる違いがある場合は、最初に UNIX フォーマットで記載します。UNIX フォーマットに続いて、小括弧内に Microsoft Windows フォーマットで記載します。その他のオペレーティング・システムについては、別途記載します。異なるオペレーティング・システムに対して、別の章を設ける場合があります。

構文表記法の規則

solidDB の資料では、以下の構文表記法の規則を使用します。

表 2. 構文表記法の規則

フォーマット	用途
INSERT INTO table_name	構文の記述には、このフォントを使用します。置き換え可能 セクションには、この フォントを使用します。
solid.ini	このフォントは、ファイル名とパス式を表しています。
[]	大括弧は、オプション項目を示します。太字テキストの場合 には、大括弧は構文に組み込む必要があります。
1	垂直バーは、構文行で、互いに排他的な選択項目を分離します。
{ }	中括弧は、構文行で互いに排他的な選択項目を区切ります。 太字テキストの場合には、中括弧は構文に組み込む必要があ ります。
	省略符号は、引数が複数回繰り返し可能なことを示します。
	3 つのドットの列は、直前のコード行が継続することを示し ます。

1 solidDB API 入門

このセクションでは、solidDB データベースへのアクセスに使用するアプリケーション・プログラミング・インターフェースの概要を説明します。

アプリケーションは、これらのインターフェースを使用して、同時に複数のデータベース接続を確立し、同時に複数の SOL ステートメントを処理できます。

solidDB ODBC ドライバー

ネイティブの solidDB ODBC ドライバーは、Microsoft ODBC 3.5.1 API 標準に準拠しています。

solidDB ODBC ドライバーは、ライブラリー (Windows 上のダイナミック・リンク・ライブラリー (DLL)) の形式で配布されます。solidDB インストール・パッケージには、2 つの ODBC ドライバー (1 つは Unicode 用、もう 1 つは ASCII 用) が含まれています。Unicode バージョンは ASCII バージョンのスーパーセットであり、Unicode 文字セットと ASCII 文字セットで使用できます。

solidDB の ODBC API のインプリメンテーションは、堅固なデータベース・アプリケーションの作成に十分な、以下のような豊富な一連のデータベース・アクセス操作をサポートします。

- ハンドルの割り振りと割り振り解除
- 属性の取得と設定
- データベース接続のオープンとクローズ
- 記述子へのアクセス
- SOL ステートメントの実行
- スキーマ・メタデータへのアクセス
- トランザクションの制御
- 診断情報へのアクセス

アプリケーションの要求に応じて、solidDB ODBC ドライバーは、各 SQL ステートメントを自動的にコミットすることも、また明示的なコミットまたはロールバック要求を待ち合わせることもできます。ドライバーは、コミット操作またはロールバック操作を実行するときには、接続に関連付けられたすべてのステートメント要求をリセットします。

solidDB ODBC ドライバー関数の使用

どのプラットフォームのユーザーも、ODBC ドライバーがサポートする関数に、solidDB ODBC API でアクセスすることができます。

solidDB ODBC API は、solidDB データベースのネイティブ・コール・レベル・インターフェース (CLI) です。この API は、ライブラリー (Windows 上のダイナミック・リンク・ライブラリー (DLL)) の形式で配布されます。 solidDB ODBC API は、ANSI X3H2 SQL CLI 標準に準拠しています。

solidDB の ODBC API のインプリメンテーションは、堅固なデータベース・アプリ ケーションの作成に十分な、以下のような豊富な一連のデータベース・アクセス操 作をサポートします。

- ハンドルの割り振りと割り振り解除
- 属性の取得と設定
- データベース接続のオープンとクローズ
- 記述子へのアクセス
- SQL ステートメントの実行
- スキーマ・メタデータへのアクセス
- トランザクションの制御
- 診断情報へのアクセス

アプリケーションの要求に応じて、solidDB ODBC ドライバーは、各 SOL ステー トメントを自動的にコミットすることも、また明示的なコミットまたはロールバッ ク要求を待ち合わせることもできます。ドライバーは、コミット操作またはロール バック操作を実行するときには、接続に関連付けられたすべてのステートメント要 求をリセットします。

ODBC API での基本的なアプリケーション手順

クライアント・データベース・アプリケーションは、solidDB ODBC API を直接 (または ODBC ドライバー・マネージャーを通して) 呼び出し、データベースとの すべての対話を実行します。例えば、レコードの挿入、削除、更新、または選択を 行うには、ODBC API で一連の関数呼び出しを行います。

ODBC API を使用するアプリケーションは、以下のタスクを実行します。

- 1. アプリケーションは、メモリーを割り振り、ハンドルを作成し、データベースへ の接続を確立します。
 - a. アプリケーションは、環境ハンドル (henv) および接続ハンドル (hdbc) 用に メモリーを割り振ります。どちらも、データベース接続の確立に必要です。

アプリケーションは、1 つ以上のデータ・ソースに関して複数の接続を要求 できます。各接続は、別個のトランザクション・スペースとみなされます。 言い換えると、1 つの接続での COMMIT や ROLLBACK によって、他の接 続を通して実行されているステートメントがコミットまたはロールバックさ れることはありません。

- b. SOLConnect() 呼び出しは、データベース接続を確立し、サーバー名 (接続ス トリングまたはデータ・ソース名)、ユーザー ID、およびパスワードを指定 します。
- c. 次に、アプリケーションは、ステートメント・ハンドル用にメモリーを割り 振ります。
- 2. アプリケーションは、ステートメントを実行します。そのためには、一連の関数 呼び出しを行う必要があります。
 - a. アプリケーションは、SOLExecDirect() を呼び出して SOL ステートメントを 準備および実行するか、または SQLPrepare() と SQLExecute() を呼び出して ステートメントを複数回実行します。

b. ステートメントが SELECT の場合には、アプリケーション内の変数に結果列 をバインドして、戻されたデータをアプリケーションが参照できるようにす る必要があります。SQLBindCol() 関数は、アプリケーションの変数を結果セ ット内の列にバインドします。行は、SOLFetch()を使用して繰り返しフェッ チすることができます。 SELECT ステートメントは、結果セットの処理が終 了するとすぐにコミットする必要があります。

ステートメントが UPDATE、DELETE、または INSERT の場合には、アプリ ケーションは、実行が成功したか検査し、SOLEndTran()を呼び出してトラン ザクションをコミットする必要があります。

- 3. 最後に、アプリケーションは接続を閉じ、すべてのハンドルを解放します。
 - a. アプリケーションは、ステートメント・ハンドルを解放します。
 - b. アプリケーションは、接続を閉じます。
 - c. アプリケーションは、接続ハンドルと環境ハンドル (hdbc と henv) を解放し ます。

ステップ 2 (SQL ステートメントの実行) は、実行する必要のある SQL ステート メントの数に応じて、繰り返し実行できることに注意してください。

これらの API 呼び出しの使用方法について詳しくは、13ページの『2章 solidDB ODBC API の使用』を参照してください。

solidDB 接続ストリングのフォーマット

クライアント・プロセスは、solidDB 接続ストリング (ネットワーク名) を使用し て、接続先のサーバーを指定します。

クライアント・サイドの Com.Connect 構成パラメーターで、デフォルトの接続ス トリングを定義することができます。また、接続時、または ODBC ドライバー・マ ネージャーでデータ・ソースを構成するときに、接続ストリングを指定することも できます。

同じフォーマットの接続ストリングが、Com,Connect パラメーターだけでなく、 solidDB ツールまたは ODBC アプリケーションと Light Client アプリケーションで 使用される接続ストリングにも適用されます。

接続ストリングのフォーマットは以下のとおりです。

protocol name [options] [host computer name] server name

ここで、

• options には、以下のオプションを任意に組み合わせて指定できます。

表 3. 接続ストリングのオプション

オプション	説明	プロトコル
-Z	この接続でのデータ圧縮を可能にします。	すべて
	ログイン・タイムアウトを指定します (デフォルトは、オペレーティング・システムに固有です)。指定された時間が経過すると、ログイン要求が失敗します。	TCP/IP

表 3. 接続ストリングのオプション (続き)

オプション	説明	プロトコル
-r milliseconds	接続(または読み取り)のタイムアウトを指定します。指定された時間内に応答が受信されないと、ネットワーク要求が失敗します。値0(デフォルト)を指定すると、タイムアウトの制限がなくなります(オペレーティング・システムのデフォルト・タイムアウトが適用されます)。	TCP/IP
-ofilename	ネットワーク・トレース機能をオンにして、トレース出力ファイルの名前を定義します。 詳しくは、「IBM solidDB 管理者ガイド」の『ネットワーク・トレース機能』を参照してください。	すべて
-plevel	指定されたレベル (0 - 5) でサーバーに ping します。 クライアントは、レベル 1 の solidDB Ping 機能をいつでも使用できます (0 はノーオペレーション/デフォルト)。レベル 2、3、4、または 5 は、サーバーで少なくとも同じレベルの Ping 機能を使用するように設定されている場合に限り使用できます。 詳しくは、「IBM solidDB 管理者ガイド」の『Ping 機能』を参照してください。	すべて
-t	ネットワーク・トレース機能をオンにします。 詳しくは、「IBM solidDB 管理者ガイド」の『ネットワーク・トレース機能』を参照してください。	すべて
-aLANA_NUMBER	LANA 番号のデフォルト値をオーバーライドします。	NetBios

- host_computer_name は、クライアントとサーバーを別のマシンで実行している場合に、TCP/IP プロトコルおよび名前付きパイプ・プロトコルで必要となります。
- server name は、通信プロトコルによって異なります。
 - TCP/IP プロトコルでの server_name は、2315」などのサービス・ポート番号です。
 - その他のプロトコルでの server_name は、「soliddb」や「chicago_office」など の名前です。

各種通信プロトコルでの構文について詳しくは、「 $IBM\ solidDB\ 管理者ガイド$ 」の『通信プロトコル』を参照してください。

注:

- protocol_name と server_name は、サーバーがネットワーク listen 名で使用しているものと一致している必要があります。
- 接続ストリングを接続時に指定する場合は、引用符で囲む必要があります。
- 接続ストリングのすべてのコンポーネントでは、大/小文字を区別しません。

例

[Com]

Connect=tcp -z -c1000 1315

[Com]

Connect=nmpipe host22 SOLID

solsql "tcp localhost 1315"

solsql "tcp 192.168.255.1 1315"

rc = SQLConnect(hdbc, "upipe SOLID", (SWORD)SQL_NTS, "dba", 3, "dba", 3);

クライアント・サイド構成ファイル

solidDB は、クライアント構成情報をクライアント・サイドの solid.ini ファイル から取得します。クライアント・サイド構成ファイルは、ODBC ドライバーが使用 され、アプリケーションの作業ディレクトリーにファイルを配置する必要がある場 合に使用されます。

重要: ほとんどの場合、solidDB 用のプログラミングでは、solidDB サーバー・サイ ド・パラメーターのみが使用されます。しかし、クライアント・サイド・パラメー ターを使用することが必要な場合があります。例えば、データ・ソースを定義しな いが、クライアント・サイド構成ファイルの接続ストリングからデータ・ソースを 取得するアプリケーションを作成したい場合などです。

注: solidDB の資料では、solid.ini ファイルについて言及するときは、通常、サー バー・サイドの solid.ini ファイルを指します。

solidDB は、始動時に構成ファイル solid.ini を開こうとします。このファイルが 存在しない場合、solidDB は、パラメーターにファクトリー値を使用します。 solid.ini ファイルが存在する場合でも、その中の特定のパラメーターに値が設定 されていない場合、solidDB は、そのパラメーターにファクトリー値を使用しま す。ファクトリー値は、使用するオペレーティング・システムに依存する場合があ ります。

デフォルトでは、クライアントは現行作業ディレクトリーで solid.ini ファイルを 検索しますが、通常、これはクライアントを始動したディレクトリーです。solidDB は、ファイルの検索時に以下の優先順位に従います (上から下)。

- SOLIDDIR 環境変数によって指定された場所 (この環境変数が設定されている場 合)
- 現行作業ディレクトリー

クライアント・サイド・パラメーター

このセクションでは、最も重要な solidDB クライアント・サイド・パラメーターに ついて説明します。

Com.Connect

[Com] セクション内の Connect パラメーターは、クライアントがサーバーと通信 する際に、クライアントが接続するデフォルトのネットワーク名 (接続ストリン グ) を定義します。当然のことながら、クライアントは、サーバーが listen する のと同じネットワーク名で対話しなければならないため、クライアント上の Connect パラメーターの値は、サーバー上の Listen パラメーターの値と一致しな ければなりません。

同じフォーマットの接続ストリングが、すべての listen 構成パラメーターおよび ODBC アプリケーションと Light Client アプリケーションで使用される接続スト リングに適用されます。

Com.Trace

Trace パラメーターをデフォルト設定の No から Yes に変更すると、solidDB は、確立済みのネットワーク接続のネットワーク・メッセージに関するトレース 情報のロギングを開始し、デフォルトのトレース・ファイルまたは TraceFile パ ラメーターで指定されたファイルに記録します。

Com.TraceFile

Trace パラメーターを Yes に設定すると、ネットワーク・メッセージに関するト レース情報が TraceFile パラメーターで指定されたファイルに書き込まれます。 ファイル名の指定がない場合、サーバーはデフォルト値 soltrace.out を使用し ますが、このファイルは、トレースがどちら側で開始されたかにより、サーバー またはクライアントの現行作業ディレクトリーに書き込まれます。

ODBC の非標準動作

このセクションでは、solidDB ODBC ドライバーの非標準動作と制限事項について 説明します。

エラー情報

クライアントによって設定されたバージョンに関係なく、ドライバーは ODBC 3.0 仕様に基づいたエラー情報を返します。

SQL NULL DATA をパラメーター長として使用した SQLPutData でのエラー

1 つ以上のデータ項目を挿入または更新しようとする場合、いずれかの項目が SQL NULL DATA を長さの指定子として持っていると、データは挿入されませ ん。列値は NULL になります。

SQLAllocHandle が不完全なエラー情報を返す場合

SQLAllocHandle を呼び出すとき、ハンドル・タイプが無効である場合、例えば、以 下のような場合、

SQLAllocHandle(-5, hdbc, &hstmt);

この関数は SQL_ERROR を返しますが、エラー状態「HY092」やメッセージ 「Invalid Attribute/Option Identifier」を返しません。

MSAccess - 表と特定の列型とのリンク

表をデータ型 WCHAR、WVARCHAR、および LONG WVARCHAR とリンクした 後、ユーザーが特定のレコードを挿入し、別のレコードを挿入/更新/削除すると、ド ライバーは前の新規に追加/更新されたレコードについて、「#deleted」を表示しま す。

ADO - OpenSchema メソッド

以下の OpenSchema メソッドは、ADO によってサポートされません。

- adSchemaCatalogs
- · adSchemaColumnPrivileges
- adSchemaConstraintColumnUsage
- adSchemaConstraintTableUsage
- · adSchemaTableConstraint

- adSchemaForeignKeys
- adSchemaTablePrivileges
- · adSchemaViews
- adSchemaViewTableUsage

上記の OpenSchema メソッドは、どの ODBC ドライバーを使用しても、ADO によ ってサポートされません。これは Microsoft OLE DB Provider for ODBC の制限事 項です。これは、solidDB ODBC ドライバーに限ったことではありません。

solidDB JDBC ドライバー

JDBC 2.0 ドライバーは、JDBC 2.0 をサポートします。

solidDB JDBC ドライバーの場合、Java Development Kit (JDK) 1.4.2 以降がサポー トされています。

solidDB JDBC ドライバーを使用すると、JDBC を使用してデータベースにアクセス する Java ツールでアプリケーションを開発できます。JDK 1.2 用のコア API であ る JDBC API は、データベース接続、SQL ステートメント、結果セット、データ ベース・メタデータなどを表現する Java クラスを定義します。これで、SQL ステ ートメントを発行し、結果を処理できます。JDBC は、Java でデータベースにアク セスするための基本 API です。

JDBC を使用するためには、solidDB JDBC ドライバーをインストールする必要があ ります。 JDBC ドライバーの使用法は、ご使用の Java 開発環境によって異なりま す。

solidDB JDBC ドライバーの使用法に関する説明と例が、solidDB インストール・パ ッケージ内の /.jdbc サブディレクトリー、および 99 ページの『4 章 solidDB JDBC ドライバーの使用』に記載されています。

solidDB Light Client

solidDB Light Client では、C、または C 関数呼び出し規約に準拠する任意のツール を使用してフットプリントの小さいアプリケーションを開発できます。

solidDB Light Client は、20 個の関数から成る ODBC API のサブセットであり、 solidDB データベースのデータにアクセスするアプリケーション開発者に完全な SQL 機能を提供します。データベース接続の制御、SQL ステートメントの実行、結 果セットのリトリーブ、トランザクションのコミット、およびその他のデータ管理 機能のための関数を提供します。

/samples/lightclient サブディレクトリーに、solidDB Light Client API を使用す る C プログラムのサンプルがあります。

詳しくは、63ページの『3章 solidDB Light Client の使用』を参照してください。

注: solidDB Light Client は、すべてのプラットフォームで使用可能なわけではあり ません。

solidDB アプリケーション・プログラミング・インターフェース (SA API)

solidDB SA は solidDB データベース製品に接続するための C 言語クライアント・ ライブラリーです。このライブラリーを solidDB 製品内部で使用して、solidDB デ ータベース表内のデータにアクセスします。ライブラリーには 90 の関数が含まれ ており、データベースを接続し、カーソル・ベースの操作を実行するための低レベ ルのメカニズムを提供します。

solidDB サーバー制御 API (SSC API)

solidDB サーバー制御 API (SSC API) は、solidDBのタスク処理システムを簡単か つ効率的に制御する手段である一連の関数で構成されるプロプラエタリー API で す。

SSC API は、共有メモリー・アクセス (SMA) ライブラリーおよびリンク・ライブ ラリー・アクセス (LLA) ライブラリーで提供されます。詳しくは、「IBM solidDB 共有メモリー・アクセスおよびリンク・ライブラリー・アクセス・ユーザー・ガイ ド」の『solidDB サーバー制御 API (SSC API)』を参照してください。

クライアント・アプリケーションの作成

このセクションでは、 solidDB で動作するクライアント・アプリケーションの作成 方法の概要を説明します。このセクションに記載された情報は、主に ODBC ドライ バーまたは Light Client ドライバーを使用する C 言語プログラムに適用されます。

クライアントとは

クライアント・アプリケーション、または単にクライアント とは、サーバーに要求 (SOL 照会)をサブミットし、サーバーから返された結果を取得するプログラムで す。

クライアント・プログラムは、サーバー・プログラムから分離されています。ま た、多くの場合、クライアントは、別のコンピューター上で実行されています。共 有メモリー・アクセスまたはリンク・ライブラリー・アクセスを使用すると、クラ イアントのコードをサーバーのコードに直接リンクし、両方を単一のプロセスとし て実行することができます。詳しくは、「IBM solidDB 共有メモリー・アクセスお よびリンク・ライブラリー・アクセス・ユーザー・ガイド」を参照してください。

クライアントは別個のプログラムなので、サーバー内の関数を直接呼び出すことは できません。その代わりに、通信プロトコル (TCP/IP や名前付きパイプなど)を使 用してサーバーと通信する必要があります。プラットフォームが異なると、サポー トされるプロトコルも異なります。プラットフォームによっては、使用するアプリ ケーションに特定のライブラリー・ファイル (特定のプロトコルをサポート) をリン クして、アプリケーションがサーバーと通信できるようにする必要があります。

照会をサーバーに渡す方法

照会は、SOL プログラミング言語を使用して作成されます。

サーバーとクライアント間でデータを交換する 1 つの方法は、単にリテラル・スト リングを相互に受け渡すことです。クライアントは、サーバーに以下のようなスト リングを送信するとします。

SELECT name FROM employees WHERE id = 12;

そして、サーバーは、以下のようなストリングを送り返すとします。 "Smith, Jane"

しかし、実際には、通信は一般に ODBC ドライバーや JDBC ドライバーなどの 「ドライバー」を介して行われます。「ODBC」は「Open DataBase Connectivity」 を意味しており、ベンダー間でのデータベース・アクセスの整合性を高めるために Microsoft が設計した API (アプリケーション・プログラミング・インターフェース) です。クライアント・プログラムは、ODBC 規則に従っている場合、それらと同じ 規則に従うどのデータベース・サーバーとも対話することができます。ほとんどの 主要データベース・ベンダーは、少なくともある程度は ODBC をサポートしていま す。ODBC 標準は、一般に、C プログラミング言語で作成されたプログラムで使用 されます。

「JDBC」は、「Java DataBase Connectivity」を意味しています。多くの部分で ODBC 標準に基づいており、当然のことながら、基本的には「Java プログラム用 ODBC」です。

特定のデータ値 (例えば、"Smith, Jane") をサーバーに渡すのに、2 つの主要な方法 があります。最初の方法では、単に値をリテラルとして照会に埋め込みます。この 方法は、以下のような SQL ステートメントで既に説明しました。

INSERT INTO employees (id, name) VALUES (12, 'Smith, Jane');

この方法は、単一のステートメントを実行したい場合に効果的です。しかし、同じ 基本ステートメントを異なる値で実行したい場合があります。例えば、500 名の従 業員のデータを挿入したい場合、以下のように、別々のステートメントを 500 個作 成するのは望ましくありません。

```
INSERT INTO employees (id, name) VALUES (12, 'Smith, Jane');
INSERT INTO employees (id, name) VALUES (13, 'Jones, Sally');
```

その代わりに、単一の「汎用」ステートメントを作成して、そのステートメントの 特定の値を渡す方が望ましい場合があります。例えば、以下のステートメントを作 成します。

INSERT INTO employees (id, name) VALUES (?, ?);

そして、疑問符(?)を特定のデータ値で置き換えます。このようにすれば、ループ 内で 500 個の INSERT ステートメントを簡単に実行でき、従業員ごとにユニーク な INSERT ステートメントを作成する必要はありません。パラメーターを使用する ことにより、ステートメントを実行するたびに異なる値を指定できます。パラメー ターにより、クライアントとサーバーが交換する値を格納するために、クライアン ト・プログラムと ODBC ドライバーが使用する変数を指定できます。基本的には、 ステートメント内に疑問符 (?) を指定した各位置でパラメーターを渡します。

パラメーターを使用してデータ値を交換したいもう 1 つの状況として、ストリン グ・リテラルとして表現するのが困難なデータを処理する場合があります。例え

ば、「American Pie」という曲のデジタル化コピーをデータベースに挿入したいが、 そのデジタル化データを表す一連の 16 進数を含むリテラルで SQL ステートメン トを作成したくはない場合、デジタル化データを配列に格納し、ODBC ドライバー にその配列の位置を通知します。

SOL ステートメントでパラメーターを使用するには、複数のステップから成る処理 を実行します。以下に、データを挿入する処理を示します。この処理は、データを リトリーブする際の処理にある程度似ています。

- 1. SOL ステートメントを準備します。準備 段階で、サーバーがステートメント を分析し、(他の処理も行いますが特に) パラメーターが何個になるか確認しま す。パラメーターの数と意味は、SOL ステートメントに組み込まれた疑問符 (?) によって示されます。
- 2. ODBC ドライバーに、パラメーターとして使用される変数を通知します。どの変 数がどの列や値に関連付けられるかを ODBC ドライバーに通知することを、パ ラメーターを「バインド」すると言います。
- 3. パラメーターに値を設定します (つまり、変数の値を設定します)。
- 4. 準備済みステートメントを実行します。

実行 段階で、ODBC ドライバーは、パラメーターに格納された値を読み取り、準備 済みのステートメントで使用するために、それらの値をサーバーに渡します。

クライアントに結果を返す方法

照会の結果は、0 個以上の一連の行です。ODBC ドライバーまたは JDBC ドライバ ーを使用している場合は、適切な ODBC 関数または JDBC 関数を使用して各行を リトリーブします。

一般的には、以下の手順を実行します。

- 1. SOL ステートメントを準備します。準備 段階で、サーバーがステートメントを 分析し、(他の処理も行いますが特に) パラメーターが何個になるか確認します。 パラメーターの数と意味は、SOL ステートメントに組み込まれた疑問符 (?) に よって示されます。
- 2. ODBC ドライバーに、パラメーターとして使用される変数を通知します。どの変 数がどの列や値に関連付けられるかを ODBC ドライバーに通知することを、パ ラメーターを「バインド」すると言います。
- 3. 準備済みステートメントを実行します。これは、サーバーに対して照会を実行 し、結果セットを収集するよう指示します。ただし、結果セットはすぐにクライ アントに渡されるわけではありません。
- 4. 結果セットの次の行をフェッチします。フェッチを行うと、結果セットから結 果を 1 行リトリーブし、アプリケーションとの共有のためにあらかじめ ODBC ドライバー用に定義したパラメーターにその行の値を格納するように、サーバー および ODBC ドライバーに指示することになります。

通常はループを実行することになり、一度に 1 行をフェッチして、各フェッチ後に パラメーターからデータを読み取ります。

ODBC ドライバーまたは Light Client ライブラリーの使用

これらのドライバーとライブラリーは、クライアント・アプリケーション・プログ ラムにリンクする必要があります。

静的ライブラリーと動的ライブラリー

次に、これらのライブラリー内に定義された関数を呼び出すことができます。ライ ブラリー名について詳しくは、solidDB パッケージの SDK Notes を参照してくださ

ライブラリー・ファイルには静的なものがあります。つまり、これらのファイル は、コンパイルとリンク操作を行ったときにクライアント・アプリケーションの実 行可能プログラムにリンクされます。ライブラリー・ファイルには動的なものもあ ります。これらは実行可能プログラムとは別に格納され、プログラムの実行時にメ モリーにロードされます。

静的ライブラリーの利点は、アプリケーションが必要なものをほぼ完備しているこ とです。アプリケーションを顧客に配布する場合、顧客は、アプリケーションをイ ンストールすれば、そのほかに別の共有ライブラリーをインストールする必要があ りません。

動的ライブラリーの利点は、複数のクライアントがそのライブラリーを使用する場 合、多くのシステムで、必要なディスク・スペースが少なくなることです (また、 プラットフォームによっては、必要なメモリー・スペースも少なくなります)。例え ば、5 MB の静的ライブラリーにそれぞれリンクする 2 つのクライアント・アプリ ケーションが存在する場合、その静的ライブラリーを格納するのに 5 MB のディス ク・スペースが必要なだけでなく、アプリケーションにリンクされる両方のライブ ラリーのコピーを格納するために 10 MB の追加ディスク・スペースが必要になり ます。しかし、2 つのクライアント・アプリケーションを動的ライブラリーにリン クすると、そのライブラリーの追加コピーは必要ありません。各アプリケーション は、独自のコピーを保持しません。

多くのライブラリーに関して、solidDB は、一部またはすべてのプラットフォーム 上で静的バージョンと動的バージョンを提供しています。

さらに Windows では、solidDB がインポート・ライブラリーを提供する場合もあり ます。各インポート・ライブラリーは、対応するダイナミック・リンク・ライブラ リーに関連付けられています。ご使用のアプリケーションは、インポート・ライブ ラリーにリンクされます。アプリケーションを実際にロードし、実行するときに、 オペレーティング・システムが、対応するダイナミック・リンク・ライブラリーを ロードします。

ステートメント・キャッシュ

照会の処理は、組み込みステートメント・キャッシュ によりさらに最適化されま す。

ステートメント・キャッシュは、これまでに準備されたいくつかの SOL ステート メントを格納する内部メモリーです。1 つのセッションでキャッシュされるステー トメント数は、クライアント・サイドの solid.ini 構成パラメーター

Client.StatementCache を使用して設定できます。デフォルト値は 6 です。

ステートメント・キャッシュは、準備済みステートメントがキャッシュ内に存在す る場合には、準備段階を省略するようにして動作します。接続が閉じると、ステー トメント・キャッシュはパージされます。

JDBC では、ステートメント・キャッシュ・サイズを、非標準の「StatementCache」 接続プロパティーを使用して動的に設定できます。詳しくは、114ページの『非標 準の接続プロパティー』を参照してください。

2 solidDB ODBC API の使用

このセクションでは、ODBC API を使用するアプリケーションの開発に関して、solidDB に固有の情報と使用例を示します。

一般に、solidDB は、Microsoft ODBC 3.51 標準に準拠しています。 solidDB ODBC API は、Microsoft が提供する関数プロトタイプに基づいて定義されています。このガイドでは、solidDB に固有の使用法が適用される領域と、オプション、データ型、および関数のサポートが異なる領域について詳しく説明します。

注: この「IBM solidDB プログラマー・ガイド」には、ODBC API 解説の全体は含まれていません。ODBC API を使用したアプリケーションの開発について詳しくは、「Microsoft ODBC Programmer's Reference」を参照してください。

solidDB は、Unicode 用および ASCII 用として、2 つのバージョンの ODBC ドライバーを提供しています。Unicode バージョンは ASCII バージョンのスーパーセットであり、Unicode 文字セットと ASCII 文字セットで使用できます。

solidDB ODBC ドライバーのインストール

solidDB インストール・プログラムは、2 つの ODBC ドライバー (1 つは Unicode 用、もう 1 つは ASCII 用) をインストールします。Unicode バージョンは ASCII バージョンのスーパーセットであり、Unicode 文字セットと ASCII 文字セットで使用できます。solidDB インストール・プログラムを使用して、ODBC ドライバーのみをインストールすることもできます。

Windows

Windows 環境では、solidDB インストール・プログラムは ODBC ドライバーと以下のシステム・データ・ソース名 (DSN) を自動的にインストールします。自分自身のユーザー DSN を追加することもできます。

- Windows 32 ビット・オペレーティング・システムの場合
 - IBM solidDB 6.5 32 ビット ANSI
 - IBM solidDB 6.5 32 ビット Unicode
- Windows 64 ビット・オペレーティング・システムの場合
 - IBM solidDB 6.5 64 ビット ANSI
 - IBM solidDB 6.5 64 ビット Unicode

Linux® および UNIX

Linux および UNIX 環境では、ODBC ドライバー・ライブラリー・ファイルは以下のディレクトリーにインストールされます。

- <solidDBインストール・ディレクトリー>/bin/: 動的ライブラリー・ファイル
 - sac<platform><version>.sa または sac<platform><version>.so ANSI
 - soc<platform><version>.sa または soc<platform><version>.so Unicode

- <solidDB インストール・ディレクトリー>/lib/: 静的ライブラリー・ファイル
 - solidodbca.sa または solidodbca.so ANSI
 - solidodbcu.sa または solidodbcu.so Unicode

オペレーティング・システムに応じて、ファイル拡張子は .sa または .so のどち らかになります。

solidDB のインストールを伴わない ODBC ドライバーのインストー ル

solidDB をインストールせずに ODBC ドライバーをインストールするには、以下の 手順を実行します。

- 1. solidDB インストール・プログラムを開始します。
- 2. 「Custom」インストールを選択します。
- 3. 「ODBC」を選択します (「Server」と「Samples」を選択解除します)。
- 4. 画面の指示に従ってインストールを実行します。

solidDB ODBC ドライバー 3.51 機能のサポート

このセクションでは、以前のバージョン (1.0、2.0、および 3.0) の solidDB ODBC ドライバーから solidDB ODBC ドライバー 3.51 にマイグレーションしたユーザー を対象にした、ODBC ドライバー 3.51 の機能のサポートを詳細に説明します。

このドライバーでは、以下の機能がサポートされます。

- 記述子の完全なサポート
- すべてのカタログ API のサポート
- Unicode のサポート
- マルチスレッドのサポート
- ADO/DAO/RDO/OLE DB のサポート
- MS Access と MS Query を通したデータ・アクセス
- ブロック・カーソルのサポート

Windows オペレーティング・システム上での使用法の概要

Windows オペレーティング・システムでは、solidDB ODBC ライブラリーは .DLL ファイルとして提供されます。

ファイルは、Unicode バージョンと ASCII バージョンで、それぞれ socw32VV.dll と sacw32VV.d11 という名前になります (ここで、「VV」はバージョン番号を示し ています)。例えば、バージョン 4.1 の Unicode ODBC ドライバーは socw3241.dll という名前になります。これらの .DLL ファイルのいずれかにある関数を呼び出す には、solidDB インポート・ライブラリー・ファイルにリンクする必要がありま す。Windows 上の solidDB では、このインポート・ライブラリー・ファイルは solidimpodbcu.lib (Unicode) または solidimpodbca.lib (ASCII) という名前にな ります。このインポート・ライブラリー・ファイルには、対応する solidDB ODBC DLL (例えば socw3241.dll) へのエントリー・ポイントが含まれます。

注: ライブラリー・ファイルは、C++ で作成されています。その他の開発ツールキ ット・メーカーのリンカーでは、異なるライブラリー・ファイル・フォーマットが 想定される場合があります。このような場合には、開発ツールキットのインポー ト・ライブラリー・ユーティリティーを使用して、ご使用のリンカーと互換性のあ るライブラリー・ファイルを構築する必要があります。これは、「Light Client」ラ イブラリーでのみ必要です。他のライブラリー・ファイルについては、Microsoft 以 外の大部分のリンカーと互換性のあるインポート・ライブラリーが solidDB に含ま れています。

solidDB クライアント DLL (Solid® ODBC ドライバー・ファイル) の使用法に関する説明

solidDB ODBC ドライバーを使用するアプリケーション・プログラムを構築するに は、以下の2つの方法から選択できます。

1. Microsoft ODBC ドライバー・マネージャーを使用する。

すべてのクライアント・ワークステーションに Microsoft ODBC ソフトウェアを インストールし、solidDB ODBC ドライバーを使用してデータ・ソースを定義す る必要があります。ドライバー・マネージャーを使用すると、solidDB ODBC ド ライバーを使用できるアプリケーションであれば、さらに、他のどの ODBC 準 拠エンジンとも連携します。

2. solidDB ODBC ドライバーを直接使用する。

接続は、Microsoft ODBC ドライバー・マネージャーを使用せずに、サーバー・ プロセスに対して直接開かれます。これにより、通常、solidDB の組み込みデプ ロイメントがより簡単になります。ただし、アプリケーションが使用できる関数 は、solidDB ライブラリー (つまり、Solid ODBC ドライバー) によって提供さ れた関数に限られます。アプリケーションは、Microsoft ODBC ドライバー・マ ネージャーまたは Microsoft Cursor Library でインプリメントされた ODBC 関 数を使用できません。

solidDB は、Microsoft ODBC ドライバー・マネージャーで使用できる、またはそれ なしで使用できるサンプル・プログラムをいくつか提供しています。これらのサン プルは、solidDB Development Kit (SDK) をインストールしたときに作成された 「samples」ディレクトリーのサブディレクトリーに入っています。以下に、選択可 能な方法の両方について、提供されているサンプルを作成および実行する方法を簡 単に説明します。

1.

ODBC ドライバー・マネージャーを使用するサンプルを作成する。

- a. 新しいアプリケーション・プロジェクトを作成します。
- b. プロジェクトに C ソース・ファイル (例えば sqled.c や embed.c) を追加 します。
- c. solidDB SQL API ヘッダーをコンパイラーに可視になるように設定します。
- d. コンパイラー用に SS WINDOWS を定義します。
- e. コンパイルおよびリンクを行います。

- f. solidDB ODBC ドライバーをインストールしたことを確認します。また、使 用する接続ストリングが ODBC データ・ソース名として定義されていること を確認します。
- g. 実行して、listen 状態の solidDB サーバーに接続します。
- 2. solidDB ODBC ライブラリーを直接使用するサンプルを作成する。

以下に、ODBC ドライバー・マネージャーの構成に対して必要な変更をリストし ます。

- a. プロジェクトに、solidDB ODBC ドライバー・ライブラリー・ファイル (solidimpodbcu.lib) を追加します。
- b. デフォルトのライブラリー・リストから ODBC ドライバー・マネージャー・ ライブラリー ODBC*.LIB を除去します。
- c. コンパイルおよびリンクを行います。
- d. これで、ODBC ドライバー・マネージャーをバイパスして、データ・ソース に接続できます。SQL API DLL socw32<VV>.dl1 (ここで、「VV」はバージ ョン番号を示す) および solidDB 通信 DLL が使用可能であることを確認し ます。データ・ソースは、solid.ini または ODBC 管理ウィンドウで定義で きます。
- e. クライアントを実行して、listen 状態の solidDB サーバーに接続します。

関数の呼び出し

このセクションでは、プログラムが ODBC ドライバーの関数を呼び出す方法を説明 します。

ヘッダー・ファイルと関数プロトタイプ

プログラムで ODBC ドライバーの関数を呼び出す場合、ODBC ヘッダー・ファイ ルをインクルードする必要があります。これらのファイルには、ODBC 関数、およ び ODBC 関数で使用されるデータ型と定数が定義されています。ヘッダー・ファイ ルは、solidDB に固有ではなく、Microsoft が提供する標準ヘッダー・ファイルで す。solidDB ODBC ドライバーは (他の ODBC ドライバーと同様に)、これらのへ ッダー・ファイルに指定された関数をインプリメントします。

ASCII & Unicode

ODBC ドライバーには、ASCII と Unicode の 2 つの「フレーバー」があります。 ASCII ドライバーは、ASCII 文字セットのみをサポートします。Unicode ドライバ ーは、Unicode 文字セットと ASCII 文字セットの両方をサポートします。

プログラムで、ASCII ODBC 関数のみを呼び出す場合は、以下のヘッダー・ファイ ルをインクルードする必要があります。

- SQL.H
- SQLEXT.H

プログラムで、Unicode の ODBC 関数を呼び出す場合には、以下のヘッダー・ファ イルをインクルードする必要があります。

• SQLUCODE.H

• WCHAR.H。このファイルは、Microsoft Visual C++ (または Developer Studio) で提 供されています。

プログラムで、ASCII 関数と Unicode 関数の両方を呼び出す場合には、Unicode の ヘッダー・ファイルのみをインクルードしてください。Unicode バージョンのヘッ ダー・ファイルには、ASCII 関数の定義も含まれています。つまり、Unicode ヘッ ダーは、ASCII ヘッダーのスーパーセットです。

ドライバー、API、および SQL 適合レベルについて詳しくは、「Microsoft ODBC Programmer's Reference」のセクション『Introduction to ODBC』を参照してくださ

ODBC ドライバー・マネージャーの使用

アプリケーションは、solidDB ODBC ドライバーに直接リンクするか、または ODBC ドライバー・マネージャーにリンクします。

Windows システムでは、solidDB に接続するアプリケーションが OLE DB または ADO API を使用する場合、またはドライバー・マネージャーを必要とするデータベ ース・ツール (Microsoft Access、FoxPro、Crystal Reports など) を使用する場合 に、ドライバー・マネージャーが必要になります。その他のほとんどの場合、ドラ イバー・マネージャーにリンクする代わりに、ODBC ドライバーに直接リンクする ことができます。

Windows システムでは、Microsoft がドライバー・マネージャーを提供しており、ド ライバー・マネージャー・インポート・ライブラリー (ODBC32.LIB) にリンクしてド ライバー・マネージャーにアクセスできます。

他のプラットフォームでは、別のベンダーのドライバー・マネージャーにリンクで きます。例えば Linux では、unixODBC を使用できます。

アプリケーションが ODBC 関数を呼び出すときの基本的なアプリケーション手順、 および ODBC 関数の呼び出しについて詳しくは、「Microsoft ODBC Programmer's *Reference*」のセクション『Introduction to ODBC』を参照してください

データ型

287ページの『付録 E. データ型』 では、solidDB がサポートする SOL データ型 に関する情報が提供されます。Microsoft からのヘッダー・ファイルには、クライア ント・プログラムで使用する C 言語のデータ型に関する情報が含まれています。ア プリケーション・プログラムとデータベース・サーバー間でデータを転送するに は、適切な型を使用する必要があります。例えば、ほとんどの 32 ビット・プラッ トフォームでは、C 言語の「int」データ型は、SQL の「INT」データ型に対応しま す。C 言語の「float」データ型は、SOL の「REAL」データ型に対応します。(C の 「float」は、SQL の「FLOAT」に対応しないことに注意してください。) ODBC 呼 び出しを介したデータの転送に使用する C 言語のデータ型について詳しくは、該当 するヘッダー・ファイル SQL.H、SQLEXT.H、SQLUCODE.H、および WCHAR.H を参照し てください。

スカラー関数

スカラー関数は、各行に対する値を返します。例えば、「絶対値」スカラー関数 は、引数として数値列を取り、列内の各値の絶対値を返します。スカラー関数は、 以下の ODBC エスケープ・シーケンスで呼び出します。

{fn scalar-function}

注: 開始文字と終了文字には、括弧ではなく中括弧を使用します。

スカラー関数のリストと使用法に関する詳細な例については、335ページの『付録 F. スカラー関数』を参照してください。

solidDB のネイティブ・スカラー関数

solidDB は、以下のネイティブ・スカラー関数を提供しますが、ODBC エスケー プ・シーケンスで呼び出すことはできません。以下の関数が提供されています。

- CURRENT CATALOG(): 現行のアクティブ・カタログ名を含む WVARCHAR ス トリングを返します。この名前は、ODBC スカラー関数 {fn DATABASE()} と同 じです。
- LOGIN CATALOG(): 接続されているユーザーに関するログイン・カタログを含 む WVARCHAR ストリングを返します (現在、ログイン・カタログは、システ ム・カタログと同じです)。
- CURRENT_SCHEMA(): 現行のアクティブ・スキーマ名を含む WVARCHAR ス トリングを返します。

関数からの戻りコード

アプリケーションが関数を呼び出すと、ドライバーはその関数を実行し、事前定義 されたコードを返します。これらの戻りコードは、成功、警告、または失敗の状況 を示します。以下の戻りコードがあります。

- SQL SUCCESS
- SQL_SUCCESS_WITH_INFO
- SQL NO DATA FOUND
- SQL ERROR
- SQL_INVALID_HANDLE
- SQL STILL EXECUTING
- SQL_NEED_DATA

関数から SQL_SUCCESS_WITH_INFO または SQL_ERROR が返された場合、アプ リケーションは、SQLError を呼び出して、エラーに関する追加情報をリトリーブす ることができます。

データ・ソースへの接続

データ・ソースとしては、データベース・サーバー、フラット・ファイル、または 別のデータ・ソースを使用できます。

データ・ソースにアクセスするには、アプリケーションが SQLConnect() 呼び出し (ServerName) で使用する solidDB サーバーのネットワーク名 を定義する必要があ ります。ネットワーク名は、以下の 3 つの方法のいずれかで指定できます。

- 関数呼び出しにネットワーク名を直接組み込む。
- 関数呼び出しに、論理データ・ソース名マッピングを使用してネットワーク名を 組み込む。
- 関数呼び出しで、空ストリングとしてネットワーク名を指定する。

ネットワーク名を定義するための3つの接続タイプがあります。

- 基本接続
- 透過接続
- SMA 接続

以下のセクションでは、基本接続 を使用してデータ・ソースに接続する方法を説明 します。

透過接続 (TC 情報) については、「IBM solidDB 高可用性ユーザー・ガイド」のセ クション『透過接続の使用』および『透過接続情報の構文』を参照してください。

SMA 接続については、「IBM solidDB 共有メモリー・アクセスおよびリンク・ライ ブラリー・アクセス・ユーザー・ガイド」のセクション『SMA 用のローカル接続の 確立』を参照してください。

ネットワーク名と接続ストリングの構文

solidDB のネットワーク名の構文は、接続タイプ (基本接続、透過接続 (TC 情報)、 または SMA 接続) によって異なります。

• 基本接続

基本接続は、アプリケーションと solidDB サーバーの間の接続に TCP/IP などの ネットワーク・プロトコルを使用する、最も一般に使用される接続タイプです。

• 透過接続 (TC 情報)

透過接続 (TC 情報) は、高可用性 (HA) 構成でクライアントと solidDB HotStandby サーバーの間の (単一の) 接続を指定するために使用されます。

· SMA 接続

SMA 接続は、共有メモリー・アクセス (SMA) セットアップでクライアントと SMAサーバーの間のローカル接続を定義するために使用されます。

ネットワーク名の構文

ネットワーク名の構文は以下のとおりです。

<network name>::=<basic connectivity>|<transparent connectivity>|<SMA connection> ここで、

• <basic connectivity>::=[<encryption attribute>] <connect string> <encryption attribute>::=USE ENCRYPTION=YES | NO

<connect string>::=protocol_name [options] [server_name] [port_number]

USE ENCRYPTION=YES tcp localhost 1315

<transparent connectivity>::={[<failure transparency level attribute>]
 [preferred access attribute>] [<encryption attribute>] <connect target
 list>} | <cluster info>

詳しくは、「IBM solidDB 高可用性ユーザー・ガイド」の『透過接続情報の構文』を参照してください。

例

TF=SESSION USE ENCRYPTION=YES SERVERS=tcp 2315 tcp 1315

• <SMA connection>::= sma <connect string>

<connect string>::=protocol_name [options] [server_name] [port_number]

sma tcp 1315

詳しくは、「 $IBM\ solidDB\$ 共有メモリー・アクセスおよびリンク・ライブラリー・アクセス・ユーザー・ガイド」のセクション『 $SMA\$ 用のローカル接続の確立』を参照してください。

solidDB 接続ストリング

solidDB 接続ストリングは、通信プロトコル、使用可能な一連の特殊オプション、オプションのホスト・コンピューター名、および サーバー名 で構成されています。

クライアントは、この組み合わせで接続先のサーバーを指定します。通信プロトコルとサーバー名は、サーバーがネットワーク listen 名で使用するものと一致する必要があります。さらに、クライアントとサーバーを別のマシンで実行している場合には、大部分のプロトコルで、ホスト・コンピューター名を指定する必要があります。クライアントのネットワーク名のすべてのコンポーネントでは、大/小文字を区別しません。

接続ストリングのフォーマットは以下のとおりです。 protocol_name [options] [host_computer_name] server_name

ここで、

• options には、以下のオプションを任意に組み合わせて指定できます。

表 4. 接続ストリングのオプション

オプション	説明	プロトコル
-Z	この接続でのデータ圧縮を可能にします。	すべて

表 4. 接続ストリングのオプション (続き)

オプション	説明	プロトコル
-c milliseconds	ログイン・タイムアウトを指定します (デフォルトは、オペレーティング・システムに固有です)。指定された時間が経過すると、ログイン要求が失敗します。	TCP/IP
-r milliseconds	接続(または読み取り)のタイムアウトを指定します。指定された時間内に応答が受信されないと、ネットワーク要求が失敗します。値0(デフォルト)を指定すると、タイムアウトの制限がなくなります(オペレーティング・システムのデフォルト・タイムアウトが適用されます)。	TCP/IP
-ofilename	ネットワーク・トレース機能をオンにして、トレース出力ファイルの名前を定義します。 詳しくは、「IBM solidDB 管理者ガイド」の『ネットワーク・トレース機能』を参照してください。	すべて
-plevel	指定されたレベル (0 - 5) でサーバーに ping します。	すべて
-t	ネットワーク・トレース機能をオンにします。 詳しくは、「IBM solidDB 管理者ガイド」の『ネットワーク・トレース機能』を参照してください。	すべて
-aLANA_NUMBER	LANA 番号のデフォルト値をオーバーライドします。	NetBios

- host computer name は、クライアントとサーバーを別のマシンで実行している場 合に、TCP/IP プロトコルおよび名前付きパイプ・プロトコルで必要となります。
- server name は、通信プロトコルによって異なります。
 - TCP/IP プロトコルでの server name は、2315」などのサービス・ポート番号 です。
 - その他のプロトコルでの server_name は、「soliddb」や「chicago_office」など の名前です。

各種通信プロトコルでの構文について詳しくは、「IBM solidDB 管理者ガイド」 の『通信プロトコル』を参照してください。

注:

- protocol name と server name は、サーバーがネットワーク listen 名で使用して いるものと一致している必要があります。
- 接続ストリングを接続時に指定する場合は、引用符で囲む必要があります。
- 接続ストリングのすべてのコンポーネントでは、大/小文字を区別しません。

同じフォーマットの接続ストリングが、Com.Connect パラメーターだけでなく、 solidDB ツールまたは ODBC アプリケーションと Light Client アプリケーションで 使用される接続ストリングにも適用されます。

例

[Com]

Connect=tcp -z -c1000 1315

[Com]

Connect=nmpipe host22 SOLID

solsql "tcp localhost 1315"

solsql "tcp 192.168.255.1 1315"

rc = SQLConnect(hdbc, "upipe SOLID", (SWORD)SQL_NTS, "dba", 3, "dba", 3);

論理データ・ソース名の使用

データ・ソース名が有効な solidDB 接続ストリングではない場合、ドライバーはそ れを論理データ・ソース名と見なします。

論理データ・ソース名は、以下の方法で「論理名」と「接続ストリング」(ネットワ ーク名) のペアとしてデータ・ソースにマップすることができます。

• クライアント・サイドの solid.ini ファイルで [Data Sources] セクションを使 用する

パラメーターの構文は以下のとおりです。

[Data Sources]

logical name = connect string; Description

ここで、Description は論理名の目的に関するコメントに使用できます。

例:

論理名 My_application を、TCP/IP を使用して接続するデータベースにマップす るには、solid.ini ファイルに以下の行を追加します。

[Data Sources]

My_application = tcpip irix 1313; Sample data source

アプリケーションがデータ・ソース「My_application」を呼び出すと、solidDB ク ライアントはそれを「tcpip irix 1313」の呼び出しにマップします。

• Windows 環境で、レジストリー設定 (ODBC ドライバー・マネージャー) を使用 する

「コントロール パネル」 → 「管理ツール」 → 「データ ソース (ODBC)」を選 択して表示されるダイアログを使用するか、「レジストリ エディタ」(regedit) を 使用して、マッピングを追加できます。

詳しくは、「IBM solidDB プログラマー・ガイド」の『Windows 用の solidDB ODBC データ・ソースの構成』を参照してください。

ヒント: solidDB データ管理ツールは、solidDB ODBC API を使用します。ODBC データ・ソースを定義した場合は、solidDB ツールで solidDBサーバーに接続する 際にも、論理データ・ソース名を使用できます。

例えば、「tcp 2525」というサーバー名で「solid 1」というデータ・ソースを作成 した場合は、solidDB SQL エディター (solsql) で以下のコマンドを使用して solidDB に接続できます。

solsql solid 1

solidDB サーバーに接続する際にネットワーク名が有効な接続ストリングでない場 合、solidDB のツールとクライアントは、それを論理データ・ソース名と見なしま す。論理データ・ソース名と有効な接続ストリングとのマッピングを検出するため に、solidDB のツールとクライアントは、クライアント・サイドの solid.ini ファ イルを検査します。

Windows 環境で、solid.ini ファイルが見つからない場合、または論理データ・ソ ース名が [Data Sources] セクションに定義されていない場合は、Windows レジス トリー設定で行われたデータ・ソース設定が、以下の順序で検査されます。

1. 以下のレジストリー・パスで、データ・ソース名を検索します。

HKEY CURRENT USER\software\sodbc\sodbc.ini\square

2. 以下のレジストリー・パスでデータ・ソース名を検索します。

 ${\tt HKEY_LOCAL_MACHINE} \\ {\tt software} \\ {\tt Yodbc}. \\ {\tt ini} \\ {\tt YDSN}$

論理データ・ソース名のマッピングを検査すると、パフォーマンスに影響が出る場 合があります。

- 例えば、作業ディレクトリーがネットワーク・ドライブにマップされているため に、ファイル・システムの処理速度が著しく遅い場合は、solid.ini ファイルの 有無を検査することでパフォーマンスに重大な影響が及ぶ可能性があります。
- Windows 環境では、ODBC レジストリー内の論理データ・ソース・マッピングが すべて検査されます。この操作で消費される時間は、定義されたデータ・ソース の量に比例します。
 - データ・ソースが少数 (1 から 5) のみの場合、接続時間は約 5 ms です。
 - データ・ソースが 1000 個の場合、接続時間は約 200 ms です。

ただし、solid.ini ファイルに論理データ・ソース名のマッピングが含まれてい る場合は、ツールとクライアントがマッピングを調べるためにレジストリーにア クセスすることはありません。

空のデータ・ソース名

アプリケーションが (空ストリングを指定することにより) solidDB サーバー・ネッ トワーク名を指定せずに ODBC API を直接使用し、SOLConnect() を呼び出す場 合、それをクライアント・アプリケーションの solid.ini ファイルの [Com] セク ション内のパラメーター Connect から読み取ります。

solid.ini ファイルは、アプリケーションの現行作業ディレクトリー内、または SOLIDDIR 環境変数で指定されたパスに存在する必要があります。

アプリケーションのワークステーションの solid.ini の中にある以下の接続行は、 「spiff」という名前のホスト・コンピューターで実行し、名前「1313」(この場合は ポート番号) を listen している solidDB サーバーに、TCP/IP プロトコルを使用し て、アプリケーション (クライアント) を接続します。

[Com]

Connect = tcpip spiff 1313

solid.ini 構成ファイルの中に Connect パラメーターが存在しない場合、クライア ントは代わりにその環境に応じたデフォルトを使用します。Listen パラメーターと

Connect パラメーターのデフォルトは、アプリケーション (クライアント) が、デフ ォルトのネットワーク名で listen するローカル solidDB サーバーに常に接続するよ うに選択されます。したがって、ローカル通信 (1 台のマシン内) では、接続の確立 のために必ずしも構成ファイルが必要となるわけではありません。

Windows 用の solidDB ODBC データ・ソースの構成

Windows プラットフォーム用に ODBC データ・ソースを構成するには、このセク ションで説明する手順を実行する必要があります。

始める前に

solidDB ODBC データ・ソースを構成するには、solidDB ODBC ドライバーがイン ストールされている必要があります。

手順

- 1. 「コントロール パネル」 → 「管理ツール」から「データソース (ODBC)」を起 動します。
- 2. 「**ユーザー DSN**」タブを開きます。
- 3. 「追加...」ボタンをクリックします。
- 4. solidDB ODBC ドライバー (データベース要件に従って ANSI または UNICODE) を選択します。
- 5. 以下の例に示す「solidDB ODBC ドライバー セットアップ」ボックスで、デー タ・ソース構成を入力します。

注: 「NetworkName」項目は、solid.ini で定義したデータベース・サーバーの listen アドレスと対応している必要があります。ネットワーク名は、3ページの 『solidDB 接続ストリングのフォーマット』に示す接続ストリング・フォーマッ トに従います。

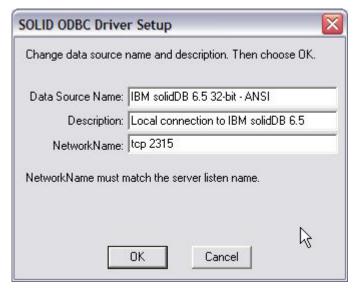


図 1. ODBC ドライバー セットアップ

unixODBC を使用した solidDB ODBC ドライバーの使用

unixODBC は、UNIX 型環境に対応した ODBC ドライバー・マネージャーです。 アプリケーションを直接 solidDB ODBC ドライバーにリンクしないで、unixODBC DriverManager を使用することができます。

unixODBC および unixODBC DriverManager について詳しくは、 http://www.unixodbc.org/ にアクセスしてください。

構成ファイル

unixODBC DriverManager は、以下の 2 つの構成ファイルの指定に従って、適切な データ・ソース・ドライバーをロードします。

- odbc.ini または .odbc.ini: データ・ソースおよび実際の ODBC ドライバーの 論理名を指定します。
- odbcinst.ini または .odbcinst.ini: 論理ドライバー名を、ファイル・システム 上のその物理的位置に関連付けます。

上記のファイルに加えて、solidDB ODBC ドライバーには、クライアント・サイド の solid.ini 構成ファイルが必要です。このファイルでは、論理データ・ソース名 が、有効な solidDB 接続ストリングに関連付けられます。

odbc.ini 構成ファイルの構文

odbc.ini ファイルまたは .odbc.ini ファイルは、データ・ソースごとに、少なく とも以下の 2 つの項目を示す必要があります。

- 大括弧で囲まれたデータ・ソースの論理名。例えば、[my solid]。
- 構文 Driver=<driver name> を使用することによって使用される実際の ODBC ドライバーの論理名。例えば、Driver = solid odbc。

構文 Description=My first Solid を使用して、さらに記述を追加することがで きます。

追加情報は、すべて無視されます。

odbcinst.ini 構成ファイルの構文

ODBC ドライバーの論理名と物理的位置は、以下のように、odbcinst.ini ファイル または .odbcinst.ini ファイルに指定される必要があります。

- [<the logical name of the driver>]、例えば、[solid odbc]
- Driver = <absolute path to the driver>、例えば、Driver = /home/jsmith/sacl2x64.so

クライアント・サイドの solid.ini 構成ファイルの構文

クライアント・サイドの solid.ini ファイルでは、以下のように、論理データ・ソ ース名を有効な solidDB 接続ストリング (ネットワーク名) に関連付ける必要があ ります。

• [Data Sources]

• <the logical data source name> = <connect string> (例えば、my solid=tcp my machine 1964 など)

構成ファイルの場所

システム・レベルのデータ・ソースは、/usr/local/etc/odbc.ini に指定されま す。

ユーザー・レベルの DSN は、~/.odbc.ini に指定されます。

同様に、システム・レベルのドライバーは、/usr/local/etc/odbcinst.ini に指定 され、ユーザー・レベルのドライバーは、~/.odbcinst.ini に指定されます。

クライアント・サイドの solid.ini ファイルは、SOLIDDIR 環境変数によって設定 されたディレクトリーか、現在の作業ディレクトリーに置くことができます。

ドライバーのリンク

solidDB ODBC ドライバーではなく、unixODBC ドライバーにリンクするには、以 下の手順を実行します。

- 1. unixODBC ドライバーを選択した場所にコピーします。
- 2. solidDB ODBC ドライバーのライブラリー・ファイルを、unixODBC ライブラリ ー・ファイルに置き換えます。

例えば、以下のようにします。

直接リンク: LDFLAGS = \$(SOLID LIB)/linux/sac12x65.so

unixODBC ドライバー・マネージャー: LDFLAGS = \$(SOLID LIB)/linux/ libodbc.so

構成ファイルの例

```
~/.odbc.ini
    [foo]
                       = Testing Solid
   Description
   Driver
                       = solid_driver_65
~/.odbcinst.ini :
    [solid driver 63]
                           = The newest ODBC driver
    Description
                   = /home/jsmith/Solid6.50.0009/bin/sacl2x64.so
   Driver
$SOLIDDIR/solid.ini :
    [Data Sources]
    solid1 = tcp 1964
```

ユーザー・ログイン情報のリトリーブ

このセクションでは、ドライバー・マネージャーがログイン情報をリトリーブする 方法を説明します。

アプリケーションが SQLDriverConnect() を呼び出し、ユーザーに情報を促すプロン プトを出すよう要求した場合、ドライバー・マネージャーは、以下の例に示すよう なダイアログ・ボックスを表示します。

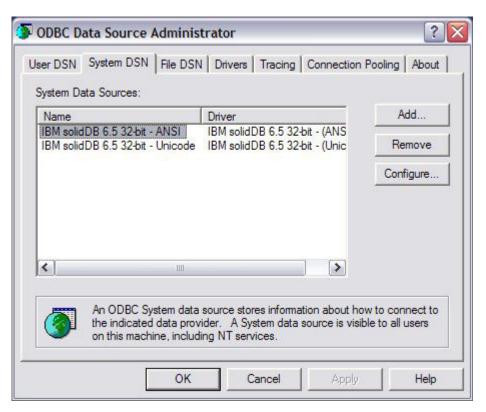


図 2. ODBC データ・ソース管理者

アプリケーションからの要求に従って、ドライバーは、ダイアログ・ボックスを表 示してログイン情報をリトリーブします。

ODBC ハンドル妥当性検査

ODBC ハンドル妥当性検査は、クライアント・サイドの

Com.ODBCHandleValidation パラメーターで制御するか、または非標準の ODBC 属性 SQL ATTR HANDLE VALIDATION で動的に制御することができます。パフォーマ ンス上の理由から、solidDB では ODBC ハンドル妥当性検査がデフォルトでオフに なります。

例えば、ODBC ドライバー・マネージャーを備えた Windows 環境では、そのドラ イバー・マネージャーがハンドル妥当性検査を行うため、solidDB ODBC ドライバ 一は同じ妥当性検査手順を繰り返す必要がありません。また、慎重に作成された ODBC アプリケーションでは、無効なハンドルが使用されることは通常ありませ ん。この場合も、ODBC ドライバーでのハンドル妥当性検査は必要ありません。ど ちらの場合でも、ドライバー内でのハンドルの妥当性検査をスキップすると、アプ リケーションのパフォーマンスが向上する場合があります。

ODBC ハンドル妥当性検査をオンまたはオフにするには、以下のようにします。

• クライアント・サイドの Com.ODBCHandle Validation を「Yes」または「No」に 設定します。デフォルトは「No」です。

[Com] ODBCHandleValidation=Yes

または

- 非標準の環境属性 SOL ATTR HANDLE VALIDATION を 1 (オン) または 0 (オフ) に 設定します。デフォルトは 0 です。
 - ハンドル妥当性検査をオンにするには、以下のように指定します。 SQLSetEnvAttr(henv, SQL ATTR HANDLE VALIDATION, (SQLPOINTER)1, 0);
 - ハンドル妥当性検査をオフにするには、以下のように指定します。 SQLSetEnvAttr(henv, SQL_ATTR_HANDLE_VALIDATION, (SQLPOINTER)0, 0);

重要: SQL ATTR HANDLE VALIDATION 属性は、環境ハンドルを作成してからその他 のハンドルが作成されるまでの間に設定する必要があります。

SQL ATTR HANDLE VALIDATION 属性はグローバルです。つまり、この属性を設定す ると、アプリケーションによって開始されるすべての solidDB ODBC ハンドルに 影響します。これにより、アプリケーションは妥当性検査されたハンドルと妥当 性検査されていないハンドルの両方を割り振ることがなくなるため、整合性が保 証されます。

ハンドル妥当性検査をオンにすると、ODBC 関数が標準のリターン値 SQL INVALID HANDLE で失敗する場合があります。

ハンドル妥当性検査をオフにした場合に、アプリケーションで無効なハンドルが使 用されると、ODBC ドライバーの動作が予測不能となり、ほとんどの場合アプリケ ーションは異常終了します。

関連概念

38ページの『ODBC API に対する solidDB 拡張機能』 以下の関数および接続属性は、ODBC API に対する solidDB 固有の拡張機能です。 361 ページの『付録 H. クライアント・サイド構成パラメーター』 クライアント・サイド構成パラメーターは、クライアント・サイドの solid.ini 構 成ファイルに保管されており、クライアントの始動時に読み取られます。

トランザクションの実行

このセクションでは、トランザクションをコミットする方法について説明します。

自動コミット・モードでは、各 SQL ステートメントは完全なトランザクションで あり、ステートメントの実行が完了すると自動的にコミットされます。『読み取り 専用トランザクションのコミット』セクションの読み取り専用 SELECT のコミット に関する重要な注意事項を参照してください。

手動コミット・モードでは、トランザクションは 1 つ以上のステートメントで構成 されています。手動コミット・モードでは、アプリケーションが SOL ステートメ ントをサブミットし、トランザクションが開かない場合には、ドライバーが暗黙的

にトランザクションを開始します。このトランザクションは、アプリケーションが SQLEndTran でトランザクションをコミットまたはロールバックするまで開いたま まになります。

読み取り専用トランザクションのコミット

- 分離レベルが READ COMMITTED 以外の場合には、読み取り専用ステートメン ト (例えば SELECT) の場合であってもコミットする必要があります。さらに、 サーバーが自動コミット・モードの場合であっても、ユーザーが SELECT ステー トメントをコミットする必要があります。ステートメントのコミットに失敗する と、パフォーマンスが低下するか、またはサーバーがメモリーを使い尽くすこと があります。この点については、以下でさらに詳しく説明します。
- 分離レベルが READ COMMITTED の場合には、読み取り専用ステートメントを コミットする必要はありません。その場合、以下の説明は適用されません。

読み取り専用ステートメントであっても、コミットする必要があります。その理由 は、solidDB は、各トランザクションの「読み取りレベル」を保存し、そのトラン ザクションがコミットするまで、他の接続からのそれ以降のトランザクションもす ベてメモリー内に維持されるからです。(この動作は、Bonsai ツリー・テクノロジー で実行される行バージョン管理の一部です。 Bonsai ツリーについて詳しくは、 「solidDB 管理者ガイド」を参照してください。) トランザクションをコミットしな いと、他のトランザクションが累積するのに従って、サーバーはより多くのメモリ ーを必要とするようになります。その結果、パフォーマンスが低下し、最終的に は、サーバーが使用可能メモリーを使い尽くすことがあります。詳しくは、 「solidDB 管理者ガイド」の『パフォーマンス・チューニング』の章を参照してくだ さい。

SELECT および自動コミット

自動コミット・モードを使用しても、SELECT ステートメントが必ずコミットされ るわけではありません。SELECT は単一のステートメントとして実行されるわけで はないので、サーバーは、SELECT を自動的にコミットすることはできません。各 SELECT では、カーソルがオープンされ、行がフェッチされ、さらにカーソルがク ローズされます。

複数行をフェッチするときに、サーバーが自動的にコミットするための方法が 2 つ 考えられます。1 つは、最終フェッチ後にコミットする方法で、もう 1 つは各フェ ッチ後にコミットする方法です。残念ながら、どちらの方法も実用的ではないた め、サーバーは、自動コミット・モードであっても SELECT ステートメントをコミ ットすることはできません。

サーバーはどのフェッチが最終フェッチか分からない、すなわち、サーバーはユー ザーがフェッチする行の数が分からないため、最終フェッチ後に自動的にコミット することはできません。(ユーザーがカーソルをクローズするまで、サーバーは、ユ ーザーがフェッチを完了したことが分かりません。)

各フェッチ後にコミットするのは実用的ではありません。各トランザクションは、 トランザクション開始時点のデータを参照する必要があるので、異なるトランザク ションで各フェッチが行われている場合、データベースの異なる「スナップショッ

ト」からデータを取得する可能性があるからです。異なるトランザクションで各フ エッチを実行すると、たとえカーソルが単一 SELECT ステートメントに関するもの であっても、そのカーソルに対してトランザクション分離レベルの REPEATABLE READ および SERIALIZABLE が混乱するか、または無意味になる可能性がありま す。

SELECT ステートメントをコミットする場合、ユーザーは、以下の操作を実行でき ます。

- COMMIT WORK ステートメントを明示的に実行する。
- 自動コミットが適用されるステートメント (つまり、SELECT 以外のステートメ ント)を実行する。
- カーソルがオープン・カーソルのみの場合、ユーザーがカーソルを明示的にクロ ーズすることによりコミットできる (サーバーが自動コミット・モードの場合 で、ほかにオープン・カーソルが存在しない場合、カーソルをクローズするとサ ーバーは自動的にコミットします)。これは、カーソルごとに処理が完了したら、 すぐにそのカーソルを明示的にクローズするよう推奨されている理由の 1 つで す。

注: カーソル内のデータが整合していること、および最新であることを保証するた め、サーバーは、実際には、カーソルをオープンする直前に自動コミットを実行し ます (自動コミットがオンの場合)。次に、サーバーは、それに続く FETCH ステー トメント (複数可) を含む新しいトランザクションをすぐに開始します。他のトラン ザクションと同様に、この新しいトランザクションもコミット (またはロールバッ ク) する必要があります。

サマリー

READ COMMITTED 以外の分離レベルを使用している場合、読み取り専用ステート メントであっても、すべてのステートメントをコミットする必要があります。

ほとんどの場合、自動コミット・モードで SELECT ステートメントを実行するとき は、各カーソルの処理の完了時にすぐにそのカーソルを明示的にクローズし、自動 コミット・モードであっても、明示的に COMMIT を行う必要があります。

データ・ソースのカタログに関する情報のリトリーブ

このセクションでは、データ・ソースのカタログに関する情報を返す関数(カタロ グ関数 と呼ばれる) について説明します。

- SOLTables は、データ・ソースに格納されている表の名前を返します。
- SQLTablePrivileges は、1 つ以上の表に関連付けられた特権を返します。
- SQLColumns は、1 つ以上の表内の列の名前を返します。
- SQLColumnPrivileges は、単一の表内の各列に関連付けられた特権を返します。
- SQLPrimaryKeys は、単一の表の主キーを含む列の名前を返します。
- SOLForeignKeys は、単一の表内の外部キーである列の名前を返します。また、指 定された表の主キーを参照する他の表内の列の名前を返します。

- SQLSpecialColumns は、単一の表内の行をユニークに識別する最適な列セットに 関する情報、またはトランザクションによって行内の値が更新された場合に自動 的に更新されるその表内の列に関する情報を返します。
- SOLStatistics は、単一の表およびその表に関連付けられた索引に関する統計を返 します。
- SOLProcedures は、データ・ソースに格納されたプロシージャーの名前を返しま
- SQLProcedureColumns は、1 つ以上のプロシージャーに関して、入出力パラメー ターのリスト、および結果セット内の列の名前を返します。

各関数は、情報を結果セットとして返します。アプリケーションは、SOLBindCol() と SQLFetch() を呼び出すことにより、これらの結果をリトリーブします。

関数の非同期実行

注: すべての solidDB 製品の ODBC ドライバーは、非同期実行をサポートしませ h.

SQL に対する ODBC 拡張機能の使用

ODBC は、SQL に対する拡張機能を定義しており、これは、大部分のデータベース 管理システムに対して共通です。

SOL 拡張機能について詳しくは、「Microsoft ODBC Programmer's Reference」の 『Escape Sequences in ODBC』を参照してください。

SQL に対する ODBC 拡張機能には、以下の内容が含まれます。

- プロシージャー
- ヒント

これらの拡張機能に関する solidDB の使用について詳しくは、以下の各セクション で説明します。

プロシージャー

ストアード・プロシージャーは、1 つ以上の SQL ステートメントとプログラム・ ロジックを含むプロシージャー型プログラム・コードです。

ストアード・プロシージャーはデータベースに格納されており、アプリケーション または他のストアード・プロシージャーからの 1 回の呼び出しで実行されます。 solidDB ストアード・プロシージャーの完全な説明については、「solidDB SOL ガ イド」でストアード・プロシージャーに関する説明を参照してください。

アプリケーションは、SQL ステートメントの代わりにプロシージャーを呼び出すこ とができます。プロシージャーの呼び出しで ODBC が使用するエスケープ節は、以 下のとおりです。

{call procedure-name [([parameter][,[parameter]]...)]}

ここで、procedure-name は、データ・ソースに格納されているプロシージャーの名 前を指定し、parameter は、プロシージャー・パラメーターを指定します。

注: ODBC 標準は、エスケープ節を以下のように指定します。

{[?=] call procedure-name [([parameter][,[parameter]]...)]}

ただし、solidDB の構文では、オプションの「?=」部分がサポートされません。(以 前のバージョンの「solidDB プログラマー・ガイド」では、solidDB は「?=」構文を サポートすると記載されていますが、これは正しくありません。)

プロシージャーには、ゼロ個以上のパラメーターを指定できます。入力パラメータ ーおよび入出力パラメーターでは、parameter にリテラルまたはパラメーター・マー カーを使用できます。データ・ソースによってはリテラル・パラメーター値を受け 入れないため、相互運用可能なアプリケーションではパラメーター・マーカーを使 用するようにしてください。出力パラメーターについては、parameter は、パラメー ター・マーカーにする必要があります。プロシージャー呼び出しにパラメーター・ マーカーが含まれる場合、アプリケーションは、プロシージャーを呼び出す前に SOLBindParameter()を呼び出して、各マーカーをバインドする必要があります。

プロシージャー呼び出しでは、入力パラメーターおよび入出力パラメーターは必須 ではありません。以下のルールに注意してください。

- {call procedure_name()} のように、パラメーターを省略した括弧付きで呼び出さ れたプロシージャーは、失敗する可能性があります。
- {call procedure name} のように、括弧なしで呼び出されたプロシージャーは、パ ラメーター値を返しません。
- 入力パラメーターは省略できます。入力パラメーターまたは入出力パラメーター を省略すると、ドライバーは、データ・ソースに対してパラメーターのデフォル ト値を使用するよう指示します。オプションとして、パラメーターのデフォルト 値は、そのパラメーターにバインドされた長さ/標識バッファーの値を使用して、 SQL_DEFAULT_PARAM に設定できます。
- パラメーターを省略する場合には、他のパラメーターと区切るためのコンマを入 れる必要があります。
- 入出力パラメーターまたはリテラル・パラメーター値を省略すると、ドライバー は、出力値を破棄します。
- プロシージャーの戻り値に対するパラメーター・マーカーを省略すると、ドライ バーは、戻り値を破棄します。
- アプリケーションで、値を返さないプロシージャーに戻り値パラメーターを指定 すると、ドライバーは、そのパラメーターにバインドされた長さ/標識バッファー の値を SQL_NULL_DATA に設定します。

データ・ソースがプロシージャーをサポートするかどうかを判断するには、アプリ ケーションで、SOL PROCEDURES 情報タイプを指定して SOLGetInfo() を呼び出 します。プロシージャーについて詳しくは、「solidDB SQL ガイド」でストアー ド・プロシージャーの説明を参照してください。

ヒント

照会内で、オプティマイザー・ディレクティブまたはヒント を指定して、使用する 照会実行プランを決定できます。

ヒントは、SQL-92 の疑似コメント構文を通して検出されます。solidDB は、ヒントに対して独自の拡張機能を提供します。

```
--(* vendor (Solid), product (Engine), option(hint)
--hint
-- *)--
hint :=
    [MERGE JOIN |
    TRIPLE MERGE JOIN
   LOOP JOIN
   JOIN ORDER FIXED
    INTERNAL SORT
   EXTERNAL SORT
   INDEX [REVERSE] table name.index name |
   PRIMARY KEY [REVERSE] table name
   FULL SCAN table name
    [NO] SORT BEFORE GROUP BY
   UNION FOR OR |
   OR FOR OR
   LOOP FOR OR]
```

疑似コメント接頭部の後に、識別情報が続きます。vendor は *Solid*、product は *Engine*、および疑似コメント・クラス名である option は有効な hint で指定します。

終止符はそれ自体で 1 行にすることも、またヒントの最終行の末尾に置くこともできます。例えば、以下のどちらも受け入れられます。

```
--(* vendor (Solid), product (Engine), option(hint)
--hint
--*)--
または
--(* vendor (Solid), product (Engine), option(hint)
--hint *)--
```

スペーシングは重要であることに注意してください。疑似コメント接頭部 --(* および接尾部 *)-- では、括弧とアスタリスクの間にスペースを入れることはできません。*)-- 終止符の前、つまりアスタリスクの前にはスペースが必要です (上記の例を参照)。--(* 内で、左括弧の前にはスペースは必要ありません。終止符 *)-- は、コメント区切り -- の後以外では、それ自体で 1 行にすることはできません。

ヒントは、常に、適用対象の SELECT、UPDATE、または DELETE のキーワード に続きます。

注: ヒントは、INSERT キーワードの後には指定できません。

各副選択では、独自のヒントが必要です。例えば、以下のヒント構文は有効な使用 方法です。

```
INSERT INTO ... SELECT hint FROM ...

UPDATE hint TABLE ... WHERE column = (SELECT hint ... FROM ...)

DELETE hint TABLE ... WHERE column = (SELECT hint ... FROM ...)
```

ヒント例 1

```
SELECT
```

```
--(* vendor(SOLID), product(Engine), option(hint)
--MERGE JOIN
--JOIN ORDER FIXED
```

-- *)--col1, col2 FROM TAB1 A, TAB2 B; WHERE A.INTF = B.INTF;

ヒント例 2

SELECT --(* vendor(SOLID), product(Engine), option(hint) --INDEX TAB1.INDEX1 --INDEX TAB1.INDEX1 FULL SCAN TAB2 -- *)--FROM TAB1, TAB2 WHERE TAB1.INTF = TAB2.INTF;

ヒントは、特定の動作に対応して特定のセマンティックを使用します。以下に、 solidDB がサポートするヒントのリストを示します。

表 5. solidDB がサポートするヒント

ヒント	定義
MERGE JOIN	FROM 節内にリストされたすべての表に関して、選択照会内でマージ結合アクセス・プランを選択するよう、オプティマイザーに指示します。MERGE JOIN オプションは、2つの表のサイズがほぼ同じ場合で、データが均等に分散している場合に使用します。同じ数量の行を結合する場合には、LOOP JOIN よりも高速です。データの結合に関して、MERGE JOIN は最大で3つの表をサポートします。結合表の順序は、列を結合し、列の結果を組み合わせることによって決まります。
	このヒントは、データが結合キーによってソートされる場合で、ネストされたループ結合パフォーマンスが十分でない場合に使用できます。オプティマイザーは、表間に等価述部 (例えば「table1.col1 = table2.col1」) が存在する場合にのみ、マージ結合を選択します。その他の場合には、オプティマイザーは、MERGE JOIN ヒントが指定されている場合であっても LOOP JOIN を選択します。
	マージ操作を行う前にデータがソートされていない場合には、solidDB 照会実行プログラムがデータをソートすることに注意してください。
	ソートを行うマージ結合では、ソートを行わないマージ結合と比較して、多くのリソースが必要となることに注意してください。

表 5. solidDB がサポートするヒント (続き)

	1.36
ヒント TRIPLE MERGE JOIN	定義 TRIPLE MERGE JOIN は、MERGE JOIN のバリアントです。MERGE JOIN では 2 つの表ソースですが、このヒントでは 3 つの表ソースが均等にマージされます。 TRIPLE MERGE JOIN ヒントは、SQL インタープリターに対して、可能な限り TRIPLE MERGE JOIN アルゴリズムを使用するように指示します。 TRIPLE MERGE JOIN アルゴリズムを使用できるのは、WHERE 条件を評価した後に得られるすべての行で等しくなっているはずの唯一のフィールドが、3 つの表ソースすべてに含まれている場合に限られます。
LOOP JOIN	FROM 節内にリストされたすべての表に関して、選択照会内でネストされたループ結合を選出するよう、オプティマイザーに指示します。デフォルトでは、オプティマイザーは、ネストされたループ結合を選出しません。 LOOP JOIN は、内部表と外部表をループし、内部表と外部表の列間の一致を検索します。パフォーマンスを向上さ
	せるために、結合列は索引付けする必要があります。 表が小さく、メモリー内に収まる場合には、ループ結合を 使用すると、他の結合アルゴリズムを使用するよりも効率 が高くなることがあります。
JOIN ORDER FIXED	オプティマイザーが、照会の FROM 節でリストされた順序で結合内の表を使用するよう指定します。これは、オプティマイザーが結合順序を再整理を試みないこと、および結合を完了するための代替アクセス・パスを検索を試みないこと意味しています。 EXPLAIN PLAN 出力を実行してヒントを「テスト」し、生成されたプランが指定された照会に対して最適であるか
INTERNAL SORT	全成されたプランが指定された思芸に対して最適であるが確認することを推奨します。 照会実行プログラムが内部ソーターを使用するよう指定します。このヒントは、想定される結果セットが小さい場合 (数千行ではなく、数百行)に使用します。例えば、総計、小さな結果セットでの ORDER BY や GROUP BY などを実行する場合などです。
	このヒントを使用すると、よりコストのかかる外部ソータ ーを使用する必要がなくなります。

表 5. solidDB がサポートするヒント (続き)

ヒント	定義
EXTERNAL SORT	照会実行プログラムが外部ソーターを使用するよう指定します。このヒントは、想定される結果セットが大きく、メモリーに収まらない場合に使用します。例えば、数千行の結果セットが想定される場合などです。
	さらに、外部ソート・ヒントを使用する前に、solid.ini に SORT 作業ディレクトリーを指定します。作業ディレク トリーを指定しないと、ランタイム・エラーが発生しま す。作業ディレクトリーは、solid.ini 構成ファイルの [sorter] セクションに指定します。例えば、以下のようにし ます。
	<pre>[sorter] TmpDir_1=c:\footnote{\text{soldb\footnote{temp1}}}</pre>
INDEX [REVERSE] table_name.index_name	指定した表に対して、指定した索引スキャンを強制的に実行します。この場合、アクセス・プランの作成に使用できるその他の索引が存在するか、または指定した照会に対して表スキャンの方が優れているかの評価には、オプティマイザーは進みません。
	EXPLAIN PLAN 出力を実行してヒントを「テスト」し、 生成されたプランが指定された照会に対して最適であるか 確認することを推奨します。
	オプションのキーワード REVERSE を指定すると、行が逆順に返されます。この場合、照会実行プログラムは索引の最終ページから開始して、索引のキーの降順(逆)で行を返し始めます。
	tablename.indexname 内では、tablename は完全修飾表名であり、catalogname および schemaname を含むことができます。
PRIMARY KEY [REVERSE] table_name	指定した表に対して、主キー・スキャンを強制的に実行し ます。
	オプションのキーワード REVERSE を指定すると、行が逆順に返されます。
	指定した表に対して主キーを使用できない場合、ランタイム・エラーが発生します。

表 5. solidDB がサポートするヒント (続き)

ヒント	定義
FULL SCAN table_name	指定した表に対して、表スキャンを強制的に実行します。 この場合、アクセス・プランの作成に使用できるその他の 索引が存在するか、または指定した照会に対して表スキャ ンの方が優れているかの評価には、オプティマイザーは進 みません。
	このヒントを使用する前に、EXPLAIN PLAN 出力を実行してヒントを「テスト」し、生成されたプランが指定された照会に対して最適であるか確認することを推奨します。
[NO] SORT BEFORE GROUP BY	GROUP BY 列で結果セットをグループ化する前に、SORT 操作を行うかどうかを示します。
	グループ項目が少数 (数百行) の場合、NO SORT BEFORE を使用します。一方、グループ項目が多数 (数千行) の場合、SORT BEFORE を使用します。
UNION FOR OR	UNION FOR OR ヒントは、SQL インタープリターに対して、A = 1 OR A = 2 スタイルの OR 条件を、以下の型の構造体で置換するように指示します。 SELECT WHERE A = 1 UNION ALL SELECT WHERE A = 2 ほとんどの場合、SQL インタープリターはこの置換を自動的に実行します。UNION FOR OR ヒントは、UNION 型
	の実行が必ず使用されるようにします。 注: A = 1 OR B = 2 型の条件も処理可能ですが、条件が相 互に排他的ではないために、問題が生じる可能性がありま す。このために、A = 1 OR B = 2 の構造体は以下のように なります。 SELECT WHERE A = 1 UNION ALL SELECT WHERE B = 2 AND UtoT NOT (A = 1)
	ここで、UtoT は UNKNOWN TO TRUE を表します。 UtoT 演算子は、NULL 値を伴うケースを処理するために必要となります。UtoT 演算子を使用しないと、値 A = NULL および B = 2 を含む行が UNION バリアントで正し
OR FOR OR	く表示されなくなります。 OR FOR OR ヒントは、UNION FOR OR と反対です。これにより、インタープリターは UNION 型のソリューションを使用しなくなります。
LOOP FOR OR	LOOP FOR OR ヒントは、UNION FOR OR と OR FOR OR の中間に位置する代替の照会実行プランです。LOOP FOR OR では、OR 値がデータ表レベルに個別に渡されますが、A = 1 OR B = 2 のような条件は処理できません (A = 1 OR B = 2 について詳しくは、UNION FOR OR の説明を参照してください)。

ODBC 拡張機能での追加の関数

ODBC は SQL ステートメントに関する以下の関数を提供しています。

これらの関数について詳しくは、「Microsoft ODBC Programmer's Reference」の 『API reference』を参照してください。

表 6. ODBC 拡張機能での追加の関数

関数	説明
SQLDescribeParam	準備済みパラメーターに関する情報をリトリーブします。
SQLNumParams	SQL ステートメント内のパラメーター数をリトリーブします。
SQLSetStmtAttr	これらの関数は、非同期処理、行セットのバインド方向、 返す可変長データの最大量、返す結果セット行の最大数、
SQLSetConnectAttr	照会タイムアウト値などのステートメント・オプションを
SQLGetStmtAttr	設定またはリトリーブします。SQLSetConnectAttr は接続 内のすべてのステートメントのオプションを設定すること に注意してください。

ODBC API に対する solidDB 拡張機能

以下の関数および接続属性は、ODBC API に対する solidDB 固有の拡張機能です。

非標準の ODBC 関数

表 7. ODBC API に対する solidDB 固有の ODBC 関数

関数	説明
SQLFetchPrev	この関数は、ODBC 関数 SQLFetch と同じですが、過去の レコードをフェッチします。SQLFetch 関数について詳し くは、「 <i>Microsoft ODBC Programmer's Reference</i> 」の『API reference』を参照してください。
SQLSetParamValue	この関数は、SQLPrepare で指定されている SQL ステートメント内にパラメーター・マーカー値を設定します。パラメーター・マーカーは、1 から順に左から右へ番号が付けられており、任意の順序で設定できます。
	この関数について詳しくは、91 ページの『非 ODBC solidDB Light Client 関数』を参照してください。
SQLGetCol	この関数は、ODBC 関数 SQLGetData と同じです。この関数について詳しくは、「 <i>Microsoft ODBC Programmer's Reference</i> 」の『API reference』を参照してください。

表 7. ODBC API に対する solidDB 固有の ODBC 関数 (続き)

関数	説明
SQLGetAnyData	この関数は、ODBC 関数 SQLGetData と同じです。この関数について詳しくは、「Microsoft ODBC Programmer's
	Reference」の『API reference』を参照してください。

非標準の ODBC 属性

以下の接続属性は、solidDB に固有のものです。

注: OUT のマークが付いている属性は読み取り専用であり、ODBC インターフェー スでは設定できません。

• SQL_ATTR_TF_LEVEL

OUT: 整数 (TF レベル: 0=NONE、1=CONNECTION、3=SESSION) 障害透過性レベル。

SQL_ATTR_TC_PRIMARY

OUT: ストリング、1 次サーバー接続ストリング

現行 1 次サーバーを示す値が常に存在します。

SQL_ATTR_TC_SECONDARY

OUT: ストリング、2 次サーバー接続ストリング

この値は、以下の場合にはワークロード割り当て済みサーバーを示します。

- 1. PA=READ MOSTLY で、しかも
- 2. 2 次サーバーが指定されたワークロード・サーバーである場合。

それ以外の場合、返されるストリングは空です。

• SQL ATTR TF WAITING

OUT: ストリング、2 次サーバー接続ストリング

この値は、割り当てられたウォッチドッグ (待機) 接続を示します。待機接続は、 1 次サーバーの損失 (破損、使用不可の状態) の可能性をより素早く検出するため に、ODBC ドライバーによって内部で使用されます。接続が TC 接続でない場 合、このストリングは空です。

• SQL ATTR PA LEVEL

OUT: 整数 (優先アクセス・レベル: 0=WRITE_MOSTLY、1=READ_MOSTLY) この属性は、ロード・バランシングを使用するかどうかを示します。

SQL_ATTR_TC_WORKLOAD_CONNECTION

OUT: ストリング、ワークロード接続のサーバー名

現行のワークロード接続サーバー。コミットの前に照会があった場合、値はトラ ンザクションがコミットされるサーバーを示します。これは、ステートメント属 性としても照会できます。その場合、これは次のステートメントを実行するサー バーを示します。

SOL ATTR LOGIN TIMEOUT MS

IN/OUT:整数、ログイン・タイムアウト (ミリ秒単位)

注: 秒単位でタイムアウトを設定するのに使用できる標準属性 SQL ATTR LOGIN TIMEOUT もあります。

SQL_ATTR_CONNECTION_TIMEOUT_MS

IN/OUT:整数、接続タイムアウト (ミリ秒単位)

注: 秒単位でタイムアウトを設定するのに使用できる標準属性 SQL ATTR CONNECTION TIMEOUT もあります。

• SQL_ATTR_QUERY_TIMEOUT_MS

IN/OUT:整数、照会タイムアウト (ミリ秒単位)

注: 秒単位でタイムアウトを設定するのに使用できる標準属性 SQL_ATTR_QUERY_TIMEOUT もあります。

SOL ATTR IDLE TIMEOUT

IN/OUT:整数、接続アイドル・タイムアウト (分単位)

サーバーが使用する、接続固有のアイドル・タイムアウトを示します。指定され た期間、接続上でアクティビティーがない場合、サーバーは自動的にその接続を シャットダウンし、事実上ユーザーを退去させます。

特殊なセマンティック:

- -1 (デフォルト): 接続タイムアウトは、サーバー・デフォルトと同等
- 0: アイドル・タイムアウトなし。接続は決して閉じられない

このプロパティー値は、SQLConnect()の実行前にのみ設定できます。

• SQL_ATTR_HANDLE_VALIDATION (環境ハンドル属性)

IN/OUT: 整数、ODBC 標準ハンドル妥当性検査をオン (1) またはオフ (0) にし ます。

デフォルトは 0 です。

この属性はグローバルです。つまり、この属性を設定すると、アプリケーション によって開始されるすべての solidDB ODBC 接続に影響します。これにより、ア プリケーションは妥当性検査されたハンドルと妥当性検査されていないハンドル の両方を割り振ることがなくなるため、整合性が保証されます。

特定のシステム、例えば ODBC ドライバー・マネージャーを含んでいる Windows では、そのドライバー・マネージャーがハンドルの妥当性検査を行うた め、solidDB ODBC ドライバー単独で同じ妥当性検査手順を繰り返す必要はあり ません。また、入念に作成された ODBC アプリケーションでは、通常、無効な

ハンドルは使用されません。その場合、ODBC ドライバーでのハンドルの妥当性 検査は必要ありません。どちらの場合でも、ドライバー内でのハンドルの妥当性 検査をスキップすると、アプリケーションのパフォーマンスが向上する場合があ ります。ハンドルの妥当性検査をオフにし、アプリケーションで無効なハンドル を使用した場合、ODBC ドライバーの動作は予測できず、多くの場合、アプリケ ーションは異常終了します。

SOL ATTR SET CONNECTION DEAD

IN/OUT:整数、必要な場合は 1 に設定する必要がある

この属性を接続に対して設定すると、ドライバーは強制的に接続を中止します が、サーバーとのハンドシェークは切断しません。この属性を 1 に設定した後、 接続は使用不能になります。

SOL ATTR PASSTHROUGH READ

IN: ストリング、読み取り型ステートメントの SQL パススルー・モード (「NONE」、「CONDITIONAL」、「FORCE」)

• SOL ATTR PASSTHROUGH WRITE

IN: ストリング、書き込み型ステートメントの SOL パススルー・モード (「NONE」、「CONDITIONAL」、「FORCE」)

カーソルの使用

ODBC ドライバーではカーソル という概念を使用して、結果セット、すなわちデー タベースからリトリーブしたデータ行内の位置を追跡します。コンピューター画面 上のカーソルが現在位置を示すのと同様に、カーソルを使用して現在位置を追跡し 示します。

アプリケーションが SQLFetch を呼び出すたびに、ドライバーはカーソルを次の行 に移動して、その行を返します。アプリケーションは SQLFetchScroll または SQLExtendedFetch (ODBC 2.x) を呼び出すこともでき、これによって 1 回のフェッ チまたは呼び出しで複数行をフェッチし、アプリケーション・バッファーに入れま す。これは「ブロック・カーソル」サポートとして知られています。実際にフェッ チされる行の数は、アプリケーションが指定する行セットのサイズによって異なる ことに注意してください。

アプリケーションは SOL POSITION オプションを使用して SOLSetPos を呼び出 し、フェッチされたデータ・ブロック内にカーソルを位置付けることができます。 これによって、アプリケーションは行セット内のデータをリフレッシュできます。 SOLSetPos は、SOL UPDATE オプションを指定してデータを更新したり、 SQL DELETE オプションを指定して結果セット内のデータを削除する場合も呼び出 されます。

コア ODBC 関数がサポートしているカーソルは、一度に 1 行ずつ、前方スクロー ルのみ行います。(結果セットから既にリトリーブしたデータ行を再度リトリーブす るには、アプリケーションで SOL CLOSE オプションを指定して SOLFreeStmt を 呼び出すことによりカーソルをクローズし、SELECT ステートメントを再実行し、 さらに SQLFetch、SQLFetch Scroll、または SQLExtendedFetch (ODBC 2.x) を使用 して、対象の行がリトリーブされるまで行をフェッチする必要があります。) 前方 だけでなく、後方スクロールの機能も必要な場合は、ブロック・カーソルを使用し てください。

行セットへのストレージの割り当て (バインディング)

個別のデータ行をバインドするだけでなく、アプリケーションは SQLBindCol を呼 び出して、行セット(1つ以上のデータ行)にストレージを割り当てることができま す。デフォルトでは、行セットは列方向にバインドされます。行方向にバインドす ることもできます。

行セットに含まれるデータ行の数を指定するには、アプリケーションで SQL ROWSET SIZE オプションを指定して SQLSetStmtAttr を呼び出します。

列方向バインディング

列方向のバインド結果にストレージを割り当てるには、アプリケーションでバイン ド対象の各列に対して、以下の手順を実行します。

- 1. データ・ストレージ・バッファーの配列を割り振ります。この配列のエレメント の数は、行セット内にある行の数と同じです。
- 2. データ値ごとに返すことができるバイト数を保持するストレージ・バッファーを 割り振ります。この配列のエレメントの数は、行セット内にある行の数と同じで す。
- 3. SOLBindCol を呼び出して、データ配列のアドレス、データ配列の 1 エレメント のサイズ、バイト数配列のアドレス、およびデータ変換後の型を指定します。デ ータをリトリーブすると、ドライバーは配列エレメントのサイズに基づき、デー 夕の連続行を配列内のどこに格納するかを判別します。

行方向バインディング

行方向のバインド結果にストレージを割り当てるには、アプリケーションで以下の 手順を実行します。

- 1. リトリーブしたデータの 1 行と、それに関連するデータ長を保持できる構造体 を宣言します。(バインドする列ごとに、構造体は、データ用の 1 つのフィール ドと、返すことができるデータのバイト数用の 1 つのフィールドを含みます。)
- 2. これらの構造体の配列を割り振ります。この配列のエレメントの数は、行セット 内にある行の数と同じです。
- 3. バインドする列ごとに SOLBindCol を呼び出します。各呼び出しでは、アプリケ ーションが最初の配列エレメント内の列のデータ・フィールドのアドレス、その データ・フィールドのサイズ、最初の配列エレメント内の列のバイト数フィール ドのアドレス、およびデータ変換後の型を指定します。
- 4. SOL BIND TYPE オプションを指定して SOLSetStmtAttr を呼び出し、構造体の サイズを指定します。データをリトリーブすると、ドライバーは構造体のサイズ に基づき、データの連続行を配列内のどこに格納するかを判別します。

カーソル・サポート

結果セットの基礎表への変更を検知するために、アプリケーションはさまざまな手 段を必要とします。このようなニーズに対応するために、各種のカーソル・モデル が設計されており、それぞれが結果セットの基礎表の変更へのセンシティビティー が異なります。

例えば、財務データの残高処理を行う場合、経理担当者は静的に見えるデータを必 要とします。データが継続的に変化している場合、帳簿で残高処理を行うことはで きません。コンサートのチケットを販売する場合、販売員は、どのチケットがまだ あるのかを示す最新の、すなわち動的なデータが必要です。

solidDB のカーソルは SQLSetStmtAttr で「動的」として設定されますが、部分的に 動的な動作をする静的カーソルと非常に似ています。solidDB の動的カーソルの動 作は、ユーザーに対し、他のユーザーが行った結果セットへの変更が可視である ODBC の動的カーソルとは異なり、そのような変更がユーザーに可視ではないとい う点で静的といえます。

solidDB では、カーソルをブロックからブロックに前方にスクロールし、後方にス クロールしない限り、あるいは更新後に同じブロック内で前後に移動している限 り、カーソルの動作は動的なものになります。これは、すべての変更が可視である ことを意味します。ただし、この動作は、solidDB の AUTOCOMMIT モード設定に よって影響されることに注意してください。詳しくは、44ページの『カーソルと自 動コミット』を参照してください。 SQLSetPos を使用した場合のカーソルの動作の 例については、46ページの『カーソルと位置付け操作』を参照してください。

solidDB のカーソルの動作に関するもう 1 つの特性は、トランザクションがそれ自 体によるデータ変更は(いくつかの制限付きで)表示できるが、時間的にオーバーラ ップしている他のトランザクションによる変更は表示できないという点です。(ユー ザー自身のデータ変更を表示する場合の制限について詳しくは、46ページの『カー ソルと位置付け操作』を参照してください。) 例えば Transaction A が開始すると、 Transaction A の開始前に作業をコミットしていなかった他のどのトランザクション による変更も表示されません。ユーザー自身の変更がそのユーザーに不可視になる solidDB の条件には以下があります。

- SELECT ステートメントで、ORDER BY 節、または GROUP BY 節を使用した ときに、solidDB が結果セットをキャッシュに入れると、ユーザー自身の変更が そのユーザーに不可視になります。
- ADO または OLE DB を使用して作成されたアプリケーションでは、solidDB の カーソルは行セットの更新などの機能を有効にするために、動的 ODBC カーソ ルのように機能します。

カーソル・タイプの指定

カーソル・タイプを指定するには、アプリケーションで SQL CURSOR TYPE オプ ションを指定して SOLSetStmtAttr を呼び出します。アプリケーションは、前方スク ロールのみを行うカーソル、静的カーソル、または動的カーソルを指定することが できます。

カーソルが前方スクロール・カーソルでない限り、アプリケーションは SOLExtendedFetch (ODBC 2.x) または SOLFetchScroll (ODBC 3.x) を呼び出して、 カーソルを後方または前方にスクロールさせます。

カーソル・サポート

このセクションでは、solidDB がサポートしているカーソル・タイプについて説明 します。

ODBC 3.51 では 3 つのタイプのカーソルが定義されています。

- ドライバー・マネージャーがサポートしているカーソル
- サーバーがサポートしているカーソル
- ドライバーがサポートしているカーソル

solidDB のカーソルは、サーバーがサポートしているカーソルです。

カーソルと自動コミット

このセクションでは、カーソルと自動コミットについて説明します。

カーソルと自動コミットに関する solidDB 固有の情報については、29ページの 『読み取り専用トランザクションのコミット』を参照してください。

ご使用のアプリケーションがブロック・カーソルと、位置付け更新および位置付け 削除を使用する場合は、solidDB の自動コミット・モードの使用には、いくつかの 制限もあります。これらのカーソル機能の簡単な説明については、41ページの『カ ーソルの使用』を参照してください。

ブロック・カーソルと、位置付け更新および位置付け削除を使用する際は、以下を 行う必要があります。

- アプリケーション内で、コミット・モードを SQL_AUTOCOMMIT_OFF に設定
- すべてのフェッチ操作と位置付け操作の完了後にのみ、アプリケーションでの変 更をコミットします。
- 位置付け操作を行うたびに変更をコミットしないようにしてください。

重要:

アプリケーションが SQL AUTOCOMMIT ON のコミット・モードを使用する場合 や、すべての位置付け操作が完了する前に変更をコミットする場合は、結果セット のブラウズ中にアプリケーションに予測不能な動作が発生する可能性があります。 詳しくは、以下のセクションを参照してください。

位置付けカーソル操作と SQL AUTOCOMMIT ON

solidDB ODBC ドライバーは、データベースからリトリーブしたデータ行である行 セット内の各行の行番号/カウンターを保持しています。アプリケーションのコミッ ト・モードが SQL AUTOCOMMIT ON に設定されており、行セット内の行に対し て位置付け更新または位置付け削除を実行した場合は、データベース内のその行が すぐに更新されます。行の新しい値によっては、行が結果セット内の元の位置から 移動されることがあります。更新された行が移動され、新しい位置は予測不能なの で (新しい値によってまったく異なるため)、ドライバーはこの行のカウンターを失 います。

また、更新された行の位置が変わったため、行セット内の他のすべての行のカウン ターも無効になる可能性があります。したがって、次回フェッチ操作または SQLSetPos 操作を行うときに、アプリケーションに不正な動作が発生する可能性が あります。

以下の例では、この制限を説明します。

アプリケーションで以下の手順を実行するとします。

- 1. コミット・モードを SQL_AUTOCOMMIT_ON に設定します。
- 2. 行セット・サイズを 5 に設定します。
- 3. 照会を実行して、n 行を含む結果セットを生成します。
- 4. SOLFetchScroll を使用して、5 行の最初の行セットをフェッチします。

サンプル結果セットを以下に示します。このサンプルでは、結果セットに含まれ る列は 1 つだけです (varchar(32) として定義されています)。以下の表では、最 初の列は、ドライバーによって内部で維持されている行番号を示します。 2番 目の列は、行の実際の値を示します。

表 8. サンプル結果セット

ドライバーにより内部に保管された 行カウンター	行の値
1	Antony
2	Ben
3	Charlie
4	David
5	Edgar

ここで、アプリケーションが SQLSetPos を呼び出して、3 行目を新しい値 Gerard で更新するとします。この更新を行うには、新しい行の値を移動して、以下のよう に位置付けします。

表 9. サンプル結果セット

ドライバーにより内部に保管された 行カウンター	行の値
1	Antony
2	Ben
空の行	
4	David
5	Edgar

表 9. サンプル結果セット (続き)

ドライバーにより内部に保管された 行カウンター	行の値
新しい行	Gerard

ここで「David」の行力ウンターは 4 ではなく 3 になります。一方、「Edgar」の カウンターは 5 ではなく 4 になります。行カウンターの一部が無効になったの で、ドライバーがカーソルの相対的位置付けまたは絶対位置付けを行うと間違った 結果を返すことになります。

コミット・モードを SQL_AUTOCOMMIT_OFF に設定しておくと、SQLEndTran 関 数を呼び出して変更をコミットするまでデータベースは更新されません。

カーソルと自動コミットに関する solidDB 固有の情報については、29ページの 『読み取り専用トランザクションのコミット』を参照してください。

カーソルと位置付け操作

アプリケーションが位置付け操作 (SOLSetPos の呼び出しの際の更新や削除など) を 実行する場合、結果セットの可視性には制限があります。

ケース 1 は、SOLSetPos を使用した場合のカーソルの動作を示したものです。ケー ス 1 では、更新の適用後に、同じブロック内でカーソルが前後にスクロールしま す。

ケース 1 は、カーソル使用時の結果セット内の更新の可視性を示すものですが、更 新が可視になる正確な環境は、いくつかの要因によって異なります。例えば、メモ リー・バッファー・サイズに対する結果セットの相対的なサイズ、トランザクショ ンの分離レベル、データをコミットする頻度などの要因が挙げられます。

ケース 2 は、行セット内でカーソルが後方にスクロールする場合、または更新の適 用後に異なる行セット内でカーソルが前後に移動する場合に、SOLSetPos を使用す る際のカーソル動作の制限を示したものです。

ケース 1

以下の例では、位置付け操作を使用したカーソル動作と、位置付け更新をユーザー に可視にする方法を示します。

アプリケーションで以下の手順を実行するとします。

- 1. コミット・モードを SQL_AUTOCOMMIT_OFF に設定します。
 - これは44ページの『カーソルと自動コミット』で説明している要件です。
- 2. 行セット・サイズを 5 に設定します。
- 3. 照会を実行して、n 行の結果セットを生成します。
- 4. SQLFetchScroll を使用して、5 行の最初の行セットをフェッチします。

サンプル結果セットを以下に示します。このサンプルでは、結果セットに含まれる 列は 1 つだけです (varchar(32) として定義されています)。以下の表では、最初の 列は、ドライバーによって内部で維持されている行番号を示します。 2 番目の列 は、行の実際の値を示します。

表 10. サンプル結果セット

ドライバーにより内部に保管された 行カウンター	行の値
1	Antony
2	Ben
3	Charlie
4	David
5	Edgar

ここで、アプリケーションが SQLSetPos を呼び出して、結果セットの 3 行目と 4 行目を Caroline および Debbie という名前で更新するとします。更新後、実際の行 の値には以下のように Caroline と Debbie が含まれています。

表 11. サンプル結果セット

ドライバーにより内部に保管された 行カウンター	行の値
1	Antony
2	Ben
3	Caroline
4	Debbie
5	Edgar

注:場合によっては、SELECT ステートメントの結果セットが大きすぎてメモリー に入りきらないことがあります。ユーザーが結果セット内を前後にスクロールする と、ODBC ドライバーはメモリー内の一部の行を破棄して、別の行を読み取ること があります。これによって、予期しない結果が生じることがあります。状況によっ ては、以前に変更された行に対して、カーソルが (ディスクなどから) 元の値を再度 読み込むと、カーソル内のデータの更新がいったん「消失」し、「再表示」するよ うに見えることがあります。

ケース 2

ケース 2 は、位置付け操作の使用時の制限を示します。以下の例は、位置付け操作 を使用した場合のカーソル動作と、位置更新がユーザーに可視でない場合を示しま

アプリケーションで以下の手順を実行するとします。

- 1. コミット・モードを SQL_AUTOCOMMIT_OFF に設定します。
 - これは44ページの『カーソルと自動コミット』で説明している要件です。
- 2. 行セット・サイズを 5 に設定します。
- 3. 照会を実行して、n 行の結果セットを生成します。
- 4. SQLFetchScroll を使用して、5 行の最初の行セットをフェッチします。

サンプル結果セットを以下に示します。このサンプルでは、最初の2つの行セ ットが示されます。結果セットに含まれる列は 1 つだけです (varchar(32) とし て定義されています)。以下の表では、最初の列は、ドライバーによって内部で 維持されている行番号を示します。 2 番目の列は、行の実際の値を示します。

表 12. サンプル結果セット

ドライバーにより内部に保管された 行カウンター	行の値
1	Antony
2	Ben
3	Charlie
4	David
5	Edgar
6	Fred
7	Gough
8	Harry
9	Ivor
10	John

上記の最初の 4 つのステップの後で、アプリケーションが SQLSetPos を呼び出 して以下のタスクを実行するとします。

- 5. 結果セットの 3 行目を更新します。
- 6. SQLFetchScroll を呼び出して次の行セットにスクロールします。これによって、 6 行目から 10 行目までを取得し、カーソルは 6 行目を指すことになります。

7. 行セットを 1 つ後方にスクロールして、最初の行セットに戻ります。これは、 FETCH_PRIOR オプションを指定して SQLScrollFetch を呼び出すことによって 行われます。

このようなタスクの実行後も、ステップ 5 で更新された 3 行目には、「ケース 1」のように更新された値ではなく、古い値が含まれています。ケース 2 の場合は、変更のコミット後に限り、更新された値が可視となります。ただし、44ページの『位置付けカーソル操作と SQL_AUTOCOMMIT_ON』のセクションで説明した SQL_AUTOCOMMIT_ON 設定時の予測不能な動作により、ブロック・カーソルおよび位置付け操作に関連する作業がすべて完了するまで、コミットを行うことはできません。

ブックマークの使用

ブックマークは、アプリケーションが行に戻るために使用する 32 ビットの値です。solidDB は、ブックマークをサポートしていません。

エラー・テキスト・フォーマット

SQLError によって返されるエラー・メッセージには、データ・ソースと、ODBC 接続のコンポーネントという 2 つの原因があります。エラー・テキストは、エラーの発行場所に応じて、特定のフォーマットを使用しなければなりません。

通常、データ・ソースは ODBC を直接サポートしていません。そのため、ODBC 接続のコンポーネントがデータ・ソースからエラー・メッセージを受信した場合、エラーの原因として、データ・ソースを識別する必要があります。また、エラーを受信したコンポーネントとして、自身を識別する必要もあります。

エラーの原因がコンポーネント自体にある場合は、エラー・メッセージでそれを説明しなければなりません。したがって、SQLErrorが返すエラー・テキストには、データ・ソースで発生したエラー用のものと、ODBC接続の他のコンポーネントで発生したエラー用のもの、という2つの異なるフォーマットがあります。

データ・ソース以外で発生したエラーの場合は、エラー・テキストは以下のフォーマットを使用する必要があります。

[vendor_identifier] [ODBC_component_identifier]
component supplied text

データ・ソース内で発生したエラーの場合は、エラー・テキストは以下のフォーマットでなければなりません。

[vendor_identifier] [ODBC_component_identifier]
[data_source_identifier] data_source_supplied_text

以下の表に、各エレメントの意味を示します。

表13. データ・ソース内のエラー

エレメント	意味
vendor_identifier	エラーが発生したコンポーネントのベンダー、またはデータ・ソースから直接エラーを受信したコンポーネントのベンダーを識別します。
ODBC_component_identifier	エラーが発生したコンポーネント、またはデータ・ソースから直接エラーを受信したコンポーネントを識別します。
data_source_identifier	データ・ソースを識別します。単一層のドライバーでは、一般的にこれはファイル・フォーマットです。複数層ドライバーの場合は DBMS 製品です。
component_supplied_text	ODBC コンポーネントによって生成されます。
data_source_supplied_text	データ・ソースによって生成されます。

注: エラー・テキスト内の大括弧 ([]) は、オプション項目を示しません。

サンプル・エラー・メッセージ

以下の例は、ODBC 接続の各種コンポーネントがどのようにエラー・メッセージ・ テキストを生成し、solidDB が SQLError でどのようにアプリケーションにエラ ー・メッセージ・テキストを返すかを示したものです。

表 14. サンプル・エラー・メッセージ

SQLSTATE	エラー・メッセージ
01000	通常の警告
01S00	接続ストリング属性が無効
08001	クライアントが接続を確立できない

SQLSTATE の値は、5 文字からなるストリングです。最初の 2 文字はクラス値 で、その後に 3 文字のサブクラス値が続きます。例えば 01000 の場合は、01 がク ラス値で、000 がサブクラス値です。なお、000 のサブクラス値は、その SQLSTATE にはサブクラスがないことを意味することに注意してください。クラス とサブクラスの値は SQL-92 で定義されています。

表 15. SQLSTATE の値

クラス値	意味
	警告を表し、SQL_SUCCESS_WITH_INFO の戻りコードを含みます。

表 15. SQLSTATE の値 (続き)

クラス値				意味
28,	34,		22、 3D、 HY	SQL_ERROR の戻り値を含むエラーを表します。
IM	,			ODBC から派生した警告およびエラーを表します。

エラー・メッセージの処理

アプリケーションは、ユーザーに対して、SQLError で得たすべてのエラー情報、す なわち ODBC SQLSTATE、ネイティブ・エラー・コード、エラー・テキスト、およ びエラーの原因を提供します。

アプリケーションはエラー・テキストを解析して、エラーの原因を識別する情報か らそのテキストを分離することができます。エラーに基づき適切なアクションを行 うこと、またはいくつかのアクションの選択肢をユーザーに提供することは、アプ リケーションの責任です。

ODBC インターフェースは、ステートメント、トランザクション、および接続を終 了し、ステートメント、接続、および環境の各ハンドルを解放する関数を提供して います。

トランザクションと接続の終了

ODBC インターフェースは、ステートメント、トランザクション、および接続を終 了し、ステートメント・ハンドル (hstmt)、接続ハンドル (hdbc)、および環境ハンド ル (henv) を解放する関数を提供しています。

ステートメント処理の終了

ステートメント・ハンドルに関連付けられたリソースを解放するには、以下のオプ ションを指定して、アプリケーションで SQLFreeStmt を呼び出します。

- SOL CLOSE: カーソルがあればそれをクローズして、保留中の結果を破棄しま す。アプリケーションは後で再度ステートメント・ハンドルを使用できます。 ODBC 3.51 では、SQLCloseCursor も使用できます。
- SOL UNBIND: ステートメント・ハンドルに対して、SOLBindCol によってバイ ンドされたすべての戻りバッファーを解放します。
- SQL RESET PARAMS: ステートメント・ハンドルに対して、SQLBindParameter によって要求されたすべてのパラメーター・バッファーを解放します。

SOLFreeHandle は、カーソルがあればそれをクローズし、保留中の結果を破棄し、 ステートメント・ハンドルに関連付けられているすべてのリソースを解放するため に使用します。

トランザクションの終了

アプリケーションは SOLEndTran を呼び出して、現行のトランザクションをコミッ トまたはロールバックします。

接続の終了

ドライバーおよびデータ・ソースへの接続を終了するには、アプリケーションで以 下の手順を実行します。

- 1. SQLDisconnect を呼び出して接続を閉じます。その後、アプリケーションはハン ドルを使用して同じデータ・ソースまたは別のデータ・ソースに再接続すること ができます。
- 2. SQLFreeHandle を呼び出して、接続ハンドルまたは環境ハンドルを解放し、ハン ドルに関連付けられたすべてのリソースを解放します。

アプリケーションの構成

このセクションでは、アプリケーションの C 言語ソース・コードの例を 2 つ紹介 します。1 つは静的 SQL 関数を使用して表を作成し、そこにデータを追加し、挿 入されたデータを選択する例です。もう 1 つは対話式のアドホック照会処理の例で す。

Microsoft は、ASCII データ用と Unicode データ用に 2 つのタイプのヘッダー・フ ァイルを提供しています。この例ではいずれの Microsoft ODBC ヘッダー・ファイ ルでも使用できます。

静的 SQL の例

以下の例では、アプリケーション内で SQL ステートメントを構成します。

```
/***********************
  サンプル名: Example1.c
  作成者
```

: アプリケーションの構成- プログラマー・ガイド : 静的 SQL 関数を使用して表を作成し、 目的

そこにデータを追加して、挿入されたデータを

選択するサンプル例です。

#if (defined(SS UNIX) || defined(SS LINUX))

#include <solidodbc3.h> #else

#include <windows.h>

#endif

#if SOLIDODBCAPI #include <sqlucode.h> #include <wchar.h> #else #include <sal.h> #include <sqlext.h> #endif

#include <stdio.h> #include <test assert.h>

```
#define MAX NAME LEN 50
#define MAX STMT LEN 100
/***********************
        関数名
                         : PrintError
                          : ハンドルに関連付けられたエラーを表示します。
SQLINTEGER PrintError(SQLSMALLINT handleType, SQLHANDLE handle)
{
                 SQLRETURN rc = SQL_ERROR;
                 SQLWCHAR
                                      sqlState[6];
                 SQLWCHAR
                                     eMsg[SQL MAX MESSAGE LENGTH];
                SQLINTEGER nError;
                 rc = SQLGetDiagRecW(handleType, handle, 1,
                            (SQLWCHAR *)&sqlState, (SQLINTEGER *)&nError,
                            (SQLWCHAR *)&eMsg, 255, NULL);
                 if (rc == SQL_SUCCESS || rc == SQL_SUCCESS_WITH_INFO) {
                         printf("\formall n \formall t Error:\%ls\formall n \formall n \formall n \formall s \formall n \formall n
                return(SQL ERROR);
}
/**********************
         関数名: DrawLine
         目的 : 指定された文字 (chr) を指定された回数 (len)
                        描画します。
void DrawLine(SQLINTEGER len, SQLCHAR chr)
                 printf("\u00e4n");
                while(len > 0)
                        printf("%c",chr);
                         len--;
                printf("\u00e4n");
}
         関数名: example1
        目的: 指定されたデータ・ソースに接続し、
                        SQL ステートメント・セットを実行します。
SQLINTEGER example1(SQLCHAR *server, SQLCHAR *uid, SQLCHAR *pwd)
                 SQLHENV
                                          henv;
                SQLHDBC
                                         hdbc;
                 SQLHSTMT
                                         hstmt;
                 SQLRETURN
                                         rc;
                SQLINTEGER id;
                                         drop[MAX STMT LEN];
                 SOLWCHAR
                 SQLCHAR
                                         name[MAX NAME LEN+1];
                 SQLWCHAR
                                          create[MAX STMT LEN];
                                         insert[MAX_STMT_LEN];
                SQLWCHAR
                SQLWCHAR
                                          select[MAX_STMT_LEN];
                SQLINTEGER namelen;
                 /* 環境ハンドルおよび接続ハンドルを割り振ります。*/
                 /* データ・ソースに接続します。*/
                /* ステートメント・ハンドルを割り振ります。*/
                 rc = SQLAllocHandle(SQL HANDLE ENV, SQL NULL HANDLE,
```

```
&henv);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE ENV,henv));
rc = SQLSetEnvAttr(henv,SQL ATTR ODBC VERSION,
     (SQLPOINTER) SQL OV ODBC3, SQL NTS);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL_HANDLE_ENV, henv));
rc = SQLAllocHandle(SQL_HANDLE_DBC,henv,&hdbc);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE ENV, henv));
rc = SQLConnect(hdbc, server, SQL_NTS, uid, SQL_NTS,
     pwd, SQL NTS);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL_HANDLE_DBC, hdbc));
rc = SQLAllocHandle(SQL_HANDLE_STMT,hdbc,&hstmt);
if (rc != SQL_SUCCESS && rc != SQL_SUCCESS_WITH_INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
   /* 表 'nameid' が存在すればそれをドロップし、なければ続行します。 */
wcscpy(drop, L"DROP TABLE NAMEID");
printf("\forall n\forall ls", drop);
DrawLine(wcslen(drop), '-');
rc = SQLExecDirectW(hstmt, drop, SQL NTS);
if (rc == SQL ERROR)
    PrintError(SQL_HANDLE_STMT, hstmt);
/* 作業をコミットします。*/
rc = SQLEndTran(SQL HANDLE DBC, hdbc, SQL COMMIT);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL_HANDLE_DBC, hdbc));
/* 表 nameid(id integer,name varchar(50)) を作成します。*/
wcscpy(create,
      L"CREATE TABLE NAMEID(ID INT, NAME VARCHAR(50))");
printf("\forall n\forall s", create);
DrawLine(wcslen(create),'-');
rc = SQLExecDirectW(hstmt,create,SQL_NTS);
if (rc == SQL ERROR)
    return(PrintError(SQL HANDLE STMT, hstmt));
/* 作業をコミットします。*/
rc = SQLEndTran(SQL_HANDLE_DBC, hdbc, SQL_COMMIT);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
/* パラメーターを使用してデータを挿入します。*/
wcscpy(insert, L"INSERT INTO NAMEID VALUES(?,?)");
printf("\forall n's", insert);
DrawLine(wcslen(insert), '-');
rc = SQLPrepareW(hstmt, insert, SQL NTS);
if (rc == SQL ERROR)
    return(PrintError(SQL HANDLE STMT, hstmt));
/* integer(id) データのバインディング*/
rc = SQLBindParameter(hstmt, 1, SQL_PARAM_INPUT,
        SQL_C_LONG, SQL_INTEGER, 0, 0, &id, 0, NULL);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
```

```
/* char(name) データのバインディング*/
rc = SQLBindParameter(hstmt, 2, SQL PARAM INPUT,
        SQL_C_CHAR, SQL_VARCHAR, 0, 0, &name,
        sizeof(name), NULL);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
id = 100;
strcpy(name, "SOLID");
rc = SQLExecute(hstmt);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL_HANDLE_DBC, hdbc));
/* 作業をコミットします。*/
rc = SQLEndTran(SQL_HANDLE_DBC, hdbc, SQL_COMMIT);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
/* ステートメント・バッファーを解放します。*/
rc = SQLFreeStmt(hstmt, SQL RESET PARAMS);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
        return(PrintError(SQL HANDLE STMT, hstmt));
rc = SQLFreeStmt(hstmt, SQL_CLOSE);
if (rc != SQL_SUCCESS && rc != SQL_SUCCESS_WITH INFO)
        return(PrintError(SQL_HANDLE_STMT, hstmt));
/* 表 nameid からデータを選択します。*/
wcscpy(select, L"SELECT * FROM NAMEID");
printf("\forall n\forall ls", select);
DrawLine(wcslen(select),
rc = SQLExecDirectW(hstmt, select, SQL_NTS);
if (rc != SQL_SUCCESS && rc != SQL_SUCCESS_WITH_INFO)
        return(PrintError(SQL_HANDLE_DBC, hdbc));
/* 出力データ用のバッファーをバインドします。*/
id = 0;
strcpy(name, "");
rc = SQLBindCol(hstmt, 1, SQL_C_LONG, &id, 0, NULL);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
rc = SQLBindCol(hstmt, 2, SQL_C_CHAR, &name,
     sizeof(name), &namelen);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL_HANDLE_DBC, hdbc));
rc = SQLFetch(hstmt);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
printf("\u00e4n Data ID
                       :%d", id);
printf("\forall n Data Name
                       :%s(%d)\n", name, namelen);
rc = SQLFetch(hstmt);
assert(rc == SQL NO DATA);
/* ステートメント・バッファーを解放します。*/
rc = SQLFreeStmt(hstmt, SQL_UNBIND);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE STMT, hstmt));
```

```
rc = SQLFreeStmt(hstmt, SQL_CLOSE);
       if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
           return(PrintError(SQL HANDLE STMT, hstmt));
       /* ステートメント・ハンドルを解放します。 */
       rc = SQLFreeHandle(SQL HANDLE STMT, hstmt);
       if (rc != SQL_SUCCESS && rc != SQL_SUCCESS WITH INFO)
          return(PrintError(SQL HANDLE STMT, hstmt));
       /* データ・ソースから切断します。*/
       rc = SQLDisconnect(hdbc);
       if (rc != SQL_SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
           return(PrintError(SQL_HANDLE_DBC, hdbc));
       /* 接続ハンドルを解放します。*/
       rc = SQLFreeHandle(SQL HANDLE DBC, hdbc);
       if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
           return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
       /* 環境ハンドルを解放します。*/
       rc = SQLFreeHandle(SQL HANDLE ENV,henv);
       if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
          return(PrintError(SQL_HANDLE_ENV, henv));
       return(0);
}
/************************************
       関数名: main
       目的: すべての操作を制御します。
void main(SQLINTEGER argc, SQLCHAR *argv[])
       puts("\forall n \forall t SOLID ODBC Driver 3.51:");
       puts("\forall n\forall t - Usage of static SQL functions");
       puts("\forall n\forall t ========="):
       if (argc != 4){
          puts("USAGE: Example1 <DSN name> <username> <passwd>");
          exit(0);
       else {
          example1(argv[1], argv[2], argv[3]);
```

対話式アドホック照会のサンプル

以下の例では、アプリケーションが、結果をリトリーブする前に、 結果セットの性質を判別する方法を示します。

```
#endif
#if SOLIDODBCAPI
#include <sqlucode.h>
#include <wchar.h>
#else
#include <sql.h>
#include <sqlext.h>
#endif
#include <stdio.h>
#ifndef TRUE
#define TRUE 1
#endif
#define MAXCOLS 100
#define MAX DATA LEN 255
SQLHENV henv;
SQLHDBC hdbc;
SQLHSTMT hstmt;
/*********************
   関数名: PrintError
   目的: ハンドルに関連付けられたエラーを表示します。
SQLINTEGER PrintError(SQLSMALLINT handleType, SQLHANDLE handle)
   SQLRETURN rc = SQL ERROR;
   SQLCHAR sqlState[6];
   SQLCHAR eMsg[SQL_MAX_MESSAGE_LENGTH];
   SQLINTEGER nError;
      rc = SQLGetDiagRec(handleType, handle, 1,
          (SQLCHAR *)&sqlState, (SQLINTEGER *)&nError,
      (SQLCHAR *)&eMsg, 255, NULL);
if (rc == SQL_SUCCESS || rc == SQL_SUCCESS_WITH_INFO) {
         printf("\frac{1}{n}\frac{1}{2}t Error:\frac{1}{2}s\frac{1}{2}n",eMs\frac{1}{2});
      return(SQL ERROR);
}
/**********************
   関数名: DrawLine
   目的 : 指定された文字 (line) を指定された回数 (len)
         描画します。
void DrawLine(SQLINTEGER len, SQLCHAR line)
      printf("\forall n");
      while(len > 0) {
         printf("%c",line);
         len--;
      printf("\forall n");
}
/************************
   関数名: example2
   目的:指定されたデータ・ソースに接続し、
         特定の SQL ステートメントを実行します。
```

```
SQLINTEGER example2(SQLCHAR *sqlstr)
   SQLINTEGER i;
   SQLCHAR colname[32];
   SQLSMALLINT coltype;
   SQLSMALLINT colnamelen;
   SQLSMALLINT nullable;
   SQLINTEGER collen[MAXCOLS];
   SQLSMALLINT scale;
   SQLINTEGER outlen[MAXCOLS];
   SQLCHAR data[MAXCOLS][MAX DATA LEN];
   SQLSMALLINT nresultcols;
   SQLINTEGER rowcount, nRowCount=0, lineLength=0;
   SQLRETURN rc;
   printf("\forall n\s", sqlstr);
   DrawLine(strlen(sqlstr),'=');
   /* SQL ステートメントを実行します。*/
   rc = SQLExecDirect(hstmt, sqlstr, SQL NTS);
   if (rc != SQL_SUCCESS && rc != SQL_SUCCESS_WITH_INFO)
          return(PrintError(SQL HANDLE STMT, hstmt));
   /* どのような種類のステートメントだったかを調べます。もし、*/
/* 結果の列がなければ、ステートメントは SELECT */
   /* ステートメントではありません。もし、影響を受ける行の数が *//* 0 より大きい場合、ステートメントはおそらく */
   /* UPDATE、INSERT、DELETE のいずれかのステートメントだったので、*/
   /* 影響を受ける行の数を出力します。もし、*/
   /* 影響を受ける行の数が O の場合は、ステートメントはおそらく */
   /* DDL ステートメントなので、操作が */
   /* 成功したことを出力し、操作をコミットします。*/
   rc = SQLNumResultCols(hstmt, &nresultcols);
   if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
       return(PrintError(SQL HANDLE STMT, hstmt));
   if (nresultcols == 0) {
       rc = SQLRowCount(hstmt, &rowcount);
       if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO) {
          return(PrintError(SQL HANDLE STMT, hstmt));
       if (rowcount > 0) {
          printf("%ld rows affected.\u00e4n", rowcount);
       else {
          printf("Operation successful.\u00e4n");
       rc = SQLEndTran(SQL_HANDLE_DBC, hdbc, SQL_COMMIT);
       if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
          return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
   /* ぞれ以外の場合は、結果セットの列名を表示し、*/
   /* display_size() 関数を使用して、*/
   /* 各デーダ型に必要な長さを計算します。*/
   /* 次に、列をバインドして、すべてのデータを */
   /* char に変換するように指定します。最後に、*/
   /* 各行をフェッチして出力し、必要に応じて */
   /* 切り捨てメッセージを出力します。*/
   else {
       for (i = 0; i < nresultcols; i++) {
          rc = SQLDescribeCol(hstmt, i + 1, colname,
```

```
(SQLSMALLINT) sizeof (colname),
               &colnamelen, &coltype, &collen[i],
               &scale, &nullable);
           if (rc != SQL_SUCCESS && rc != SQL_SUCCESS_WITH_INFO) {
               return(PrintError(SQL_HANDLE_STMT, hstmt));
           /* 列名を出力します。 */
           printf("%s\text{\text{t}}, colname);
           rc = SQLBindCol(hstmt, i + 1, SQL_C_CHAR,
               data[i], sizeof(data[i]), &outlen[i]);
           if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO) {
               return(PrintError(SQL HANDLE STMT, hstmt));
           lineLength += 6 + strlen(colname);
       DrawLine(lineLength-6,'-');
       while (TRUE) {
           rc = SQLFetch(hstmt);
           if (rc == SQL SUCCESS | rc == SQL SUCCESS WITH INFO){
               nRowCount++;
               for (i = 0; i < nresultcols; i++) {</pre>
                   if (outlen[i] == SQL NULL DATA) {
                      strcpy((char *)data[i], "NULL");
                   printf("%s\t",data[i]);
               printf("\f");
           else {
               if (rc == SQL ERROR)
                  PrintError(SQL HANDLE STMT, hstmt);
               break;
       printf("\forall Rows:\%d\forall n n RowCount);
   SQLFreeStmt(hstmt, SQL_UNBIND);
   SQLFreeStmt(hstmt, SQL CLOSE);
   return(0);
関数名: main
    目的: すべての操作を制御します。
int __cdecl main(SQLINTEGER argc, SQLCHAR *argv[])
   SQLRETURN rc;
   printf("\forall n\forall SOLID ODBC Driver 3.51-Interactive");
   printf("\forall n\forall t ad-hoc Query Processing");
   printf("\forall n\forall t =======\forall n\forall t);
   if (argc != 4) {
       puts("USAGE: Example2 <DSN name> <username> <passwd>");
       exit(0);
   /* 環境ハンドルおよび接続ハンドルを割り振ります。*/
   /* データ・ソースに接続します。*/
```

}

```
/* ステートメント・ハンドルを割り振ります。*/
rc = SQLAllocHandle(SQL HANDLE ENV, SQL NULL HANDLE, &henv);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL_HANDLE_ENV, henv));
rc = SQLSetEnvAttr(henv, SQL ATTR ODBC VERSION,
    (SQLPOINTER) SQL OV ODBC3, SQL NTS);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL_HANDLE_ENV, henv));
rc = SQLAllocHandle(SQL_HANDLE_DBC, henv, &hdbc);
if (rc != SQL_SUCCESS && rc != SQL_SUCCESS_WITH_INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE ENV, henv));
printf("\u00e4n Connecting to \u00d8s\u00e4n ", argv[1]);
rc = SQLConnect(hdbc, argv[1], SQL_NTS, argv[2], SQL_NTS,
    argv[3], SQL_NTS);
if (rc != SQL_SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
rc = SQLAllocHandle(SQL HANDLE STMT, hdbc, &hstmt);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
/* 以下の SQL ステートメントを実行します。*/
example2("SELECT * FROM SYS TABLES");
example2("DROP TABLE TEST_TAB");
example2("CREATE TABLE TEST TAB(F1 INT, F2 VARCHAR)");
example2("INSERT INTO TEST_TAB VALUES(10, 'SOLID')");
example2("INSERT INTO TEST_TAB VALUES(20, 'MVP')");
example2("UPDATE TEST TAB SET F2='UPDATED' WHERE F1 = 20");
example2("SELECT * FROM TEST TAB");
/* ステートメント・ハンドルを解放します。 */
rc = SQLFreeHandle(SQL_HANDLE_STMT, hstmt);
if (rc != SQL_SUCCESS && rc != SQL_SUCCESS_WITH_INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE STMT, hstmt));
/* データ・ソースから切断します。*/
rc = SQLDisconnect(hdbc);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
/* 接続ハンドルを解放します。*/
rc = SQLFreeHandle(SQL HANDLE DBC, hdbc);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL HANDLE DBC, hdbc));
/* 環境ハンドルを解放します。*/
rc = SQLFreeHandle(SQL HANDLE ENV, henv);
if (rc != SQL SUCCESS && rc != SQL SUCCESS WITH INFO)
    return(PrintError(SQL_HANDLE_ENV, henv));
return(0);
```

アプリケーションのテストとデバッグ

Microsoft ODBC SDK では、アプリケーション開発のためのツールを提供しています。

以下のツールが含まれています。

- ODBC Test。この対話式ユーティリティーを使用すると、ドライバーのアドホッ ク・テストおよび自動テストが可能です。 ODBC ドライバーの適合性の基本的 な領域を対象とした、サンプル・テスト DLL (Quick Test) が含まれています。
- ODBC Spy。このデバッグ・ツールを使用すると、データ・ソースの情報の収集 およびドライバーやアプリケーションのエミュレートが可能です。
- サンプル・アプリケーション。ソース・コードと makefile を含んでおり、以下の ように使用します。
 - #define および ODBCVER で、アプリケーションのコンパイルに使用する ODBC のバージョンを指定します。ODBC 3.51 定数とプロトタイプを使用す るには、インクルード・ファイルの提供前に、以下の行をアプリケーション・ コードに追加してください。

#define ODBCVER 0X0352

- ASCII データの場合は、以下の標準的な Microsoft インクルード・ファイルを 使用してください。

SOL.H および SOLEXT.H

- Unicode データの場合は、以下の Microsoft インクルード・ファイルを使用し てください。

SQLUCODE.H および WCHAR.H

ODBC SDK ツールについて詳しくは、「Microsoft ODBC SDK ガイド (Microsoft ODBC SDK Guide)」を参照してください。

3 solidDB Light Client の使用

このセクションでは、solidDB Light Client の使用方法について説明します。Light Client は、フットプリントの非常に小さいデータベース・クライアントのライブラリーであり、また ODBC API のサブセットであり、特にメモリー・リソースの制限された組み込みソリューションのインプリメント用に設計されています。 solidDB Light Client を使用すると、軽量のクライアント・アプリケーションで solidDB データベースの能力を最大限に使用できます。

solidDB Light Client とは

solidDB Light Client ライブラリーは ODBC API (ODBC 1.0 コア) の 20 の関数からなるサブセットで、solidDB データベースにアクセスするアプリケーション開発者に完全な SQL 機能を提供します。

solidDB Light Client は、データベース接続の制御、SQL ステートメントの実行、 結果セットのリトリーブ、トランザクションのコミット、その他の solidDB 機能の ための関数を提供します。solidDB Light Client はメモリー容量の少ないターゲット 環境に適しています。

solidDB Light Client の概要

solidDB Light Client の使用を開始するには、インストール手順とプラットフォーム 固有の資料に従って、TCP/IP インフラストラクチャーをセットアップする必要があります。

開発環境のセットアップとサンプル・プログラムの作成

solidDB Light Client ライブラリーを使用したプログラムの作成は、通常の C/C++ プログラムの作成とまったく同じです。

以下のタスクを実行する必要があります。

- ライブラリー・ファイルをご使用のプロジェクトに挿入します。
- ヘッダー・ファイルをインクルードします。
- ソース・コードをコンパイルします。
- プログラムをリンクします。

最初の2つのタスクについて、以下のセクションで詳しく説明します。

プロジェクトへのライブラリー・ファイルの挿入

ご使用の開発環境の資料で、プログラムへのライブラリーのリンク方法を確認してください。正しい Light Client ライブラリーをプログラムにリンクします。

プラットフォームによっては、動的ライブラリーを使用するか静的ライブラリーを使用するかを選択します。アプリケーションをコンパイルしてリンクするときに、ライブラリーのコードがアプリケーションにリンクされる場合は、「静的」ライブ

ラリーです。アプリケーション・コードをロードして実行するときに、ライブラリーがアプリケーションにリンクされる場合は、「動的」ライブラリーです。

UNIX ベースのプラットフォームでは、ライブラリー名は以下のパターンになります。

slcPPPvv.EEE

ここで、

- 「slc」は、「solidDB Light Client」です。
- 「PPP」は、以下のようなプラットフォーム固有の ID です。
 - マルチスレッド Linux の場合は「12x」、
 - Solaris 2.9 の場合は「s9x」、
 - HP-UX (PA-RISC 上) の場合は「h1x」のようになります。
- 「vv」はバージョン標識で、例えばバージョン 4.1 の場合は「41」のようになります。
- 「EEE」は、以下のようなプラットフォーム関連の拡張子です。
 - UNIX 共有オブジェクト・ファイル (動的) の場合は「.so」、
 - UNIX ライブラリー・ファイル (静的) の場合は「.a」です。

したがって、例えば s1cs8x41.a は、Solaris 8 用の solidDB 4.1 Light Client ライブラリーです。



Windows では、Light Client は静的ライブラリーとして提供されています。

ヘッダー・ファイルのインクルード

以下の行を Light Client プログラムに組み込む必要があります。 #include "cli0lcli.h"

必要なその他すべての Light Client ヘッダーを含むディレクトリーを、ご使用の開発環境のインクルード・ディレクトリー設定に挿入してください。

開発環境セットアップの検証

Light Client サンプル・プログラムを作成して、開発セットアップが正しいことを検証できます。これによって、コードを書かずに開発環境を検証できます。

- Windows 環境では、TCP/IP サービスは、標準 DLL である wsock32.dll によって提供されます。これらのサービスをプロジェクトにリンクするには、wsock32.lib をリンカーの lib ファイル・リストに追加します。
- Windows 環境では、開発ツールによっては、標準 ODBC サービスを提供する odbc32.1ib を、デフォルト・ライブラリーとしてプロジェクトにリンクする場合

があります。 ODBC の関数は、名前とインターフェースが solidDB Light Client に似ているので、Light Client の代わりに ODBC を使用するようにプログラムがリンクされることがあります。 odbc32.1ib をリンカーのファイル・リストから削除します。

サンプル・アプリケーションを使用したデータベースへの接続

solidDB Light Client ライブラリーを使用したデータベースへの接続の確立は、ODBC を使用した接続の確立と似ています。

アプリケーションは環境ハンドルを取得し、接続のためのスペースを割り振り、接続を確立する必要があります。サンプル・プログラムを実行して、ご使用の環境内の solidDB データベースに対する接続を取得できるかどうかを確認します。

solidDB への接続の確立

以下のコードは、マシン 192.168.1.111 で実行中でポート 1313 で TCP/IP を listen している solidDB データベースへの接続を確立します。パスワードが DBA のユーザー・アカウント DBA がデータベース内で定義されています。

```
/* 環境オブジェクトを指すポインターです。*/
HENV henv;
HDBC hdbc;
                 /* データベース接続オブジェクトを指すポインターです。*/
                 /* 戻りコード用の変数です。*/
RETCODE rc;
rc = SQLAllocEnv(&henv);
if (SQL SUCCESS != rc)
   printf("SQLAllocEnv fails.\u00e4n");
   return;
rc = SQLAllocConnect(&henv, &hdbc);
if (SQL SUCCESS != rc)
   printf("SQLAllocConnect fails.\u00e4n");
   return;
rc = SQLConnect(hdbc, (UCHAR*)"192.168.1.111 1313", SQL NTS,
(UCHAR*) "DBA", SQL_NTS, (UCHAR*) "DBA", SQL_NTS);
if (SQL SUCCESS != rc)
   printf("SQLConnect fails.\u00e4n");
   return;
}
上記で確立された接続は、以下のコードを使用して切断できます。読みやすくする
ため、戻りコードの検査は含んでいません。
SQLDisconnect(hdbc);
SQLFreeConnect(hdbc);
SQLFreeEnv(henv);
```

solidDB Light Client での SQL ステートメントの実行

このセクションでは、SQL を使用した基本的なデータベース操作の方法を簡単に説明します。

以下の操作について説明します。

- solidDB Light Client によるステートメントの実行
- 結果セットの読み取り
- トランザクションと自動コミット・モード
- データベース・エラーの処理

solidDB Light Client によるステートメントの実行

以下のコードでは単純 SQL ステートメントを実行します。 INSERT INTO TESTTABLE (I,C) VALUES (100, 'HUNDRED');

このコードでは、有効な HENV henv および有効な HDBC henv が存在することと、RETCODE 型の変数 rc が定義されることが必要です。また、このコードでは、列 I および C を持つ表 TESTTABLE がデータベース内に存在することが必要です。

パラメーターを指定したステートメントの実行

以下のコード例では、異なるパラメーター値を指定して、単純ステートメント INSERT INTO TESTTABLE (I,C) VALUES (?,?) を複数回実行する準備をします。 Light Client は ODBC のようなパラメーター・バインディングは行わない点に注意してください。その代わりに、SQLSetParamValue 関数を使用してパラメーター値を割り当てる必要があります。以下のような変数定義が必要です。

```
#include "cli0lcli"
int i;
char buf[255];
SDWORD dwPar;
```

上記と同様に、このコードでは、有効な HENV henv および有効な HDBC henv が存在することと、RETCODE 型の変数 rc が定義されること、および列 I および C を持つ表 TESTTABLE がデータベース内に存在することが必要です。

```
rc = SQLAllocStmt(hdbc, &hstmt);
if (SQL SUCCESS != rc) {
    printf("Alloc statement failed. \u20a4n");
rc = SQLPrepare(hstmt,
    (UCHAR*)"INSERT INTO TESTTABLE(I,C)VALUES (?,?)", SQL_NTS);
    if (SQL SUCCESS != rc) {
         printf("Prepare failed. \u20a4n");
    for (i=1; i<100; i++)
    dwPar = i;
    sprintf(buf,"line%i",i);
    rc = SQLSetParamValue(
    hstmt,1,SQL C LONG,SQL INTEGER,0,0,&dwPar,NULL );
    if (SQL SUCCESS != rc) {
        printf("(SetParamValue 1 failed) \u2247n");
        return 0;
    rc = SQLSetParamValue(
    hstmt,2,SQL C CHAR,SQL CHAR,0,0,buf,NULL );
    if (SQL SUCCESS != rc) {
        printf("(SetParamValue 1 failed) \u2247n");
        return 0;
    rc = SQLExecute(hstmt);
    if (SQL SUCCESS != rc) {
        printf("SQLExecute failed \u20a4n");
rc = SQLFreeStmt(hstmt,SQL_DROP);
if (SQL SUCCESS != rc) {
    printf("SQLFreeStmt failed. \u20a4n");
```

結果セットの読み取り

以下に抜粋したコードは SQL ステートメント SELECT I,C FROM TESTTABLE を準備し、実行して、データベースが返すすべての行をフェッチします。以下のコード例では、rc、henv、hstmt、および henv に対する有効な定義が必要です。

```
rc = SQLAllocStmt(hdbc, &hstmt);
if (SQL_SUCCESS != rc) {
    printf("SQLAllocStmt failed. \u2247n");
    }
rc = SQLPrepare(hstmt,(UCHAR*)"SELECT I,C FROM TESTTABLE", SQL_NTS);
if (SQL_SUCCESS != rc) {
```

```
printf("SQLPrepare failed. \u20a4n");
    rc = SQLExecute(hstmt);
    if (SQL SUCCESS != rc) {
         printf("SQLExecute failed. \u20a4n");
    rc = SQLFetch(hstmt);
if ((SQL SUCCESS != rc) &&SQL NO DATA FOUND != rc)) {
    printf("SQLFetch returned an unexpected error code . \u224n");
while (SQL NO DATA FOUND != rc)
    rc = SQLGetCol(hstmt, 1, SQL C LONG, &lbuf, sizeof(lbuf), NULL);
    if (rc == SQL_SUCCESS)
        printf("LC SQLGetCol(1) returns %d \u224n", lbuf);
        else printf("Error in SQLGetCol(1) \u22an");
        rc = SQLGetCol(hstmt, 2, SQL C CHAR, buf, sizeof(buf), NULL);
        if (rc == SQL SUCCESS)
            printf("SQLGetCol(2) returns %s \u224n",buf);
         else printf("Error in SQL GetCol(2) \u21an");
         rc = SQLFetch(hstmt);
    }
    rc = SQLFreeStmt(hstmt,SQL DROP);
    if (SQL SUCCESS != rc)
         printf("SQLFreeStmt failed. ");
```

結果セットの処理には、以下の Light Client API 関数を使用すると便利です。

- SQLDescribeCol
- · SQLGetCursorName
- SQLNumResultCols
- · SQLSetCursorName

トランザクションと自動コミット・モード

すべての solidDB Light Client 接続では、自動コミット・オプションがオフに設定されています。Light Client ではこのオプションをオンに設定する方法がありません。各トランザクションを明示的にコミットする必要があります。

トランザクションをコミットするには、SQLTransact 関数を以下のように呼び出します。

```
rc = SQLTransact(SQL_NULL_HENV, hdbc, SQL_COMMIT);
```

トランザクションをロールバックするには、SQLTransact を以下のように呼び出します。

```
rc = SQLTransact(SQL_NULL_HENV, hdbc, SQL_ROLLBACK);
```

データベース・エラーの処理

Light Client API 関数が SQL_ERROR または SQL_SUCCESS_WITH_INFO を返す と、SOLError 関数を呼び出すことにより、エラーまたは警告に関してより詳細な情 報を取得できます。表 TESTTABLE が定義されていないデータベースに対して以下 のコードを実行すると、適切なエラー情報が生成されます。

通常どおり、このコードでは、有効な HENV henv および有効な HDBC henv が存 在することと、RETCODE 型の変数 rc が定義されることが必要です。

```
rc = SQLPrepare(hstmt,(UCHAR*)"SELECT I,C FROM TESTTABLE", SQL NTS);
if (SQL SUCCESS != rc)
               char buf[255];
              RETCODE rc;
              char szSQLState[255];
               char szErrorMsg[255];
               SDWORD nativeerror = 0;
              SWORD maxerrmsg = 0;
             memset(szSQLState,0,sizeof(szSQLState));
             memset(szErrorMsg,0,sizeof(szErrorMsg));
              rc = SQLError(
               SQL_NULL_HENV, hdbc, hstmt, (UCHAR*)szSQLState, &nativeerror,
               (UCHAR*)szErrorMsg, sizeof(szErrorMsg), &maxerrmsg);
               if (rc == SQL ERROR)
                             printf("SQLError failed \u20a4n.");
               }
              else
                                            printf("Error information dump begins:----\frac{\pmanuments}{\pmanuments}");
                                            printf("SQLState '%s' \u224n",szSQLState);
               printf("nativeerror %i ¥n", nativeerror);
              printf("Errormsg '%s' \u224n", szErrorMsg);
printf("maxerrmsg %i ¥n", maxerrmsg);
printf("Error information dump ends:-----\frac{\text{\text{"Error information dump ends:-----\frac{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\tin\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\texi}\text{\text{\text{\texi}\text{\text{\text{\text{\text{\texi{\text{\texi\texi{\texi{\texi{\tiex{\texi{\texi{\texi}\tiex{\texi{\texi{\texi{\texi{\texi}\tiex{\
```

solidDB Light Client の使用に関する考慮事項

このセクションには、solidDB Light Client の使用に関する重要な情報と制限事項を 記載します。

データ・フェッチにおけるネットワーク・トラフィック

solidDB Light Client の通信は、solidDB の RowsPerMessage 設定をサポートしてい ません。Light Client が SQLFetch を呼び出すたびに、クライアントとサーバーの間 でネットワーク・メッセージが送信されます。大量のデータをフェッチする場合 は、これによってパフォーマンスに影響が及びます。

Unicode および ODBC のサポート

solidDB Light Client は Unicode および ODBC 3.51 API 機能を処理しません。 3.5 より前の ODBC API だけがサポートされています。

BIGINT はサポートされない

solidDB Light Client は BIGINT データ型をサポートしていません。

ODBC に精通したプログラマーのための注意点

Light Client API では提供されていない ODBC 関数を使用している場合は、標準の ODBC データベース・インターフェースから solidDB Light Client へのマイグレーションには、多少のプログラミングが必要になります。大まかなマイグレーション 手順は以下のとおりです。

- 1. ご使用のアプリケーションによる ODBC の使用方法を検討し、Light Client API 機能だけで十分かどうかを評価します。独自のコードに以下のような小さい変更を加えることができます。
 - ODBC 拡張レベル 1 の関数の呼び出しを、ODBC コア・レベルの関数の呼び 出しに変換する。
 - SQLBindParameter なしにアプリケーションを書き換える。
- 2. solidDB Light Client のサンプルを使用して、ご使用の環境を検証します。
- 3. 独自のコード内の ODBC の呼び出しを変更し、プログラムを再作成し、テスト します。

solidDB Light Client 関数のサマリー

このセクションには、ODBC API のサブセットである solidDB Light Client API の 関数をリストします。

実際の関数の説明については、『solidDB Light Client 関数リファレンス』セクションのトピックを参照してください。

注: solidDB Light Client は、パラメーター値設定用 (SQLBindParameter など) またはデータ・バインディング用 (SQLBindCol など) の ODBC 拡張レベル機能を提供していません。代わりに solidDB Light Client は SAG CLI 準拠の関数として、パラメーター値の設定用に SQLSetParamValue、結果セットからのデータの読み取り用に SQLGetCol を提供しています。これらの関数について詳しくは、91ページの『非 ODBC solidDB Light Client 関数』を参照してください。

関数のサマリー

このセクションでは、solidDB Light Client が提供している関数のサマリーについて説明します。

solidDB Light Client API の使用方法を示す完全なプログラム例は、 72 ページの『solidDB Light Client サンプル』を参照してください。

表 16. 関数のサマリー

タスク	関数
データ・ソースへの接続	76ページの『SQLAllocEnv (ODBC 1.0、コア)』
	75ページの『SQLAllocConnect (ODBC 1.0、コア)』
	77 ページの『SQLConnect (ODBC 1.0、コア)』
SQL ステートメントの準備	76ページの『SQLAllocStmt (ODBC 1.0、コア)』
	89ページの『SQLPrepare (ODBC 1.0、コア)』
	38ページの『ODBC API に対する solidDB 拡張機能』の SqlSetParamValue
	この関数は、solidDB Light Client に固有のものである点に 注意してください。この関数について詳しくは、この表の 後のセクションを参照してください。
	90ページの『SQLSetCursorName (ODBC 1.0、コア)』
	85ページの『SQLGetCursorName (ODBC 1.0、コア)』
要求のサブミット	82 ページの『SQLExecute (ODBC 1.0、コア)』
	81ページの『SQLExecDirect (ODBC 1.0、コア)』
結果と結果に関する情報のリト	89 ページの『SQLRowCount (ODBC 1.0、コア)』
リーブ	88ページの『SQLNumResultCols (ODBC 1.0、コア)』
	78ページの『SQLDescribeCol (ODBC 1.0、コア)』
	91 ページの『非 ODBC solidDB Light Client 関数』の SqlGetCol
	この関数は ODBC 準拠の関数 SQLGetData と同じである 点に注意してください。
	82 ページの『SQLFetch (ODBC 1.0、コア)』
	85ページの『SQLGetData (ODBC 1.0、レベル 1)』
	この関数は対応する SAG CLI 関数 SQLGetCol と同じである点に注意してください。
	80ページの『SQLError (ODBC 1.0、コア)』
ステートメントの終了	84 ページの『SQLFreeStmt (ODBC 1.0、コア)』
	91 ページの『SQLTransact (ODBC 1.0、コア)』

表 16. 関数のサマリー (続き)

タスク	関数
接続の終了	80ページの『SQLDisconnect (ODBC 1.0、コア)』
	77 ページの『SQLConnect (ODBC 1.0、コア)』
	83 ページの『SQLFreeEnv (ODBC 1.0、コア)』

solidDB Light Client サンプル

このセクションには、solidDB Light Client API の使用方法を示すプログラム例が示 されています。

solidDB Light Client サンプル 1

#include "sample1.h"

```
* ファイル:
               SAMPLE1.C
* 説明:
               Solid Light Client API のサンプル・プログラム
* 作成者:
               Solid
* Solid Light Client サンプル・プログラムは以下を実行します。
* 1. 十分な接続情報を含むのに必要なだけの入力パラメーターがあることを
    確認します。
* 2. HENV および HDBC の各オブジェクトにメモリーを割り振って、
   Light Client による Solid への接続を準備します。
* 3. Light Client ライブラリーを使用して Solid に接続します。
* 4. SOLID システム表のいずれかからデータを読み取るために、
   1 つの照会用のステートメント
    'SELECT TABLE SCHEMA, TABLE NAME, TABLE TYPE FROM TABLES' を作成します。
* 5. 照会を実行します。
* 6. 結果セットのすべての行をフェッチして出力します。
* 7. 正常に接続を閉じます。
void cdecl main(int argc, char *argv[])
           /* 環境オブジェクトを指すポインターです。 */
/* データベース接続オブジェクトを指すポインターです。*/
 HENV henv;
 HDBC hdbc;
           /* 戻りコード用の変数です。
 RETCODE rc;
           /* データベース・ステートメント・オブジェクトを指す
 HSTMT hstmt;
              ポインターです。
 char buf[255]; /* db から取得するデータ用のバッファーです。
                                               */
 char buf2[255]; /* 作成する出力可能な行用のバッファーです。
                                               */
 int iCount = 0; /* フェッチする行のカウンターです。
 /* 1. 十分な接続情報を含むのに必要なだけの入力パラメーターがあることを */
     確認します。 */
 if (argc != 4)
  printf("Proper usage \u20e4"connect string\u20e4" uid pwd \u20e4n");
  printf("argc %i ¥n",argc);
  return;
```

```
printf("Will connect SOLID at %s with uid %s and pwd%s.\u00e4n", argv[1],
 argv[2], argv[3]);
/* 2. HENV および HDBC の各オブジェクトのメモリーを割り振って、
                                                               /*
     Light Client による SOLID への接続を準備します。*/
rc = SQLAllocEnv(&henv);
if (SQL_SUCCESS != rc)
 printf("SQLAllocEnv fails.\u00e4n");
 return;
rc = SQLAllocConnect(henv, &hdbc);
if (SQL_SUCCESS != rc)
 printf("SQLAllocConnect fails.\u00e4n");
 return;
/* 3. Light Client ライブラリーを使用して SOLID に接続します。*/
rc = SQLConnect(hdbc, (UCHAR*)argv[1], SQL_NTS, (UCHAR*)argv[2],
 SQL_NTS, (UCHAR*)argv[3], SQL_NTS);
if (SQL_SUCCESS != rc)
 printf("SQLConnect fails.\u00e4n");
 return;
else printf("Connect ok.\forall n");
/* 4.1 つの照会用のステートメントを作成します。
/* SOLID システム表のいずれかからデータを読み取るためのものです。*/
rc = SQLAllocStmt(hdbc, &hstmt);
if (SQL SUCCESS != rc) {
 printf("SQLAllocStmt failed. \u20a4n");
rc = SQLPrepare(hstmt,
  (UCHAR*) "SELECT TABLE SCHEMA, TABLE NAME, TABLE TYPE FROM TABLES",
SQL NTS);
if (SQL SUCCESS != rc) {
 printf("SQLPrepare failed. \u20a4n");
else printf("SQLPrepare succeeded. \u214n");
/* 5. 照会を実行します。*/
rc = SQLExecute(hstmt);
if (SQL SUCCESS != rc) {
 printf("SQLExecute failed. \u20a4n");
else printf("SQLExecute succeeded. \u20abn");
/* 6. 結果セットのすべての行をフェッチし、出力します。*/
rc = SQLFetch(hstmt);
if ((SQL_SUCCESS != rc) && (SQL_NO_DATA_FOUND != rc)) {
 printf("SQLFetch returned an unexpected error code . \u224n");
else printf("Starting to fetch data.\formall n");
```

```
while (SQL NO DATA FOUND != rc)
   iCount++;
   sprintf(buf2, "Row %i :", iCount);
   rc = SQLGetCol(hstmt, 1, SQL_C_CHAR, buf, sizeof(buf), NULL);
   if (rc == SQL SUCCESS)
     strcat(buf2, buf);
     strcat(buf2, ",");
   else printf("Error in SQL GetCol(1) \u21an");
   rc = SQLGetCol(hstmt, 2, SQL_C_CHAR, buf, sizeof(buf), NULL);
   if (rc == SQL_SUCCESS)
     strcat(buf2, buf);
     strcat(buf2, ",");
   else printf("Error in SQL_GetCol(2) \u22a1n");
   rc = SQLGetCol(hstmt, 3, SQL_C_CHAR, buf, sizeof(buf), NULL);
   if (rc == SQL_SUCCESS)
     strcat(buf2, buf);
   else printf("Error in SQL_GetCol(3) \u22an");
   printf("%s \u2214n", buf2);
   rc = SQLFetch(hstmt);
 rc = SQLFreeStmt(hstmt, SQL DROP);
 if ((SQL_SUCCESS != rc))
   printf("SQLFreeStmt failed. ");
 /* 7. 正常に接続を閉じます。
                                                 */
 SQLDisconnect(hdbc);
 SQLFreeConnect(hdbc);
 SQLFreeEnv(henv);
 printf("Sample program ends successfully.\u00e4n");
solidDB Light Client サンプル 2
#ifndef SAMPLE1 H
#define SAMPLE1_H
* ファイル: SAMPLE1.H
            Solid Light Client API ヘッダー・ファイルのサンプル・プログラム*
* 説明:
* 作成者:
            Solid
   *************************
#include <stdio.h>
```

```
solidDB Light Client サンプル 3
C:\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{C:}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{C:}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\footnote{\text{Solid}\foo
Will connect Solid at fb1 1313 with uid DBA and pwd DBA.
Connect ok.
SQLPrepare succeeded.
SQLExecute succeeded.
Starting to fetch data.
Row 1 : SYSTEM, SYS TABLES, BASE TABLE
Row 2 : SYSTEM, SYS COLUMNS, BASE TABLE
Row 3 :_SYSTEM, SYS_USERS, BASE TABLE
Row 4 :_SYSTEM,SYS_UROLE,BASE TABLE
Row 5 :_SYSTEM,SYS_RELAUTH,BASE TABLE
Row 6 : SYSTEM, SYS_ATTAUTH, BASE TABLE Row 7 : SYSTEM, SYS_VIEWS, BASE TABLE
Row 8 : SYSTEM, SYS KEYPARTS, BASE TABLE
Row 9 :_SYSTEM,SYS_KEYS,BASE TABLE
Row 10 : SYSTEM, SYS CARDINAL, BASE TABLE
Row 11 : SYSTEM, SYS INFO, BASE TABLE
Row 12 :_SYSTEM,SYS_SYNONYM,BASE TABLE
Row 13 : SYSTEM, TABLES, VIEW
Row 14 :_SYSTEM, COLUMNS, VIEW
Row 15 : SYSTEM, SQL_LANGUAGES, BASE TABLE Row 16 : SYSTEM, SERVER_INFO, VIEW
Row 17 : SYSTEM, SYS TYPES, BASE TABLE
Row 18 : SYSTEM, SYS FORKEYS, BASE TABLE
Row 19: SYSTEM, SYS FORKEYPARTS, BASE TABLE
Row 20: SYSTEM, SYS PROCEDURES, BASE TABLE
Row 21: SYSTEM, SYS TABLEMODES, BASE TABLE
Row 22 : SYSTEM, SYS EVENTS, BASE TABLE
Row 23 : SYSTEM, SYS SEQUENCES, BASE TABLE
Row 24 : SYSTEM, SYS TMP HOTSTANDBY, BASE TABLE
Sample program ends successfully.
```

solidDB Light Client 関数リファレンス

#include <string.h>
#include "cli0lcli.h"

#endif

以下のトピックでは、solidDB Light Client がサポートしている各 ODBC 関数をアルファベット順に説明します。各関数は、C プログラミング言語関数として定義されています。

SQLAllocConnect (ODBC 1.0、コア)

SQLAllocConnect は、henv で識別される環境内の接続ハンドル用にメモリーを割り振ります。

構文

RETCODE SQLAllocConnect(henv, phenv)

SOLAllocConnect 関数は以下の引数を受け入れます。

表 17. SQLAllocConnect の引数

型	引数	使用法	説明
henv	henv	入力	環境ハンドル

表 17. SQLAllocConnect の引数 (続き)

型	引数	使用法	説明
HDBC FAR *	phenv	出力	接続ハンドルのストレージを指すポインター

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_ERROR、 または SOL INVALID HANDLE

SQLAllocConnect は、SQL_ERROR を返す場合、phenv で参照される henv を SQL_NULL_HDBC に設定します。追加情報を取得するために、アプリケーション は、指定した henv を使用し、さらに henv と hstmt をそれぞれ SQL NULL HDBC と SQL NULL HSTMT に設定して、SQLError を呼び出すこと ができます。

SQLAllocEnv (ODBC 1.0、コア)

SQLAllocEnv は、環境ハンドル用にメモリーを割り振り、アプリケーションで使用 するために ODBC コール・レベル・インターフェースを初期化します。アプリケー ションは、他の ODBC 関数を呼び出す前に、SOLAllocEnv を呼び出す必要があり ます。

構文

RETCODE SQLAllocEnv(phenv)

SOLAllocEnv 関数は以下の引数を受け入れます。

表 18. SOLAllocEnv の引数

型	引数	使用法	説明
HENV FAR *	phenv	出力	環境ハンドルのストレージを指すポインタ ー

戻り値

SQL SUCCESS または SQL ERROR

SQLAllocEnv は、SQL ERROR を返す場合、phenv で参照される henv を SOL NULL HENV に設定します。この場合、アプリケーションは、メモリー割り 振りエラーが発生したことを想定できます。

SQLAllocStmt (ODBC 1.0、コア)

SOLAllocStmt は、ステートメント・ハンドル用にメモリーを割り振り、そのステー トメント・ハンドルを henv で指定される接続に関連付けます。アプリケーション は、SQL ステートメントをサブミットする前に、SQLAllocStmt を呼び出す必要が あります。

構文

RETCODE SQLAllocStmt(henv, phstmt)

SQLAllocStmt 関数は以下の引数を受け入れます。

表 19. SQLAllocStmt の引数

型	引数	使用法	説明
HDBC	henv	入力	接続ハンドル
HSTMT FAR	phstmt		ステートメント・ハンドルのストレージを 指すポインター

戻り値

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_INVALID_HANDLE、 また は SQL_ERROR

SQLAllocStmt は、SQL_ERROR を返す場合、phstmt で参照される hstmt を SQL_NULL_HSTMT に設定します。これでアプリケーションは、henv と SQL_NULL_HSTMT で SQLError を呼び出すことにより、追加情報を取得できま す。

SQLConnect (ODBC 1.0、コア)

SQLConnect は、ドライバーをロードし、データ・ソースへの接続を確立します。接 続ハンドルは、状況、トランザクション状態、およびエラー情報を含めて、接続に 関するすべての情報のストレージを参照します。

構文

RETCODE SQLConnect(henv, szDSN, cbDSN, szUID, cbUID, szAuthStr, cbAuthStr)

SQLConnect 関数は以下の引数を受け入れます。

表 20. SQLConnect の引数

型	引数	使用法	説明
HDBC	henv	入力	接続ハンドル
UCHAR FAR *	szDSN	入力	データ・ソース名
SWORD	cbDSN	入力	szDSN の長さ
UCHAR FAR *	szUID	入力	ユーザー ID
SWORD	cbUID	入力	szUID の長さ
UCHAR FAR *	szAuthStr	入力	認証ストリング (一般にはパスワー ド)
SWORD	cbAuthStr	入力	szAuthStr の長さ

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLDescribeCol (ODBC 1.0、コア)

SQLDescribeCol は、結果セット内の 1 つの列に関して、列名、型、精度、位取 り、および NULL 可能性からなる結果記述子を返します。ブックマーク列 (列 0) に関する情報を返すのに使用することはできません。

構文

RETCODE SQLDescribeCol(hstmt, icol, szColName, cbColNameMax, pcbColName, pfSqlType, pcbColDef, pibScale, pfNullable)

SQLDescribeCol 関数は以下の引数を受け入れます。

表 21. SQLDescribeCol の引数

型	引数	使用法	説明
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドル
UWORD	icol	入力	結果データの列番号。1 から順に左から右 へ番号が付けられます。
UCHAR FAR *	szColName	出力	列名のストレージを指すポインター。列に 名前がない場合、または列名を判断できな い場合には、ドライバーは空ストリングを 返します。
SWORD	cbColNameMax	入力	szColName バッファーの最大長
SWORD FAR *	pcbColName	出力	szColName で返すことのできるバイトの 総数 (NULL 終了バイトを除く)。返すこ とのできるバイトの数が cbColNameMax 以上の場合には、szColName 内の列名 は、cbColNameMax - 1 バイトに切り捨て られます。

表 21. SQLDescribeCol の引数 (続き)

型	引数	使用法	説明
SWORD FAR *	pfSqlType	出力	列の SQL データ型。以下の値のいずれか を取る必要があります。
			SQL_BIGINT (注: solidDB Light Client は、BIGINT/SQL_BIGINT をサポートしま せん。)
			SQL_BINARY
			SQL_BIT (注: solidDB、solidDB Light Client、solidDB ODBC ドライバー、およ び solidDB JDBC ドライバーは、 BIT/SQL_BIT をサポートしません。)
			SQL_CHAR
			SQL_DATE
			SQL_DECIMAL
			SQL_DOUBLE
			SQL_FLOAT
			SQL_INTEGER
			SQL_LONGVARBINARY
			SQL_LONGVARCHAR
			SQL_NUMERIC
			SQL_REAL
			SQL_SMALLINT
			SQL_TIME
			SQL_TIMESTAMP
			SQL_TINYINT
			SQL_VARBINARY
			SQL_VARCHAR
			または、ドライバー固有の SQL データ型。データ型を判断できない場合、ドライバーは 0 を返します。
			詳しくは、288ページの『SQL データ型』を参照してください。ドライバー固有の SQL データ型については、ドライバーの資料を参照してください。

表 21. SQLDescribeCol の引数 (続き)

型	引数	使用法	説明
UDWORD FAR	pcbColDef	出力	データ・ソース上の列の精度。精度を判断できない場合、ドライバーは 0 を返します。
SWORD FAR *	pibScale	出力	データ・ソース上の列の位取り。位取りを 判断できないか、適用されない場合、ドラ イバーは 0 を返します。
SWORD FAR *	pfNullable	出力	列に NULL 値が許可されるかどうかを示します。以下の値のいずれかです。 ・ SQL_NO_NULLS: 列に NULL 値が許可されません。 ・ SQL_NULLABLE: 列に NULL 値が許可されます。 ・ SQL_NULLABLE_UNKNOWN: ドライバーは、列に NULL 値が許可されるかどうか判断できません。

SQL_SUCCESS, SQL_SUCCESS_WITH_INFO, SQL_STILL_EXECUTING, SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLDisconnect (ODBC 1.0、コア)

SQLDisconnect は、特定の接続ハンドルに関連付けられた接続を閉じます。

構文

RETCODE SQLDisconnect(henv)

SQLDisconnect 関数は以下の引数を受け入れます。

表 22. SQLDisconnect の引数

型	引数	使用法	説明
HDBC	henv	入力	接続ハンドル

戻り値

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLError (ODBC 1.0、コア)

SQLError は、エラー情報または状況情報を返します。

構文

RETCODE SQLError(henv, henv, hstmt, szSqlState, pfNativeError, szErrorMsg, cbErrorMsgMax, pcbErrorMsg)

SQLError 関数は以下の引数を受け入れます。

表 23. SQLError の引数

型	引数	使用法	説明
HENV	henv	入力	環境ハンドルまたは SQL_NULL_HENV
HDBC	henv	入力	接続ハンドルまたは SQL_NULL_HDBC
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドルまたは SQL_NULL_HSTMT
UCHAR FAR *	szSqlState	出力	NULL 終了ストリングとしての SQLSTATE。
SDWORD FAR *	pfNativeError	出力	ネイティブ・エラー・コード (データ・ソース に固有)
UCHAR FAR *	szErrorMsg	出力	エラー・メッセージ・テキストのストレージを 指すポインター
SWORD	cbErrorMsgMax	入力	szErrorMsg バッファーの最大長。この値は、 SQL_MAX_MESSAGE_LENGTH - 1 以下の必要 があります。
SWORD FAR *	pcbErrorMsg	出力	szErrorMsg で返すことのできるバイトの総数 (NULL 終了バイトを除く) を指すポインター。返すことのできるバイトの数が cbErrorMsgMax 以上の場合、szErrorMsg 内のエラー・メッセージ・テキストは、cbErrorMsgMax - 1 バイトに 切り捨てられます。

戻り値

SQL_SUCCESS, SQL_SUCCESS_WITH_INFO, SQL_NO_DATA_FOUND, SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLExecDirect (ODBC 1.0、コア)

ステートメント内にいずれかのパラメーターが存在する場合、SQLExecDirect は、 そのパラメーター・マーカー変数の現行値を使用して準備可能ステートメントを実 行します。SQLExecDirect は、一回限りの実行のために SQL ステートメントをサブ ミットする最も迅速な方法です。

構文

RETCODE SQLExecDirect(hstmt, szSqlStr, cbSqlStr)

SQLExecDirect 関数は、以下の引数を使用します。

表 24. SQLExecDirect の引数

型	引数	使用法	説明
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドル
UCHAR FAR *	szSqlStr	入力	実行される入力 SQL ステートメント
SDWORD	cbSqlStr	入力	szSqlStr の入力長

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_NEED_DATA、 SQL_STILL_EXECUTING、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLExecute (ODBC 1.0、コア)

ステートメント内にいずれかのパラメーター・マーカーが存在する場合、 SQLExecute は、そのパラメーター・マーカー変数の現行値を使用して準備済みステ ートメントを実行します。

構文

RETCODE SQLExecute(hstmt)

SOLExecute ステートメントは、以下の引数を受け入れます。

表 25. SQLExecute の引数

型	引数	使用法	説明
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドル

戻り値

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_NEED_DATA、 SQL_STILL_EXECUTING、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLFetch (ODBC 1.0、コア)

SQLFetch は、結果セットからデータの行をフェッチします。ドライバーは、 SOLGetCol でストレージ・ロケーションにバインドされたすべての列に関するデー 夕を返します。

構文

RETCODE SQLFetch(hstmt)

SOLFetch 関数は以下の引数を受け入れます。

表 26. SQLFetch の引数

型	引数	使用法	説明
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドル

SQL_SUCCESS, SQL_SUCCESS_WITH_INFO, SQL_NO_DATA_FOUND, SQL_STILL_EXECUTING、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLFreeConnect (ODBC 1.0、コア)

SQLFreeConnect は、接続ハンドルを解放し、そのハンドルに関連付けられたすべて のメモリーを解放します。

構文

RETCODE SQLFreeConnect(henv)

SQLFreeConnect 関数は以下の引数を受け入れます。

表 27. SQLFreeConnect の引数

型	引数	使用法	説明
HDBC	henv	入力	接続ハンドル

戻り値

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLFreeEnv (ODBC 1.0、コア)

SQLFreeEnv は、環境ハンドルを解放し、その環境ハンドルに関連付けられたすべて のメモリーを解放します。

構文

RETCODE SQLFreeEnv(henv)

SQLFreeEnv 関数は以下の引数を受け入れます。

表 28. SQLFreeEnv の引数

型	引数	使用法	説明
HDBC	henv	入力	接続ハンドル

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLFreeStmt (ODBC 1.0、コア)

SQLFreeStmt は、特定の hstmt に関連付けられた処理を停止し、hstmt に関連付け られたオープン・カーソルをクローズし、保留中の結果を破棄し、またオプション でステートメント・ハンドルに関連付けられたすべてのリソースを解放します。

構文

RETCODE SQLFreeStmt(hstmt, fOption)

SQLFreeStmt 関数は以下の引数を受け入れます。

表 29. SQLFreeStmt の引数

型	引数	使用法	説明
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドル
			ての列バッファーを解放します。 SQL_RESET_PARAMS: 指定した hstmt に対して SQLParamValue によって設定された
			すべてのパラメーター・バッファーを解 放します。

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLGetCursorName (ODBC 1.0、コア)

SQLGetCursorName は、指定した hstmt に関連付けられたカーソル名を返します。

構文

RETCODE SQLGetCursorName(hstmt, szCursor, cbCursorMax, pcbCursor)

SQLGetCursorName 関数は以下の引数を受け入れます。

表 30. SQLGetCursorName の引数

型	引数	使用法	説明
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドル
UCHAR FAR *	szCursor	出力	カーソル名のストレージを指すポイン ター
SWORD	cbCursorMax	入力	szCursor の長さ
SWORD FAR *	pcbCursor	出力	szCursor で返すことのできるバイトの 総数 (NULL 終了バイトを除く)。返す ことのできるバイトの数が cbCursorMax 以上の場合には、szCursor 内のカーソル名は、cbCursorMax - 1 バイトに切り捨てられます。

戻り値

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLGetData (ODBC 1.0、レベル 1)

SQLGetData は、現在行内の単一のアンバインドされた列に関する結果データを返し ます。この関数は、文字、バイナリー、またはデータ・ソース固有のデータ型の列 から文字データ値またはバイナリー・データ値 (例えば、SQL LONGVARBINARY 列または SQL LONGVARCHAR 列からのデータ) を部分単位でリトリーブしま す。

アプリケーションは、SQLGetData を呼び出す前に、SQLFetch を呼び出して、カー ソルをデータの行に位置付ける必要があります。

構文

RETCODE SQLGetData(hstmt, icol, fCType, rgbValue, cbValueMax, pcbValue)

SQLGetData 関数は以下の引数を受け入れます。

表 31. SQLGetData の引数

型	引数	使用法	説明
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドル
UWORD	icol	入力	結果データの列番号。1 から順に左から右 へ番号が付けられます。列番号 0 は、行の ブックマークのリトリーブに使用されま す。ブックマークは、ODBC 1.0 ドライバ ーおよび SQLFetch ではサポートされてい ません。

表 31. SQLGetData の引数 (続き)

型	引数	使用法	説明
SWORD	fCType	入力	結果データの C データ型。以下の値のいずれかを取る必要があります。
			SQL_C_BINARY
			SQL_C_BIT
			SQL_C_BOOKMARK
			SQL_C_CHAR
			SQL_C_DATE
			SQL_C_DEFAULT
			SQL_C_DOUBLE
			SQL_C_FLOAT
			SQL_C_SLONG
			SQL_C_SSHORT
			SQL_C_STINYINT
			SQL_C_TIME
			SQL_C_TIMESTAMP
			SQL_C_ULONG
			SQL_C_USHORT
			SQL_C_UTINYINT
			SQL_C_DEFAULT は、データがデフォルトの C データ型に変換されることを指定します。 注: ドライバーは、ODBC 1.0 からfCType の以下の値もサポートする必要があります。アプリケーションは、ODBC 1.0ドライバーの呼び出しでは、ODBC 2.0値ではなく、これらの値を使用する必要があります。
			SQL_C_LONG
			SQL_C_SHORT
			SQL_C_TINYINT
			データの変換方法については、 307 ページ の『SQL から C データ型へのデータ変 換』を参照してください。

表 31. SQLGetData の引数 (続き)

型	引数	使用法	説明
PTR	rgbValue	出力	データのストレージを指すポインター
SDWORD	cbValueMax	入力	rgbValue バッファーの最大長。文字データ については、rgbValue は、NULL 終了バイ ト用のスペースも含む必要があります。
			文字およびバイナリーの C データについては、cbValueMax によって、SQLGetDataの 1 回の呼び出しで受信するデータの量が決まります。その他すべての型の C データについては、cbValueMax は無視されます。ドライバーは、rgbValue のサイズを、fCType で指定された C データ型のサイズと想定し、データ値の全体を返します。
SDWORD FAR *	pcbValue	出力	SQL_NULL_DATA、SQLGetData の現行呼び出しの前に rgbValue で返すことのできるバイトの総数 (文字データ用の NULL 終了バイトを除く)、または使用可能なバイト数を判断できない場合にはSQL_NO_TOTAL
			文字データについては、pcbValue が SQL_NO_TOTAL か、または cbValueMax 以上の場合、rgbValue 内のデータは、cbValueMax - 1 バイトに切り捨てられ、ドライバーによって NULL 終了されます。
			バイナリー・データについては、pcbValueが SQL_NO_TOTAL か、または cbValueMax より大きい場合、rgbValue 内のデータは、cbValueMax バイトに切り捨てられます。
			その他すべてのデータ型については、cbValueMax の値は無視され、ドライバーは、rgbValue のサイズを、fCType で指定された C データ型のサイズと想定します。

SQL_SUCCESS, SQL_SUCCESS_WITH_INFO, SQL_NO_DATA_FOUND, SQL_STILL_EXECUTING、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLNumResultCols (ODBC 1.0、コア)

SQLNumResultCols は、結果セットの列数を返します。

構文

RETCODE SQLNumResultCols(hstmt, pccol)

SQLNumResultCols 関数は以下の引数を受け入れます。

表 32. SQLNumResultCols の引数

型	引数	使用法	説明
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドル
SWORD FAR	pccol	出力	結果セット内の列の数

戻り値

SQL SUCCESS, SQL SUCCESS WITH INFO, SQL STILL EXECUTING, SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLPrepare (ODBC 1.0、コア)

SQLPrepare は、SQL ストリングの実行を準備します。

構文

RETCODE SQLPrepare(hstmt, szSqlStr, cbSqlStr)

SQLPrepare 関数は以下の引数を受け入れます。

表 33. SQLPrepare の引数

型	引数	使用法	説明
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドル
UCHAR FAR	szSqlStr	入力	SQL テキスト・ストリング
SDWORD	cbSqlStr	入力	szSqlStr の長さ

戻り値

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_STILL_EXECUTING. SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLRowCount (ODBC 1.0、コア)

SQLRowCount は、UPDATE、INSERT、または DELETE のステートメントの影響 を受ける行の数、または SQLSetPos 内の SQL UPDATE、SQL ADD、または SQL_DELETE の操作によって影響を受ける行の数を返します。

目的

RETCODE SQLRowCount(hstmt, pcrow)

SQLRowCount 関数は以下の引数を受け入れます。

表 34. SQLRowCount の引数

型	引数	使用法	説明
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドル
SDWORD FAR	pcrow	出力	UPDATE、INSERT、および DELETE のステートメントでは、pcrow は、要求の影響を受ける行の数になります。または、影響される行の数を入手できない場合には -1 になります。 その他のステートメントと関数では、ドライバーは、pcrow の値を定義できます。例えば、データ・ソースによっては、行をフェッチする前に、SELECT ステートメントまたはカタログ関数によって返された行の数を返すことができます。 注: 多くのデータ・ソースでは、結果セット内の行をフェッチする前にその行数を返すことができます。 注: 多くのデータ・ソースでは、結果セット内の行をフェッチする前にその行数を返すことはできません。相互運用性を最大にするために、複数のアプリケーションでこの動作に依存してはいけません。

戻り値

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLSetCursorName (ODBC 1.0、コア)

SQLSetCursorName は、カーソル名をアクティブ hstmt に関連付けます。アプリケ ーションが SQLSetCursorName を呼び出さない場合、ドライバーは、SQL ステート メント処理の必要に応じてカーソル名を生成します。

構文

RETCODE SQLSetCursorName(hstmt, szCursor, cbCursor)

SQLSetCursorName 関数は以下の引数を受け入れます。

表 35. SQLSetCursorName の引数

型	引数	使用法	説明
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドル

表 35. SQLSetCursorName の引数 (続き)

型	引数	使用法	説明
UCHAR FAR	szCursor	入力	カーソル名
SWORD	cbCursor	入力	szCursor の長さ

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

SQLTransact (ODBC 1.0、コア)

SQLTransact は、接続に関連付けられたすべての hstmt に対するアクティブなすべ ての操作に関してコミット操作またはロールバック操作を要求します。SQLTransact は、henv に関連付けられたすべての接続に関して、コミット操作またはロールバッ ク操作を実行するよう要求することもできます。

構文

RETCODE SQLTransact(henv, henv, fType)

SQLTransact 関数は以下の引数を受け入れます。

表 36. SQLTransact の引数

型	引数	使用法	説明
HENV	henv	入力	環境ハンドル
HDBC	henv	入力	接続ハンドル
UWORD	fType	入力	以下の 2 つの値のどちらかです。
			SQL_COMMIT
			SQL_ROLLBACK

戻り値

SQL_SUCCESS、 SQL_SUCCESS_WITH_INFO、 SQL_ERROR、 または SQL_INVALID_HANDLE

非 ODBC solidDB Light Client 関数

このトピックでは、solidDB Light Client がサポートする 4 つの非 ODBC 関数につ いて説明します。

1. SQLFetchPrev

SQLFetchPrev は、結果セットからデータの直前の行をフェッチします。その機 能は、対応する ODBC API の SQLFetch (直前のレコードに対して使用した場 合) と同じです。詳しくは、82 ページの『SQLFetch (ODBC 1.0、コア)』を参照 してください。

2. SQLGetAnyData

SQLGetAnyData は、現在行内の単一のアンバインドされた列に関する結果デー 夕を返します。SQLGetAnyData の機能は、対応する ODBC API の SQLGetData と同じです。この関数について詳しくは、85ページの『SQLGetData (ODBC 1.0、レベル 1)』を参照してください。

3. SOLGetCol

SOLGetCol は、現在行内の単一列に関する結果データを取得します。アプリケー ションは、この関数を使用して、一度に 1 列のデータをリトリーブできます。 また、簡単に管理可能なブロック単位で大きなデータ値をリトリーブするのにも 使用できます。SOLGetCol の機能は、対応する ODBC API の SOLGetData と 同じです。詳しくは、85ページの『SQLGetData (ODBC 1.0、レベル 1)』を参 照してください。

4. SOLSetParamValue

SOLPrepare で指定された SOL ステートメント内のパラメーター・マーカーの 値を設定します。パラメーター・マーカーは、1 から順に左から右へ番号が付け られており、任意の順序で設定できます。引数 rgbValue の値は、SQLExecute が呼び出されたときにパラメーター・マーカー用に使用されます。

構文

RETCODE SQLSetParamValue(hstmt, ipar, fCType, fSqlType, cbColDef, ibScale, rgbValue, pcbValue)

SQLSetParamValue 関数は以下の引数を受け入れます。

表 37. SQLSetParamValue の引数

型	引数	使用法	説明
HSTMT	hstmt	入力	ステートメント・ハンドル
UWORD	ipar	入力	パラメーターの番号。1 から順に左から 右へ番号が付けられます。

表 37. SQLSetParamValue の引数 (続き)

型	引数	使用法	説明
SWORD	fCType	入力	 結果データの C データ型。このトピックの最後で、許可されるデータ型変換を確認してください。 以下の値のいずれかを取る必要があります。 ・ SQL_C_BINARY ・ SQL_C_CHAR ・ SQL_C_DOUBLE ・ SQL_C_LONG ・ SQL_C_SHORT
SDWORD	fSqlType	入力	 ・SQL_C_SHORT パラメーターの SQL データ型。この表の後で、許可されるデータ型変換を確認してください。 以下の値のいずれかを取る必要があります。 ・SQL_C_BINARY ・SQL_C_CHAR ・SQL_DATE ・SQL_DECIMAL ・SQL_C_DOUBLE ・SQL_C_FLOAT ・SQL_INTEGER ・SQL_LONGVARBINARY ・SQL_LONGVARCHAR ・SQL_NUMERIC ・SQL_REAL ・SQL_SMALLINT ・SQL_TIME ・SQL_TIME ・SQL_TINYINT ・SQL_VARBINARY ・SQL_VARCHAR
UDWORD	cbColDef	入力	対応するパラメーター・マーカーの列ま たは式の精度
SWORD	ibScale	入力	対応するパラメーター・マーカーの列ま たは式の位取り

表 37. SQLSetParamValue の引数 (続き)

型	引数	使用法	説明
PTR	rgbValue	入力	出力データ
SDWORD *	pcbValue	入力	rgbValue 内のデータの長さ

fCType は、rgbValue の内容を記述します。fCType は、SQL_C_CHAR か、引数 fSqlType に相当する C データ型である必要があります。fCType が SQL_C_CHAR で fSqlType が数値型の場合、rgbValue は、文字ストリングから fSqlType で指定さ れた型に変換されます。

fSqlType は、パラメーター・マーカーで参照される列または式のデータ型です。実 行時に、rgbValue の値が読み取られ、fCType から fSqlType に変換された後、 solidDB に送信されます。 rgbValue の値は変更されないことに注意してください。

cbColDef は、参照される列または式の列定義の長さまたは精度です。以下のよう に、cbColDef は、データのクラスによって異なります。

表 38. cbColDef の差異化

型	説明
SQL_CHAR	列の最大長
SQL_VARCHAR	
SQL_DECIMAL	最大 10 進数精度 (つまり、可能な総桁数)
SQL_NUMERIC	

ibScale は、参照される列の小数点以下の総桁数です。ibScale は、SOL DECIMAL および SQL_NUMERIC のデータ型に対してのみ定義されます。rgbValue は、パラ メーター・マーカーに対する実際のデータを含む必要のある文字ストリングです。 データは、fCType 引数で指定される形式である必要があります。

pcbValue は、rgbValue 内のパラメーター・マーカー値の長さを示す整数です。これ は、fCType が SQL_C_CHAR の場合、または NULL データベース値を指定する場 合にのみ使用されます。パラメーター・マーカーに NULL 値を指定する場合には、 この変数は SQL_NULL_DATA に設定する必要があります。この変数を SQL_NTS に設定すると、rgbValue は NULL 終了ストリングとして扱われます。

戻り値

SQL_SUCCESS、SQL_ERROR、または SQL_INVALID_HANDLE

診断

fcType 引数で識別されるデータを、fSqlType 引数で識別されるデータ値に変換できない場合、以下の SQL_ERROR が返されます。

07006 - Restricted data type attribute violation

- fcType 引数が無効な場合、以下の SQL_ERROR が返されます。 S1003 - Program type out of range
- fSqlType 引数が無効な場合、以下の SQL_ERROR が返されます。 S1004 - SQL data type out of range
- ipar 引数が 1 より小さい場合、以下の SQL_ERROR が返されます。 S1009 - Invalid argument value

使用上の注意

この関数で設定されたすべてのパラメーターは、SQL_UNBIND_PARAMS オプションまたは SQL_DROP オプションを指定して SQLFreeStmt を呼び出すか、または同じパラメーター番号で SQLSetParamValue を再び呼び出すまで有効です。パラメーターを含む SQL ステートメントを実行すると、パラメーターの設定値は、solidDB に送信されます。

注: パラメーターの数は、準備されたステートメント内に存在するパラメーター・マーカーの数と正確に一致する必要があります。SQL ステートメント内に存在するパラメーター・マーカーよりも少ない数のパラメーター値が設定された場合、代わりに NULL 値が使用されます。

コード例

以下のコード例では、異なるパラメーター値を指定して、単純ステートメント INSERT INTO TESTTABLE (I,C) VALUES (?,?) を複数回実行する準備をします。

```
char buf[255];
SDWORD dwPar;
rc = SQLPrepare(hstmt,(UCHAR*)"INSERT INTO TESTTABLE(I,C)
VALUES (?,?)",SQL_NTS);
if (SQL_SUCCESS != rc) {
     printf("Prepare failed. \u20a4n");
for (i=1;i<100;i++)
        dwPar = i;
        sprintf(buf,"line%i",i);
    rc = SQLSetParamValue(
    hstmt,1,SQL_C_LONG,SQL_INTEGER,0,0,&dwPar,NULL );
    if (SQL_SUCCESS != rc) {
        printf("(SetParamValue 1 failed) \u224n");
                 return 0;
    rc = SQLSetParamValue(
    hstmt,2,SQL_C_CHAR,SQL_CHAR,0,0,buf,NULL );
    if (SQL SUCCESS != rc) {
        printf("(SetParamValue 1 failed) \u2247n");
                 return 0;> >
```

関連関数

表 39. 関連関数

関連情報	参照先
ステートメントの実行の準備	SQLPrepare
準備済み SQL ステートメントの実行	SQLExecute
SQL ステートメントの実行	SQLExecDirect

solidDB Light Client 型変換マトリックス

以下の表は、solidDB Light Client の SQLGetCol 関数と SQLSetParamValue 関数に よって提供される型変換を示しています。

以下に、表内で C 変数データ型に使用される省略形を示します。

表 40. C 変数データ型の省略形

省略形	API パラメーター定義	C 変数データ型
Bin	SQL_C_BINARY	void*
Char	SQL_C_CHAR	char[]、char*
Long	SQL_C_LONG	long int (*)、32 ビット
Short	SQL_C_SHORT	short int (*)、16 ビット
Float	SQL_C_FLOAT	float (*)
Double	SQL_C_DOUBLE	double (*)

(*) これらのデータ型の変数を Light Client 関数呼び出しでパラメーターとして使用 する場合、実際には代わりに変数を指すポインターを渡す必要があることに注意し てください。

SQL データ型の説明については、17ページの『データ型』を参照してください。

SQLGetCol 関数と SQLGetData 関数は、データベース列型と C 変数データ型の間 で、以下のデータ型変換を実行します。

表 41. データベース列型と C 変数データ型間の変換

SQL データ型/ C 変数データ型	Bin	Char	Long	Short	Float	Double
TINYINT	*	*	*	*	*	*
LONG VARBINARY	*	*				

表 41. データベース列型と C 変数データ型間の変換 (続き)

SQL データ型/						
C 変数データ型	Bin	Char	Long	Short	Float	Double
VARBINARY	*	*				
BINARY	*	*				
LONG VARCHAR	*	*				
CHAR	*	*				
NUMERIC		*	*	*	*	*
DECIMAL		*	*	*	*	*
INTEGER	*	*	*	*	*	*
SMALLINT	*	*	*	*	*	*
FLOAT	*	*	*	*	*	*
REAL	*	*	*	*	*	*
DOUBLE	*	*	*	*	*	*
DATE		*				
TIME		*				
TIMESTAMP		*				
VARCHAR	*	*				

SQLSetParamValue 関数は、C データ型とデータベース列型の間で以下の型変換を提 供します。

表 42. データベース列型と C 変数データ型間の変換

SQL データ型/ C 変数データ型	Bin	Char	Long	Short	Float	Double
TINYINT		*	*	*		
LONG VARBINARY	*					
VARBINARY	*					
BINARY	*					
LONG VARCHAR		*				

表 42. データベース列型と C 変数データ型間の変換 (続き)

SQL データ型/						
C 変数データ型	Bin	Char	Long	Short	Float	Double
CHAR		*				
NUMERIC		*	*	*	*	*
DECIMAL		*	*	*	*	*
INTEGER		*	*	*		
SMALLINT		*	*	*		
FLOAT		*	*	*	*	*
REAL		*	*	*	*	*
DOUBLE		*	*	*	*	*
DATE		*				
TIME		*				
TIMESTAMP		*				
VARCHAR		*				

4 solidDB JDBC ドライバーの使用

solidDB JDBC ドライバー 2.0 は、JDBC Type 4 ドライバーです。*Type 4* は、Java Database Connectivity (JDBC) 2.0 標準の 100% Pure Java 実装であることを意味しています。

JDBC API は、データベース接続、SQL ステートメント、結果セット、データベース・メタデータなどを表す Java クラスを定義します。これにより、Java プログラマーは SQL ステートメントを発行し、結果を処理できます。 JDBC は、Java でデータベースにアクセスするための基本 API です。JDBC テクノロジーについて詳しくは、JDBC テクノロジーのホーム・ページ (http://java.sun.com/products/jdbc/) を参照してください。

solidDB JDBC ドライバーは完全に Java で記述されており、TCP/IP ネットワーク・プロトコルを使用して、solidDB サーバーと直接通信します。 solidDB JDBC ドライバーには、追加のデータベース・アクセス・ライブラリーは必要ありません。このドライバーでは、Java ランタイム環境 (JRE) または Java 開発キット (JDK) が使用可能である必要があります。

solidDB JDBC ドライバーとは

このトピックでは、solidDB JDBC ドライバーについて説明します。

JDBC API は、データベース接続、SQL ステートメント、結果セット、データベース・メタデータなどを表す Java クラスを定義します。Java プログラマーは、これを使用して SQL ステートメントを発行し、結果を処理できます。JDBC は、Java でデータベースにアクセスするための基本 API です。JDBC テクノロジーについて詳しくは、JDBC テクノロジーのホーム・ページ (http://java.sun.com/products/jdbc/)を参照してください。

solidDB の JDBC ドライバーは完全に Java で記述されており、TCP/IP ネットワーク・プロトコルを使用して solidDB サーバーと直接通信します。solidDB ドライバーには、ODBC のような追加のデータベース・アクセス・ライブラリーは必要ありません。このドライバーでは、JRE (Java ランタイム環境) または JDK (Java Development Kit) が使用可能である必要があります。

solidDB JDBC ドライバーは、JDBC 2.0 標準の solidDB インプリメンテーションです。このドライバーは、JDK 1.4.2 以上をサポートするすべての Java 環境で使用可能です。

solidDB JDBC ドライバーの概要

solidDB JDBC ドライバー (SolidDriver2.0.jar) は、solidDB のインストール中にインストールされます。 solidDB パッケージで提供されるサンプルの Java プログラムを使用して、インストールを検証することができます。ご使用の環境によっては、solidDB JDBC ドライバーを使用する前に、さまざまな構成設定を設定する必要があります。

デフォルトのインストール・ディレクトリー

solidDB JDBC ドライバーは、solidDB のインストール中に、solidDB インストー ル・ディレクトリーの jdbc ディレクトリーにインストールされます。

jdbc ディレクトリーには、WebSphere® で使用するための、solidDB データ・スト ア・ヘルパー・クラス (SolidDataStoreHelper.jar) も含まれています。

solidDB インストール・ディレクトリーの samples/idbc ディレクトリーには、 solidDB JDBC ドライバーを使用する Java コードのサンプルが含まれています。こ のサンプルの実行に関する説明は、同じディレクトリーにある readme.txt ファイ ルにあります。

Java 環境の要件

- JDBC API 仕様書リリース 2.0 をサポートし正常に機能する Java ランタイム環 境または開発環境があることを確認してください。
- Java 環境の資料を調べて、圧縮バイトコードを使用できるかどうかを確認してく ださい。 SolidDriver2.0.jar には、大部分の Java 仮想マシンで使用可能な圧 縮バイトコード・フォーマットの solidDB JDBC ドライバー・クラスが含まれて います。ただし、一部の環境 (Microsoft J++ など) では、圧縮解除されたバイト コードが必要です。ご使用の環境で、圧縮解除されたバイトコードが必要な場 合、長いファイル名をサポートするツールを使用して、SolidDriver2.0.jar ファ イルを解凍する必要があります。

CLASSPATH 環境変数の設定

ご使用の環境の CLASSPATH 環境変数に、solidDB JDBC ドライバーの .jar ファ イル・インストール・パスを含める必要があります。

Windows

インストールを行うと、solidDB JDBC ドライバーのデフォルトのインストー ル・パスがシステム CLASSPATH 環境変数に自動的に追加されます。

システム CLASSPATH 環境変数は、以下のようにして、「コントロール パネ ル」で確認および設定できます。

「コントロール パネル」 → 「システム」 → 「詳細設定」 → 「環境変数」

・ Linux および UNIX

solidDB JDBC ドライバー (SolidDriver2.0.jar) のインストール・パスを含むよ うに、CLASSPATH 環境変数を設定します。

例えば Bourne シェルの場合、以下のコマンドを使用します。

export CLASSPATH=<solidDB installation directory>/jdbc/SolidDriver2.0.jar:\$CLASSPATH

Bourne シェル以外のシェルを使用している場合、ご使用のシェルに合うように、 このコマンドを変更してください。

sample1.java を使用したインストールの検証

sample1.java サンプル・アプリケーション (samples/jdbc ディレクトリーで入手 可)を使用して、solidDB JDBC ドライバーのインストールを検証することができま

sample1.java サンプル・アプリケーションは、以下の処置を実行します。

- 1. JDBC ドライバー・マネージャー・サービスを使用して、solidDB JDBC ドライ バーを登録します。
- 2. 実行中の solidDB プロセス用に接続ストリングを要求します。
- 3. ドライバーを使用して、solidDB に接続します。
- 4. solidDB システム表の 1 つからデータをリトリーブするために、1 つの照会に 対して以下のステートメントを作成します。

SELECT TABLE CATALOG, TABLE SCHEMA, TABLE NAME, TABLE TYPE FROM TABLES

- 5. 照会を実行します。
- 6. 結果セットのすべての行をフェッチします。

空の solidDB データベース・ディクショナリーには、およそ 86 行が含まれま す。

サンプルの実行

サンプルを実行する前に、以下を確認してください。

- 使用する PATH 環境変数に、Java コンパイラーと JRE を保持するディレクトリ 一が含まれている。
- サンプル/jdbc ディレクトリーに、有効な solidDB (評価) ライセンスが含まれて いる。
- 1. solidDB プロセスをまだ実行していない場合は、プロセスをすぐに開始し、空の データベースを作成します。
- 2. 作業ディレクトリーを /samples/jdbc に変更します。これは、サンプルの Java プログラムを含むディレクトリーです。
- 3. 以下のようにして、Java サンプル・プログラムをコンパイルします。 javac sample1.java
- 4. 以下のコマンドを使用して、サンプル・アプリケーションを開始します。 java sample1
- 5. アプリケーションによって、有効な接続ストリングの入力を求めるプロンプトが 出されます。接続ストリングのフォーマットは、以下のとおりです。

jdbc:solid://<hostname>:<port>/<username>/<password>

例えば、以下のストリングは、ポート 2315 で TCP/IP プロトコルを listen する ホスト「mymachine」で、solidDB サーバーへの接続を試みます。

jdbc:solid://localhost:2315/dba/dba

接続ストリングを入力したら、サンプル・アプリケーションは照会結果を出力し ます。

sample1.java サンプル・アプリケーションのトラブルシューティング

sample1.java サンプル・アプリケーションの実行中に生じる可能性のある問題、お よびそれらの解決策を以下にリストします。

- 1. ドライバーを正常に登録できない。
 - Java 環境が java.sql クラスをサポートしていません。
 - SolidDriver2.0.jar が CLASSPATH 定義にありません。
- 2. solidDB プロセスに接続できない。
 - solidDB サーバーのバージョンは、6.5 以上である必要があります。

古い solidDB バージョンは、現在のリリースで提供されるドライバーからの 接続を拒否する場合があります。

• 接続ストリングが間違っているか、solidDB が指定した TCP/IP を listen して いない可能性があります。

solidDB が実行していることを確認し、listen 情報を検証してください。例え ば、solidDB SQL エディター (solsql) を使用して、ネットワークを介して接 続が確立できていることを確認することができます。

solidDB JDBC ドライバーの登録

JDBC ドライバー・マネージャーは、ドライバーのロードとアンロード、および接 続要求の適切なドライバーとのインターフェースを処理します。

ドライバーは、以下に示すように登録できます。このコードを実行すると、ドライ バーは DriverManager に自身を登録します。

/ Class.forName サービスを使用した登録 Class.forName("solid.jdbc.SolidDriver");

データベースへの接続

ドライバー・マネージャーにドライバーを正しく登録すると、java.sql.Connection の インスタンスを作成することにより、接続が確立されます。

以下のコード例によって、java.sql.Connection のインスタンスが作成されます。

```
Connection conn = null;
// sCon は、JDBC 接続ズトリングです。
(jdbc:solid://hostname:port/login/password)
String sCon = "jdbc:solid://fb9:1314/dba/dba";
try {
   conn = DriverManager.getConnection(sCon);
} catch (SQLException e) {
    System.out.println("Connect failed : " + e.getMessage());
```

DriverManager.getConnection 関数では、パラメーターとして JDBC 接続ストリング が必要です。JDBC 接続ストリングにより、データベース・サーバーが稼働してい るコンピューターが識別されます。また、このストリングには、サーバーへの接続 に必要なその他の情報も含まれます。

solidDB の JDBC URL (接続ストリング) の構文は、以下のとおりです。

jdbc:solid://<hostname>:<port>/<username>/<password>[?<property-name>=<value>]...

例えば、以下の接続ストリングは、マシン fb9 のポート 1314 で TCP/IP プロトコ ルを listen する solidDB サーバーへの接続を試みます。

"jdbc:solid://fb9:1314/dba/dba"

アプリケーションは、複数の Connection オブジェクトを使用することにより、デー タベースに対して複数の接続を確立できます。接続ライフ・サイクルは、非常に正 確な方法で管理する必要があります。そうしなければ、データベースへのアクセス を試行する同時ユーザーとアプリケーションの間で、競合が発生する可能性があり ます。詳しくは、128ページの『コード例』を参照してください。

注: solidDB JDBC ドライバーは、照会の許可されない管理オプションに関する接続 のみをサポートします。このタイプの接続では、java.util.Properties 名 ADMIN_ USER を TRUE に設定してください。TRUE に設定して接続を確立した後は、 ADMIN コマンドのみが許可されます。

トランザクションと自動コミット・モード

JDBC 仕様に定義されているように、solidDB データベースには、自動コミット・モ ードまたは非自動コミット・モードのいずれかで接続できます。

- 自動コミット・モード以外の場合、各トランザクションによる変更を他のデータ ベース接続で認識できるようにするには、そのトランザクションを明示的にコミ ットする必要があります。
- 自動コミット状態は、Connection.getAutoCommit() メソッドでモニターできます。
- この状態は、Connection.setAutoCommit() で設定できます。自動コミット状態に対 する solidDB サーバーのデフォルト設定は true です。
- 自動コミット・モードがオフの場合、トランザクションは以下の 2 つの方法でコ ミットできます。
 - Connection.commit() メソッドの呼び出し、または
 - SOL 'COMMIT WORK' に関するステートメントの実行

データベース・エラーの処理

JDBC のデータベース・エラーは、例外メカニズムで処理および管理されます。 JDBC インターフェースで指定されるメソッドの大部分は、SQLException のインス タンスをスローできます。これらのエラーは、通常のアプリケーション・ワークフ ローに出現する可能性があるため (例えば、並行性競合を表します)、このようなエ ラーに対する耐性をコードに持たせる必要があります。基本的には、コードの実行 結果に関係なく、接続を「閉じている」以外の状態のままにしておくことは許され ません。このアプローチでは、未処理の例外のために、使用可能なすべての接続が 開いたままになるのを防止できます。

e.getErrorCode() を呼び出すことにより、例外のエラー・コードを取得できます。 solidDB エラー・コードのリストについては、「IBM solidDB 管理者ガイド」の付 録『エラー・コード』を参照してください。

以下のコード例は、データベースから返されたエラーを正しく処理する方法を示し ています。

```
Public void listTablesExample() {
   try {
       Class.forName("solid.jdbc.SolidDriver");
   } catch (ClassNotFoundException e) {
       System.err.println("Solid JDBC driver is not registered
   in the classpath");
       return; //メソッドを終了します。
   Connection conn = null;
   Statement stmt = null;
   ResultSet rs = null;
   try {
       conn = DriverManager.getConnection("jdbc:solid://
       localhost:1313", "dba", "dba");
       stmt = conn.createStatement();
       rs = stmt.executeQuery("SELECT * FROM tables");
       while (rs.next()) {
           System.out.println(rs.getObject(0));//結果を出力します。
   } catch (SQLException e) {
       e.printStackTrace();
   } finally {
       /* リソースが必要なくなった場合、
   finally{} ブロックで、
   作成したのと逆の順番で
   解放するのが良い考え方です。
       if (rs != null) {
           try {
              rs.close();
           } catch (SQLException sqlEx) { // 無視します。
               rs = null;
       if (stmt != null) {
           try {
               stmt.close();
           } catch (SQLException sqlEx) { // 無視します。
               stmt = null;
       }
   if (conn != null)
       try {
           conn.close();
       } catch (SQLException e) {
           e.printStackTrace();
       } finally {
           conn = null;
```

solidDB および JDBC に関する特記事項

JDBC は、使用できる SQL ダイアレクトを指定しません。単に SQL をドライバー に渡すだけであり、ドライバーは、その SQL を直接データベースに渡すことも、 SQL 自体を構文解析することもできます。このため、solidDB JDBC ドライバーの 動作は、solidDB に固有のものになります。

関数によっては、JDBC 仕様のいくつかの詳細項目が未確定のままになっていま す。solidDB のメソッドのインプリメンテーションに固有の詳細については、 『JDBC ドライバーのインターフェースおよびメソッド』を参照してください。

solidDB JDBC ドライバーは、solidDB のカタログとスキーマをサポートしていま す。

ストアード・プロシージャーの実行

solidDB データベースでは、他の SQL ステートメントと同様に、CALL proc_name [(parameter ...)] ステートメントを実行することにより、ストアード・プロシ ージャーを呼び出すことができます。また、プロシージャーは、標準 CallableStatement インターフェースを通して、JDBC 内で同様の方法で使用できま す。

注: solidDB ストアード・プロシージャーは、結果セットを返すことができます。 JDBC CallableStatement インターフェースを通してプロシージャーを呼び出す必要は ありません。JDBC を使用して solidDB プロシージャーを呼び出す例については、 128 ページの『コード例』で sample3 アプリケーションのソース・コードを参照し てください。

JDBC ドライバーのインターフェースおよびメソッド

solidDB JDBC ドライバー 2.0 は、JDBC 2.0 標準と互換性があり、JDBC 2.0 オプ ション・パッケージ (以前はスタンダード・エクステンションと呼ばれていました) 内の一部の機能をサポートしています。

このトピックでは、標準 API との solidDB に固有の相異点について説明します。 java.sql パッケージおよび javax.sql パッケージで、標準パッケージおよびイン ターフェースを参照できます。また、『既知の実装クラスの一覧 (All Known Implementing Classes)』のリストを確認することにより、特定のインプリメンテーシ ョン (実装) の詳細を参照できます。

solidDB JDBC ドライバーが各種データ型をサポートする方法については、140ペー ジの『solidDB JDBC ドライバー型変換マトリックス』を参照してください。

Array

java.sql.Array インターフェースは、サポートされません。このインターフェース は、Java プログラミング言語で、SQL の配列型のマップに使用されます。これは solidDB では現在使用できない SQL-99 規格を反映しています。

Blob

java.sql.Blob インターフェースはサポートされません。このインターフェースは、 Java プログラミング言語で、SOL の Blob 型のマップに使用されます。これは solidDB では現在使用できない SQL-99 規格を反映しています。

CallableStatement

java.sql.CallableStatement インターフェースは、データベース・ストアード・プロシ ージャーの呼び出しをサポートするためのものです。したがって、solidDB ストア ード・プロシージャーは、JDBC で他のステートメントと同じ方法で使用されま す。solidDB サーバー上でのみアプリケーションを作成する場合には、 CallableStatement クラスを使用する必要はありません。しかし、移植性を考える と、CallableStatement を使用するのが賢明な選択です。

注: JDBC ドライバーでは、指定した型と並行性で ResultSet オブジェクトを生成す る Statement オブジェクトを作成できます。デフォルトの結果セット型と結果セッ ト並行性タイプをオーバーライドできることから、これは JDBC 1.0 の createStatement メソッドとは異なります。

標準 API との相異点

以下に、JDBC API で定義された標準 CallableStatement インターフェースとの相異 点を示します。

表 43. 標準 CallableStatement インターフェースとの相異点

メソッド名	注
getArray(int i)	solidDB ではサポートされません。
getBlob(int i)	solidDB ではサポートされません。
getClob(int i)	solidDB ではサポートされません。
getDate(int parameterIndex, Calendar cal)	Java API の仕様どおりに機能します。 注: 指定された Calendar オブジェクトを使 用して、デフォルトとは異なる時間帯とロケ ールを指定します。同じルールが、Calendar インスタンスで動作する他の類似したメソッ ドに対応します。
getObject (int i, Map map)	solidDB ではサポートされません。
getRef(int i)	solidDB ではサポートされません。
registerOutParameter(int parameterIndex, int sqlType, String typeName)	solidDB ではサポートされません。このメソッドは、「This method is not supported」というメッセージ付きで例外をスローします。

Clob

java.sql.Clob インターフェースはサポートされません。このインターフェースは、 Java プログラミング言語で、SQL の Clob 型のマップに使用されます。これは solidDB では現在使用できない SQL-99 規格を反映しています。

Connection

java.sql.Connection インターフェースはパブリック・インターフェースです。指定し たデータベースとの接続 (セッション) の確立に使用します。SQL ステートメント が実行され、接続のコンテキスト内で結果が返されます。

標準 API との相異点

以下に、JDBC API で定義された標準 Connection インターフェースとの相異点を示

表 44. 標準 Connection インターフェースとの相異点

メソッド名	注
getTypeMap()	solidDB はこのメソッドを提供していますが、このメソッドは常に NULL を返します。
isReadOnly()	データベースが読み取り専用として宣言されている場合、solidDB は、読み取り専用接続および読み取り専用トランザクションのみをサポートします。このメソッドは、常に falseを返します。
nativeSQL(String sql)	Java API の仕様どおりに機能します。 solidDB JDBC ドライバーは、solidDB サー バーに渡す SQL を変更しません。ユーザー が渡す SQL 照会が返されます。
prepareCall(String sql)	Java API の仕様どおりに機能します。 注: エスケープ呼び出し構文はサポートされ ないことに注意してください。
setReadOnly(boolean readOnly)	データベースが読み取り専用として宣言されている場合、solidDBは、読み取り専用データベースおよび読み取り専用トランザクションのみをサポートします。このメソッドは存在しますが、接続の動作に影響を与えません。
setTransactionIsolation(int level)	Java API の仕様どおりに機能します。
setTypeMap(Map map)	solidDB ではサポートされません。

DatabaseMetaData

java.sql.DatabaseMetaData インターフェースは、パブリック抽象インターフェースで す。データベースに関する一般的、総合的な情報を提供します。

solidDB は、このインターフェースのすべてのメソッドをサポートしています。

solidDB JDBC ドライバーが各種データ型をサポートする方法については、140ペー ジの『solidDB JDBC ドライバー型変換マトリックス』を参照してください。

ドライバー

java.sql.Driver インターフェースは、パブリック抽象インターフェースです。このイ ンターフェースはすべてのドライバー・クラスでインプリメントされており、 solidDB は、このインターフェースのすべてのメソッドをサポートしています。

PreparedStatement

java.sql.PreparedStatement インターフェースは、パブリック抽象インターフェースで す。このインターフェースは、Statement インターフェースを拡張します。プリコン パイルされた SQL ステートメントを表すオブジェクトを提供します。

注: JDBC ドライバーでは、指定した型と並行性で ResultSet オブジェクトを生成す る PreparedStatement オブジェクトを作成できます。デフォルトの結果セット型と結 果セット並行性タイプをオーバーライドできることから、これは JDBC 1.0 の prepareStatement メソッドとは異なります。

サブインターフェース: CallableStatement

標準 API との相異点

以下に、JDBC API で定義された標準 PreparedStatement インターフェースとの相異 点を示します。

表 45. 標準 PreparedStatement インターフェースとの相異点

メソッド名	注
setArray(int i, Array x)	solidDB ではサポートされません。
setBlob(int I, Blob x)	solidDB ではサポートされません。
setClob(int I, Clob x)	solidDB ではサポートされません。
setObject(int parameterIndex, Object x)	Java API の仕様どおりに機能します。 注:以下のオブジェクトは、solidDB ではサポートされません。 BLOB、CLOB、ARRAY、REF、およびjava.util.Map を使用するオブジェクト。
setObject(int parameterIndex, Object x, int targetSqlType))	solidDB ではサポートされません。このメソッドは、「This method is not supported」というメッセージ付きで例外をスローします。
setObject(int parameterIndex, Object x, int targetSQLType, int scale)	solidDB ではサポートされません。このメソッドは、「This method is not supported」というメッセージ付きで例外をスローします。
setRef(int I, Ref x)	solidDB ではサポートされません。

Ref

java.sql.Ref インターフェースは、パブリック抽象インターフェースです。

このインターフェースは、データベース内の SOL 構造化型の値への参照です。こ のインターフェースは solidDB ではサポートされません。

ResultSet

java.sql.ResultSet インターフェースは、照会ステートメントからのデータベース結果 セットを表すデータの表です。このオブジェクトには、そのデータの現在行を指す カーソルが含まれます。カーソルの初期位置は、先頭行の前です。次のメソッド で、次の行に移動します。結果セット内に行がそれ以上残されていない場合、この メソッドは false を返します。これにより、WHILE ループを使用して、結果セット 内で処理を繰り返すことができます。

標準 API との相異点

以下に、JDBC API で定義された標準 ResultSet インターフェースとの相異点を示 します。

表 46. 標準 ResultSet インターフェースとの相異点

メソッド名	注
getArray(int i)	solidDB ではサポートされません。
getArray(String ColName)	solidDB ではサポートされません。
getBigDecimal(String columnName)	Java API の仕様どおりに機能します。
getCharacterStream(int columnIndex)	Java API の仕様どおりに機能します。
	注: JDBC ドライバーは、指定されたパラメーターを、指定された Reader オブジェクトに、指定された文字長で設定します。LONG VARCHAR/LONG WVARCHR パラメーターに大きな UNICODE 値を入力する場合、便宜上、java.io.Reader を通してその値を送信できます。JDBC ドライバーは、ファイルの終わりに到達するまで、必要に応じてストリームからデータを読み取ります。ドライバーは、UNICODE からデータベース CHAR フォーマットに、すべての必要な変換を行います。
getCharacterStream(String columnName)	Java API の仕様どおりに機能します。上の注は、このメソッドにも適用されます。
getFetchSize()	solidDB ではサポートされません。

表 46. 標準 ResultSet インターフェースとの相異点 (続き)

メソッド名	注
getObject(int_columnIndex)	Java API の仕様どおりに機能します。
	注: 以下のオブジェクトは、solidDB ではサポートされません。 BLOB、CLOB、ARRAY、REF、およびjava.util.Map オブジェクトを使用する。
getObject(int i, Map map)	solidDB ではサポートされません。
getObject(String colName, Map map)	solidDB ではサポートされません。このメソッドは、「This method is not supported」というメッセージ付きで例外をスローします。
getRef(int i)	solidDB ではサポートされません。
getRef(String colName)	solidDB ではサポートされません。
refreshRow()	solidDB ではサポートされません。
setFetchSize(int rows)	solidDB では操作が実行されません。毎回、 データベースからフェッチする行の数の値を 設定します。このメソッドでユーザーが設定 した値は無視されます。

ResultSetMetaData

java.sql.ResultSetMetaData インターフェースは、パブリック抽象インターフェースで す。このインターフェースは、ResultSet 内の列の型とプロパティーの検索に使用さ れます。

SQLData

java.sql.SQLData インターフェースはサポートされません。このインターフェース は、SOL ユーザー定義型のカスタム・マップに使用されます。これは solidDB では 現在使用できない SQL-99 規格を反映しています。

SQLInput

java.sql.SQLInput インターフェースはサポートされません。このインターフェース は、SQL 構造化型または特殊型のインスタンスを表す入力ストリームです。これは solidDB では現在使用できない SQL-99 規格を反映しています。

SQLOutput

java.sql.SQLOutput インターフェースはサポートされません。このインターフェース は、ユーザー定義型の属性をデータベースに書き戻すために使用する出力ストリー ムです。これは solidDB では現在使用できない SQL-99 規格を反映しています。

Statement

java.sql.Statement インターフェースは、パブリック抽象インターフェースです。静 的 SQL ステートメントを実行し、実行結果を取得するために使用するオブジェク トです。

注: JDBC ドライバーでは、指定した型と並行性で ResultSet オブジェクトを生成す る Statement オブジェクトを作成できます。デフォルトの結果セット型と結果セッ ト並行性タイプをオーバーライドできることから、これは JDBC 1.0 の CreateStatement メソッドとは異なります。

サブインターフェース:

- CallableStatement
- PreparedStatement

標準 API との相異点

以下に、JDBC API で定義された標準 Statement インターフェースとの相異点を示 します。

表 47. 標準 Statement インターフェースとの相異点

	,
メソッド名	注
getFetchSize()	solidDB では操作が実行されません。
getMaxFieldSize()	MaxFieldSize は、solidDB サーバーの動作に 影響を与えません。
getMoreResults()	solidDB は、複数の結果セットをサポートしません。
getResultSetType()	solidDB ではサポートされません。
setFetchSize(int rows)	solidDB では操作が実行されません。毎回、 データベースからフェッチする行の数の値を 設定します。このメソッドでユーザーが設定 した値は無視されます。
setMaxFieldSize(int max)	MaxFieldSize は、solidDB サーバーの動作に 影響を与えません。

Struct

java.sql.Struct インターフェースはサポートされません。このインターフェースは、 SQL 構造化型に関する Java プログラミング言語での標準マッピングを表します。 これは solidDB では現在使用できない SQL-99 規格を反映しています。

ResultSet (更新可能)

java.sql.Resultset インターフェースは、更新可能な ResultSet オブジェクトを生成す るためのメソッドを含みます。結果セットは、その並行性タイプが

CONCUR_UPDATABLE の場合に更新可能です。update xxx メソッド (xxx はデー 夕型を示します)、および updateRow メソッドと deleteRow メソッドを使用して、 結果セット内で行を更新または削除したり、新しい行を挿入したりすることができ ます。

標準 API との相異点

以下に、JDBC API で定義された標準 ResultSet インターフェースとの相異点を示 します。

表 48. 標準 ResultSet インターフェースとの相異点

メソッド名	注
getRef(int i)	このメソッドはサポートされません。
getRef(String colName)	このメソッドはサポートされません。
refreshRow()	このメソッドはサポートされません。
rowDeleted()	このメソッドはサポートされません。
rowInserted()	このメソッドはサポートされません。
setFetchSize(int rows)	このメソッドはサポートされません。

solidDB JDBC ドライバーの拡張機能

このセクションでは、solidDB JDBC ドライバーに含まれている非標準の拡張機能に ついて説明します。

WebSphere の互換性

solidDB JDBC ドライバーには、WebSphere の互換性を向上させる機能がありま す。

Java トランザクション API (JTA) のサポート

solidDB サーバーは、Java トランザクション API (JTA) インターフェースを使用し て、分散トランザクションに関与することができます。「Java Transaction API Specification 1.1」で説明されているように、以下のインターフェースがサポートさ れます。

- XAResource インターフェース (javax.transaction.xa.XAResource)
- Xid インターフェース (javax.transaction.xa.Xid)

solidDB Universal Cache で SQL パススルーとともに JTA を使用する場合は、読 み取りステートメント (SELECT) のみがサポートされます。

WebSphere での solidDB データ・ストア・ヘルパー・クラス

WebSphere では、WebSphere 内で使用する JDBC データ・ソース用にアダプター・ クラスが必要です。これらのアダプターの基本クラスは

com.ibm.websphere.rsadapter.GenericDataStoreHelper クラスであり、solidDB は、 com.ibm.websphere.rsadapter.SolidDataStoreHelper というクラス内にこのアダプターの 独自のバージョンを実装します。

このクラスは、solidDB 製品内で SolidDataStoreHelper.jar と呼ばれる別個のア ーカイブ・ファイルとして提供されます。このファイルは、solidDB インストー ル・ディレクトリーの jdbc ディレクトリーにあります。

WebSphere に、新しい solidDB データ・ソースを構成する場合、以下を行う必要が あります。

- 構成のデータ・ストア・ヘルパー・フィールドに、クラス com.ibm.websphere.rsadapter.SolidDataStoreHelper を指定する。
- WebSphere のデータ・ソース構成に、SolidDataStoreHelper.jar ファイルへの絶 対パスを指定する。

WebSphere に新しいデータ・ソースを定義する方法について詳しくは、WebSphere の資料を参照してください。

solidDB の WebSphere サンプル・アプリケーションを Websphere Studio Application Developer のワークスペースにインストールする方法については、 solidDB インストール・ディレクトリーにある samples/websphere ディレクトリー を参照してください。

solidDB データ・ソース・プロパティーおよび WebSphere

WebSphere に新しいデータ・ソースを構成する場合には、以下のプロパティーを定 義する必要があります。

URL

- 型: java.lang.String
- 値には、'jdbc:solid://<hostname>:<port>' のような構文を使用する必要があります。

user

- 型: java.lang.String
- 値は、正当なユーザー名である必要があります。

password

- 型: java.lang.String
- 値は、有効なパスワードである必要があります。

JDBC での接続タイムアウト

このトピックでは、接続タイムアウトの設定に solidDB で使用可能な機能について 説明します。

接続タイムアウト は、接続ソケットを通してデータ伝送を実行する任意の JDBC 呼び出しの応答タイムアウトを意味しています。指定された時間内に応答メッセー ジを受信できない場合には、I/O 例外がスローされます。JDBC 標準 (2.0/3.0) は、 接続タイムアウトの設定をサポートしていません。solidDB では、この設定のため に 2 つの方法が導入されています。1 つは、非標準ドライバー・マネージャー拡張 メソッドを使用することであり、もう 1 つはプロパティー・メカニズムを使用する ことです。どちらの場合にも、時間単位は 1 ミリ秒です。

ドライバー・マネージャー・メソッド get/setConnectionTimeout()

以下の例で、ソリューションを説明します。設定の効果はすぐに有効になります。 強制的に切断したい場合には、タイムアウトにゼロを設定できます。

//Solid JDBC をインポートします。 import solid.jdbc.*;

//接続を定義します。

solid.jdbc.SolidConnection conn = null;

//Solid に固有のメソッドを使用するために、SolidConnection にキャストします。 conn = (SolidConnection)java.sql.DriverManager.getConnection(sCon);

//接続タイムアウトをミリ秒単位で設定します。 conn.setConnectionTimeout(3000);

非標準の接続プロパティー

以下の接続プロパティーを使用して、接続固有の動作を実現できます。

- 『ステートメント・キャッシュ・プロパティー』
- 115ページの『タイムアウト・プロパティー』
- 116 ページの『Appinfo プロパティー』
- 116ページの『透過接続 (TC) プロパティー』
- 116 ページの『共有メモリー・アクセス (SMA) 接続プロパティー』
- 117 ページの『SOL パススルー・プロパティー』
- 117ページの『カタログ名とスキーマ名のプロパティー』
- 117 ページの『URL ストリングでの接続プロパティーの設定』

ステートメント・キャッシュ・プロパティー

solidDB JDBC ドライバーは、接続のステートメント・キャッシュの値を設定するプ ロパティーを導入します。

プロパティーの名前は「StatementCache」であり、キャッシュのデフォルト・サイズ は8です。有効な値の範囲は1以上512以下です。値がこの範囲を超えると、ド ライバーは暗黙に 1 か 512 の値を強制します。

以下に、このプロパティーの使用例を示します。

// Solid JDBC ドライバー・インスタンスを作成します。 Class.forName("solid.jdbc.SolidDriver");

// 新しい Properties インスタンスを作成し、 // StatementCache プロパティーの値を挿入します。 java.util.Properties props = new java.util.Properties(); props.put("StatementCache","32");

// 使用する接続ストリングを定義します。 String sCon="jdbc:solid://localhost:1315/uname1/pwd1";

// ステートメント・キャッシュ 32 で Connection オブジェクトを取得します。 java.sql.Connection conn = java.sql.DriverManager.getConnection(sCon, props);

タイムアウト・プロパティー

以下のセクションにリストしたタイムアウトは、接続プロパティーとして設定でき ます。

接続タイムアウト・プロパティー (solid_connection_timeout_ms)

プロパティー「solid connection timeout ms」を使用して、接続タイムアウト値を (ミリ秒単位で) 設定できます。このプロパティーは、新しい接続を取得する前に設 定する必要があります。いったん接続オブジェクトを作成すると、プロパティー値 を変更しても効果がありません。

ログイン・タイムアウト・プロパティー (solid login timeout ms)

プロパティー「solid login timeout ms」を使用して、接続を開く場合のタイムアウト を (ミリ秒単位で) 設定できます。

注: メソッド DriverManger.setLoginTimeout(seconds) を使用して、ログイン・タイム アウトを設定することもできます。これは、標準に準拠したメソッドです。

アイドル・タイムアウト・プロパティー (solid idle timeout min)

プロパティー「solid idle timeout min」を使用して、接続が指定した時間より長い間 アイドル状態になったときに起動するタイムアウトを (分単位で) 設定できます。

このプロパティー値を設定しなかった場合は、サーバー・サイドの構成パラメータ - ConnectTimeOut の設定が適用されます。ファクトリー値は 480 分です。0 は 「無期限のタイムアウト」(有効期限がありません)を意味します。

例

以下の例は、「solid connection timeout ms」プロパティーを使用して接続タイムア ウトを設定する方法を示しています。

// 「solid connection timeout ms」プロパティーで接続タイムアウトを設定します。 // public class Test {

```
public static void main( String args[] ){
 // プロパティー・オブジェクトを作成します。
 Properties props = new Properties();
 // プロパティーにユーザー名とパスワードを設定します。
 props.put("user", "MYUSERNAME");
 props.put("password", "MYPASSWORD");
 // プロパティー・オブジェクトに接続タイムアウトを設定します。
 props.put("solid connection timeout ms", "10000");
 try {
   // ドライバーを作成します。
   Driver d = (Driver)(
      Class.forName("solid.jdbc.SolidDriver").newInstance());
   // URL とプロパティー情報で接続を取得します。
   Connection c = DriverManager.getConnection(
```

```
"jdbc:solid://localhost:1313", props );
 // 接続を閉じます。
 c.close();
} catch ( Exception e ) {
 ; // 無事に終了することができました。
```

Appinfo プロパティー

Appinfo という接続属性を使用すると、同じユーザー名の下で同じコンピューター で実行されているアプリケーションを、トレースと管理の目的でユニークに識別で きます。Appinfo は、サーバー・サイドで、コマンド ADMIN COMMAND 'userlist' によってリトリーブできます。デフォルトでは、値 (ストリング) は設定されませ ん。この値は、接続プロパティー「solid_appinfo」で設定できます。

注: ODBC アプリケーションでは、Appinfo の値は環境変数 SOLAPPINFO を介し て受け渡されます。

透過接続 (TC) プロパティー

透過接続 (TC) は、solidDB HA ソリューション (HotStandby) で使用できる接続モ ードの 1 つです。 JDBC では、TC モードは以下の接続プロパティーによって設定 されます。

solid tf level

透過的フェイルオーバー・レベルを「CONNECTION」、「SESSION」、または 「NONE」に設定します。デフォルトは「NONE」です。

• solid preferred access

優先されるアクセス・モードを「WRITE MOSTLY」または「READ MOSTLY」 に設定します。値「READ MOSTLY」は、1 次サーバーと 2 次サーバーの間 で、読み取り専用トランザクションの自動ロード・バランシングを設定します。 デフォルトは「WRITE MOSTLY」で、これは通常の HotStandby 操作に対応し、 すべての負荷が 1 次サーバーへ転送されます。

• \[\solid_tf1_reconnect_timeout \]

失敗した場合の再接続再試行のタイムアウトを設定します。単位はミリ秒です。 デフォルトは 10000 (10 秒) です。

TC 接続プロパティーについて詳しくは、「IBM solidDB 高可用性ユーザー・ガイ ド」のセクション『透過接続の使用』を参照してください。

共有メモリー・アクセス (SMA) 接続プロパティー

SMA サーバーに対するローカルの (RPC ベースでない) JDBC 接続は、以下の接続 プロパティーを「yes」に設定することで作成できます。さらに、特定のポートでロ ーカル・サーバーを使用していることを定義する必要があります。

· "solid shared memory"

有効な値は "yes" のみです。

例えば、以下のようにします。

Properties props = new Properties(); // 直接アクセス・プロパティーを有効にします。 props.put("solid shared memory", "yes"); // 接続を取得します。 Connection c = DriverManager.getConnection ("jdbc:solid://localhost:1315", props);

詳しくは、「IBM solidDB 共有メモリー・アクセスおよびリンク・ライブラリー・ アクセス・ユーザー・ガイド」の『SMA の JDBC 接続の作成』を参照してくださ 170

SQL パススルー・プロパティー

SOL パススルー・モードは、以下の接続プロパティーを使用して設定できます。

"solid_passthrough_read"

読み取り型ステートメントの SQL パススルー・モードを 「NONE」、「CONDITIONAL」または「FORCE」に設定します。

• "solid_passthrough_write"

書き込み型ステートメントの SOL パススルー・モードを 「NONE」、「CONDITIONAL」または「FORCE」に設定します。

SOL パススルーおよびパススルー・モードについて詳しくは、「IBM solidDB Universal Cache ユーザー・ガイド」のセクション『SOL パススルー・モードの設 定』を参照してください。

カタログ名とスキーマ名のプロパティー

カタログ名とスキーマ名は、以下の接続プロパティーで設定できます。

• "solid_catalog"

solidDB カタログ名を設定します。

· "solid schema"

solidDB スキーマ名を設定します。

URL ストリングでの接続プロパティーの設定

合、solidDB JDBC URL の構文は以下のとおりです。

すべての接続プロパティーは、接続時に、JDBC メソッド DriverManager.getConnection() に渡す JDBC URL の中でも設定できます。この場

"jdbc:solid://<hostname>:<port>/>username>/<password>[?<property-name>=<value>]..."

[&]quot;.jdbc:solid://locahost:1964/dba/dba"

[&]quot;jdbc:solid://server1.acme.com:1964/dba/dba?solid_login_timeout_ms=100"

[&]quot;jdbc:solid://server1.acme.com:1964/dba/dba?solid_login_timeout_ms=100?solid_idle_timeout_min=5"

JDBC 2.0 オプション・パッケージ API のサポート

solidDB JDBC ドライバー 2.0 は、JDBC 2.0 仕様のオプション・パッケージ (以前 はスタンダード・エクステンションと呼ばれていました)内の一部の機能をサポー トしています。

JDBC 接続のプーリング

JDBC 2.0 スタンダード・エクステンション API では、ユーザーがニーズに最も適 した特定のキャッシングまたはプーリングのアルゴリズムを使用して、プーリング 技法をインプリメントできるように指定しています。solidDB は、標準の ConnectionPoolDataSource および PooledConnection のインターフェースを実装する クラスを提供します。

solidDB はこれらのクラスを以下のようにインプリメントします。

ConnectionPoolDataSource

javax.sql.ConnectionPoolDataSource インターフェースは、プールされた java.sql.Connection オブジェクトのリソース・マネージャー接続ファクトリーとし て機能します。solidDB は、このインターフェースのインプリメンテーションを SolidConnectionPoolDataSource クラスで提供します。 API 関数については、 『ConnectionPoolDataSource API 関数』を参照してください。

PooledConnection

javax.sql.PooledConnection インターフェースは、物理接続をデータベースにカプ セル化します。solidDB はこのインターフェースのインプリメンテーションを、 SolidPooledConnection クラスで提供します。 API 関数については、125ページの 『PooledConnection API 関数 』を参照してください。

注: solidDB は、実際の接続プールの実装は提供しません。つまり、 PooledConnection インスタンスを実際にプールするデータ構造とロジックは使用で きません。ユーザーは、独自の接続プーリング・ロジック、つまり実際に接続をプ ールするクラスを実装する必要があります。

ConnectionPoolDataSource API 関数

パブリック・クラス SolidConnectionPoolDataSource は、 javax.sql.ConnectionPoolDataSource をインプリメントします。 javax.sql.ConnectionPoolDataSource インターフェースの API 関数は、以下のように 記述されます。

表 49. コンストラクター

説明タイプ	説明
関数名	コンストラクター
関数型	solidDB プロプラエタリー API
説明	クラス変数を初期化します。

表 49. コンストラクター (続き)

説明タイプ	説明
パラメーター	なし
戻り値	なし
構文および例外	public SolidConnectionPoolDataSource()

表 50. コンストラクター

説明タイプ	説明
関数名	コンストラクター
関数型	solidDB プロプラエタリー API
説明	クラス変数を初期化します。
パラメーター	DB サーバーを識別するストリングとしての URL
戻り値	なし
構文および例外	public SolidConnectionPoolDataSource(String urlStr)

表 51. setDescription

説明タイプ	説明
関数名	setDescription
関数型	solidDB プロプラエタリー API
説明	この関数は、説明ストリングを設定します。
パラメーター	説明ストリング (descString)
戻り値	なし
構文および例外	public void setDescription(String descString)

表 52. getDescription

説明タイプ	説明
関数名	getDescription
関数型	solidDB プロプラエタリー API
説明	この関数は、説明ストリングを返します。

表 52. getDescription (続き)

説明タイプ	説明
パラメーター	なし
戻り値	ストリング (説明) を返します。
構文および例外	public String getDescription()

表 53. setURL

説明タイプ	説明
関数名	setURL
関数型	solidDB プロプラエタリー API
説明	この関数は、solidDB サーバーを指す URL ストリングを設定します。
パラメーター	URL ストリング (urlStr)
戻り値	なし
構文および例外	public void setURL(String urlStr)

表 54. getURL

説明タイプ	説明
関数名	getURL
関数型	solidDB プロプラエタリー API
説明	この関数は、DB URL ストリングを返します。
パラメーター	なし
戻り値	ストリング (URL) を返します。
構文および例外	public String getURL()

表 55. setUser

説明タイプ	説明
関数名	setUser
関数型	solidDB プロプラエタリー API

表 55. setUser (続き)

説明タイプ	説明
説明	この関数は、ユーザー名ストリングを設定します。 (WebSphere の互換性)
パラメーター	ユーザー名ストリング
戻り値	なし
構文および例外	public void setUser(String newUser)

表 56. getUser

説明タイプ	説明
関数名	getUser
関数型	solidDB プロプラエタリー API
説明	この関数は、ユーザー名ストリングを返します。 (WebSphere の互換性)
パラメーター	なし
戻り値	ストリング (ユーザー名) を返します。
構文および例外	public String getUser()

表 57. setPassword

説明タイプ	説明
関数名	setPassword
関数型	solidDB プロプラエタリー API
説明	この関数は、パスワード・ストリングを設定します。 (WebSphere の互換性)
パラメーター	パスワード・ストリング
戻り値	なし
構文および例外	public void setPassword(String newPassword)

表 58. getPassword

説明タイプ	説明
関数名	getPassword

表 58. getPassword (続き)

説明タイプ	説明
関数型	solidDB プロプラエタリー API
説明	この関数は、パスワード・ストリングを返します。 (WebSphere の互換性)
パラメーター	なし
戻り値	ストリング (パスワード) を返します。
構文および例外	public String getPassword()

表 59. setConnectionURL

説明タイプ	説明
関数名	setConnectionURL
関数型	solidDB プロプラエタリー API
説明	この関数は、solidDB サーバーを指す URL ストリングを設定します。
パラメーター	URL ストリング
戻り値	なし
構文および例外	public void setConnectionURL(String newUrl)

表 60. getConnectionURL

説明タイプ	説明
関数名	getConnectionURL
関数型	solidDB プロプラエタリー API
説明	この関数は、URL ストリングを返します。
パラメーター	なし
戻り値	ストリング (URL) を返します。
構文および例外	public String getConnectionURL()

表 61. getLoginTimeout

説明タイプ	説明
関数名	getLoginTimeout
関数型	javax.sql.ConnectionPoolDataSource API
説明	この関数は、ログイン・タイムアウト値を返します。
パラメーター	なし
戻り値	タイムアウト値を整数 (秒数) として返します。
構文および例外	public int getLoginTimeout() は、java.sql.SQLException をスローします。

表 62. getLogWriter

説明タイプ	説明
関数名	getLogWriter
関数型	javax.sql.ConnectionPoolDataSource API
説明	この関数は、デバッグ・メッセージの出力に使用するライタ ーへのハンドルを返します。
パラメーター	なし
戻り値	java.io.PrintWriter へのハンドルを返します。
構文および例外	public java.io.PrintWriter getLogWriter() は、 java.sql.SQLException をスローします。

表 63. getPooledConnection

説明タイプ	説明
関数名	getPooledConnection
関数型	javax.sql.ConnectionPoolDataSource API
説明	この関数は、接続プールから PooledConnection オブジェクトを返します。このオブジェクトはデータベース・サーバーへの有効な接続を確立しています。
パラメーター	なし
戻り値	PooledConnection オブジェクトを返します。

表 63. getPooledConnection (続き)

説明タイプ	説明
構文および例外	public javax.sql.PooledConnection getPooledConnection()
	この関数は、java.sql.SQLException をスローします。

表 64. getPooledConnection

説明タイプ	説明
関数名	getPooledConnection
関数型	javax.sql.ConnectionPoolDataSource API
説明	この関数は、接続プールから PooledConnection オブジェクトを返します。このオブジェクトはデータベース・サーバーへの有効な接続を確立しています。
パラメーター	ユーザー (ストリングとしてのユーザー名)、パスワード (ストリングとしてのパスワード)
戻り値	PooledConnection オブジェクトを返します。
構文および例外	public javax.sql.PooledConnection getPooledConnection(String user, String password)
	この関数は、java.sql.SQLException をスローします。

表 65. setLoginTimeout

説明タイプ	説明
関数名	setLoginTimeout
関数型	javax.sql.ConnectionPoolDataSource API
説明	この関数は、ログイン・タイムアウト値を秒数で設定します。
パラメーター	秒数 (整数として)
戻り値	なし
構文および例外	public void setLoginTimeout(int seconds)

表 66. setLogWriter

説明タイプ	説明
関数名	setLogWriter

表 66. setLogWriter (続き)

説明タイプ	説明
関数型	javax.sql.ConnectionPoolDataSource API
説明	この関数は、デバッグ・メッセージの出力/ログに使用する ライター・オブジェクトへのハンドルを設定します。
パラメーター	java.io.PrintWriter へのハンドル
戻り値	なし
構文および例外	public void setLogWriter(java.io.PrintWriter out)
	この関数は、java.sql.SQLException をスローします。

PooledConnection API 関数

パブリック・クラス SolidPooledConnection は、javax.sql.PooledConnection をインプ リメントします。javax.sql.PooledConnection インターフェースの API 関数は以下の とおりです。

表 67. addConnectionEventListener

説明タイプ	説明
関数名	addConnectionEventListener
関数型	javax.sql.PooledConnection API
説明	このオブジェクトが接続を解放する際に通知するイベント・ リスナーを追加します。このリスナーは通常、接続プーリン グ・モジュールです。
パラメーター	リスナー (javax.sql.ConnectionEventListener へのハンドル)
戻り値	なし
構文および例外	public void addConnectionEventListener(
	javax.sql.ConnectionEventListener listener)

表 68. close

説明タイプ	説明
関数名	close
関数型	javax.sql.PooledConnection API
説明	この関数は、物理接続を閉じます。

表 68. close (続き)

説明タイプ	説明
パラメーター	なし
戻り値	なし
構文および例外	public void close()
	この関数は、java.sql.SQLException をスローします。

表 69. getConnection

説明
getConnection
javax.sql.PooledConnection API
java.sql.Connection へのハンドルを返します。
なし
java.sql.Connection
public java.sql.Connection getConnection() この関数は、java.sql.SQLException をスローします。

表 70. removeConnectionEventListener

説明タイプ	説明
関数名	removeConnectionEventListener
関数型	javax.sql.PooledConnection API
説明	この関数は、リスナーへの参照を解除します。
パラメーター	リスナー
戻り値	なし
構文および例外	public void removeConnectionEventListener(
	javax.sql.ConnectionEventListener listener)

solidDB の接続済み RowSet クラス: SolidJDBCRowSet

このトピックで説明されている RowSet は、solid.jdbc.SolidBaseRowSet (javax.sql.RowSet をインプリメント) コンストラクターを拡張します。

```
* 既存の接続ハンドルを使用して SolidJDBCRowSet を作成します。*/
public SolidJDBCRowSet(java.sql.Connection conn)
* 既存の ResultSet ハンドルを使用して SolidJDBCRowSet を作成します。*/
public SolidJDBCRowSet(java.sql.ResultSet rset)
* 特定の URL、ユーザー名、およびパスワードを使用して、新しい
* SolidJDBCRowSet を作成します。
public SolidJDBCRowSet(String url, String uname, String pwd)
* 特定の URL、ユーザー名、パスワード、および JNDI ネーミング・コンテキストを
* 使用して、新しい SolidJDBCRowSet を作成します。
public SolidJDBCRowSet(String dsname,
                  String username,
                  String password,
                  Context namingcontext)
```

例えば、「Java 2 Platform, Standard Edition, v 1.4.2 API Specification: http://java.sun.com/j2se/1.4.2/docs/api/javax/sql/RowSet.html」のメソッド・インターフ エースの説明を参照してください。

SolidJDBCRowSet の使用に関する考慮事項

データベースへの接続を確立する前に呼び出すことができるメソッドがいくつかあ ります (通常は、実行するコマンドのパラメーターを設定するため、または RowSet インスタンスのプロパティーを設定するために呼び出します)。ただし、RowSet イ ンターフェース・メソッドの大部分は、データベースへの接続を確立した後にのみ 呼び出すことができます。これは、コマンドがメソッド setCommand(String) で設定 され、メソッド execute() が呼び出されたことを意味しています。SolidJDBCRowSet インスタンスに以前の java.sql.Connection ハンドルがない場合は、execute() の呼び 出し中に接続が確立されます。execute()の呼び出し後、行セット・インスタンスに は java.sql.Connection オブジェクトおよび java.sql.PreparedStatement オブジェクト が含まれ、コマンドを実行したのが照会ステートメントであった場合は、 java.sql.ResultSet ハンドルも含まれます。また、setString、setObject など、すべての パラメーター設定メソッドも含まれます。

以下の例では、SolidJDBCRowSet クラスの正しい使用法を説明します。

```
/**
* SolidJDBCRowSet の使用方法を示す簡単な例です。
* 最初に、接続済み RowSet クラスのインスタンスを作成します。
* URL、ユーザー名、パスワードを以下のコンストラクターにすぐに
* 指定できますが、この例では対応する値にヌル・パラメーターを指定して
* setUrl、setUsername などの RowSet クラスのメソッドの使用法を示します。
SolidJDBCRowSet rs = new SolidJDBCRowSet(null, null, null);
// 接続の URL を設定します。
rs.setUrl("jdbc:solid://localhost:1313");
// ユーザー名を設定します。
rs.setUsername("user1");
// パスワードを設定します。
rs.setPassword("pwd1");
```

```
/**
* 注意! コマンド・パラメーターおよびその他のプロパティーは
* 任意の順序で設定できます。例えば、実行するコマンドを
* 定義する前にパラメーターを設定できます。また、コマンド・
* パラメーターを任意の順序で定義できます。コマンド・
* ステートメントおよび指定したパラメーターは、execute() メソッド
* 呼び出しでデータベースへの接続が完了するまで、
* 構文解析されないからです。
// コマンドにパラメーター #2 を設定します。
rs.setString(2,"'SYS_SYNC%'");
// コマンド・ストリングを設定します。
rs.setCommand("select table name from tables where table name like?
and table name not like ?;");
// パラメーター #1 を設定します。
rs.setString(1,"'SYS %'");
// コマンドを実行します。データベースへの接続は、この呼び出しの前
// には確立されません。
rs.execute();
// これで、ResultSet をブラウズできます。
while( rowset.next() ){
// いろいろな操作をしてみます。
// 結果セットを閉じます。このメソッド呼び出しによって、データベースへの接続も
// 閉じられます。
rs.close()
```

Java Naming and Directory Interface (JNDI)

solidDB JDBC ドライバーは、Java Naming and Directory Interface (JNDI) をサポートしています。

JNDI により、アプリケーションは共通のインターフェースを使用してネーミング・サービスとディレクトリー・サービスにアクセスできます。JNDI はサービスではなく、一連のインターフェースです。これらのインターフェースによって、アプリケーションはファイル・システム、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) などのディレクトリー・サービス、Network Information System (NIS)、Common Object Request Broker Architecture (CORBA) などの分散オブジェクト・システム、Java リモート・メソッド呼び出し (RMI)、および Enterprise JavaBeans (EJB) といった数多くのさまざまなディレクトリー・サービスにアクセスできます。

コード例

このトピックでは、solidDB JDBC ドライバーを使用する 4 つの Java コード例を示します。

Java コード例 1: sample1.java

```
**
* JDBC サンプル・アプリケーション sample1
*
*
* この単純な JDBC アプリケーションは、Solid JDBC ドライバーを使用して
```

```
以下の処理を行います。
  1. JDBC ドライバー・マネージャー・サービスを使用してドライバーを登録します。
   2. ユーザーに対して、有効な JDBC 接続ストリングの入力を促すプロンプトを
     出します。
  3. ドライバーを使用して、Solid に接続します。
   4.1 つの照会用のステートメントを作成します。
     'SELECT TABLE SCHEMA, TABLE NAME, TABLE TYPE FROM TABLES'
      これは、Solid システム表の 1 つからデータを読み取るためのものです。
  5. 照会を実行します。
   6. 結果セットのすべての行をフェッチおよびダンプします。
  7. 接続を閉じます。
  アプリケーションを作成し実行するには、以下の手順を実行します。
  1. 作業用の Java 開発環境を用意しておきます。
  2. 接続する Solid をインストールして開始します。
     サーバーが稼働中であることを確認します。
   3. 開発/稼働環境で使用する CLASSPATH 定義に SolidDriver2.0.jar を追加します。
   4. sample1.java ファイルに基づいて、Java プロジェクトを作成します。
  5. アプリケーションを作成し、実行します。
  詳しくは、solidDB パッケージに含まれる、readme.txt ファイルを
  参照してください。
*/
import java.io.*;
public class sample1 {
 public static void main (String args[]) throws Exception
   java.sql.Connection conn;
   java.sql.ResultSetMetaData meta;
   java.sql.Statement stmt;
   java.sql.ResultSet result;
   int i;
   System.out.println("JDBC sample application starts...");
   System.out.println("Application tries to register the driver.");
   // これは、ドライバーの登録に関して推奨されている方法です。
   java.sql.Driver d =
     (java.sql.Driver)Class.forName("solid.jdbc.SolidDriver").newInstance();
   System.out.println("Driver successfully registered.");
   // ユーザーは、接続ストリングの入力を求められます。
   System.out.println(
      "Now sample application needs a connectstring in format:\u00e4n"
      );
   System.out.println(
      "jdbc:solid://<host>:<port>/<user name>/<password>\u00e4n"
   System.out.print("\( \frac{1}{4}\) n Please enter the connect string >");
   BufferedReader reader :
      new BufferedReader(new InputStreamReader(System.in));
   String sCon = reader.readLine();
   // 次に、接続を試行します。
   System.out.println("Attempting to connect :" + sCon);
   conn = java.sql.DriverManager.getConnection(sCon);
   System.out.println("SolidDriver successfully connected.");
   String sQuery = "SELECT TABLE SCHEMA, TABLE NAME, TABLE TYPE FROM TABLES";
```

```
stmt= conn.createStatement();
    result = stmt.executeQuery(sQuery);
    System.out.println("Query executed and result set obtained.");
    // 取得した結果セットに関する情報を含む
    // メタデータ・オブジェクトを取得します。
    System.out.println("Obtaining metadata information.");
   meta = result.getMetaData();
    int cols = meta.getColumnCount();
    System.out.println("Metadata information for columns is as follows:");
    // 結果セットに関する列情報をダンプします。
    for (i=1; i <= cols; i++)
    {
        System.out.println("Column i:"+i+" "+meta.getColumnName(i)+ "," +
            meta.getColumnType(i) + "," + meta.getColumnTypeName(i));
    // 最後に、結果セットをダンプします。
    System.out.println("Starting to dump result set.");
    int cnt = 1;
    while(result.next())
        System.out.print("\u00e4nRow "+cnt+" : ");
        for (i=1; i <= cols; i++) {
           System.out.print(result.getString(i)+"\text{"});
       cnt++;
    }
    stmt.close();
    conn.close();
   // これで、すべて終了です。
    System.out.println("\u00e4nResult set dumped. Sample application finishes.");
Java コード例 1 の出力
Solid\DatabaseEngine4.1\jdbc\samples>java sample1.java
JDBC sample application starts...
Application tries to register the driver.
Driver successfully registered.
Now sample application needs a connectstring in format:
jdbc:solid://<host>:<port>/<user name>/<password>
Please enter the connect string >jdbc:solid://localhost:1313/dba/dba
Attempting to connect :jdbc:solid://localhost:1313/dba/dba
SolidDriver successfully connected.
Query executed and result set obtained.
Obtaining metadata information.
Metadata information for columns is as follows:
Column i:1 TABLE SCHEMA, 12, VARCHAR
Column i:2 TABLE NAME, 12, VARCHAR
Column i:3 TABLE_TYPE,12,VARCHAR
Starting to dump result set.
Row 1 : _SYSTEM SYS_TABLES
                               BASE TABLE
Row 2 : _SYSTEM SYS_COLUMNS
                               BASE TABLE
Row 3 : _SYSTEM SYS_USERS
                               BASE TABLE
Row 4 : _SYSTEM SYS_UROLE
                               BASE TABLE
Row 5 : _SYSTEM SYS_RELAUTH
Row 6 : _SYSTEM SYS_ATTAUTH
                               BASE TABLE
                               BASE TABLE
```

```
Row 7 : _SYSTEM SYS_VIEWS
Row 8 : _SYSTEM SYS_KEYPARTS
Row 9 : _SYSTEM SYS_KEYS
Row 10 : _SYSTEM SYS_C
Row 11 : _SYSTEM SYS_I
                                       BASE TABLE
                                       BASE TABLE
                                       BASE TABLE
                             SYS_CARDINAL
                                                 BASE TABLE
                             SYS INFO
                                                 BASE TABLE
Row 12 : _SYSTEM
                             SYS SYNONYM
                                                 BASE TABLE
Row 13 : _SYSTEM
                             TABLES VIEW
                             COLUMNS VIEW
Row 14 : _SYSTEM
Row 15 : SYSTEM
                             SQL_LANGUAGES BASE TABLE
Row 16 : _SYSTEM
                             SERVER INFO
                                                 VIEW
Row 17 : SYSTEM
Row 18 : SYSTEM
Row 19 : SYSTEM
Row 20 : SYSTEM
                             SYS TYPES
                                                 BASE TABLE
                             SYS FORKEYS
                                                 BASE TABLE
                             SYS FORKEYPARTS BASE TABLE
                             SYS PROCEDURES BASE TABLE
Row 21 : SYSTEM
                             SYS TABLEMODES BASE TABLE
Row 22 : _SYSTEM
                             SYS EVENTS
                                                 BASE TABLE
Row 23 : _SYSTEM
                             SYS_SEQUENCES BASE TABLE
                             SYS TMP HOTSTANDBY
Row 24 : SYSTEM
                                                          BASE TABLE
Result set dumped. Sample application finishes.
```

Java コード例 2: sample2.java

```
JDBC サンプル・アプレット sample2
      この単純な JDBC アプレットは、Solid ネイティブ JDBC ドライバーを使用して
     以下の処理を行います。
  1. JDBC ドライバー・マネージャー・サービスを使用してドライバーを登録します。
  2. ドライバーを使用して、Solid に接続します。
     使用する URL は、sample2.html から読み取ります。
  3. 指定した SOL ステートメントを実行します。
  アプリケーションを作成し実行するには、以下の手順を実行します。
  1. 作業用の Java 開発環境を用意しておきます。
  2. 接続する Solid をインストールして開始します。
     サーバーが稼働中であることを確認します。
  3. 開発/稼働環境で使用する CLASSPATH 定義に SolidDriver2.0.jar を追加します。
  4. sample2.java ファイルに基づいて、Java プロジェクトを作成します。
  5. アプリケーションを作成し、実行します。sample2.html に
     ご使用の環境を指す有効な URL が定義されていることを確認します。
  詳しくは、IBM solidDB Development Kit パッケージに含まれる
  readme.txt ファイルを参照してください。
*/
import java.util.*;
import java.awt.*;
import java.applet.Applet;
import java.net.URL;
import java.sql.*;
public class sample2 extends Applet {
 TextField textField;
 static TextArea textArea;
 String url = null;
 Connection con = null;
 public void init()
    // URL の有効な値は、例えば以下のようになります。
    // url = "jdbc:solid://localhost:1313/dba/dba";
    url = getParameter("url");
```

```
textField = new TextField(40);
   textArea = new TextArea(10, 40);
   textArea.setEditable(false);
   Font font = textArea.getFont();
   Font newfont = new Font("Monospaced", font.PLAIN, 12);
   textArea.setFont(newfont);
   // アプレットにコンポーネントを追加します。
   GridBagLayout gridBag = new GridBagLayout();
   setLayout(gridBag);
   GridBagConstraints c = new GridBagConstraints();
   c.gridwidth = GridBagConstraints.REMAINDER;
   c.fill = GridBagConstraints.HORIZONTAL;
   gridBag.setConstraints(textField, c);
   add(textField);
   c.fill = GridBagConstraints.BOTH;
   c.weightx = 1.0;
   c.weighty = 1.0;
   gridBag.setConstraints(textArea, c);
   add(textArea);
   validate();
   trv {
       // Solid JDBC ドライバーをロードします。
       Driver d =
          (Driver)Class.forName ("solid.jdbc.SolidDriver").newInstance();
       // ドライバーへの接続を試行します。
       con = DriverManager.getConnection (url);
       // 接続できなかったのであれば例外が
       // スローされています。したがって、ここに到達した場合、
       // URL への接続が成功しています。
       // 接続で生成された警告を確認して
       // 表示します。
       checkForWarning (con.getWarnings ());
       // DatabaseMetaData オブジェクトを取得し、
       // 接続に関する情報を表示します。
       DatabaseMetaData dma = con.getMetaData ();
       textArea.appendText("Connected to " + dma.getURL() + "\u00e4n");
       textArea.appendText("Driver " + dma.getDriverName() + "\u00e4n");
       textArea.appendText("Version
                                       " + dma.getDriverVersion() + "\u00e4n");
   catch (SQLException ex) {
       printSQLException(ex);
   catch (Exception e) {
       textArea.appendText("Exception: " + e + "\u00e4n");
public void destroy() {
   if (con != null) {
       try {
           con.close();
       catch (SQLException ex) {
           printSQLException(ex);
       catch (Exception e) {
```

```
textArea.appendText("Exception: " + e + "\u00e4n");
   }
}
public boolean action(Event evt, Object arg) {
   if (con != null) {
      String sqlstmt = textField.getText();
      textArea.setText("");
      try
          // Statement オブジェクトを作成して、
          // ドライバーに SQL ステートメントをサブミットできるようにします。
          Statement stmt = con.createStatement ();
          // 行制限を設定します。
         stmt.setMaxRows(50);
          // 照会をサブミットし、ResultSet オブジェクトを作成します。
          ResultSet rs = stmt.executeQuery (sqlstmt);
          // 結果セットから、すべての列と行を表示します。
          textArea.setVisible(false);
          dispResultSet (stmt,rs);
          textArea.setVisible(true);
          // 結果セットを閉じます。
          rs.close();
          // ステートメントを閉じます。
         stmt.close();
      catch (SQLException ex) {
          printSQLException(ex);
      catch (Exception e) {
          textArea.appendText("Exception: " + e + "\u00e4n");
      textField.selectAll();
   return true;
}
 //-----
 // checkForWarning
 // 警告を確認し、表示します。警告が存在する場合、
 // true を返します。
 //-----
 private static boolean checkForWarning (SQLWarning warn)
        throws SQLException
     boolean rc = false;
     // SQLWarning オブジェクトが指定されている場合、
     // 警告メッセージを表示します。複数の警告が
     // チェーニングされている可能性があることに注意してください。
     if (warn != null) {
        textArea.appendText("\forall n*** Warning ***\forall n");
        rc = true;
        while (warn != null) {
           textArea.appendText("SQLState: " +
               warn.getSQLState () + "\u00e4n");
           textArea.appendText("Message:
               warn.getMessage () + "\u00e4n");
           textArea.appendText("Vendor:
               warn.getErrorCode () + "\n");
           textArea.appendText("\footnote\n");
           warn = warn.getNextWarning ();
```

```
}
   return rc;
}
// dispResultSet
// 指定された結果セット内のすべての列と行を表示します。
private static void dispResultSet (Statement sta, ResultSet rs)
   throws SQLException
   int i;
   // ResultSetMetaData を取得します。これは、
   // 列見出しに使用されます。
   ResultSetMetaData rsmd = rs.getMetaData ();
   // 結果セット内の列数を取得します。
   int numCols = rsmd.getColumnCount ();
   if (numCols == 0) {
       textArea.appendText("Updatecount is "+sta.getUpdateCount());
       return;
   // 列見出しを表示します。
   for (i=1; i<=numCols; i++) {
      if (i > 1) {
          textArea.appendText("\f");
      try {
          textArea.appendText(rsmd.getColumnLabel(i));
      catch(NullPointerException ex) {
          textArea.appendText("null");
   textArea.appendText("\u00e4n");
   // 結果セットの終端までフェッチしながら、データを表示します。
   boolean more = rs.next ();
   while (more) {
       // 各列をループして、列データを取得し、
       // 表示します。
       for (i=1; i<=numCols; i++) {</pre>
          if (i > 1) {
              textArea.appendText("\text{"}t");
          try {
              textArea.appendText(rs.getString(i));
          catch(NullPointerException ex) {
              textArea.appendText("null");
      textArea.appendText("\u00e4n");
      // 次の結果セット行をフェッチします。
      more = rs.next ();
}
private static void printSQLException(SQLException ex)
       // SQLException が生成されています。それをキャッチし、
```

```
// エラー情報を表示します。複数の
         // エラー・オブジェクトがチェーニングされて
         // いる可能性があることに注意してください。
         textArea.appendText("\footnote\n** SQLException caught ***\footnote\n");
         while (ex != null) {
            textArea.appendText("SQLState: " +
               ex.getSQLState () + "\n");
            textArea.appendText("Message:
               ex.getMessage () + "\u00e4n");
            textArea.appendText("Vendor:
               ex.getErrorCode () + "\n");
            textArea.appendText("\u00e4n");
            ex = ex.getNextException ();
   }
}
Java コード例 3: sample3.java
/**
      JDBC サンプル・アプリケーション sample3
      この単純な JDBC アプリケーションは、Solid JDBC ドライバーを使用して
      以下の処理を行います。
  1. JDBC ドライバー・マネージャー・サービスを使用してドライバーを登録します。
  2. ユーザーに対して、有効な JDBC 接続ストリングの入力を促すプロンプトを
     出します。
  3. ドライバーを使用して、Solid に接続します。
  4. プロシージャー sample3 をドロップして作成します。
     そのプロシージャーが存在しない場合、関連する例外をダンプします。
  5. java.sql.Statement を使用してそのプロシージャーを呼び出します。
  6. 結果セットのすべての行をフェッチおよびダンプします。
  7. 接続を閉じます。
  アプリケーションを作成し実行するには、以下の手順を実行します。
  1. 作業用の Java 開発環境を用意しておきます。
  2. 接続する Solid をインストールして開始します。
     サーバーが稼働中であることを確認します。
* 3. 開発/稼働環境で使用する CLASSPATH 定義に SolidDriver2.0.jar を追加します。
  4. sample3.java ファイルに基づいて、Java プロジェクトを作成します。
  5. アプリケーションを作成し、実行します。
* 詳しくは、IBM solidDB Development Kit パッケージに含まれる
  readme.txt ファイルを参照してください。
import java.io.*;
import java.sql.*;
public class sample3 {
   static Connection conn;
   public static void main (String args[]) throws Exception
      System.out.println("JDBC sample application starts...");
      System.out.println("Application tries to register the driver.");
      // これは、ドライバーの登録に関して推奨されている方法です。
      Driver d = (Driver)Class.forName("solid.jdbc.SolidDriver").newInstance();
      System.out.println("Driver successfully registered.");
```

```
// ユーザーは、接続ストリングの入力を求められます。
    System.out.println(
        "Now sample application needs a connectstring in format:\"\"
    System.out.println(
       "jdbc:solid://<host>:<port>/<user name>/<password>\u00e4n"
       );
    System.out.print("\forall nPlease enter the connect string >");
    BufferedReader reader =
   new BufferedReader(new InputStreamReader(System.in));
   String sCon = reader.readLine();
    // 次に、接続を試行します。
    System.out.println("Attempting to connect :" + sCon);
    conn = DriverManager.getConnection(sCon);
   System.out.println("SolidDriver successfully connected.");
   DoIt();
    conn.close();
   // これで、すべて終了です。
   System.out.println(
        "¥nResult set dumped. Sample application finishes.");
}
static void DoIt() {
   try {
       PreparedStatement pstmt = conn.prepareStatement("call sample3(?)");
       // パラメーター値を設定します。
       pstmt.setInt(1,10);
       ResultSet rs = pstmt.executeQuery();
       if (rs != null) {
            ResultSetMetaData md = rs.getMetaData();
            int cols = md.getColumnCount();
           int row = 0;
           while (rs.next()) {
               row++;
               String ret = "row "+row+": ";
               for (int i=1;i<=cols;i++) {
                   ret = ret + rs.getString(i) + " ";
               System.out.println(ret);
           }
       }
       conn.commit();
   catch (SQLException ex) {
       printexp(ex);
    catch (java.lang.Exception ex) {
       ex.printStackTrace ();
}
static void createprocs() {
   Statement stmt = null;
   String proc = "create procedure sample3 (limit integer)" +
                 "returns (c1 integer, c2 integer) " +
                  "begin " +
                  " c1 := 0;" +
                   while c1 < limit loop " +
                      c2 := 5 * c1;" +
```

```
return row: " +
                     c1 := c1 + 1;" +
                   end loop;" +
                 "end";
      try {
         stmt = conn.createStatement();
         stmt.execute("drop procedure sample3");
      } catch (SQLException ex) {
         printexp(ex);
      try {
         stmt.execute(proc);
      } catch (SQLException ex) {
         printexp(ex);
         System.exit(-1);
   }
   public static void printexp(SQLException ex) {
      System.out.println("\u00e4n*** SQLException caught ***");
      while (ex != null) {
         System.out.println("SQLState: " + ex.getSQLState());
         System.out.println("Message: " + ex.getMessage());
                                 " + ex.getErrorCode());
         System.out.println("Vendor:
         ex = ex.getNextException ();
      }
   }
}
Java コード例 4: sample4.java
/**
      JDBC サンプル・アプリケーション sample4
*
      この単純な JDBC アプリケーションは、Solid JDBC ドライバーを使用して
      以下の処理を行います。
  1. JDBC ドライバー・マネージャー・サービスを使用してドライバーを登録します。
  2. ユーザーに対して、有効な JDBC 接続ストリングの入力を促すプロンプトを
     出します。
  3. ドライバーを使用して、Solid に接続します。
  4. 表 sample4 をドロップして作成します。
  その表が存在しない場合、関連する例外をダンプします。
5. 引数として指定されたファイルをデータベースに挿入します (Store メソッド)。
   6. この 'blob' を読み取り、out.tmp ファイルに戻します (Restore メソッド)。
  7. 接続を閉じます。
   アプリケーションを作成し実行するには、以下の手順を実行します。
  1. 作業用の Java 開発環境を用意しておきます。
*
   2. 接続する Solid をインストールして開始します。
     サーバーが稼働中であることを確認します。
   3. 開発/稼働環境で使用する CLASSPATH 定義に SolidDriver2.0.jar を追加します。
   4. sample4.java ファイルに基づいて、Java プロジェクトを作成します。
   5. アプリケーションを作成し、実行します。
  詳しくは、solidDB Development Kit パッケージに含まれる
   readme.txt ファイルを参照してください。
*/
import java.io.*;
import java.sql.*;
```

```
public class sample4 {
   static Connection conn;
   public static void main (String args[]) throws Exception
       String filename = null;
       String tmpfilename = null;
       if (args.length < 1) {
           System.out.println("usage: java sample4 <infile>");
           System.exit(0);
       filename = args[0];
       tmpfilename = "out.tmp";
       System.out.println("JDBC sample application starts...");
       System.out.println("Application tries to register the driver.");
       // これは、ドライバーの登録に関して推奨されている方法です。
       Driver d = (Driver)Class.forName("solid.jdbc.SolidDriver").newInstance();
       System.out.println("Driver successfully registered.");
       // ユーザーは、接続ストリングの入力を求められます。
       System.out.println(
           "Now sample application needs a connectstring in format:\"\"
           );
       System.out.println(
           "jdbc:solid://<host>:<port>/<user name>/<password>\u00e4n"
           );
       System.out.print("\u00e4nPlease enter the connect string >");
       BufferedReader reader =
       new BufferedReader(new InputStreamReader(System.in));
       String sCon = reader.readLine();
       // 次に、接続を試行します。
       System.out.println("Attempting to connect :" + sCon);
       conn = DriverManager.getConnection(sCon);
       System.out.println("SolidDriver successfully connected.");
       // 表 sample4 をドロップし、作成します。
       createsample4();
       // その表にデータを挿入します。
       Store(filename);
       // そして、リストアします。
       Restore(tmpfilename);
       conn.close();
       // これで、すべて終了です。
       System.out.println("\u00e4nSample application finishes.");
   static void Store(String filename) {
       String sql = "insert into sample4 values(?,?)";
       FileInputStream inFileStream ;
       try {
           File f1 = new File(filename);
           int blobsize = (int)f1.length();
           System.out.println("Inputfile size is "+blobsize);
           inFileStream = new FileInputStream(f1);
           PreparedStatement stmt = conn.prepareStatement(sq1);
           stmt.setLong(1, System.currentTimeMillis());
           stmt.setBinaryStream(2, inFileStream, blobsize);
           int rows = stmt.executeUpdate();
```

```
stmt.close();
        System.out.println(""+rows+" inserted.");
        conn.commit();
   catch (SQLException ex) {
        printexp(ex);
   catch (java.lang.Exception ex) {
       ex.printStackTrace ();
}
static void Restore(String filename) {
    String sql = "select id,blob from sample4";
    FileOutputStream outFileStream ;
        File f1 = new File(filename);
        outFileStream = new FileOutputStream(f1);
        PreparedStatement stmt = conn.prepareStatement(sq1);
        ResultSet rs = stmt.executeQuery();
        int readsize = 0;
        while (rs.next()) {
            InputStream in = rs.getBinaryStream(2);
            byte bytes[] = new byte[8*1024];
            int nRead = in.read(bytes);
           while (nRead != -1)
                readsize = readsize + nRead;
                outFileStream.write(bytes,0,nRead);
                nRead = in.read(bytes);
            }
        stmt.close();
        System.out.println("Read "+readsize+" bytes from database");
   catch (SQLException ex) {
        printexp(ex);
   catch (java.lang.Exception ex) {
        ex.printStackTrace ();
}
static void createsample4() {
    Statement stmt = null;
   String proc = "create table sample4 (" +
                  "id numeric not null primary key,"+
                  "blob long varbinary)";
   try {
        stmt = conn.createStatement();
        stmt.execute("drop table sample4");
    } catch (SQLException ex) {
        printexp(ex);
   try {
        stmt.execute(proc);
    } catch (SQLException ex) {
        printexp(ex);
        System.exit(-1);
}
```

```
static void printexp(SQLException ex) {
          System.out.println("\u00e4n*** SQLException caught ***");
         while (ex != null) {
              System.out.println("SQLState: " + ex.getSQLState());
              System.out.println("Message: " + ex.getMessage());
System.out.println("Vendor: " + ex.getErrorCode());
              ex = ex.getNextException ();
     }
}
```

solidDB JDBC ドライバー型変換マトリックス

このトピックの型変換マトリックスは、solidDB JDBC ドライバーがサポートする Java データ型から SQL データ型への変換方法を示します。

このマトリックスは、データを取得する ResultSet.getXXX メソッドとデータを設定 する ResultSet.setXXX メソッドの両方に適用されます。X は、solidDB JDBC ドラ イバーがそのメソッドをサポートすることを意味します。

表 71. Java データ型から SOL データ型への変換

表 /1. Java ナータ型から SQL ナータ	至、((() 及:	突																	
データの取得と設定に適用する Java データ型	T I N Y I N T	S M A L I I N	I N T E G E	R E A	F L O A	D O U B L	D E C I M A	N U M E R I	СНА	V A R C H A	L O N G V A R C H A	W C H	W V A R C H A	L O N G W V A R C H A	B I N A R	V A R B I N A R Y	L O N G V A R B I N A R	D A T	T I M	T I M E S T A M P
	T	Т	R	L	Т	Е	L	С	R	R	R	R	R	R	Y	R	Y	Е	Е	P
getArray/setArray	_																			
getBlob/setBlob																				
getByte/setByte	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X						
getCharacterStream/ setCharacterStream									X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
getClob/setClob																				
getShort/setShort	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X									
getInt/setInt	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X									
getlong/setLong	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X									
getfloat/setfloat	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X									
getDouble/setDouble	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X									
getBigDecimal/setBigDecimal	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X									

表 71. Java データ型から SQL データ型への変換 (続き)

データの取得と設定に適用する Java データ型	T I N Y I N T	S M A L L I N T	I N T E G E R	R E A L	F L O A T	D O U B L E	D E C I M A L	N U M E R I	C H A R	V A R C H A R	L O N G V A R C H A	W C H A R	W V A R C H A R	L O N G W V A R C H A	B I N A R Y	V A R B I N A R Y R	L O N G V A R B I N A R	D A T E	T I M E	T I M E S T A M P
getRef/setRef																				
getBoolean/setBoolean	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X									
getString/setString	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
getBytes/setBytes									X	X	X	X	X	X	X	X	X			
getDate/setDate									X	X	X	X	X	X				X		X
getTime/setTime									X	X	X	X	X	X					X	X
getTimestamp/setTimestamp									X	X	X	X	X	X				X		X
getAsciiStream/setAsciiStream									X	X	X	X	X	X	X	X	X			
getUnicodeStream/setUnicodeStream									X	X	X	X	X	X	X	X	X			
getBinaryStream/setBinaryStream									X	X	X	X	X	X	X	X	X			
getObject/setObject	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X

5 solidDB SA の使用

このセクションでは、solidDB SA とも呼ばれている solidDB アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) の使用方法について説明します。

solidDB SA は、solidDB データベース管理製品にアクセスするための、低レベルの C 言語クライアント・ライブラリーです。solidDB SA は、solidDB 製品内部にある レイヤーです。通常は、ODBC または JDBC などの業界標準ベースのインターフェースの使用を推奨します。ただし、書き込みロードが多い環境では (BATCH INSERT および BATCH UPDATE)、solidDB SA によって、パフォーマンスを大幅に向上することができます。

solidDB SA とは

solidDB SA は solidDB データベース製品に接続するための C 言語クライアント・ライブラリーです。このライブラリーを solidDB 製品内部で使用して、solidDB データベース表内のデータにアクセスします。ライブラリーには 90 の関数が含まれており、データベースを接続し、カーソル・ベースの操作を実行するための低レベルのメカニズムを提供します。

ODBC や JDBC などの業界標準インターフェースと比べると、solidDB SA はデータベース・サーバーに送信するネットワーク・メッセージをより柔軟に構成することができます。読み取りまたは書き込みのパフォーマンス (例えばバッチ挿入や主キーの参照など) を最適化する必要のあるアプリケーションでは、solidDB SA を使用することで、パフォーマンスを大幅に向上できます。例えば、バッチ挿入中にサイトでのパフォーマンス・ボトルネックが発生する場合、solidDB SA はボトルネックを減少させることができます。これは、solidDB SA によって、単一のネットワーク・メッセージやリモート・プロシージャー・コール内で挿入する複数の行の受け渡しが行えるからです。

注: パフォーマンス・ボトルネックが読み取り操作で発生している場合は、solidDB SA を使用しても、パフォーマンスはわずかしか向上しません。

solidDB SA インターフェースは、SQL パーサー、インタープリター、オプティマイザーをバイパスします。solidDB SA 経由で SQL を使用していない限り、solidDB SA を使用して、結果セットにアクセスすることができます。SQL での結果セットのリトリーブが必要な場合は、ODBC などの業界標準 API か、ODBC ベースの solidDB Light Client を使用しなければなりません。

solidDB SA を使用するには、既存のインターフェースを変換する必要があります。 そのため、以下のようなパフォーマンス向上のための他の方法を試した後でのみ (成果がほとんどなかった場合)、solidDB SA を使用することを推奨します。

• 最適な行順序になるように列を書き込むか、主キーによる列の索引付けを行います。そうしないと、solidDB は、データベースに挿入された順序で行をディスクに格納します。

- 不要な索引を除去します。例えば、表の行の 15% を超える選択を行う照会は、 表のフル・スキャンによるほうが高速に行える可能性があります。
- 100 から 200 行を挿入するたびにトランザクションをコミットして、トランザク ション・サイズを最適化します。
- ストアード・プロシージャーを使用します。

solidDB SA の概要

solidDB SA は、共有メモリー・アクセス (SMA) およびリンク・ライブラリー・ア クセス (LLA) とともに使用することができます。このトピックでは、solidDB SA を使用する前に必要な手順を説明します。

solidDB SA の使用を開始する前に、以下を必ず実行しておいてください。

- 1. ローカル・アプリケーションを作成する場合、SMA または LLA ライブラリ ー・ファイルが必要です。SMA および LLA ライブラリー・ファイルは、 solidDB のインストール中にインストールされます。これらのライブラリーに は、solidDB SA 関数とともに、すべてのサーバー機能が含まれています。
- 2. リモート・ユーザー・アプリケーションを作成する場合は、solidDB SA ライブ ラリー (例えば、Windows オペレーティング・システムの場合 solidimpsa.lib) をアプリケーションにリンクできるようにしておく必要があります。
- 3. solidDB を始動しておきます。必要であれば、solidDB SA の使用前に新しいデ ータベースを作成しておいてください。

開発環境のセットアップとサンプル・プログラムの作成

リンク・ライブラリー・アクセスまたは SA クライアント・ライブラリーでの solidDB SA ライブラリーを使用したアプリケーション・プログラムの作成は、通常 の C/C++ プログラムの作成と同じです。

- 1. リンク・ライブラリー・アクセス・ライブラリー・ファイルまたは SA クライア ント・ライブラリーをプロジェクトに挿入します。正しいファイル名について は、「IBM solidDB 共有メモリー・アクセスおよびリンク・ライブラリー・アク セス・ユーザー・ガイド」のセクション『LLA アプリケーションの作成と実行』 を参照してください。
- 2. 以下の solidDB SA ヘッダー・ファイルをインクルードします。このファイル は、solidDB SA ライブラリーをリンク・ライブラリー・アクセスまたは solidDB SA クライアント・ライブラリーで使用するアプリケーションで必要で す。

#include "sa.h"

必要なその他のすべての solidDB SA ヘッダーを含むディレクトリーを、開発環 境のインクルード・ディレクトリー設定に挿入します。

- 3. ソース・コードをコンパイルします。
- 4. プログラムをリンクします。

開発環境セットアップの検証

solidDB SA サンプル・プログラムを使用して、開発セットアップを検証することが できます。これによって、コードを書かずに開発環境を検証できます。

開発環境で、以下を検証してください。

• Windows 環境では、TCP/IP サービスは、標準 DLL である wsock32.dll によっ て提供されます。これらのサービスをプロジェクトにリンクするには、 wsock32.1ib をリンカーの lib ファイル・リストに追加します。

サンプル・アプリケーションを使用したデータベースへの接続

solidDB SA では、データベースへの接続は、SaConnectT 構造によって表現されま す。この構造は、関数 SaConnect を呼び出すことで確立されます。以下のサンプ ル・コードは、ローカル・マシン・ポート 1313 で TCP/IP プロトコルを listen し ているデータベースへの接続を確立します。パスワードが DBA のユーザー・アカ ウント DBA がデータベース内で定義されています。

```
SaConnectT* scon;
scon = SaConnect("tcp localhost 1313", "dba", "dba");
if (scon == NULL)
   /* 接続に失敗しました。接続エラー・テキストを表示します。*/
   char* errstr;
   SaErrorInfo(NULL, &errstr, NULL);
   printf("%s\u00e4n", errstr);
   return(1);
```

SQL を使用せずに solidDB SA を使用したデータの書き込み

solidDB SA では、カーソルを使用してデータを書き込みます。

削除および更新の操作の場合は、カーソルの作成後、検索を行って、更新および削 除する行をカーソルが指すようにします。挿入操作の場合は、カーソルの作成後、 挿入行がカーソルにすぐに書き込まれます。solidDB SA では、単一のネットワー ク・メッセージ内で挿入する複数の行を引き渡すこともできます。

挿入操作の実行

挿入操作に必要な solidDB SA 関数を以下の表にリストします。

solidDB が特定の表にカーソルを作成した後、変数が列にバインドされ、行がカー ソルに書き込まれ、カーソルがクローズします。

注: SaArrayInsert を使用して単一メッセージに複数の行を挿入する場合、明示的な フラッシュを実行して、行をデータベースに送信する必要があります。

表 72. 挿入操作手順

手順	SA 関数	コメント
1. カーソルの作成	SaCursorCreate	

表 72. 挿入操作手順 (続き)

手順	SA 関数	コメント
2. カーソルへの変数 のバインド	SaCursorColData、SaCursorColDate、 SaCursorColDateFormat、 SaCursorColDFloat、SaCursorColDouble、 SaCursorColDynData、SaCursorColDynstr、 SaCursorColFloat、SaCursorColInt、 SaCursorColLong、SaCursorColStr、 SaCursorColTime、SaCursorColTimestamp	
3. カーソルのオープ ン	SaCursorOpen	
4. カーソルへの行の書き込み	複数行の場合は SaArrayInsert、1 行の場合 は SaCursorInsert	必要に応じてループ内 で実行します。
5. カーソルの解放	SaCursorFree	
6. サーバーへのネットワーク・メッセージのフラッシュ	SaArrayFlush	SaArrayInsert の使用 時のみ必要です。

以下のコード・サンプルの抜粋では、SaArrayInsert 関数を使用して、単一のネット ワーク・メッセージに 4 行のデータを書き込む方法を示します。このコードでは、 SaArrayFlush を呼び出すことで、サーバーにすべての行がフラッシュされるので、 同じネットワーク・メッセージでこれらの行を渡すことができます。

```
scur = SaCursorCreate(scon, "SAEXAMPLE");
/* 変数を列にバインドします。*/
SaCursorColInt(scur, "INTC", &intc);
SaCursorColStr(scur, "CHARC", &str);
/* カーソルをオープンします。*/
SaCursorOpen(scur);
/* 表に値を挿入します。列の値は、列にバインドされたユーザー変数から
* 取得します。
*/
for (intc = 2; intc <= 5; intc++) {
   switch (intc) {
       case 2:
           str = "B";
           break;
       case 3:
           str = "C";
           break;
       case 4:
           str = "D";
           break;
       case 5:
           str = "E";
           break;
   SaArrayInsert(scur);
}
```

/* カーソルをクローズします。*/ SaCursorFree(scur); /* 挿入内容をサーバーにフラッシュします。*/ SaArrayFlush(scon, NULL);

更新および削除の操作の実行

以下の表に、基本的な更新および削除の操作に必要な solidDB SA 関数をリストし ます。

solidDB が特定の表にカーソルを作成した後、変数が表の列にバインドされ、カー ソルがオープンします。実際の検索を開始する前に、削除する行を検索するための 制約を設定します。更新する行が複数ある場合は、更新や削除の前に、各行を個別 にフェッチする必要があります。操作後、カーソルが解放されます。 cursor is freed.

表 73. 更新および削除の操作手順

手順	SA 関数	コメント
1. カーソルの作成	SaCursorCreate	
2. カーソルへの変数 のバインド	SaCursorColData、SaCursorColDate、 SaCursorColDateFormat、 SaCursorColDFloat、SaCursorColDouble、 SaCursorColDynData、SaCursorColDynstr、 SaCursorColFloat、SaCursorColInt、 SaCursorColLong、SaCursorColStr、 SaCursorColTime、SaCursorColTimestamp	
3. カーソルのオープ ン	SaCursorOpen	
4. 更新または削除す る行の検索制約の設定	SaCursorEqual, SaCursorAtleast, SaCursorAtmost	
5. 更新または削除す る行の検索の開始	SaCursorSearch	
6. 更新または削除す る行のフェッチ	SaCursorNext	
7. 実際の更新または 削除の実行	SaCursorUpdate または SaCursorDelete	更新の場合は、ステップ 2 でバインドした 変数に新しい値が入っ ている必要がありま す。
8. カーソルの解放	SaCursorFree	

以下のコード・サンプルの抜粋では、SaCursorUpdate を使用して表の行を更新する 方法を示します。このコードでは、カーソルの作成後に SaCursorColInt および SaCursorColStr を使用して表の列にバインドされた変数に、更新のための新しい値 が入っている点に注意してください。

scur = SaCursorCreate(scon, "SAEXAMPLE"); /* テスト表の列 INTC と CHARC に変数をバインドします。*/ SaCursorColInt(scur, "INTC", &intc); SaCursorColStr(scur, "CHARC", &str); /* カーソルをオープンします。*/ SaCursorOpen(scur); /* 検索制約を設定します。*/ str = "D"; SaCursorEqual(scur, "CHARC"); /* 検索を開始します。*/ SaCursorSearch(scur); /* 列をフェッチします。*/ SaCursorNext(scur); /* カーソル内の現在行を更新します。*/ intc = 1000; str = "D Updated"; SaCursorUpdate(scur); /* カーソルをクローズします。*/ SaCursorFree(scur);

SQL を使用せずに solidDB SA を使用したデータの読み取り

照会操作に必要な solidDB SA 関数をこのトピックにリストします。

solidDB SA では、カーソルを使用してデータを照会します。照会データは、更新や 削除の操作と同様の方法で検索します。カーソルが特定の表に作成され、表の列に 変数がバインドされたら、カーソルがオープンします。照会する行の検索の制約 は、実際の検索開始前に設定されます。複数の行を検索する場合は、各行を個別に フェッチする必要があります。すべての行をフェッチした場合、カーソルを解放す る必要があります。

基本的には、すべての solidDB SA 照会は SOL ベースの照会と同様の方法で、 solidDB オプティマイザーを使用します。索引選択方法は SOL と同じです。唯一の 例外は、solidDB SA の検索では、索引の選択に ORDER BY を使用する点です。 つまり、ORDER BY に最適な索引が選択されます。2 つの索引の適性が同じ場合、 コストの低いほうが選択されます。照会は、SaCursorSearch を呼び出すたびに最適 化されます。

注: Solid SA を使用する場合は、オプティマイザーのヒント機能を使用することは できません。

表 74. 照会操作手順

手順	SA 関数	コメント
1. カーソルの作成	SaCursorCreate	

表 74. 照会操作手順 (続き)

手順	SA 関数	コメント
2. カーソルへの変数 のバインド	SaCursorColInt、SACursorColStr、およびその 他のデータ型用の他の関数	
3. カーソルのオープ ン	SaCursorOpen	
4. 照会する行の検索 制約の設定	SaCursorEqual、SaCursorAtleast、 SaCursorAtmost	
5. 照会する行の検索の開始	SaCursorSearch	
6. 指定した基準に一 致する行のフェッチ	SaCursorNext	必要に応じてループ内 で実行します。
7. カーソルの解放	SaCursorFree	

例

```
/* データベース表にカーソルを作成します。*/
scur = SaCursorCreate(scon, "SAEXAMPLE");
/* テスト表の列に変数をバインドします。*/
rc = SaCursorColInt(scur, "INTC", &intc);
rc = SaCursorColStr(scur, "CHARC", &str);
/* カーソルをオープンします。*/
rc = SaCursorOpen(scur);
assert(rc == SA_RC_SUCC);
/* 検索制約を設定します。*/
str = "A";
rc = SaCursorAtleast(scur, "CHARC");
str = "C";
rc = SaCursorAtmost(scur, "CHARC");
/* 順序付け基準を設定します。*/
rc = SaCursorAscending(scur, "CHARC");
/* 検索を開始します。*/
rc = SaCursorSearch(scur);
/* 行をフェッチします。*/
for (i = 1; i <= 3; i++) {
   rc = SaCursorNext(scur);
   switch (intc) {
       case 1:
           assert(strcmp(str, "A") == 0);
           break;
       case 2:
           assert(strcmp(str, "B") == 0);
           break;
       case 3:
           assert(strcmp(str, "C") == 0);
           break;
   }
```

```
}
/* カーソルをクローズします。*/
SaCursorFree(scur);
```

solidDB SA を使用した SQL ステートメントの実行

SQL パーサーと SQL 変換処理をバイパスするだけでなく、solidDB SA では、直 接 SaSOLExecDirect 関数を使用して、SOL ステートメントを限定的に実行すること ができます。

この関数は、CREATE TABLE などの単純 SQL ステートメントを実行するために 設計されています。SOL 結果セットをリトリーブする必要がある場合は、ODBC や solidDB Light Client などの別のプログラミング・インターフェースを使用する必要 があります。

例

```
/* テスト表と索引を作成します。*/
SaSQLExecDirect(scon,
       "CREATE TABLE SAEXAMPLE(INTC INTEGER, CHARC VARCHAR)");
SaSQLExecDirect(scon,
       "CREATE INDEX SAEXAMPLE I1 ON SAEXAMPLE (CHARC)");
```

トランザクションと自動コミット・モード

デフォルトでは、solidDB SA は自動コミット・モードで実行されます。

トランザクションを明示的に開始する SaTransBegin 関数を呼び出すことで、自動コ ミット・モードをオフに切り替えることができます。このモードでは、トランザク ションは、SaTransCommit 関数を使用してコミットするか、SaTransRollback を使用 してロールバックします。

注: トランザクションのコミット後、solidDB SA は自動コミット・モードの設定に 戻ります。

自動コミット・モードでは、挿入 (SaCursorInsert)、更新 (SaCursorUpdate)、または 削除 (SaCursorDelete) の後すぐにトランザクションがコミットされます。 SaArrayInsert を使用している場合でも、自動コミットの使用時は各レコードが別々 のトランザクションに挿入されることに注意してください (詳しくは、157ページ の『SaArrayInsert』を参照してください)。SaArrayInsert 関数を使用して複数の行を 挿入する際にパフォーマンスを向上するには、SaTransBegin および SaTransCommit を使用して、複数の挿入を単一トランザクションにまとめます。

データベース・エラーの処理

このセクションには、データベース・エラーの処理に関する情報が含まれていま す。

solidDB SA は ODBC のようなエラー処理機能は提供していません。通常、solidDB SA 関数は、成功した場合は SA RC SUCC または要求したオブジェクトを指すポ インターを返します。成功しなかった場合は、戻り値は solidDB SA エラー・コー

ド (以下のセクションの表を参照) のいずれか、または NULL になります。エラー がデータベース・エラーの場合は、エラー・テキストが SaErrorInfo 関数から返され ます。

```
if (scon == NULL) {
      /* 接続に失敗しました。接続エラー・テキストを表示します。*/
      char* errstr;
      SaErrorInfo(NULL, &errstr, NULL);
      printf("%s\n", errstr);
      return(1);
   }
```

関数 SaCursorErrorInfo は、最後のカーソル操作が失敗した場合は、エラー・テキス トを返します。SaErrorInfo には接続パラメーターがあるので、その接続に該当する 最後のエラーを返しますが、SaCursorErrorInfo にはカーソル・パラメーターがある ので、そのカーソルの最後のエラーを返すことに注意してください。

solidDB SA 関数のエラー・コードとメッセージ

以下に、solidDB SA 関数で考えられる戻りコードを示します。これらのエラー・コ ードはすべて、sa.h ファイルで定義されています。

表 75. solidDB SA 関数の戻りコード

エラー・コード	意味
SA_RC_SUCC	操作が成功しました。
SA_RC_END	操作が完了しました。
SA_ERR_FAILED	操作が失敗しました。
SA_ERR_CURNOTOPENED	カーソルがオープンしていません。
SA_ERR_CUROPENED	カーソルがオープンしています。
SA_ERR_CURNOSEARCH	カーソル内でアクティブな検索がありませ ん。
SA_ERR_CURSEARCH	カーソル内でアクティブな検索があります。
SA_ERR_ORDERBYILL	「順序付け」指定が正しくありません。
SA_ERR_COLNAMEILL	列名が正しくありません。
SA_ERR_CONSTRILL	制約が正しくありません。
SA_ERR_TYPECONVILL	型変換が正しくありません。
SA_ERR_UNIQUE	ユニーク制約違反です。
SA_ERR_LOSTUPDATE	並行性競合。2 つのトランザクションで同じ 行を更新または削除しました。
SA_ERR_SORTFAILED	検索結果セットのソートに失敗しました。

表 75. solidDB SA 関数の戻りコード (続き)

エラー・コード	意味
SA_ERR_CHSETUNSUPP	サポートされない文字セットです。
SA_ERR_CURNOROW	カーソル内に現在行がありません。
SA_ERR_COLISNOTNULL	NOT NULL 列に NULL 値が指定されました。
SA_ERR_LOCALSORT	結果セットがローカルにソートされていま す。行を更新または削除できません。
SA_ERR_COMERROR	通信エラーです。接続が失われました。
SA_ERR_NOSTRCONSTR	制約のストリングが欠落しています。
SA_ERR_ILLENUMVAL	数値が正しくありません。
SA_ERR_COLNOTBOUND	列がバインドされていません。
SA_ERR_CALLNOSUP	操作がサポートされていません。*
SA_ERR_RPCPARAM	RPC パラメーター・エラーです。
SA_ERR_TABLENOTFOUND	表が検出されません。
SA_ERR_READONLY	接続が読み取り専用です。
SA_ERR_ILLPARAMCOUNT	パラメーターの数が間違っています。
SA_ERR_INVARG	無効な引数です。
SA_ERR_INVCALLSEQ	無効な呼び出しシーケンスです。

注: SaArray* 関数はリンク・ライブラリー・アクセスではサポートされておらず、 ネットワーク・クライアント・ライブラリーでのみ機能します。リンク・ライブラ リー・アクセスでは、SA_ERR_CALLNOSUP を返します。

solidDB SA に関する特記事項

このトピックには、solidDB SA に関する重要な情報や制限事項が含まれています。

solidDB SA およびバイナリー・ラージ・オブジェクト (BLOB)

現在、solidDB SA は BLOB ストリームをサポートしておらず、属性値の最大サイ ズは 32K に制限されています。

SaCursorCol* 関数と solidDB SQL がサポートしているデータ型

SaCursorColXXX() 関数は、XXX 型の変数を、指定された列にバインドします。例 えば、SaCursorColInt 関数は、int 型の変数を、指定された列にバインドします。変 数を列にバインドする場合、通常、変数と列には対応する型が使用されます。例え ば、通常、int C 変数は INT SQL 列にバインドします。ただし、列のデータ型とバ インドする変数のデータ型は必ずしも同一である必要はありません。例えば、C int 変数を SQL FLOAT にバインドすることはできますが、データをやり取りする間に 精度が失われる (あるいはオーバーフローやアンダーフローが発生する) リスクが生 じます。

SaCursorCol* 関数は、以下の表にリストされた SQL データ型をサポートします。

表 76. サポートしている SQL データ型

SaCursolCol* 関数	T I N Y I N	S M A L I I	I N T E G E	R E A	F L O A	D O U B L	D E C I M A	N U M E R	СНА	V A R C H A	L O N G V A R C H A	W C H A R	W V A R C H A	L O N G W V A R	B I N A R	V A R B I N A R Y R	L O N G V A R B I N A R Y	D A T E	T I M	T I M E S T A M
	T	Т		L			L	С	R	R	R			С	Y	K	Y	E	Е	P
SaCursorColInt	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X						L
SaCursor ColLong	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X						
SaCursor ColFloat	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X						
SaCursor ColDouble	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X						
SaCursorColStr									X	X	X									
SaCursorCol Date									X	X	X	X	X	X				X		X
SaCursor ColTime									X	X	X	X	X	X					X	X
SaCursor ColTimestamp									X	X	X	X	X	X					X	X
SaCursor ColData															X	X	X			
SaCursor ColDynData		X	X	X	X	X	X	X	X	X	X				X	X	X			
SaCursor ColFixStr		X	X	X	X	X	X	X	X	X	X				X	X	X	X	X	X
SaCursor ColDynStr		X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X							

注: 他の API と同様に、solidDB SA における変換によっては、成功するかどうか が宣言した値で決まる場合があることに注意してください。例えば、フィールドの 実際の値が (「123」のような)整数の場合にのみ、SaCursorCollInt は (「foo」のよ うな) SQL データ型 CHAR を扱うことができます。

solidDB SA 関数リファレンス

このトピックには、solidDB SA 関数のアルファベット順のリストが含まれていま

各説明には、目的、構文、パラメーター、戻り値、およびコメントが含まれていま す。

関数の構文

関数の宣言の構文は以下のとおりです。

SA EXPORT H function(modifier parameter [,...]);

ここで modifier には以下のいずれかを指定できます。

SaConnectT* SaColSearchT* SaCursorT* SaDataTypeT* SaDateT* SaDfloatT* SaDynDataT* SaDynStrT* SaChSetT char* char** double* long*

float* int

int*

unsigned*

void

パラメーターはイタリックで記載し、以下で説明します。

パラメーターの説明

各関数の説明では、パラメーターを表形式で示します。表にはパラメーターの一般 的な使用タイプ (次のセクションで説明) と、特定の関数におけるパラメーター変数 の使用方法が記載されています。

パラメーター使用タイプ

以下の表には、solidDB SA パラメーターで考えられる使用タイプが示されていま す。パラメーターをポインターとして使用する場合は、呼び出し後にパラメーター 変数の所有権を指定する 2 番目のカテゴリーの使用法を含むという点に注意してく ださい。

表 77. solidDB SA パラメーター使用タイプ

使用タイプ	意味
in	パラメーターが入力であることを示します。
output	パラメーターが出力であることを示します。
in out	パラメーターが入出力であることを示します。
take	ポインター・パラメーターにのみ適用されます。関数がパラメーター値を取ることを意味します。関数呼び出し後は、呼び出し元は、パラメーターを参照できません。関数または関数で作成されたオブジェクトが、パラメーターが不要になったときにそれを解放する必要があります。
hold	ポインター・パラメーターにのみ適用されます。関数呼び出し後も、関数がパラメーター値を保持することを意味します。呼び出し元は、関数呼び出し後もパラメーター値を参照できます。また、パラメーターを解放する必要があります。通常は、この種のパラメーターは、ローカル・データ構造内にポインター値を保持するオブジェクトのコンストラクターに渡されます。呼び出し元はパラメーターを保持するオブジェクトが削除されるまで、パラメーターを解放することはできません。
use	ポインター・パラメーターにのみ適用されます。パラメーターが関数呼び出し中にのみ使用されることを意味します。関数呼び出し後は、呼び出し元はパラメーターを自由に処理することができます。 これはパラメーター引き渡しの最も一般的なタイプです。
ref	out パラメーターにのみ適用されます。詳しくは、以下の『戻り値』を参照してください。
give	out パラメーターにのみ適用されます。詳しくは、以下の『戻り値』を参照してください。

各関数の説明では、その関数が値を返すのかどうかと、返される値の型を示しま す。戻り値は以下のいずれかの値になります。

- Boolean (TRUE, FALSE)
- int (1、0 など)
- SA_RC_SUCC などの SaRetT (エラー戻りコード)。有効なエラー・コードのリス トについては、150ページの『データベース・エラーの処理』を参照してくださ 61
- Pointer (out パラメーター)

ポインターでは、以下の戻り使用タイプが考えられます。

表 78. ポインターの戻り使用タイプ

使用タイプ	意味
ref	呼び出し元が戻り値の参照しか行えず、解放はできないことを示します。戻り値を返したオブジェクトが、その戻り値を解放した後は、戻り値を使用しないようにしてください。
give	関数が呼び出し元に戻り値を提供することを示します。呼び出し元 が戻り値を解放する必要があります。

SaArrayFlush

SaArrayFlush は、SaArrayInsert への一連の呼び出しによって配列操作バッファーが 満杯になった場合、このバッファーをフラッシュ(つまり、サーバーにデータを送 信) します。

デフォルトでは、SaArrayFlush 操作を含むすべての SA 操作は、自動コミット・モ ードで実行されます。自動コミット・モードでは、SaArrayFlush 関数は配列のすべ てのレコードを単一トランザクションで自動的には挿入しません。その代わりに、 SaArrayFlush を呼び出すと、各レコードの挿入が個別のトランザクションとして扱 われます。パフォーマンスを最大化するには、SaArrayFlush の呼び出し前に明示的 に SaTransBegin を実行し、SaArrayFlush の呼び出し後に明示的に SaTransCommit を実行します。

SaArray* 関数はリンク・ライブラリー・アクセスではサポートされておらず、ネッ トワーク・クライアント・ライブラリーでのみ機能します。リンク・ライブラリ ー・アクセスでは、SA_ERR_CALLNOSUP を返します。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaArrayFlush(SaConnectT* scon, SaRetT* rctab)

SaArrayFlush 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 79. SaArrayFlush のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	use	接続オブジェクトを指すポインター
rctab	use	各配列操作に対する戻りコードの配列
		このパラメーターが NULL 以外の場合、各配列操作の戻りコードは $rctab[i]$ で返されます。ここで i は、前回の SaArrayFlush 以降の配列操作のオーダー番号です。

戻り値

SA RC SUCC または最初に失敗した配列操作のエラー・コード

関連項目

SaArrayInsert.

SaArrayInsert

SaArrayInsert は 1 つのネットワーク・メッセージに値の配列を挿入します。この関 数は、挿入された値を、配列挿入バッファー内に配置します。SaArrayFlush 関数を 使用して、バッファーをフラッシュ (つまりサーバーにデータを送信) することがで きます。

SaArrayInsert は、内部キャッシュが満杯になると暗黙的なフラッシュも行います。 ただし、すべての行を確実にサーバーに送信するには、SaArrayInsert を使用して最 後のレコードを挿入した後、SaArrayFlush を呼び出す必要があります。

注:

- 1. デフォルトでは、SaArrayInsert および SaArrayFlush の操作を含むすべての SA 操作は、自動コミット・モードで実行されます。パフォーマンスに関する重要な 注記については、156ページの『SaArrayFlush』を参照してください。
- 2. SaArray* 関数はリンク・ライブラリー・アクセスではサポートされておらず、 ネットワーク・クライアント・ライブラリーでのみ機能します。リンク・ライブ ラリー・アクセスでは、SA ERR CALLNOSUP を返します。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaArrayInsert(SaCursorT* scur)

SaArrayInsert 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 80. SaArrayInsert のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur		カーソル・オブジェクトを指 すポインター

戻り値

SA RC SUCC またはエラー・コード

関連項目

156ページの『SaArrayFlush』.

SaColSearchCreate

SaColSearchCreate は、指定された表の列情報検索を開始します。

構文

SaColSearchT* SA EXPORT H SaColSearchCreate(SaConnectT* scon, char* tablename)

SaColSearchCreate 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表81. SaColSearchCreate のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	in	接続オブジェクトを指すポイ ンター
tablename	in	表名

列検索オブジェクトを指すポインター、または表が存在しない場合は NULL

SaColSearchFree

SaColSearchFree は、列検索オブジェクトを解放します。

構文

void SA EXPORT H SaColSearchFree(SaColSearchT* colsearch)

SaColSearchCreate 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 82. SaColSearchCreate のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
colsearch	in, take	列検索ポインター

戻り値

なし

SaColSearchNext

SaColSearchNext は、表内の次の列の情報を返します。

構文

int SA EXPORT H SaColSearchNext(SaColSearchT* colsearch, char** p_colname, SaDataTypeT* p_coltype)

SaColSearchNext 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表83. SaColSearchNext のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
colsearch	in, use	列検索ポインター
p_colname	out, ref	列名のローカル・コピーを指すポインターは * p_colname に格納されます。

表83. SaColSearchNext のパラメーター (続き)

パラメーター	使用タイプ	説明
p_coltype	out	列の型は * p_coltype に格納されます。SaDataTypeT データ型および、この型で保持できる有効な値の説明は、sa.hファイルを参照してください。

表 84. SaColSearchNext の戻り値

値	説明
1	次の列が検出されたため、パラメーターは更 新されます。
0	列がこれ以上ないため、パラメーターは更新 されません。入力パラメーターが無効な場合 も、関数は 0 を返します。

SaConnect

SaConnect は、solidDB サーバーへの接続を作成します。複数の接続を同時にアクテ ィブにすることはできますが、異なる接続での操作は、個別のトランザクションで 実行されます。

構文

SaConnectT* SA EXPORT H SaConnect(char* servername, char* username, char* password)

SaConnect 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 85. SaConnect のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
servername	in, use	サーバー名。サーバー名が空 の場合は、リンク・サーバー に接続されます。
username	in, use	ユーザー名
password	in, use	パスワード

表 86. SaConnect の戻り値

戻り使用タイプ	説明
give	接続ポインター、または接続が失敗した場合 は NULL

SaCursorAscending

SaCursorAscending は、列に昇順基準を指定します。

複数の列でソートするには、列ごとにこの関数を 1 回呼び出す必要があります。列 にキー (主キーや索引) がない場合、行はサーバー側ではなく、ローカルに (クライ アント上で) ソートされます。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorAscending(SaCursorT* scur, char* colname)

SaCursorAscending 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 87. SaCursorAscending のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名

戻り値

SA RC SUCC またはエラー・コード

SaCursorAtleast

SaCursorAtleast は、列に Atleast 基準を指定します。Atleast 基準とは、列の値が Atleast の値以上でなければならないことを意味します。Atleast の値は、列に現在バ インドされているユーザー変数から取得します。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorAtleast(SaCursorT* scur, char* colname)

SaCursorAtleast 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 88. SaCursorAtleast のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名

SA RC SUCC またはエラー・コード

SaCursorAtmost

SaCursorAtmost は、列に Atmost 基準を指定します。Atmost 基準とは、列の値が Atmost の値以下でなければならないことを意味します。Atmost の値は、列に現在 バインドされているユーザー変数から取得します。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorAtmost(SaCursorT* scur, char* colname)

SaCursorAtmost 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 89. SaCursorAtmost のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名

戻り値

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

SaCursorBegin

SaCursorBegin は、セットの先頭にカーソルを位置付けます。以降の SaCursorNext 関数の呼び出しでは、最初の行が返されます。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorBegin(SaCursorT* scur)

SaCursorBegin 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 90. SaCursorBegin のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター

SA RC SUCC またはエラー・コード

SaCursorClearConstr

SaCursorClearConstr は、カーソルからすべての検索制約を消去します。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorClearConstr(SaCursorT* scur)

SaCursorClearConstr 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 91. SaCursorClearConstr のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター

戻り値

SA RC SUCC またはエラー・コード

SaCursorColData

SaCursorColData は、ユーザー変数をデータベース列にバインドします。

バインド済みの変数は、「入力」または「出力」のいずれかのパラメーターとして 使用できます。「入力」パラメーターは、挿入および更新などの操作や検索制約用 に、クライアントからサーバーにデータ値を受け渡します。「出力」パラメーター は、検索中にサーバーが読み取った値を保持します。例えば、データの INSERT を 実行するには、ユーザーは最初に変数をバインドし、実際の INSERT の前に値をバ インド済みの変数に格納します。INSERT を実行すると、これらの値はデータベー スにコピーされます。同様に、フェッチ操作中に、次の行をリトリーブすると、そ の行の列の値がバインド済みの変数にコピーされ、クライアント・プログラムで認 識できるようにします。

1回のバインディング後に、変数を複数回使用することができます。例えば、複数 の行を挿入する場合は、バインド済みの変数に適切な値を格納し、INSERT 操作を 実行するためのループを作成することができます。「バインド」操作は、ループ前 に 1 回だけ行う必要があります。ループ内で、各 INSERT 操作に対して実行する 必要はありません。同様に、変数を一度バインドした後は、SaCursorNext 関数を使 用して多数の行を(一度に1行ずつ)リトリーブすることができます。行をリトリ

ーブするたびに、その値がバインド済みの変数にコピーされます。データ・バッフ ァーのアドレスは、変更されない点に注意してください。SaCursorNext を呼び出す たびに、このバッファーに格納された値だけが変更されます。

列が (SELECT ステートメントで WHERE 節を使用する場合のように) 検索制約と して設定されると、dataptr としてアドレスが渡されるユーザー・データ変数が指す 値に、この制約の値が設定されます。例えば、関数 SaCursorEquals が列に対して呼 び出された場合、サーバーはバインド済みの変数の現行値に完全に一致する値を持 つ行だけをリトリーブします。検索制約は検索操作 (SaCursorSearch と、それに続く SaCursorNext の呼び出し)のためにセットアップされますが、実際には他の操作 (SaCursorUpdate または SaCursorDelete など) のためにカーソルを正しい位置に設定 するために使用することができることに注意してください。通常、更新を検索と組 み合わせて、行の一部だけを更新します。つまり、検索制約のある列の値を使用し て影響のある行を定義し (実質的には SQL の「WHERE」節)、他のバインド済みの 変数を使用して残りの列の新しい値を定義します。同じバインド済みの変数を、検 索制約と更新/挿入操作の両方に使用できる点に注意してください (SQL UPDATE ステートメントの WHERE 節と「UPDATE ... SET col = value」節の両方で同じ列 が使用できるのと同様です)。同じバインド済みの変数を検索制約と、クライアント/ サーバー間でのデータの交換の両方に使用する場合は、バインド済みの変数内のデ ータが更新されるたびに検索制約が変更されることはありません。サーバーは検索 制約が作成されたとき (例えば SaCursortAtmost() などの関数が呼び出されたとき) にバインド済みの変数内にあった値を使用します。

検索操作では、ユーザー変数は、現在行の値を含むように更新されます。また、検 索基準が関係している場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用されま す。挿入および更新の操作では、その列の新しい値はユーザー変数から取得しま す。

バインド済みの変数を「in」パラメーターとして (例えば INSERT や UPDATE の 操作で)使用する場合は、ユーザーはバッファーの割り振りと解放を行わなければ なりません。バインド済みの変数を「out」パラメーターとして使用する場合は、SA レイヤーがバッファーの割り振りと解放を行います。変数を「out」パラメーターと して使用する場合は、ユーザー変数に格納される値は、列データのローカル・コピ ーを含むバッファーを指すポインターになります。各行をリトリーブした場合、そ の行の値がこのバッファーにコピーされます。このバッファーを指すポインター は、次回 SaCursorOpen または SaCursorFree を呼び出すまで有効です。その後はポ インターを参照してはなりません。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorColData(SaCursorT* scur, char* colname. char** dataptr, unsigned* *lenptr*)

SaCursorColData 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 92. SaCursorColData のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
dataptr	in, hold	ユーザー変数を指すポインタ
lenptr	in, hold	データの長さを保持するため に使用する変数を指すポイン ター

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

SaCursorColDate

SaCursorColDate は、SaDateT 型のユーザー変数をデータベース列にバインドしま す。

検索操作では、ユーザー変数は、現在行の値を含むように更新されます。また、検 索基準が関係している場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用されま す。挿入および更新の操作では、その列の新しい値はユーザー変数から取得しま す。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorColDate(SaCursorT* scur, char* colname, SaDateT* dateptr)

SaCursorColDate 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 93. SaCursorColDate のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
dateptr	in, hold	ユーザー変数を指すポインタ

戻り値

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

参照

変数のバインドについて詳しくは、 162 ページの『SaCursorColData』 を参照してく ださい。

SaCursorColDateFormat

SaCursorColDateFormat は、日付形式のストリングをデータベース列にバインドしま す。

検索操作では、ユーザー変数は、現在行の値を含むように更新されます。また、検 索基準が関係している場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用されま す。列のデータ型によって、形式ストリングは日付、時刻、タイム・スタンプのい ずれかの形式になります。

構文

SaRetT SA EXPORT_H SaCursorColDateFormat(SaCursorT* scur, char* colname, char* dtformat)

SaCursorColDateFormat 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 94. 5	SaCursorColDateFormat	のパラメーター
---------	-----------------------	---------

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
dtformat	in, hold	日付/時刻/タイム・スタンプ の形式ストリング

戻り値

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

関連項目

変数のバインドについて詳しくは、 167 ページの『SaCursorColDynData』を参照して ください。指定可能な日付/時刻/タイム・スタンプ形式についての説明は、 189 ペ ージの『SaDateSetAsciiz』を参照してください。

SaCursorColDfloat

SaCursorColDfloat は、SaDfloatT 型のユーザー変数をデータベース列にバインドし ます。

検索操作では、ユーザー変数は、現在行の値を含むように更新されます。また、検 索基準が関係している場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用されま す。挿入および更新の操作では、その列の新しい値はユーザー変数から取得しま す。

注: SaDFloatT は SQL データ型の DECIMAL に相当します (FLOAT ではありませ ん)。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorColDfloat(SaCursorT* scur, char* colname, SaDfloatT* dfloatptr)

SaCursorColDfloat 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 95. SaCursorColDfloat のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
dtfloatptr	in, hold	ユーザー変数を指すポインタ

戻り値

SA RC SUCC またはエラー・コード

関連項目

SaCursorColDouble . .

169 ページの『SaCursorColFloat』.

変数のバインドについて詳しくは、 162 ページの『SaCursorColData』 を参照してく ださい。

SaCursorColDouble

SaCursorColDouble は、double 型のユーザー変数をデータベース列にバインドしま す。

検索操作では、ユーザー変数は、現在行の値を含むように更新されます。また、検 索基準が関係している場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用されま す。挿入および更新の操作では、その列の新しい値はユーザー変数から取得しま す。

注: C 言語のデータ型である「double」は、SQL データ型の「FLOAT」に相当しま す。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorColDouble(SaCursorT* scur, char* colname, double* doubleptr)

SaCursorColDouble 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 96. SaCursorColDouble のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
doubleptr	in, hold	ユーザー変数を指すポインター

戻り値

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

関連項目

169 ページの『SaCursorColFloat』.

165 ページの『SaCursorColDfloat』.

変数のバインドについて詳しくは、『SaCursorColDynData』 を参照してください。

SaCursorColDynData

SaCursorColDynData は、SaDynDataT 型のユーザー変数をデータベース列にバイン ドします。

検索操作では、ユーザー変数は、現在行の値を含むように更新されます。また、検 索基準が関係している場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用されま す。挿入および更新の操作では、その列の新しい値はユーザー変数から取得しま す。

検索操作では、SaDynDataMove 関数を使用して列データが SaDynDataT 変数に格納 され、これによって古いデータが上書きされます。検索の終了後、ユーザーは SaDynDataFree 関数を使用して、SaDynDataT 変数を解放する必要があります。

動的データ・オブジェクト (SaDynDataT) は、可変長データの処理を簡単にする抽 象オブジェクトです。動的データはあらゆるデータ型で使用できますが、可変長デ ータ (VARBINARY、LONG VARBINARY、VARCHAR、LONG VARCHAR など) に最適です。

データ・オブジェクトのメモリー管理は、外部からは認識されずにオブジェクト内 で行われます。動的データ・オブジェクトには、データおよび長さという、外部か ら見ることができる属性が 2 つあります。一般に、SaDynDataMove 関数および SaDynDataAppend 関数は、動的データ・オブジェクト内のデータ値の設定および変 更に使用されます。必要に応じて追加のメモリーが自動的に割り振られ、 SaDynDataFree を使用して動的データ・オブジェクトが破棄されると、関連付けられたすべてのメモリーが自動的に割り振り解除されます。ユーザーは SaDynDataGetData 関数および SaDynDataGetLen 関数を使用して、それぞれデータまたは長さにアクセスすることができます。

SaDynDataMove および SaDynDataAppend は、既にデータがメモリー・バッファー内に完全に存在している場合には使用できません。同じデータのコピーを 2 つ保持することによってメモリー使用量が増大するとともに、バッファーが大容量の場合、メモリー・コピーのオーバーヘッドが大きくなる可能性があります。したがって、(SaDynDataMove を使用してコピーするよりも) SaDynDataMoveRef を使用してデータ・ポインターを直接割り当てる方が賢明な場合があります。この場合、ユーザーは動的データ・オブジェクト自体を解放した後でのみ、メモリー・バッファーを変更または割り振り解除することができます。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaCursorColDynData(
 SaCursorT* scur,
 char* colname,
 SaDynDataT* dd)

SaCursorColDynData 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
dd	in, hold	ユーザー変数を指すポインタ

戻り値

SA RC SUCC またはエラー・コード

SaCursorColDynStr

SaCursorColDynStr は、SaDynStrT 型のユーザー変数をデータベース列にバインドします。

検索操作では、ユーザー変数は、現在行の値を含むように更新されます。また、検 索基準が関係している場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用されま す。挿入および更新の操作では、その列の新しい値はユーザー変数から取得しま す。 検索操作では、SaDynStrMove 関数を使用して列データが SaDynStrT 変数に格納さ れ、これによって古いデータが上書きされます。検索の終了後、ユーザーは SaDynStrFree 関数を使用して、SaDynStrT 変数を解放する必要があります。

ユーザーは SaDynStrT 変数を (文字の列だけではなく) 不特定型の列にバインドで きます。データは列型と動的ストリング型の間で双方向に変換されます。

動的ストリング・オブジェクト (SaDynStrT) は、可変長ストリングの処理を簡単に する抽象オブジェクトです。一般に、SaDynStrMove 関数および SaDynStrAppend 関 数は、動的ストリング・オブジェクト内のデータ値の設定および変更に使用されま す。必要に応じて追加のメモリーが自動的に割り振られ、SaDynStrFree を使用して 動的データ・オブジェクトが破棄されると、関連付けられたすべてのメモリーが自 動的に割り振り解除されます。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorColDynStr(SaCursorT* scur, char* colname, SaDynStrT* ds)

SaCursorColDynStr 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 98	SaCursorColDvnStr	のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
ds	in, hold	ユーザー変数を指すポインタ

戻り値

SA RC SUCC またはエラー・コード

関連項目

変数のバインドについて詳しくは、 167 ページの『SaCursorColDynData』 を参照し てください。

SaCursorColFloat

SaCursorColFloat は、float 型のユーザー変数をデータベース列にバインドします。

バインド後の変数は、列に書き込むか列から読み取る値、あるいは検索操作を制約 するために使用する値を (例えば SQL 内の WHERE 節に相当する部分の一部とし て)保持するために使用できます。検索操作では、ユーザー変数は、リトリーブさ れた現在行から読み取った値を含むように更新されます。また、検索基準が関係し

ている場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用できます。更新および挿 入の操作では、バインド済みのユーザー変数から新しい値が取得され、データベー ス内の列に書き込まれます。

注: C 言語の「float」データ型は、SQL の「FLOAT」データ型ではなく、SQL の 「SMALLFLOAT」データ型に相当します。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorColFloat(SaCursorT* scur, char* colname. float* floatptr)

SaCursorColFloat 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 99. SaCursorColFloat のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
floatptr	in, hold	ユーザー変数を指すポインタ

戻り値

SA RC SUCC またはエラー・コード

関連項目

166ページの『SaCursorColDouble』.

165 ページの『SaCursorColDfloat』.

変数のバインドについて詳しくは、167ページの『SaCursorColDynData』 を参照し てください。

SaCursorCollnt

SaCursorColInt は、int 型のユーザー変数をデータベース列にバインドします。

バインド後の変数は、列に書き込むか列から読み取る値、あるいは検索操作を制約 するために使用する値を (例えば SOL 内の WHERE 節に相当する部分の一部とし て)保持するために使用できます。検索操作では、ユーザー変数は、リトリーブさ れた現在行から読み取った値を含むように更新されます。また、検索基準が関係し ている場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用できます。更新および挿 入の操作では、バインド済みのユーザー変数から新しい値が取得され、データベー ス内の列に書き込まれます。

注: C 言語の「int」データ型はプラットフォームに依存しますが、SQL データ型 (TINYINT、 SMALLINT、INT、および BIGINT) はプラットフォームに依存しませ ん。適切な C 言語データ型と値を、対応する SQL データ型にマップするように注 意しなければなりません。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorColInt(SaCursorT* scur, char* colname, int* intptr)

SaCursorColInt 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 100. SaCursorColInt のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
intptr	in, hold	ユーザー変数を指すポインター

戻り値

SA RC SUCC またはエラー・コード

関連項目

変数のバインドについて詳しくは、167ページの『SaCursorColDynData』 を参照し てください。

SaCursorColLong

SaCursorColLong は、ユーザー変数をデータベース列にバインドします。

バインド後の変数は、列に書き込むか列から読み取る値、あるいは検索操作を制約 するために使用する値を (例えば SQL 内の WHERE 節に相当する部分の一部とし て)保持するために使用できます。検索操作では、ユーザー変数は、リトリーブさ れた現在行から読み取った値を含むように更新されます。また、検索基準が関係し ている場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用できます。更新および挿 入の操作では、バインド済みのユーザー変数から新しい値が取得され、データベー ス内の列に書き込まれます。

注: C 言語の「long」データ型はプラットフォームに依存しますが、SOL データ型 (TINYINT、SMALLINT、INT、および BIGINT) はプラットフォームに依存しませ ん。適切な C 言語データ型と値を、対応する SOL データ型にマップするように注 意しなければなりません。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaCursorColLong(SaCursorT* scur, char* colname, long* longptr)

SaCursorColLong 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 101. SaCursorColLong のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
longptr	in, hold	ユーザー変数を指すポインタ

戻り値

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

関連項目

変数のバインドについて詳しくは、167ページの『SaCursorColDynData』 を参照し てください。

SaCursorColNullFlag

SaCursorColNullFlag は、NULL 値フラグを列にバインドします。

列値が NULL の場合、* p_isnullflag の値は 1 で、それ以外の場合、値は 0 で す。* p isnullflag の値は、フェッチ操作中に自動的に更新されます。検索操作で は、ユーザー変数は、現在行の値を含むように更新されます。また、検索基準が関 係している場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用されます。挿入およ び更新中は、*p_isnullflag がゼロ以外の場合に NULL 値がデータベースに挿入さ れます。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorColNullFlag(SaCursorT* scur, char* colname, int* p isnullflag)

SaCursorColNullFlag 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 102. SaCursorColNullFlag パラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	 カーソル・オブジェクトを指すポインター

表 102. SaCursorColNullFlag パラメーター (続き)

パラメーター	使用タイプ	説明
colname	in, use	列名
p_isnullflag	in, hold	フェッチ操作中に NULL の状況が格納され、挿入および更 新の操作中に NULL の状況の取得元となる整数変数を指す ポインター

SA RC SUCC またはエラー・コード

関連項目

変数のバインドについて詳しくは、 167 ページの『SaCursorColDynData』 を参照し てください。

SaCursorColStr

SaCursorColStr は、ユーザー変数をデータベース列にバインドします。

検索操作では、ユーザー変数は、現在行の値を含むように更新されます。また、検 索基準が関係している場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用されま す。挿入および更新の操作では、その列の新しい値はユーザー変数から取得しま す。

検索操作では、ユーザー変数に格納される値は、列データのローカル・コピーを指 すポインターになります。データ・ポインターは、次回 SaCursorOpen または SaCursorFree を呼び出すまで有効です。その後はポインターを参照してはなりませ h.

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaCursorColStr(SaCursorT* scur, char* colname, char** strptr)

SaCursorColStr 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 103. SaCursorColStr のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
strptr	in, hold	ユーザー変数を指すポインター

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

関連項目

変数のバインドについて詳しくは、 167 ページの『SaCursorColDynData』 を参照し てください。

SaCursorColTime

SaCursorColTime は、SaDateT 型のユーザー変数をデータベース列にバインドしま す。

検索操作では、ユーザー変数は、現在行の値を含むように更新されます。また、検 索基準が関係している場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用されま す。挿入および更新の操作では、その列の新しい値はユーザー変数から取得しま す。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorColTime(SaCursorT* scur, char* colname, SaDateT* timeptr)

注: timeptr のデータ型は実際には SaDateT です。時間データ用の別の SaTimeT は ありません。

SaCursorColTime 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 104. SaCursorColTime のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
timeptr	in, hold	ユーザー変数を指すポインタ

戻り値

SA RC SUCC またはエラー・コード

関連項目

変数のバインドについて詳しくは、167ページの『SaCursorColDynData』 を参照し てください。

SaCursorColTimestamp

SaCursorColTimestamp は、SaDateT 型のユーザー変数をデータベース列にバインド します。

検索操作では、ユーザー変数は、現在行の値を含むように更新されます。また、検 索基準が関係している場合、この関数はそれらの値を受け渡すために使用されま す。挿入および更新の操作では、その列の新しい値はユーザー変数から取得しま す。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaCursorColTimestamp(SaCursorT* scur, char* colname, SaDateT* timestampptr)

注: timeptr のデータ型は実際には SaDateT です。タイム・スタンプ・データ用の別 の SaTimestampT はありません。

SaCursorColTimestamp 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 105. SaCursorColTimestamp の	パラ	メーター	
-------------------------------	----	------	--

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
timestampptr	in, hold	ユーザー変数を指すポインター

戻り値

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

関連項目

変数のバインドについて詳しくは、 167 ページの『SaCursorColDynData』 を参照し てください。

SaCursorCreate

SaCursorCreate は、表名で指定された表にカーソルを作成します。表が存在してい ない場合は操作が失敗します。

構文

SaCursorT* SA EXPORT H SaCursorCreate(SaConnectT* scon. char* tablename)

SaCursorCreate 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 106. SaCursorCreate のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	in, hold	接続オブジェクトを指すポイ ンター
tablename	in, use	表名

パラメーター scon の使用タイプは「hold」です。これは、作成されたカーソル・オ ブジェクトが、関数呼び出しが戻った後も、scon オブジェクトを参照し続けるため です。

表 107. 戻り値

戻り使用タイプ	説明
	カーソル・オブジェクトを指すポインター、 または表が存在しない場合は NULL

SaCursorDelete

SaCursorDelete は、カーソル内の現在行をデータベースから削除します。カーソル は行に位置付ける必要があります。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaCursorDelete(SaCursorT* scur)

SaCursorDelete 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 108. SaCursorDelete のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター

戻り値

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

SaCursorDescending

SaCursorDescending は、列に降順ソート基準を指定します。

複数の列でソートするには、列ごとにこの関数を 1 回呼び出す必要があります。

列にキー (主キーや索引) がない場合、行はサーバー側ではなく、ローカルに (クラ イアント上で) ソートされます。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaCursorDescending(SaCursorT* scur, char* colname)

SaCursorDescending 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 109. SaCursorDescending のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名

戻り値

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

SaCursorEnd

SaCursorEnd は、セットの最後にカーソルを位置付けます。それ以降 SaCursorPrev を呼び出すと、セットの最後の行にカーソルが位置付けられます。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorEnd(SaCursorT* scur)

SaCursorEnd 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 110. SaCursorEnd のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	I .	カーソル・オブジェクトを指 すポインター

戻り値

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

SaCursorEqual

SaCursorEqual は、列に等価検索基準を指定します。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaCursorEqual(SaCursorT* scur, char* colname)

SaCursorEqual 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 111. SaCursorEqual のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名

SA RC SUCC またはエラー・コード

SaCursorErrorInfo

SaCursorErrorInfo は、カーソル内の前回の操作からエラー情報を返します。

構文

bool SA EXPORT H SaCursorErrorInfo(SaCursorT* scur, char** errstr, int* errcode)

SaCursorErrorInfo 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 112. SaCursorErrorInfo のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
errstr	out, ref	NULL 以外の場合は、エラー・ストリングのローカル・コピーを指すポインターが * errstr に格納されます。
errcode	out	NULL 以外の場合は、エラ ー・コードが * errcode に格 納されます。

戻り値

エラーがある場合は TRUE が返され、errstr および errcode が更新されます。

エラーがない場合は FALSE が返され、errstr および errcode が更新されません。

SaCursorFree

SaCursorFree は、カーソルを解放します。この呼び出し以降、カーソル・ポインタ ーが無効になります。

構文

void SA EXPORT H SaCursorFree(SaCursorT* scur)

SaCursorFree 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 113. SaCursorFree のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, take	カーソル・オブジェクトを指 すポインター

戻り値

なし

SaCursorInsert

SaCursorInsert は、新しい行をデータベースに挿入します。新しい行の列の値は、列 にバインドされたユーザー変数から取得されます。新しい行を挿入するには、カー ソルをオープンしておく必要があります。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorInsert(SaCursorT* scur)

SaCursorInsert 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 114. SaCursorInsert のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター

戻り値

SA RC SUCC またはエラー・コード

SaCursorLike

SaCursorLike は、列に類似基準を指定します。

値には SQL の「_」または「%」のようなワイルドカード文字は含むことはできま せん。列の値にこれらの文字が含まれていると、システムがエスケープ文字により 引用符でこれらの文字を囲みます。したがって、類似値は「%」文字で終わるワイ ルドカード文字のない SQL の類似値と実質的には同じです。例えば、列内の 「MARK」を検索するようにエンジンに指定した場合、エンジンは「MARK」、 「MARK SMITH」、および「MARKETING」など、「MARK」で始まるすべての値 を検索します。

類似値は、列にバインドされたユーザー変数から取得します。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaCursorLike(SaCursorT* scur, char* colname, int likelen)

SaCursorLike 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 115. SaCursorLike のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名
likelen	in	類似部分の長さ (ストリング 終止符を除く)

戻り値

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

SaCursorNext

SaCursorNext は、データベースから次の行をフェッチします。列にバインドされた すべてのユーザー変数が更新されます。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaCursorNext(SaCursorT* scur)

SaCursorNext 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 116. SaCursorNext のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター

戻り値

SA_RC_SUCC: 検出された次の行

SA_RC_END: 検索終了

SaCursorOpen

SaCursorOpen は、カーソルをオープンします。

カーソルをオープンする前に、すべての SaCursorColXXX 操作を実行しておく必要 があります。カーソルをオープンすると、実行している可能性がある既存の検索が 終了します。また、カーソルに指定されたすべての検索基準が消去されます。

カーソルをオープンすると、ユーザーは新しい行をカーソルに挿入するか、検索基 準を指定することができます。検索を開始するには、カーソルをオープンしておく 必要があります。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorOpen(SaCursorT* scur)

SaCursorOpen 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 117. SaCursorOpen のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur		カーソル・オブジェクトを指 すポインター

戻り値

SA RC SUCC またはエラー・コード

SaCursorOrderbyVector

SaCursorOrderbyVector を使用して、検索で使用する列の順序を指定します。

初期値を値のベクトルとして使用して、キー内の検索開始位置を指定します。初期 値はキー内の開始点の選択だけに使用されます。その後、初期値は列の値と照合さ れることはありません。複数の基準を指定すると、指定された順序で処理されま す。順序付けのための正しいキーが必要です。

初期値は、列にバインドされたユーザー変数から取得します。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorOrderbyVector(SaCursorT* scur, char* colname)

SaCursorOrderbyVector 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 118. SaCursorOrderbyVector のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
colname	in, use	列名

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

SaCursorOrderbyVector の例

```
/* これらの変数は、「I」と「J」の名前が付いた列にバインドされます。*/
int i, j;
/* このカーソル内の列に変数をバインドします。*/
SaCursorColStr(scur, "I", 'i);
SaCursorColStr(scur, "J", 'j);
/* 検索に使用する値を設定します。*/
i = 2;
j = 1;
/* 列の順序を指定します。*/
SaCursorOrderByVector(scur, "I");
SaCursorOrderByVector(scur, "J");
/* 一致する値がないか、カーソルを検索します。*/
SaCursorSearch(scur);
上記は、以下の SOL WHERE 節と同等です。
...WHERE (i,j) >= (2,1)
```

SaCursorPrev

SaCursorPrev は、データベースから前の行をフェッチします。列に現在バインドさ れているすべてのユーザー変数が更新されます。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaCursorPrev(SaCursorT* scur)

SaCursorPrev 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 119. SaCursorPrev のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur		カーソル・オブジェクトを指 すポインター

戻り値

SA RC SUCC: 検出された前の行

SA_RC_END: 検出の冒頭 (既に先頭行にいるので、前の行はありません)

注: SA RC END はカーソルのどちらの端 (先頭または最後) にでも適用できます。

SaCursorReSearch

SaCursorReSearch は、古い検索基準を使用して、新しい検索を開始します。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorReSearch(SaCursorT* scur) SaCursorReSearch 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 120. SaCursorReSearch のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター

SA RC SUCC、SA RC END、またはエラー・コード。エラー・コードのリストに ついては、150ページの『データベース・エラーの処理』を参照してください。

SaCursorSearch

SaCursorSearch は、カーソル内の検索を開始します。検索開始後、ユーザーはデー タベースから行をフェッチすることができます。各検索は個別のトランザクション として実行され、検索開始後は現行ユーザーやその他のユーザーによる変更を認識 しません。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorSearch(SaCursorT* scur)

SaCursorSearch 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 121. SaCursorSearch のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
SCUT		カーソル・オブジェクトを指 すポインター

戻り値

SA_RC_SUCC、SA_RC_END、またはエラー・コード

SaCursorSearchByRowid

SaCursorSearchByRowid は、rowid で指定された行が検索セットに含まれる新しい検 索を開始します。

SaCursorSearchByRowid は rowid に従って検索を行うだけなので、1 行またはゼロ 行を返します。以前の検索制約は解除されず、次回 SaCursorReSearch を呼び出す際 にも有効になります。

特定のレコードの rowid を取得するには、rowid 列の値を読み取ります。各表には rowid 列があります。CREATE TABLE または ALTER TABLE ステートメント内 で rowid 列を明示的に作成する必要はありません。

構文

```
SaRetT SA EXPORT H SaCursorSearchByRowid(
   SaCursorT* scur,
    void* rowid,
   int rowidlen)
```

SaCursorSearchByRowid 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 122. SaCursorSearchByRowid のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指すポインター
rowid	in, use	rowid を含むデータ域を指すポインター。rowid は「void *」として宣言されますが、ストリング (char *) の形式で なければなりません。
rowidlen	in	rowid パラメーターが指すデータ (ストリング) の長さ

戻り値

SA_RC_SUCC、SA_RC_END、またはエラー・コード

SaCursorSearchReset

SaCursorSearchReset は、検索カーソルをリセットします。

古い検索制約が使用されますが、その値はユーザー・バッファー(すなわち、パラ メーター) から再度読み取られます。使用する特定の値以外は同一の照会を使用し て繰り返し検索を行う場合は、これによってパフォーマンスを向上することができ ます。

例えば、特定のユーザーや接続が、特定の表の ID 列に基づいて常にその表を検索 し、検索のたびに異なる ID 値を使用すると仮定します。次の ID を検索するため の「新しい」照会を作成する代わりに、既存の照会をリセットして、新しい値を使 用することができます。

例えば、以下のような既存のコードがあると仮定します。

```
/* 変数を列にバインドします。*/
SaCursorColInt(scur, "MY_COL_NAME", &search_parameter1);
/* 毎回異なる値を使用して照会を繰り返します。*/
while (there_are_more_values_to_look_for) {
  /* 検索する値のパラメーターを設定します。*/
  search parameter1 = some value;
  /* 検索基準を指定します。*/
  rc = SaCursorEqual(scur, "MY_COL_NAME");
  /* 検索基準とパラメーター値を使用する新しい照会を作成します。*/
  rc = SaCursorSearch(scur);
   /* 検索基準に一致する行 (複数可) を取得します。*/
  rc = SaCursorNext(scur);
  /* リトリーブしたデータを処理します... */
   foo();
   . . .
```

```
/* 次のループを反復する前に、古い照会を削除します。*/
rc = SaCursorClearConstr(scur);
```

以下の例のようにコードを変更することで、ほとんどの場合にパフォーマンスを向 上できます。

```
/* 変数を列にバインドします。*/
SaCursorColInt(scur, "MY COL NAME", &search parameter1);
/* 新しい照会を作成します。*/
rc = SaCursorEqual(scur, "MY COL NAME");
rc = SaCursorSearch(scur);
/* 検索する値のパラメーターを設定します。*/
search parameter1 = some value;
/* 毎回異なる値を使用して照会を繰り返します。*/
while (there are more values to look for)
   /* 検索基準に一致する行 (複数可) を取得します。*/
  rc = SaCursorNext(scur);
   /* リトリーブしたデータを処理します... */
  foo();
   /* 次に検索する値のパラメーターを設定します。*/
   search parameter1 = some value;
   /* 既存の照会をリセットして、パラメーター内の最新の値を使用します。*/
   rc = SaCursorSearchReset(scur);
   }
```

SaCursorSearchReset() を使用すると、制約条件 (上記の例では「Equal」) の再指定 や、SaCursorSearch() の呼び出しを毎回行う必要がなくなります。

SaCursorSearchReset は新しい結果セットの先頭にカーソルをリセットします。例え ば、制約がまったくない検索をリセットすると、カーソルの位置は表の先頭に変更 されます。

注: この関数を呼び出す前に、バッファー内の検索パラメーター値を必ず更新する ようにしてください。この関数呼び出し中に、新しい値が読み取られます。

制限

- 1. SaCursorSearchReset() は以下のシナリオでは使用できません。
 - 検索でローカル・ソートが行われます。つまり、検索で使用される索引では処 理できないソート基準があります。
 - SaCursorSearchByRowid で rowid による検索が行われます。

このようなケースでは、SaCursorSearchReset は SA ERR NORESETSEARCH を 返します。

2. 制約内で使用する各「類似」値は同じ長さでなければなりません。これは、 SaCursorLike()が「類似」制約の長さを引数として使用するが、 SaCursorSearchReset() を呼び出すとこの長さを変更できないからです。例えば、 以下のシーケンスの「類似」値を使用すると、すべてが同じ長さなので、関数は 正しく機能します。

```
"SMITH"
```

[&]quot;JONES"

ただし、以下のようなシーケンスの「類似」値を使用すると、この関数は正しく 機能しません。

"SMITH"

"JOHNSON"

3. 同じ列のバインディングを使用して複数の制約を設定する場合は、 SaCursorSearchReset を使用することは、通常、実用的ではありません。例えば、 1 から 10 までの範囲 (1 と 10 を含む) で「col」の値を検索するとします。以 下のような例になります。

```
SaCursorColInt(scur, "col", &i);
i = 1;
SaCursorAtleast(scur, "col");
i = 10;
SaCursorAtmost(scur, "col");
```

このような検索をリセットすると、変数 i から一度だけ列の新しい値が読み取ら れます。したがって、サーバーは 1 つの値を読み取り、それを上限および下限 の両方として使用します。例えば、以下のようなコードを使用すると仮定しま す。

```
i = 5;
SaCursorSearchReset(scur);
```

このコードでは 5 <= i <= 5 という検索を行いますが、これは望ましい結果で はありません。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorSearchReset(SaCursorT* scur

SaCursorSearchReset 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 123. SaCursorSearchReset のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター

戻り値

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

SaCursorSetLockMode

SaCursorSetLockMode は、カーソルの検索モードを設定します。

この設定は、サーバーで可能なロック方式モードに影響を及ぼします。検索が既に アクティブな場合は、設定は同じカーソルで行われる次の検索でのみ有効です。デ フォルトの検索モードは SA_LOCK_SHARE です。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorSetLockMode(SaCursorT* scur, sa_lockmode_t lockmode)

SaCursorSetLockMode 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 124. SaCursorSetLockMode のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指すポインター
lockmode	in	以下のいずれかの検索モードです。
		SA_LOCK_SHARE
		SA_LOCK_FORUPDATE
		SA_LOCK_EXCLUSIVE

各モードの意味は以下のとおりです。

- SA_LOCK_SHARE: デフォルトのオプティミスティック並行性制御。
- SA_LOCK_FORUPDATE: 更新する行をロックします。他のユーザーは読み取りだ けが行え、書き込みは行えません。
- SA LOCK EXCLUSIVE: 行を排他的にロックします。他のユーザーはこのレコー ドを読み取ることも、書き込むこともできません。

注: この関数は任意の表に適用されます。この関数を適用するために、表を特定の ロック・モードにする必要はありません。

戻り値

SA_RC_SUCC

SA_ERR_ILLENUMVAL

SaCursorSetPosition

SaCursorSetPosition は、キー値で指定された行にカーソルを位置付けます。キー値 は、ユーザーがバインド済みの、制約指定がある列変数から取得されます。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorSetPosition(SaCursorT* scur)

SaCursorSetPosition 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 125. SaCursorSetPosition のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur		カーソル・オブジェクトを指 すポインター

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

SaCursorSetRowsPerMessage

SaCursorSetRowsPerMessage は、1 つのネットワーク・メッセージでサーバーからクライアントに送信する行の数を設定します。

関数 SaCursorSearch によって検索が開始された後は、この設定は無効です。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H
 SaCursorSetRowsPerMessage(
 SaCursorT* scur,
 int rows_per_message)

SaCursorSetRowsPerMessage 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 126. SaCursorSetRowsPerMessage のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur	in, use	カーソル・オブジェクトを指 すポインター
rows_per_message	in	1 つのネットワーク・メッセ ージで送信する行の数

戻り値

SA_RC_SUCC: 成功

SA_ERR_FAILED: エラー、rows_per_message < 1

SaCursorUpdate

SaCursorUpdate は、データベースのカーソルの現在行を更新します。

カーソルは行に位置付ける必要があります。新しい行の列の値は、列にバインドされたユーザー変数から取得されます。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaCursorUpdate(SaCursorT* scur)

SaCursorUpdate 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 127. SaCursorUpdate のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scur		カーソル・オブジェクトを指 すポインター

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

SaDateCreate

SaDateCreate は、新しい日付オブジェクトを作成します。

日付オブジェクトに格納される日付は未定義です。

構文

SaDateT* SA_EXPORT_H SaDateCreate(void)

SaDateCreate 関数はパラメーターを受け入れません。

戻り値

表 128. SaDateCreate の戻り値

戻り使用タイプ	説明
give	新しい日付オブジェクト

SaDateFree

SaDateFree は、日付オブジェクトを解放します。

この呼び出し後は、その目付オブジェクトが無効となり使用できなくなります。

構文

void SA_EXPORT_H SaDateFree(SaDateT* date)

SaDateFree 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 129. SaDateFree のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
date	in, take	日付オブジェクト

戻り値

なし

SaDateSetAsciiz

SaDateSetAsciiz は、ASCII ゼロ・ストリング日付を日付オブジェクトに設定しま す。

形式ストリングでは、以下の特殊文字が認識されます。

YYYY 世紀を含む年

ΥY デフォルトの世紀 1900 での年

MM 月

```
日
DD
           日
D
          時
ΗН
Н
          分分分
NN
          秒
SS
           秒
S
FFF
          秒の小数部、1/1000 秒
```

すべてのフィールドはオプションです。フィールドは形式ストリングに従ってスキ ャンされ、一致すると、そのフィールドが正しい値で置き換えられます。フォーマ ット内のその他のすべての文字は、そのまま処理されます。

2 文字 (例えば、「MM」、「DD」など) の場合、値が 2 桁で表現されることを意 味しています (1 から 9 の値は、前に文字 0 を付けて、例えば 01 と表現されま す)。単一の文字は、可能な場合には値を 1 桁で表現することを意味しています。 例えば、日付形式を "YY-M-D" と定義した場合、1999 年 1 月 2 日は "99-1-2" の ようになります。日付形式を "YY-MM-DD" と定義した場合、この日付は "99-01-02" のようになります。

以下の例に、日付形式の使用法を示します。

SaDateSetAsciiz(date, "YY-MM-DD", "94-09-13"); SaDateSetAsciiz(date, "MM/DD/YY HH.NN", "09/13/94 19.20");

デフォルトの日付形式は YYYY-MM-DD HH:NN:SS であり、ここで時刻フィール

構文

```
SaRetT SA EXPORT H SaDateSetAsciiz(
   SaDateT* date,
    char* format,
    char* asciiz)
```

ドはオプションです。

SaDateSetAsciiz 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 130. SaDateSetAsciiz のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
date	in, out	日付オブジェクト
format	in, use	asciiz (ゼロ終了 ASCII) バッファーの日付形式、またはデフォルトのフォーマットを使用する場合には NULL
asciiz	in, use	asciiz (ゼロ終了 ASCII) ストリング・フォーマットのデータを含むバッファー

戻り値

SA_RC_SUCC

SA_ERR_FAILED

SaDateSetTimet

SaDateSetTimet は、入力値を「timet」という名前の変数から「date」という名前の変 数にコピーします。この値は、time t フォーマット (C ライブラリー関数 time() か ら返されるフォーマット)から SaDateT フォーマットに自動的に変換されます。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaDateSetTimet(SaDateT* date, long timet)

SaDateSetTimet 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 131. SaDateSetTimet のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
date	use	日付オブジェクト
timet	in	time_t フォーマットの新しい
		日付値

戻り値

SA_RC_SUCC

SA_ERR_FAILED

SaDateToAsciiz

SaDateToAsciiz は、ASCII ゼロ終了ストリング・フォーマットで日付を格納しま す。

別の日付形式については、189ページの『SaDateSetAsciiz』を参照してください。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaDateToAsciiz(SaDateT* date, char* format, char* asciiz)

SaDateToAsciiz 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 132. SaDateToAsciiz のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
date	in, use	日付オブジェクト
format	in, use	asciiz (ゼロ終了 ASCII) バッファーでの日付形式、または デフォルトのフォーマットを使用する場合には NULL

表 132. SaDateToAsciiz のパラメーター (続き)

パラメーター	使用タイプ	説明
asciiz	out	日付を格納するバッファー 注:呼び出し元は、この関数を呼び出す前に十分に大きい バッファーを割り振る必要があること、またバッファーの 処理の終了時にこのバッファーを割り振り解除する必要が あることに注意してください。

 SA_RC_SUCC

SA_ERR_FAILED

SaDateToTimet

SaDateToTimet は、日付を time_t フォーマットで格納します。time_t の日付は、C ライブラリー関数 time() で返される値と同じです。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaDateToTimet(SaDateT* date, long* p_timet)

SaDateToTimet 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 133. SaDateToTimet のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
date	in, use	日付オブジェクト
timet	out	time_t フォーマットで日付を 格納する long 変数を指すポ
		インター

戻り値

SA_RC_SUCC

SA_ERR_FAILED

SaDefineChSet

SaDefineChSet は、クライアント文字セットを定義します。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaDefineChSet(SaConnectT* scon, SaChSetT chset)

SaDefineChSet 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 134. SaDefineChSet のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	in out	接続オブジェクトを指すポインター
chset	in	列挙型文字指定。有効な文字セットは、sa.h ファイルに リストされており、 SA_CHSET_DEFAULT、SA_CHSET_ANSI などが含まれ ています。

注: scon パラメーターはこの関数呼び出しで変更されるため、scon の使用タイプに は「out」が含まれます。

戻り値

OK の場合には SA_RC_SUCC、または指定した文字セットがサポートされない場合 には SA_ERR_CHSETUNSUPP

SaDfloatCmp

SaDfloatCmp は、2 つの dfloat 値を比較します。

構文

int SA_EXPORT_H SaDfloatCmp(SaDfloatT* p_dfl1 , SaDfloatT* p dfl2)

SaDfloatCmp 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 135. SaDfloatCmp のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
p_dfl1	in, use	dfloat 変数を指すポインター
p_dfl2	in, use	dfloat 変数を指すポインター

戻り値

p_dfl1 < p_dfl2 の場合 < -1 p dfl1 = p dfl2 の場合 = p dfl1 > p dfl2 の場合 > 1

これは、C の strcmp() 関数と同等のものであり、この C 関数は、最初のパラメー ターが 2 番目のパラメーターより小さい場合には負数、2 つが等しい場合にはゼ ロ、最初のパラメーターが 2 番目のパラメーターより大きい場合には正数 (ゼロよ り大きい)を返します。

SaDfloatDiff

SaDfloatDiff は、2 つの dfloat 値の差 (つまり、p_dfl1 - p_dfl2) を計算します。そ の結果は、* p_result_dfl に格納されます。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaDfloatDiff(SaDfloatT* p_result_dfl, SaDfloatT* p_dfl1, SaDfloatT* p_dfl2)

SaDfloatDiff 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 136. SaDfloatDiff のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
p_result_dfl	out	結果を格納する dfloat 変数を 指すポインター
p_dfl1	in, use	dfloat 変数を指すポインター
p_df12	in, use	dfloat 変数を指すポインター

戻り値

SA_RC_SUCC

SA_ERR_FAILED

SaDfloatOverflow

SaDfloatOverflow は、dfloat にオーバーフロー値が含まれるか検査します。

構文

int SA_EXPORT_H SaDfloatOverflow(SaDfloatT* *p_dfl*)

SaDfloatOverflow 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 137. SaDfloatOverflow のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
p_dfl	in, use	dfloat 変数を指すポインター

戻り値

1: dfloat 値がオーバーフロー値の場合

0: dfloat 値がオーバーフロー値ではない場合

SaDfloatProd

SaDfloatProd は、2 つの dfloat 値の積を計算します。その結果は、* p_result_dfl に 格納されます。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaDfloatProd(SaDfloatT* p_result_dfl, SaDfloatT* p_dfl1, SaDfloatT* p_dfl2)

SaDfloatProd 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 138. SaDfloatProd のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
p_result_dfl	out	結果を格納する dfloat 変数を 指すポインター
p_dfl1	in	dfloat 変数を指すポインター
p_df12	in	dfloat 変数を指すポインター

戻り値

SA_RC_SUCC

SA_ERR_FAILED

SaDfloatQuot

SaDfloatQuot は、2 つの dfloat 値の商 (つまり、p_dfl1/p_dfl2) を計算します。その 結果は、* p_result_dfl に格納されます。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaDfloatQuot(SaDfloatT* p result dfl, SaDfloatT* p_dfl1, SaDfloatT* p_dfl2)

SaDfloatQuot 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 139. SaDfloatQuot のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
p_result_dfl	out	結果を格納する dfloat 変数を 指すポインター
p_dfl1	in	dfloat 変数を指すポインター
p_dfl2	in	dfloat 変数を指すポインター

SA_RC_SUCC

SA_ERR_FAILED

SaDfloatSetAsciiz

SaDfloatSetAsciiz は、ゼロ終了 ASCII ストリングから dfloat 値を設定します。

構文

```
SaRetT SA_EXPORT_H SaDfloatSetAsciiz(
    SaDfloatT* p_dfl,
    char* asciiz)
```

SaDfloatSetAsciiz 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 140. SaDfloatSetAsciiz のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
p_dfl1	out	結果を格納する dfloat 変数を 指すポインター
asciiz	in	ゼロ終了 ASCII ストリング として dfloat 値を読み取るバ ッファー

戻り値

SA_RC_SUCC

SA_ERR_FAILED

SaDfloatSum

SaDfloatSum は、2 つの dfloat 値の和を計算します。その結果は、* p_result_dfl に 格納されます。

構文

```
SaRetT SA_EXPORT_H SaDfloatSum(
    SaDfloatT* p_result_dfl,
    SaDfloatT* p_dfl1,
    SaDfloatT* p dfl2)
```

SaDfloatSum 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 141. SaDfloatSum のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
p_result_dfl		結果を格納する dfloat 変数を 指すポインター
p_dfl1	in	dfloat 変数を指すポインター

表 141. SaDfloatSum のパラメーター (続き)

パラメーター	使用タイプ	説明
p_dfl2	in	dfloat 変数を指すポインター

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

SaDfloatToAsciiz

SaDfloatToAsciiz は、dfloat 値を asciiz (ゼロ終了 ASCII) ストリングとして格納し ます。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaDfloatToAsciiz(SaDfloatT* p_dfl, char* asciiz)

SaDfloatToAsciiz 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 142. SaDfloatToAsciiz のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
p_dfl	in	dfloat 変数を指すポインター
asciiz	out	dfloat を asciiz (ゼロ終了 ASCII) ストリング・フォーマットで格納するバッファー。そのメモリーは、呼び出し元が事前に割り振る必要があります。

戻り値

SA_RC_SUCC

SA_ERR_FAILED

SaDfloatUnderflow

SaDfloatUnderflow は、dfloat にアンダーフロー値が含まれるか検査します。

構文

int SA_EXPORT_H SaDfloatUnderflow(SaDfloatT* p dfl)

SaDfloatUnderflow 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 143. SaDfloatUnderflow のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
p_dfl	in, use	dfloat 変数を指すポインター

- 1: dfloat 値がアンダーフロー値の場合
- 0: dfloat 値がアンダーフロー値ではない場合

SaDisconnect

SaDisconnect は、solidDB サーバーからユーザーを切断します。

構文

void SA_EXPORT_H SaDisconnect(SaConnectT* scon)

SaDisconnect 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 144. SaDisconnect のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	in, take	接続オブジェクトを指すポインター

戻り値

なし

SaDynDataAppend

SaDynDataAppend は、動的データ・オブジェクトにデータを付加します。

構文

```
void SA_EXPORT_H SaDynDataAppend(
   SaDynDataT* dd,
   char* data,
   unsigned len)
```

SaDynDataAppend 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 145. SaDynDataAppend のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
dd	use	動的データ・オブジェクト
data	in out, use	dd に付加するデータ
len	in	付加するデータの長さ

戻り値

なし

関連項目

変数のバインドについて詳しくは、 167 ページの『SaCursorColDynData』を参照して ください。

SaDynDataChLen

SaDynDataChLen は、動的データ・オブジェクトのデータ域の長さを変更します。 必要に応じて、メモリーの割り振りと割り振り解除を行います。

新しい長さが現在の長さよりも小さい場合、データ域が切り捨てられます。新しい 長さが現在の長さよりも大きい場合、新しいデータ域の内容はスペース文字で初期 化されます。

構文

void SA EXPORT H SaDynDataChLen(SaDynDataT* dd, unsigned len)

SaDynDataChLen 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 146. SaDynDataChLen のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
dd	in out, use	動的データ・オブジェクト
len	in	動的データ・オブジェクトの
		新しいデータ域の長さ

戻り値

なし

関連項目

「動的データ」(SaDynDataT) について詳しくは、167ページの 『SaCursorColDynData』を参照してください。

SaDynDataClear

SaDynDataClear は、SaDynDataT オブジェクトからメモリーの割り振りを解除しま す。

SaDynDataClear は、データを割り振り解除しますが、SaDynDataT オブジェクト自 体は割り振り解除しません。SaDynDataClear の結果として、SaDynDataCreate から 返された「空」の動的データ・オブジェクトが残されます。SaDynDataT オブジェク ト自体は、SaDynDataFree 関数を使用して別途割り振り解除する必要があります。

構文

void SA EXPORT H SaDynDataClear(SaDynDataT* dd)

SaDynDataClear 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 147. SaDynDataClear のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
dd	in out, use	動的データ・オブジェクト

戻り値

なし

関連項目

「動的データ」(SaDynDataT) について詳しくは、167ページの『SaCursorColDynData』を参照してください。

SaDynDataCreate

SaDynDataCreate は、新しい動的データ・オブジェクトを作成します。動的データ・オブジェクトは、可変量の不特定型データを保持できるオブジェクトです。

動的データ・オブジェクトは、他の SaDynDataXXX 関数を使用して操作できます。

構文

SaDynDataT* SA EXPORT H SaDynDataCreate(void)

SaDynDataCreate はパラメーターを受け入れません。

戻り値

表 148. SaDynDataCreate の戻り値

戻り使用タイプ	説明
give	新しい空の動的データ・オブジェクト。エラ ーの場合には、NULL を返します。

関連項目

「動的データ」(SaDynDataT) について詳しくは、167ページの『SaCursorColDynData』を参照してください。

SaDynDataFree

SaDynDataFree は、動的データ・オブジェクトを解放します。この呼び出し後は、動的データ・オブジェクト・ポインターが無効になり使用できなくなります。

構文

void SA_EXPORT_H SaDynDataFree(
 SaDynDataT* dd)

SaDynDataFree 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 149. SaDynDataFree のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
dd	in, take	動的データ・オブジェクト

なし

関連項目

「動的データ」(SaDynDataT) について詳しくは、167ページの 『SaCursorColDynData』を参照してください。

SaDynDataGetData

SaDynDataGetData は、動的データ・オブジェクトのデータ域を指すポインターを返 します。

構文

char* SA_EXPORT_H SaDynDataGetData(SaDynDataT* dd)

SaDynDataGetData 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 150. SaDynDataGetData のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
dd	in, use	動的データ・オブジェクト

戻り値

動的データ・オブジェクトのローカル・データ域への参照

関連項目

「動的データ」(SaDynDataT) について詳しくは、167ページの 『SaCursorColDynData』を参照してください。

SaDynDataGetLen

SaDynDataGetLen は、動的データ・オブジェクトのデータ域の長さを返します。

構文

unsigned SA_EXPORT_H SaDynDataGetLen(SaDynDataT* dd)

SaDynDataGetData 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 151. SaDynDataGetData のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
dd	in, use	動的データ・オブジェクト

データ域の長さ。この関数は、エラーが発生した場合、またはデータ域の実際の長 さが 0 の場合、0 を返します。

関連項目

「動的データ」(SaDynDataT) について詳しくは、167ページの 『SaCursorColDynData』を参照してください。

SaDynDataMove

SaDynDataMove は、「data」という名前のパラメーターから動的データ・オブジェ クト (名前は dd) にデータをコピーします。この関数は、既存のデータが存在する 場合には上書きします。

パラメーター dd は、SaDynDataCreate 関数で事前に作成した動的データ・オブジェ クトを指している必要があります。

注: SaDynDataMove は、データをコピーします。データではなく、単なる参照をコ ピーする場合には、203ページの『SaDynDataMoveRef』を参照してください。

一般に、SaDynDataMove 関数および SaDynDataAppend 関数は、動的データ・オブ ジェクト内のデータ値の設定および変更に使用されます。必要に応じて追加のメモ リーが自動的に割り振られ、SaDynDataFree を使用して動的データ・オブジェクト が破棄されると、関連付けられたすべてのメモリーが自動的に割り振り解除されま す。ユーザーは SaDynDataGetData 関数および SaDynDataGetLen 関数を使用して、 それぞれデータまたは長さにアクセスすることができます。

SaDynDataMove および SaDynDataAppend は、既にデータがメモリー・バッファー 内に完全に存在している場合には使用できません。同じデータのコピーを 2 つ保持 することによってメモリー使用量が増大するとともに、バッファーが大容量の場 合、メモリー・コピーのオーバーヘッドが大きくなる可能性があります。したがっ て、(SaDynDataMove を使用してコピーするよりも) SaDynDataMoveRef を使用して データ・ポインターを直接割り当てる方が賢明な場合があります。この場合、ユー ザーは動的データ・オブジェクト自体を解放した後でのみ、メモリー・バッファー を変更または割り振り解除することができます。

構文

void SA EXPORT H SaDynDataMove(SaDynDataT* dd, char* data, unsigned len)

SaDynDataMove 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 152. SaDynDataMove のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
dd	in out, use	動的データ・オブジェクト
data	in, use	新しいデータ
len	in	データの長さ (データがストリング の場合、この長さにはストリング終 止符が含まれる)

なし

関連項目

SaDynDataMoveRef. .

「動的データ」(SaDynDataT) について詳しくは、167ページの 『SaCursorColDynData』を参照してください。

SaDynDataMoveRef

SaDynDataMoveRef は、動的データ・オブジェクトに対するデータ参照を移動しま す。

SaDynDataMoveRef は、「data」という名前のパラメーターから「dd」という名前の パラメーターの該当フィールドにポインター (アドレス) をコピーします。呼び出し 元は、動的データ・オブジェクトが入力データを参照している限り、そのデータが 存続することを保証する必要があります。

注: この関数は、データではなく、参照のみをコピーします。単なる参照ではな く、データをコピーする場合には、 202 ページの『SaDynDataMove』を参照してく ださい。

一般に、SaDynDataMove 関数および SaDynDataAppend 関数は、動的データ・オブ ジェクト内のデータ値の設定および変更に使用されます。必要に応じて追加のメモ リーが自動的に割り振られ、SaDynDataFree を使用して動的データ・オブジェクト が破棄されると、関連付けられたすべてのメモリーが自動的に割り振り解除されま す。ユーザーは SaDynDataGetData 関数および SaDynDataGetLen 関数を使用して、 それぞれデータまたは長さにアクセスすることができます。

SaDynDataMove および SaDynDataAppend は、既にデータがメモリー・バッファー 内に完全に存在している場合には使用できません。同じデータのコピーを 2 つ保持 することによってメモリー使用量が増大するとともに、バッファーが大容量の場 合、メモリー・コピーのオーバーヘッドが大きくなる可能性があります。したがっ て、(SaDynDataMove を使用してコピーするよりも) SaDynDataMoveRef を使用して データ・ポインターを直接割り当てる方が優れている場合があります。この場合、

ユーザーは動的データ・オブジェクト自体を解放した後でのみ、メモリー・バッフ ァーを変更または割り振り解除することができます。

構文

```
void SA EXPORT H SaDynDataMoveRef(
    SaDynDataT* dd,
    char* data,
   unsigned len)
```

SaDynDataMoveRef 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 153. SaDynDataMoveRef のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
dd	in out, use	動的データ・オブジェクト
data	in、hold	データ
len	in	データの長さ (データがストリング の場合、この長さにはストリング終 止符が含まれる)

戻り値

なし

関連項目

202 ページの『SaDynDataMove』.

「動的データ」(SaDynDataT) について詳しくは、167ページの 『SaCursorColDynData』を参照してください。

SaDynStrAppend

SaDynStrAppend は、動的ストリングの終端に別のストリングを付加します。

構文

```
void SA_EXPORT_H SaDynStrAppend(
   SaDynStrT* p_ds,
   char* str)
```

SaDynStrAppend 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 154. SaDynStrAppend のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
p_ds	out	動的ストリング
Str	in, use	p_ds に付加されるストリン グ

なし

SaDynStrCreate

SaDynStrCreate は、新しい動的ストリング・オブジェクトを作成 (初期化) します。

構文

SaDynStrT SA_EXPORT_H SaDynStrCreate(void)

SaDynStrCreate はパラメーターを受け入れません。

戻り値

表 155. SaDynStrCreate の戻り値

戻り使用タイプ	説明
	空データで初期化された動的ストリング・オ ブジェクト。メモリー不足の場合は NULL を返します。

SaDynStrFree

SaDynStrFree は、SaDynStrT 変数を解放します。

検索操作では、SaDynStrMove 関数を使用して列データが SaDynStrT 変数に格納さ れ、これによって古いデータが上書きされます。検索の終了後、ユーザーは SaDynStrFree 関数を使用して、SaDynStrT 変数を解放する必要があります。

構文

void SA EXPORT H SaDynStrFree(SaDynStrT* p ds)

SaDynStrFree 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 156. SaDynStrFree のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
$p_{\perp}ds$	in, take	動的ストリング

注: この関数はメモリーの割り振りを解除するため、関数呼び出し後は p_ds ポイン ターが無効となります。したがって、使用タイプは「take」です。

戻り値

なし

SaDynStrMove

SaDynStrMove は、ストリングの値 (2 番目のパラメーター) を SaDynStrT (最初の パラメーター) にコピーします。

SaDynStrMove は、ポインターではなく、ストリングをコピーします。

SaDynStrT は、SaDynStrMove で設定する前に、SaDynStrCreate で初期化する必要が あります。

注意:

SaDynStrT を (例えば memcpy を使用して) 別の SaDynStrT にコピーしないでく ださい。2 つの SaDynStrT ポインターが同じ割り振り領域を指すことになりま す。

構文

```
void SA EXPORT H SaDynStrMove(
   SaDynStrT* p ds,
   char* str)
```

SaDynStrMove 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 157	SaDynStrMove	のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
p_ds	out	動的ストリング変数を指すポインター
str	in, use	動的ストリングの新しい値

戻り値

なし

SaErrorInfo

SaErrorInfo は、サーバー接続での最後の操作からエラー情報を返します。

この関数では、カーソル・エラーは検査できません。代わりに、SaCursorErrorInfo 関数を使用する必要があります。

構文

bool SA EXPORT H SaErrorInfo(SaConnectT* scon, char** errstr, int* errcode)

SaErrorInfo 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 158. SaErrorInfo のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	use	接続オブジェクトを指すポインター
errstr	out, ref	エラーが発生した場合、およびこのパラメーターが NULL 以外の場合には、*errstr にエラー・ストリングの ローカル・コピーを指すポインターが格納されます。
errcode	out	エラーが発生した場合、およびこのパラメーターが NULL 以外の場合には、*errcode にエラー・コードが格 納されます。

TRUE: エラーが発生したため、errstr および errcode が更新されています。

FALSE: エラーが発生していないので、errstr および errcode が更新されていませ h_{\circ}

SaGloballnit

SaGlobalInit は、SA システム内でいくつかのグローバルな初期化を行います。

この関数は、SaConnect を除く他の SA 関数の前に呼び出す必要があります。他の SA 関数の前に SaConnect 関数を呼び出した場合、SaGlobalInit は SaConnect によ って呼び出されるため、ユーザーが呼び出す必要はありません。

構文

void SA EXPORT H SaGlobalInit(void)

SaGlobalInit はパラメーターを受け入れません。

戻り値

なし

SaSetDateFormat

SaSetDateFormat デフォルトの日付形式を定義します。

使用可能な目付形式については、191ページの『SaDateToAsciiz』を参照してくださ 11

構文

SaRetT SA EXPORT H SaSetDateFormat(SaConnectT* scon, char* dateformat)

SaSetDateFormat 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 159. SaSetDateFormat のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	in, out, use	接続オブジェクトを指すポイ ンター
dateformat	in, use	接続のデフォルトの日付形式

注: scon パラメーターはこの関数呼び出しで変更されるため、使用タイプには 「out」が含まれます。

戻り値

成功した場合には SA_RC_SUCC

サーバーへの接続が切断された場合には SA_ERR_COMERROR

関連項目

使用可能な日付、時刻、およびタイム・スタンプのフォーマットについては、191 ページの『SaDateToAsciiz』を参照してください。

SaSetSortBufSize

SaSetSortBufSize は、接続がローカル・ソート (SA ライブラリーによってクライア ント・サイドで実行されるソート) に使用するメモリーの容量を設定します。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaSetSortBufSize(SaConnectT* scon, unsigned long size)

SaSetSortBufSize 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 160. SaSetSortBufSize のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	in, out, use	接続オブジェクトを指すポイ ンター
size	in	バイト単位のメモリー・バッ ファー・サイズ

注: scon パラメーターはこの関数呼び出しで変更されるため、使用タイプには 「out」が含まれます。

戻り値

OK の場合には SA_RC_SUCC、または指定されたメモリー・サイズが小さすぎる (< 10 KB) 場合には SA_ERR_FAILED

SaSetSortMaxFiles

SaSetSortMaxFiles は、接続がローカル・ソート (SA ライブラリーによってクライアント・サイドで実行されるソート) に使用するファイルの最大数を設定します。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaSetSortMaxFiles(
SaConnectT* scon,
unsigned int nfiles)

SaSetSortMaxFiles 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 161. SaSetSortMaxFiles のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	in, out, use	接続オブジェクトを指すポイ ンター
nfiles	in	ファイルの最大数

注: scon パラメーターはこの関数呼び出しで変更されるため、使用タイプには「out」が含まれます。

戻り値

OK の場合には SA_RC_SUCC、指定されたファイル数が少なすぎる (< 3) 場合には SA_ERR_FAILED

SaSetTimeFormat

SaSetTimeFormat は、デフォルトの時刻形式を定義します。

使用可能なフォーマットについては、189ページの『SaDateSetAsciiz』でSaDateSetAsciiz の時刻部分の説明を参照してください。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaSetTimeFormat(
 SaConnectT* scon,
 char* timeformat)

SaSetTimeFormat 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 162. SaSetTimeFormat のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	in, out, use	接続オブジェクトを指すポイ ンター
timeformat	in	接続のデフォルトの時刻形式

注: scon パラメーターはこの関数呼び出しで変更されるため、scon の使用タイプには「out」が含まれます。

SA_RC_SUCC

サーバーへの接続が切断された場合には SA_ERR_COMERROR

関連項目

使用可能な日付、時刻、およびタイム・スタンプのフォーマットについては、189 ページの『SaDateSetAsciiz』を参照してください。

SaSetTimestampFormat

SaSetTimestampFormat は、デフォルトのタイム・スタンプ・フォーマットを定義し ます。

使用可能な目付、時刻、およびタイム・スタンプのフォーマットについては、189 ページの『SaDateSetAsciiz』を参照してください。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaSetTimestampFormat(SaConnectT* scon, char* timestampformat)

SaSetTimestampFormat 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 163. SaSetTimestampFormat のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	in, out, use	接続オブジェクトを指すポイ ンター
timestampformat	in	接続のデフォルトのタイム・ スタンプ・フォーマット

戻り値

SA_RC_SUCC

関連項目

使用可能な日付、時刻、およびタイム・スタンプのフォーマットについては、189 ページの『SaDateSetAsciiz』を参照してください。

SaSQLExecDirect

SaSOLExecDirect では、CREATE TABLE、DROP TABLE、INSERT、および DELETE などの単純 SQL ステートメントを実行できます。

データをフェッチできないため、SELECT 操作は実行できません。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaSQLExecDirect(SaConnectT* scon, char *sqlstr)

SaSOLExecDirect 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 164. SaSQLExecDirect のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	in, use	接続オブジェクトを指すポイ ンター
sqlstr	in, use	実行する SQL ステートメン トを含むストリングを指すポ インター

戻り値

SA_RC_SUCC

以下に、可能性のあるエラー・コードを示します。

- 15001: SAP ERR SYNTAXERROR SD. 構文エラー: <error>, cline>。
- 15002: SAP ERR ILLCOLNAME S. 正しくない列名 <name>。
- 15003: SAP_ERR_TOOMANYPARAMS. ストリング制約に対してパラメーターが 多すぎる。
- 15004: SAP_ERR_TOOFEWPARAMS. ストリング制約に対してパラメーターが少 なすぎる。

SaTransBegin

SaTransBegin は、新しいトランザクションを開始します。この呼び出し後は、すべ ての選択、挿入、更新、および削除の操作が同じトランザクション内で実行されま すが、SaTransCommit を呼び出すまで、データベース内で変更が可視になりませ h.

SaTransBegin 呼び出しを実行しないと、サーバーはデフォルトで自動コミット・モ ードとなり、したがって各選択、挿入、更新、および削除の操作は、別々のトラン ザクションで実行されます。自動コミット・モードでは、明示的なコミット (SaTransCommit) は必要ありません。

トランザクションは、失われた更新やユニーク・エラーに関して、書き込み操作を 検証するモードで実行されます。

構文

void SA EXPORT H SaTransBegin(SaConnectT* scon)

SaTransBegin 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 165. SaTransBegin のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon		接続オブジェクトを指すポインター

なし

SaTransCommit

SaTransCommit は、SaTransBegin で開始された現行トランザクションをコミットし ます。

この関数を呼び出すと、すべての変更がデータベース内で永続的になります。現行 トランザクションが完了すると、データベース・サーバーは、次回 SaTransBegin を 呼び出すまで自動コミット・モードに戻ります。

構文

SaRetT SA_EXPORT_H SaTransCommit(SaConnectT* scon)

SaTransCommit 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 166. SaTransCommit のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon		接続オブジェクトを指すポイ ンター

戻り値

SA RC SUCC またはエラー・コード

SaTransRollback

SaTransRollback は、SaTransBegin によって開始された現行トランザクションをロー ルバックします。データベースには、変更が行われません。

現行トランザクションが完了すると、データベース・サーバーは、次回 SaTransBegin を呼び出すまで自動コミット・モードに戻ります。

構文

SaRetT SA EXPORT H SaTransRollback(SaConnectT* scon)

SaTransRollback 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 167. SaTransRollback のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon		接続オブジェクトを指すポインター

SA_RC_SUCC またはエラー・コード

SaUserId

SaUserID は、接続の現行ユーザー ID を返します。

構文

int SA_EXPORT_H SaUserId(SaConnectT* scon)

SaUserId 関数は以下のパラメーターを受け入れます。

表 168. SaUserId のパラメーター

パラメーター	使用タイプ	説明
scon	in, use	接続オブジェクトを指すポイ ンター

戻り値

サーバー内のユーザー ID

6 Unicode の使用

solidDB は Unicode 標準をサポートして、世界中の主要言語で使用される文字をエンコードする機能を提供しています。 Unicode エンコード・データを使用するために、アプリケーション開発において、非標準または solidDB 固有の実装環境を使用する必要はありません。つまり、標準 ODBC API または JDBC API、および solidDB ツールを使用することができます。また、solidDB は、各アプリケーションが異なるエンコードを使用するように設定されている可能性のある異機種混合のマルチ・クライアント環境もサポートしています。

Unicode データベース・モード

バージョン 6.5 から、solidDB データベースを、Unicode モードまたは部分的 Unicode モードの 2 つのモードで作成することができるようになりました。このデータベース・モードは、solidDB サーバーの文字データ型 (CHAR、VARCHAR など) のエンコードを基にしています。ワイド文字データ型 (WCHAR、WVARCHAR など) は、両方のモードで Unicode にエンコードされます。

• Unicode モード

Unicode モードでは、文字データ型の内部表記は UTF-8 です。

ワイド文字データ型の内部表記は、UTF-16です。

• 部分的 Unicode モード

部分的 Unicode モードでは、文字データ型の内部表記は特定のエンコードを使用しません。その代わりに、データはバイト・ストリングで保管されますが、この場合、ユーザー・アプリケーションがこのことを認識し、必要に応じて変換を処理するものと想定されます。

ワイド文字データ型の内部表記は、UTF-16 です。

solidDB バージョン 6.3 およびそれより前のバージョンで作成されたデータベースは、部分的 Unicode タイプです。

重要: 6.5 でのデフォルトのデータベース・モードは、部分的 Unicodeです。

注: Unicode アプリケーションは、Unicode データベースと部分的 Unicode データベースの両方で作成可能です。ただし、このセクションの説明では、Unicode サポートは Unicode データベース・モードを基にしていることを想定しています。

solidDB Unicode データベースの主な機能

• Unicode データの保管およびリトリーブ

Unicode データの内部表記は、UTF-8 および UTF-16 のエンコードを基にしています。ワイド文字列型のデータは、内部で UTF-16 で表記され、文字列型のデータは UTF-8 で表記されます。

つまり、単一およびマルチバイトの両方のデータを文字列型で保管することがで きます。主にマルチバイトのデータが予想される場合、そのマルチバイトのデー タをワイド文字列型で保管するように選択して、スペースの使用効率を最適化す ることができます。

• アプリケーションで使用されるエンコードへの制限がない

solidDB ODBC/JDBC ドライバーは、solidDB サーバーで、アプリケーション・エ ンコードと UTF-8/UTF-16 フォーマット間の変換を処理します。

• アプリケーション開発に使用可能な標準 ODBC API および JDBC API

アプリケーション開発に対する、非標準、または solidDB 固有の要件はありませ ん。標準 ODBC API または JDBC API を使用できます。

Unicode とは

Unicode 標準は、コンピューター処理でテキストに使用される汎用文字表現標準で す。 Unicode では、一貫性のある方法で、マルチリンガルのプレーン・テキストを エンコードして、多国間でテキスト・ファイルを簡単に交換できるようにします。

Unicode 標準は、今日の主な書き言葉で使用される文字用のコード・ポイント (固有 番号)を定義しています。これには、句読記号、弁別発音記号、数学記号、技術記 号、矢印、および絵記号などが含まれます。合計すると、Unicode 標準は、多数の 書き言葉のクラシカル・テキストおよびヒストリカル・テキストを含む、世界中の アルファベット、表意文字セット、および記号集合の 100,000 文字を超える文字 に、コードを提供しています。文字は、UTF-8 および UTF-16 などさまざまなエン コード・フォームで表すことができます。

Unicode 標準は、国際標準 ISO/IEC 10646 と完全な互換性を持ち、ISO/IEC 10646 と同じ文字およびコード・ポイントがすべて含まれています。このようなコードご との一致は、東アジアの表意文字(漢字)も含めて、2つの標準のすべてのエンコ ード文字に当てはまります。 Unicode 標準は、文字とその使用法に関する追加情報 も提供しています。Unicode に準拠するあらゆるインプリメンテーションは、 ISO/IEC 10646 にも準拠しています。

エンコード形式

Unicode 文字は、32 ビット形式 (UTF-32)、16 ビット形式 (UTF-16)、および 8 ビ ット形式 (UTF-8) という 3 つのエンコード形式の中の 1 つで表されます。これら の文字エンコード標準は、各文字の識別情報と数値 (コード位置) を定義するだけで なく、その値のビット表現も定義します。

バージョン 6.5 から、solidDB は、文字データを表すために UTF-8 エンコードを 使用し、ワイド文字データには UTF-16 エンコードを使用するように構成すること ができます。データベース・モードは、パラメーター

General.InternalCharEncoding を使用して制御されます。

データベースが Unicode モード (General.InternalCharEncoding=UTF8) で作成され る場合、以下が適用されます。

- ワイド文字列型のデータは、内部で UTF-16 で表記されます。
- 文字列型のデータは、UTF-8 で表記されます。

データベースが部分的 Unicode モード (General.InternalCharEncoding=Raw) で作成される場合、以下が適用されます。

- ワイド文字列型のデータは、内部で UTF-16 で表記されます。
- 文字列型のデータは、特定のエンコードでエンコードされません。その代わりに、データはバイト・ストリングで保管されますが、この場合、ユーザー・アプリケーションがこのことを認識し、必要に応じて変換を処理するものと想定されます。

UTF-8 および UTF-16 エンコードは、基本的にエンコード方式を、実装で使用される実際のビットに変換する方法です。つまり、UTF-8 エンコードと UTF-16 エンコードは同じ文字セットを共有しますが、各文字のデータ・サイズは異なります。

• UTF-16

UTF 16 は、16 ビット文字を想定し、特定の文字範囲を拡張メカニズムとして使用することで、16 ビット文字のペアを使用して、さらに 100 万の文字にアクセスできるようにします。

• UTF-8

UTF-8 は、すべての Unicode 文字を可変長のバイト・エンコード方式にトランスフォームする方法です。一般的な ASCII セットに対応する Unicode 文字が、ASCII と同じバイト値を持つことになるという利点と、ソフトウェアを大きく書き換えなくても、多くの既存のソフトウェアで、UTF-8 にトランスフォームされた Unicode 文字を使用できるという利点があります。

Unicode コンソーシアムも、Unicode 標準を実装する方法として UTF-8 の使用を承認しています。16 ビットの UTF-16 形式で表現されたあらゆる Unicode 文字は、情報を失うことなく UTF-8 形式に変換することができ、その逆の変換もできます。

Unicode データベースの設計

このセクションでは、Unicode で使用するための solidDB データベースのセットアップ方法について説明します。

注: Unicode アプリケーションは、Unicode データベースと部分的 Unicode データベースの両方で作成可能です。ただし、このセクションの説明では、Unicode サポートは Unicode データベース・モードを基にしていることを想定しています。

Unicode データベースの作成

solidDB データベース・モードは、パラメーター **General.InternalCharEncoding** を使用して制御されます。

• Unicode モード: General.InternalCharEncoding=UTF8

Internal Char Encoding が「UTF8」に設定されている場合、文字データ型の内部表記は UTF-8 です。文字データ型とワイド文字データ型の両方が、solid DB サーバーおよびアプリケーション間で変換されます。

• 部分的 Unicode モード: General.InternalCharEncoding=Raw

Internal Char Encoding が「Raw」に設定されている場合、文字データ型の内部表 記は特定のエンコードを使用しません。その代わりに、データはバイト・ストリ ングで保管されますが、この場合、ユーザー・アプリケーションがこのことを認 識し、必要に応じて変換を処理したものと想定されます。ワイド文字データ型 は、solidDB サーバーおよびアプリケーション間で変換されます。

solidDB バージョン 6.3 およびそれより前のバージョンで作成されたデータベー スは、部分的 Unicode タイプです。

重要: データベース・モードは、データベースの作成時に定義する必要があり、後 で変更することはできません。

データベースがいずれかのモードで既に存在し、そのデータベース・モードがパラ メーターの値と矛盾する場合、サーバーの始動は、solerr.out に以下のエラー・メ ッセージを出して失敗します。

Parameter General.InternalCharEncoding contradicts the existing database mode

Unicode データベースで使用するデータ型の決定

文字データ型とワイド文字データ型は両方とも、Unicode データベースに Unicode データを保管するために使用することができます。主にマルチバイトのデータが予 想される場合、そのマルチバイトのデータをワイド文字列型で保管するように選択 して、スペースの使用効率を最適化することができます。これは、UTF-8 エンコー ドと UTF-16 エンコードは同じ文字セットを共有していても、各文字のデータ・サ イズが異なるためです。

- ワイド文字列型のデータ (WCHAR/WVARCHAR/LONG WVARCHAR) は、内部 で UTF-16 で表記され、各文字は、2 バイトまたは 4 バイトで表記されます。
 - 基本多言語面 (BMP) の文字: 2 バイト
 - BMP 以外の文字 (代理文字): 4 バイト
- 文字列型のデータ (CHAR/VARCHAR/LONG VARCHAR) は UTF-8 で表記さ れ、各文字は、1 バイトから 4 バイトで表記されます。

サイズは、コード・ポイントによって異なります。

簡単な例

- ASCII 文字: 1 バイト
- キリル文字、アラビア語、ヘブライ語、Latin 1 補足などの文字: 2 バイト
- アジア言語の文字/残りの BMP 文字: 3 バイト
- BMP 以外の文字 (代理文字): 4 バイト

例えばアジア言語では、大部分の文字が BMP に属し、2 バイトが必要になるた め、ワイド文字データ型 (UTF-16) で保管したほうが効率的です。ヨーロッパ言語 の場合、大部分の共通文字が 1 バイトで表記されるため、文字データ型 (UTF-8) で保管したほうが効率的です。

ワイド文字データの場合、必要な処理も少なくなります。つまり、ワイド文字デー 夕型を使用すると、パフォーマンスが向上する場合があります。

Unicode データ型は相互運用が可能です。これは、UTF-16 と UTF-8 が同じ文字セ ットを共有し、どちらのデータ型を使用してもデータ損失のリスクがないからで す。暗黙的な型変換を使用して、文字データ型とワイド文字データ型間で、すべて のストリング操作を行うことができます。

Unicode データ格納用列の作成

Unicode データの Unicode データベースへの保管を開始するには、以下のようにし て、Unicode データ列を含む表を最初に作成する必要があります。

CREATE TABLE customer1 (c id INTEGER, c name VARCHAR,...) CREATE TABLE customer2 (c id INTEGER, c name WVARCHAR,...)

データ列の順序付け (照合)

文字データ列は、UTF-8 のバイナリー値と、UTF-16 フォーマットのワイド文字デ ータ列に基づいて順序付けされます (最上位バイト順を使用)。バイナリー順序が、 各国語ユーザーが希望するものと異なる場合、別個の列を作成して、正しい順序付 け情報を保管する必要があります。

データベース・エンティティー名での Unicode の使用

すべての SOL ステートメントで Unicode 名を二重引用符で囲むだけで、Unicode ストリングを使用して表、列、プロシージャーなどのデータベース・エンティティ 一に名前を付けることができます。

solidDB ツールは、環境のデフォルト・ロケール、または指定されたロケールに従 って、Unicode ストリングを処理することができます。

詳しくは、『Unicode での solidDB ツールの使用』を参照してください。

ユーザー名およびパスワードでの Unicode の使用

ユーザー名とパスワードにも Unicode ストリングを使用することができます。ただ し、さまざまなツールからのアクセスの問題を回避するために、元のデータベース 管理者のアカウント情報を純粋な ASCII ストリングとして提供する必要がありま す。

ファイル名での Unicode の使用

Unicode ストリングは、いずれのファイル名にも使用できません。

Unicode での solidDB ツールの使用

このセクションでは、Unicode データベースおよび部分的 Unicode データベースで の solidDB ツールの使用方法について説明します。

以下の solidDB ツールを使用して、Unicode データベースと部分的 Unicode データ ベースの両方において、システムのデフォルト・ロケール、または指定されたロケ ールで、データを出力およびインポートすることができます。

- solidDB SQL エディター (solsql)
- solidDB データ・ディクショナリー (soldd)

- solidDB エクスポート (solexp)
- solidDB Speed Loader (solloado)

solidDB リモート制御 (solcon) は、UTF-8 へのデータの変換をサポートしていませ ん。例えば、solcon に出力されたエラー・メッセージに Unicode でエンコードされ たデータが含まれている場合、そのメッセージはコンソールで正しく表示されませ h_{\circ}

変換に使用されるロケールは、ツールの開始時に、コマンド行オプションで定義さ れます。

重要:

- solidDB ツールは solidDB ODBC API 3.5.1 を使用します。つまり、文字データ 型のバインディング方式がサーバー・サイドの Srv.ODBCDefaultCharBinding パ ラメーターまたはクライアント・サイドの client-side Client.ODBCCharBinding パラメーターで定義されている場合、この設定は solidDB ツールの動作にも影響 します。
- Unicode データベースと部分的 Unicode データベースは、CHAR および WCHAR のデータ型の変換に関して、動作が異なります。
 - Unicode データベース

CHAR と WCHAR のデータ型は、solidDB の UTF-8/UTF-16 フォーマット と、選択されたバインディング方式で定義されたロケール/コードページ間で変 換されます。

- 部分的 Unicode データベース

CHAR データ型は変換されません。その代わり、部分的 Unicode データベー スに CHAR データを保管するために使用される raw (バイナリー) フォーマッ トで処理されます。

WCHAR データ型は、solidDB の UTF-16 フォーマットと、選択されたバイン ディング方式で定義されたロケール/コードページ間で変換されます。

表 169. 部分的 Unicode および Unicode データベース用の solidDB ツールのコマンド行オ プション

オプション	説明
オプションなし/工場出	solid.ini ファイルのサーバー・サイド・パラメーターまたはクラ
荷時設定	イアント・サイド・パラメーターでオーバーライドされない限り、 コンソールのロケール設定が使用されます。
	注: サーバー・サイドの Srv.ODBCDefaultCharBinding パラメー
	ターまたはクライアント・サイドの Client.ODBCCharBinding パ
	ラメーターを UTF8 に設定する場合は、コンソールのロケールが
	UTF-8 をサポートしている必要があります。
-m	solid.ini ファイルのサーバー・サイド・パラメーターまたはクラ
	イアント・サイド・パラメーターに関わらず、コンソールのロケー
	ル設定が使用されます。

表 169. 部分的 Unicode および Unicode データベース用の solidDB ツールのコマンド行オプション (続き)

オプション	説明
-M <locale_name></locale_name>	ロケール・コンソール設定は、 <locale_name> で定義されたロケールによってオーバーライドされます。<locale_name> は、オペレーティング・システムによって異なります。 例えば、Linux 環境では、中国語 (簡体字)/中国のコード・ページ GB18030 のロケール名は zh_CN.gb18030 です。 Windows 環境では、フィンランド語/フィンランドの Latin1 コード・ページのロケール名は fin fin.1252 です。</locale_name></locale_name>
-u	入出力は強制的に UTF-8 になります。

注: solid.ini ファイルのサーバー・サイド・パラメーターまたはクライアント・サイド・パラメーターが「Raw」バインディングを使用するように設定されている場合、常に -m、-M、または -u オプションを使用して solid.ini の設定をオーバーライドする必要があります。

Unicode データベースと部分的 Unicode データベース間の互換性

データベースが Unicode モードで作成された場合、それを部分的 Unicode モードに変更することはできません。その逆の変更も行えません。部分的 Unicode データベースを Unicode に変換 (またはその逆に変換) する必要がある場合、solidDB ツールを使用して、データベースをエクスポートおよび再ロードすることができます。

データベースがいずれかのモードで既に存在し、そのデータベース・モードがパラメーターの値と矛盾する場合、サーバーの始動は、solerr.out に以下のエラー・メッセージを出して失敗します。

Parameter General.InternalCharEncoding contradicts the existing database mode

部分的 Unicode データベースの Unicode への変換

部分的 Unicode データベースを Unicode データベースに変換するには、solidDB ツールを使用して、データベースをエクスポートおよび再ロードします。

始める前に

- データベースのバックアップを作成します。
- 部分的 Unicode データベースの CHAR データ型列のデータをエンコードするためにアプリケーション・サイドで使用されるロケー \mathcal{W} コードページを検証します。

エクスポート・フェーズ中に、CHAR データ型列にあるデータは solidDB ツール によって変換されずに、そのまま出力されます。つまり、CHAR データ型の基本 となるロケール/コードページが、出力ファイルのロケール/コードページ・フォーマットになります。出力ファイルに単一のロケール/コードページでデータが含まれるようにするには、solidDB が、WCHAR データ型列のデータを、UTF-16 から、CHAR データと正確に同じロケール/コードページ・フォーマットに変換できる必要があります。

インポート・フェーズで、solidDB ツールは、出力ファイルのロケール/コードペ ージ・フォーマットから、Unicode データベースで使用される UTF-8 (CHAR) お よび UTF-16 (WCHAR) エンコードに、データを変換します。

このタスクについて

この手順では、例として以下のセットアップが使用されます。

- サーバー名は solidDB、接続に使用されるプロトコルは TCP/IP でポート 1964 を使用します (ネットワーク名は「tcpip 1964」)。
- 部分的 Unicode データベースは、ユーザー名「dbadmin」、パスワード 「password」を使用して作成されています。
- 部分的 Unicode データベースの CHAR データ型は、ロケール zh_CN.gb18030 (中国語 (簡体字)/中国、およびコードページ GB18030) を使用して、アプリケー ション・サイドでエンコードされます。

ヒント: 独自のデータベース作成スクリプトを使用できる場合は、それらを使用し て、新規データベース表定義を作成することができます。この場合、それらをエク スポートおよびインポートするために、soldd および solsal を使用する必要はあり ません。

手順

1. solidDB データ・ディクショナリー (soldd) を使用して、データ定義を抽出しま す。

以下のコマンドを使用して、すべての表、ビュー、トリガー、索引、プロシージ ャー、シーケンス、およびイベントの定義を含む SQL スクリプトを抽出しま す。

soldd -Mzh CN.gb18030 "tcpip 1964" dbadmin password

デフォルトのファイル名 soldd.sql が使用されます。

注: セキュリティー上の理由から、ユーザー定義とロール定義はリストされてい ません。データベースにユーザーまたはロールが含まれている場合、それらの CREATE ステートメントを、抽出した SQL ファイルに手動で追加します。

重要: 参照整合性を保持するために、表定義ステートメントを再編成して、参照 される表が、参照を行う表より前に作成されるようにしなければならない場合が あります。

2. solidDB エクスポート (solexp) を使用して、データベースからデータを抽出しま

以下のコマンドを使用して、すべての表の制御ファイルおよびデータ・ファイル を抽出してください。

solexp -Mzh CN.gb18030 "tcpip 1964" dbadmin password *

このエクスポートにより、各表に対して、制御ファイル (.ctr) お よびデータ・ファイル (.dat) が作成されます。デフォルトのファ イル名は、エクスポートした表の名前と同じです。

- 3. 新規 Unicode データベースを作成します。
 - a. General.InternalCharEncoding パラメーターを「UTF8」に設定します。
 [General]

InternalCharEncoding=UTF8

- b. 新規 Unicode データベース用の作業ディレクトリーで solidDB を始動して、 新規データベースを作成します。
- 4. solidDB SQL エディター (solsql) を使用して、新規データベースにデータ定義をインポートします。

以下のコマンドを使用して、solidDB データ・ディクショナリー (soldd) によって作成された SQL スクリプトを実行します。

solsql -fsoldd.sql -Mzh CN.gb18030 "tcpip 1964" dbadmin password

5. solidDB Speed Loader (solloado) を使用して、新規データベースにデータをロードします。

各表に対して、以下のコマンドを使用して、新規データベースにデータをロード します。

solloado -Mzh_CN.gb18030 "tcpip 1964" dbadmin password <table_name>.ctr

関連トピック

• 「IBM solidDB 管理者ガイド」の『solidDB データ管理ツールの使用』

Unicode に対応したアプリケーションの開発

このセクションでは、アプリケーションを Unicode モードの solidDB データベース で使用するように設計する方法を説明します。

サポートされるインターフェース

ODBC

solidDB ODBC ドライバーは Unicode 準拠であり、Microsoft ODBC 3.51 標準に 準拠しています。

注: solidDB は、Unicode 用および ASCII 用として、2 つのバージョンの ODBC ドライバーを提供しています。Unicode バージョンは ASCII バージョン のスーパーセットであり、Unicode 文字セットと ASCII 文字セットで使用できます。

JDBC

Unicode は solidDB JDBC ドライバーでサポートされています。これは、JDBC 2.0 標準の solidDB 実装です。

Java はネイティブで Unicode ストリングを使用するため、Unicode のサポートとは、主に、solidDB で文字データにアクセスするときに、データ型の変換が不要であることを意味します。さらに、JDBC ResultSet Class メソッドであるgetUnicodeStream および setUnicodeStream が、solidDB に保管された大容量のUnicode テキストの処理用にサポートされます。

· solidDB Light Client

solidDB Light Client は、ODBC 3.5 以降の API 機能をサポートしていないた め、Unicode をサポートしません。

異なるロケール設定を持つマルチ・クライアント環境

Unicode データベースでは、solidDB ODBC ドライバーおよび JDBC ドライバー が、solidDB サーバーで、アプリケーション・エンコードと UTF-8/UTF-16 フォー マット間の変換を処理します。

ODBC 環境では、アプリケーション・バッファーでのエンコード用に、アプリケー ションのデフォルト・ロケール、またはユーザー定義のロケールが使用されるよう に変換を設定することができます。これは、サーバー・サイドの

Srv.ODBCDefaultCharBinding 構成パラメーターおよびクライアント・サイドの Client.ODBCCharBinding 構成パラメーターで制御されます。

SQL ストリング関数

SQL ストリング関数は、予想通りに機能します。変換は必要に応じて暗黙に行われ ます。いずれかのオペランドがワイド文字型である場合、結果は、常にワイド文字 型になります。

関数 UPPER() および LOWER() は、文字が Latin 1 コード・ページの一部である 場合にのみ、Unicode ストリングで、大文字または小文字の変換を実行します。 Unicode 文字を大文字または小文字に変換できない場合、入力ストリングはそのま ま返されます。

文字の埋め込み

SQL.CharPadding=yes パラメーター設定は、Unicode データベースでは無効です。 CHAR 値内のブランク文字は必ず破棄されます。

ODBC アプリケーション・データベースおよび Unicode データ ベース

ODBC 環境では、solidDB ODBC ドライバーが、アプリケーション (クライアント) で使用されるエンコードと、solidDB Unicode データベースの UTF-8/UTF-16 フォ ーマット間のデータ変換を処理します。文字データのバインディングは、サーバ ー・サイドのパラメーター Srv.ODBCDefaultCharBinding を使用して、すべてのク ライアントに対して設定することも、クライアント・サイドのパラメーター Client.ODBCCharBinding を使用して、クライアントごとに設定することもできま す。いずれの場合でも、標準 C 型識別子の SQL_C_CHAR が使用されます。

文字データのバインディングでは、以下の方式の 1 つを使用するように ODBC ド ライバーを設定することができます。

- 現在のクライアント・ロケール・エンコード
- ロケール名で定義された特定のエンコード
- エンコードなし
- UTF-8 エンコード

すべての方式に対して、以下の2つのユース・ケースがサポートされます。

• サーバー・サイド・パラメーター **ODBCDefaultCharBinding** を使用して、すべて のクライアントに対して同じバインディング方式を設定する。

[Srv]

ODBCDefaultCharBinding=raw|locale|locale:|locale:<locale name>|UTF8

• クライアント・サイド・パラメーター **ODBCCharBinding** を使用して、クライアントごとにバインディング方式を設定する。

[Client]

ODBCCharBinding=raw|locale|locale:<locale name>

ODBCCharBinding パラメーターは、**ODBCDefaultCharBinding** で設定されるサーバー・サイド設定をオーバーライドします。

ファクトリー値は、両方とも locale: です。

• raw — solidDB サーバーとクライアント間でデータ変換は行われません

値「raw」は、バージョン 6.3 またはそれ以前の solidDB で使用しているバインディングをデータベースで使用する場合に利用できます。

- locale クライアント・システムで設定される場合も、現在のクライアント・ロケール設定が使用されます
- locale: 現在のクライアント設定が、クライアント・システムのデフォルト・ロケール・セットでオーバーライドされます

ドライバーは、空のストリングを使用して setlocale() を呼び出します。これにより、システムに設定されたロケール設定が効率的に検索されます。

例えば Linux 環境では、環境変数の LC_CTYPE が最初に検査され、それが定義されていなければ、環境変数 LANG が検索されます。

• locale:<locale name> — 現在のクライアント・システム設定がオーバーライドされ、指定されたロケールが使用されます

<locale name> の規則は、オペレーティング・システムにより異なります。

例えば、Linux 環境では、中国語 (簡体字)/中国のコード・ページ GB18030 のロケール名は zh_CN.gb18030 です。 Windows 環境では、フィンランド語/フィンランドの Latin1 コード・ページのロケール名は fin_fin.1252 です。

• UTF8 — クライアント・サイド・システムに設定されたロケールに関わらず、 UTF-8 バインディングが強制されます。

注:

- **Srv.ODBCDefaultCharBinding** の値が locale 以外の場合、すべてのクライアントに対して、現在のすべてのシステム・ロケール設定をオーバーライドします。
- Client.ODBCCharBinding の値が locale 以外の場合、サーバー・サイド値 (設定 されている場合) と、現在のシステム・ロケール設定の両方をオーバーライドします。

現在のクライアント・ロケール・エンコードを使用する場合 (locale)

現在のクライアント・ロケール・エンコードを使用するには、以下のようにします。

- 1. 次のように、パラメーター設定を構成します。
 - ・ すべてのクライアントが同じバインディング方式を使用する場合 (サーバー・ サイド・パラメーター)

サーバー・サイド solid.ini のセクション [Server] に、

ODBCDefaultCharBinding パラメーターを設定します。

[Srv]

ODBCDefaultCharBinding=locale

• 一部またはすべてのクライアントが異なるバインディング方式を必要とする場 合 (クライアント・サイド・パラメーター)

クライアント・サイド solid.ini のセクション [Client] に、

ODBCCharBinding パラメーターを設定します。

[Client]

ODBCCharBinding=locale

クライアント・サイド・パラメーターは、サーバー・サイド設定をオーバーラ イドします。

2. アプリケーションが setlocale() を呼び出すように設定します。

特定のロケール・エンコードを使用する場合 (locale:<locale name>)

特定のロケール・エンコードを使用するには、以下のようにします。

solid.ini にロケールを定義します。

・ すべてのクライアントが同じバインディング方式を使用する場合 (サーバー・サ イド・パラメーター)

サーバー・サイド solid.ini のセクション [Server] に、

ODBCDefaultCharBinding パラメーターを設定します。

[Srv]

ODBCDefaultCharBinding=locace:<locale name>

例えば Linux 環境では、以下のようにします。

ODBCDefaultCharBinding=locale:zh CN.gb18030

一部またはすべてのクライアントが異なるバインディング方式を必要とする場合 (クライアント・サイド・パラメーター)

クライアント・サイド solid.ini のセクション [Client] に、

ODBCCharBinding パラメーターを設定します。

[Client]

ODBCCharBinding=locale:<locale name>

クライアント・サイド・パラメーターは、サーバー・サイド設定をオーバーライ ドします。

例えば Linux 環境では、以下のようにします。

[Client]

ODBCCharBinding=locale:zh CN.gb18030

注:特定のロケールを設定すると、setlocale()で定義されたアプリケーション設定がオーバーライドされます。

例 1

すべてのクライアントが、クライアントの現在のロケールを使用します。各クライアントが、異なるコード・ページを使用することができます。

以下のように、サーバー・サイドの solid.ini が使用されます。

[Srv]

ODBCDefaultCharBinding=locale

例 2

クライアントの現在のロケールを使用するクライアントもありますが、Latin1 コード・ページを使用するクライアントもあります。

以下のように、サーバー・サイドの solid.ini が使用されます。

[Srv]

ODBCDefaultCharBinding=locale

Latin1 コード・ページが必要なクライアントでは、以下のように、クライアント・サイドの solid.ini が使用されます。

[Client]

ODBCCharBinding=locale:fin fin.1252

JDBC アプリケーション・データベースおよび Unicode データベース

JDBC 環境では、solidDB JDBC ドライバーが、アプリケーション (クライアント) で使用されるエンコードと、Unicode データベースの UTF-8/UTF-16 フォーマット 間のデータ変換を処理します。 JDBC で Unicode を使用するために、solidDB 固有の設定を作成する必要はありません。

7 トランザクション・ログ・リーダーの使用

solidDB トランザクション・ログ・リーダーは、solidDB トランザクション・ログからトランザクション単位でログ・レコードを読み取ることを可能にするソリューションです。ログ・リーダー・インターフェースを使用すると、例えば solidDB サーバーのログ・トラフィックを listen して表示するアプリケーションを作成することができます。

ログ・リーダーは、SYS_LOG と呼ばれる読み取り専用のシステム表を基にしています。このシステム表では、各行が単一のログ項目に対応しています。 SYS_LOG 表は仮想表 です。ログ・リーダーが SYS_LOG 表に対する SQL 要求を受け取ると、内部ログ構造から、該当する結果セットが動的に生成されます。各ログ読み取りは、異なるログ・レコードから開始することができます。

トランザクション・ログにある各項目ごとに、SYS_LOG表には、ログ・レコード、実行されたトランザクションおよびステートメントの型、および変更されたデータ自体を持つ行を識別するデータが含まれています。

SYS_LOG 表には、SQL ステートメントを使用して、ODBC および JDBC ドライバーでアクセスすることができます。例えば、solidDB トランザクション・ログを読み取って、SQL DML ステートメントに関係するレコードを抽出するアプリケーションを作成できます。さらに、このアプリケーションでステートメントをプレーン・テキストの SQL ストリングに再構成し、必要なタイプの出力に印刷することができます。

アプリケーションは、SYS_LOG 表をローカルにもリモートにも読み取ることができます。複数のアプリケーションが、干渉なしで同時に SYS_LOG 表を読み取ることができます。

ログ・リーダー・インターフェースの使用法を示すサンプル・アプリケーションが、solidDB パッケージの samples/logreader ディレクトリーに含まれています。

SYS_LOG 表に関して詳しくは、「 $IBM\ solidDB\ SQL\ ガイド$ 」の付録『データベース仮想表』のセクション『 $SYS\ LOG$ 』を参照してください。

ログ・リーダーを使用したアプリケーション開発に関する考慮事項 サポートされている表タイプ

- インメモリー表とディスク・ベース表の両方がサポートされています。
- トランジエント表およびテンポラリー表はサポートされていません。

トランジエント表およびテンポラリー表はログ記録されないため、これらの表内のデータはログ・リーダーを介して返されません。

サポートされるデータベース操作

• コミットされたトランザクションのみがログ・リーダーによって返されます。

1 つのトランザクションに対するすべてのイベントは、一度に返されます。各ト ランザクションは、コミット時にすべて返されます。ログ・リーダーは、コミッ トされたすべてのトランザクションを、ログにコミットされた順番で返します。 重複するトランザクションは、トランザクションごとに返されます。

トリガーはサポートされています。

トリガー・アクション部分の操作は、通常のユーザー操作としてログに記録され ます。トリガーでの書き込み操作は、操作が実行されるとログに記録されます。 つまり、トリガー前の操作はユーザー・データ操作の前にログに記録され、トリ ガー後の操作はユーザー・データ操作の後にログに記録されます。

カスケード・アクションはサポートされています。

参照アクションのカスケードによる操作は、通常のユーザー操作としてログに記 録されます。カスケード操作は、実際のユーザー・データ操作の後にログに記録 されます。

• DDL 操作はサポートされています。

DDL 操作の場合、ログ・リーダーは、元の SOL ステートメントを含む特別な DBE_LOGREADER_LOG_REC_DDL レコードを返します。

キャッチアップ・モードおよびライブ・データ・モード

ログ読み取りが SYS LOG から始まる場合、読み取りは最初にキャッチアップ・モ ードに入ります。キャッチアップ・モードでは、ログ読み取りの開始位置がログか ら検索され、その位置から読み取りが開始されます。ログ読み取りが現在のログの 最後に達すると、ライブ・データの読み取りを開始します。ライブ・モードでは、 トランザクションは、トランザクションが実行されると返されます。

複数のログ・リーダーが使用されている場合、ログ・リーダーごとにいずれかのデ **ータ・モードになります。**

ライブ・データ・モードでは、使用可能なデータがない場合でも、毎秒、カーソル が返されます。この場合、SYS LOG 表の FLAGS フィールドはゼロです。

キキー

主キーは、表に対して必須ではありません。システムで生成された内部および非表 示の主キー値は、ログ・リーダーを介して返されません。

データベースを設計する際に、主キーが定義されていない場合に行を識別する方法 を決定する必要があります。

高可用性

高可用性 (HotStandby) がサポートされているので、1 次サーバーと 2 次サーバー の間でログ・ファイルの内容とログ・アドレスの互換性が保たれます。ログが 1 次 サーバーから読み取られ、フェイルオーバーが発生した場合、SYS LOG からの新 規読み取りは、古い 1 次サーバーから受け取った最後の LOGADDR を使用して開 始することができます。

ログは、2次サーバーから読み取ることもできます。例えばロード・バランシング に関して、この機能は便利です。

スロットル

クライアントがログ・レコードを読み取るスピードより、サーバーがログ・レコー ドを生成するスピードの方が速い場合、スロットルが生じる場合があります。つま り、ログ・リーダーがライブ・データから遅れ過ぎないようにするために、サーバ 一に書き込むユーザー・トランザクションがスローダウンされます。

LogReader.MaxSpace パラメーターを使用して、スロットルが生じる前に行われる バッファリングを制御することができます。

読み取りを開始したがその後で読み取りを停止したアプリケーションが原因で、サ ーバーが停止することもあります。

ログの最大サイズ

ログ・リーダーを使用しているアプリケーションが長時間にわたって停止または終 了した場合、ログの最大サイズに到達することがあります。このような場合、エラ ー・メッセージは生成されません。また、キャッチアップ用にアプリケーションに よって保管された位置は使用できなくなり、キャッチアップ操作は失敗します。

アクセス権限

SYS LOG 表へのアクセス、パーティションへの表の追加、またはパーティション からの表の除去を行うには、管理者権限が必要です。

ログ・リーダーの停止

ログの読み取りはいつでも停止できます。未配信のデータがログに残っていても、 データが失われることはありません。

最後の読み取り位置が認識されていれば、情報を失うことなくログの読み取りを再 開できます。アプリケーションでは、次の SYS LOG 照会が行われると、現在のロ グ位置を使用して、データを失うことなくログの読み取りを続行できます。ログ位 置を指定せずに SYS LOG 表にアクセスすると、ライブ・データから読み取りが開 始されます。

ログ・リーダーは、solidDB サーバーで ADMIN COMMAND 'LOGREADER STOP' コマン ドを使用して停止することができます。

ログ・リーダーの構成

ログ・リーダーは、solid.ini 構成ファイル内の LogReader セクションにあるサー バー・サイド構成パラメーターで構成されています。

このタスクについて

重要: LogReaderEnabled、MaxSpace、および MaxLogSize の各パラメーターも、 solidDB Universal Cache および InfoSphere™ CDC Replication で使用されます。

手順

• LogReaderEnabled を「yes」に設定して、ログ・リーダーを有効にします。

これにより、ログ・リーダーは SYS LOG からの読み取りが可能になります。ト ランザクションのロギング・モードも、より詳細になります。

- ご使用の環境に応じて、以下のパラメーターを設定します。
 - MaxSpace 値を設定して、スロットルが生じる前にメモリーのバッファーに入 れられるログ・レコードの最大数を定義します。
 - MaxLogSize 値を設定して、キャッチアップに使用可能なログの最大サイズを 定義します。

定義したサイズにログが到達すると、古いログ・データが削除され、それより 古い LOGADDR ログ位置からのキャッチアップはできなくなります。

- MaxMemLogSize 値を設定して、ロギングが無効な場合の (Logging,LogEnabled=No)、メモリー内のログ・リーダー・ログ・ファイルの最 大サイズを定義します。

例

```
[LogReader]
LogReaderEnabled=yes ;デフォルト: no
;MaxLogSize=100000 ;デフォルト: 10240 (MB)
;考えられるキャッチアップのために常に保持されるログ・ファイルの
; 量 (MB 単位)。このサイズは、妥当なキャッチアップの最大サイズ
; に応じて調整される必要があります。宣言されるスペースは、
; 常に完全に占有されます。
MaxSpace=500000
                ;デフォルト:100000
; レコードのスロットルに使用されるインメモリー・ログ・リーダー・バッファーの
; サイズ。バッファーがいっぱいになると、スロットル (スローダウン)
;が行われます。バッファーが使用されると、サイズは、solidDB サーバー・プロセスの
: フットプリントにまでなります。
```

ログ・リーダーを使用したログ・データの読み取り

solidDB トランザクション・ログは、ログ・リーダー固有の SELECT ステートメン トを使用して読み取ることができます。

このタスクについて

トランザクション・ログは、複数のアクティブな SELECT ステートメントから同時 に読み取ることができます。各口グ読み取りは、他の口グ読み取りとは無関係に、 別々のログ位置から開始できます。

ヒント:

solidDB パッケージには、ログ・リーダー・インターフェースの使用方法を示すサ ンプル・アプリケーションが含まれています。このサンプル・アプリケーション は、solidDB インストール・ディレクトリー内の samples/logreader ディレクトリ ーにあります。

手順

1. SELECT ステートメントで SYS LOG 表からログ・データを読み取ります。

ログを読み取るための基本構文は、以下のとおりです。

SELECT RECID, RELID, FLAGS, LOGADDR, DATA FROM SYS LOG WHERE LOGADDR > ?;

WHERE 条件は、LOGADDR フィールドに対してのみ許可されます。許可される制約 は、より大きい(>)のみです。他のフィールドに制約を付けると、エラーが生じ ます。

また、LOGADDR フィールドで定義した指定のログ位置からログ読み取りを開始す ることもできます。

a. 現在の LOGADDR 値をリトリーブします。

SELECT LOGADDR FROM SYS LOG LIMIT 1;

例えば、以下のようにします。

SELECT LOGADDR FROM SYS LOG LIMIT 1; LOGADDR

000000000000001FFFFFFF0000029500000295

1 rows fetched.

b. SELECT ステートメントの LOGADDR を定義します。

例えば、以下のようにします。

SELECT RECID, RELID, FLAGS, LOGADDR, DATA FROM SYS_LOG WHERE LOGADDR > '00000000000001FFFFFFF0000029500000295';

結果読み取りが開始すると、フェッチ呼び出しにより、行が返され始めます。ロ グ・レコードのユーザー・データは、バイナリー・フォーマットの DATA 列に 含まれています。

使用可能なデータがない場合、サーバーは 1 秒間隔で空のデータを返します。 このような場合、新規フェッチ呼び出しを発行して、新規データが使用可能かど うかを確認することができます。

DATA 列および SYS LOG 表のその他の列について詳しくは、「IBM solidDB SOL ガイド」の SYS LOG 表の定義 を参照してください。

2. ログ・リーダーから返された行のユーザー・データを再構成します。

注: ログ・レコードの正確な処理手順は、アプリケーション設計によって異なり ます。以下の手順は、ログ・レコードをさらに処理するために使用できるフォー マットでユーザー・データを出力する際に必要となる基本的な手順です。

a. solidDB システム表を照会して、列のメタデータを取得します。

例えば Java 環境では、ResultSet.getMetaData() 呼び出しを使用して solidDB システム表から列のメタデータを読み取ることができます。

b. メタデータを使用して、DATA 列内のデータを解析し、任意のフォーマット で出力を生成します。

例えば、サンプル・アプリケーション (samples/logreader) では、ログ・レ コードがプレーン・テキストの SOL ステートメントに変換されます。

ログ・レコードのパーティショニングおよびフィルタリング

デフォルトでは、アプリケーションによって生成されるすべてのログ・レコードが 返されます。データベースのサブセットのログ・レコードにのみアクセスする場合 は、ログ・リーダーのパーティションを指定することができます。ログ・リーダー のパーティションは、名前付きの表の集合です。パーティションは重複する場合が あります。

パーティションに関する情報は、SYS FEDT DB PARTITION システム表および SYS_FEDT_TABLE_PARTITION システム表に保管されています。

パーティションの作成および削除

ログ・リーダーのパーティションは、SOL ステートメントを使用して、作成、変 更、および削除されます。

このタスクについて

パーティション設定は、トランザクション用でパーシスタントです。

手順

・ パーティションの作成

以下のコマンドを使用して、パーティションを作成します。

CREATE LOGREADER PARTITION creatition-name>

• パーティションの削除

以下のコマンドを使用して、パーティションを削除(ドロップ)します。

・ パーティションの変更

以下のコマンドを使用して、パーティションに表を追加したり、パーティション から表を除去したりします。

注:表がパーティションの一部である場合、その表をドロップしたり、変更した りすることはできません。使用できる ALTER ステートメントは、ALTER LOGREADER PARTITION ... DROP TABLE のみです。

パーティション・フィルターの使用

セッション固有のパーティション・フィルターを設定して、特定のパーティション からのみ、ログ・レコードを読み取ることができます。

このタスクについて

パーティション・フィルターに対する設定は、現在のセッションのみに適用され、 その設定後に開始された SYS LOG からのすべての読み取りに対して有効になりま す。パーティション・データは、SYS_FEDT_DB_PARTITION システム表に保管さ れます。

手順

• 以下のステートメントを使用して、パーティション・フィルターを設定します。

NONE に設定すると (デフォルト)、すべてのログ・レコードが読み取られます。

• SELECT ステートメントを使用して、SYS FEDT DB PARTITION システム表にあ る既存のパーティションを表示します。

例えば、以下のようにします。

SELECT * FROM sys fedt db partition

トランザクション・バッチの設定

トランザクション・バッチを使用すると、ログからの複数のトランザクションを単 一のトランザクションのように返すことができます。トランザクション・バッチ・ サイズは、セッションに応じて設定されます。ログ記録されたトランザクションが 別のデータベースに送られる場合、トランザクション・バッチによって、ネットワ ーク全体の読み取りパフォーマンスを向上させることができます。例えば、多数の 挿入を 1 つのトランザクションでバッチ処理できるため、別のデータベースでトラ ンザクションを実行する必要がある場合に、1 つのトランザクションしか実行しな くて済みます。

このタスクについて

トランザクション・バッチ設定は、現在のセッションにのみ適用され、その設定後 に開始された SYS LOG からのすべての読み取りに対して有効になります。

手順

以下のコマンドを使用して、トランザクション・バッチ・サイズを設定します。 SET LOGREADER BATCH <size>

デフォルトのバッチ・サイズは 1 で、トランザクションのバッチ処理は行われませ h.

タスクの結果

トランザクションのバッチ・サイズを設定しても、キャッチアップ位置は変更され ません。つまり、同じキャッチアップ位置を使用して、もう一度すべてのトランザ クションをバッチ処理で読み取ることができます。

付録 A. solidDB がサポートする ODBC 関数

このトピックでは、solidDB がサポートする ODBC 関数について説明します。

表 170. solidDB がサポートする ODBC 関数

関数名/導入されたバージョン 1	目的	ODBC の使用時の可用性	規格適合 2		
データ・ソースへの接続					
SQLAllocEnv (1.0)	N/A	推奨されない (SQLAllocHandle で置き換え)	N/A		
SQLAllocConnect (1.0)	N/A	推奨されない (SQLAllocHandle で置き換え)	N/A		
SQLAllocHandle (3.0)	サポートされているデータ・ソース属性のリストを返します。 インストールされているドライバーとその属性のリストを返します。	サポートされる サポートされる	ISO 92 ODBC		
SQLConnect (1.0)	ドライバーおよびデータ・ソースへの接続を確立します。接続ハンドルは、状況、トランザクション状態、およびエラー情報を含めて、データ・ソースへの接続に関するすべての情報のストレージを参照します。	サポートされる	ISO 92		
SQLDriverConnect (1.0)	この関数は、SQLConnect の代替となります。 ユーザーに対してすべての接続情報の入力を 促すプロンプトを出すダイアログ・ボックス や、システム情報に定義されていないデー タ・ソースを含めて、SQLConnect の 3 つの 引数より多くの接続情報を必要とするデー タ・ソースをサポートします。	サポートされる (この関数の Unicode バージョンを含む)	ODBC		
SQLBrowseConnect (1.0)	属性および属性値の連続レベルを返します。 すべてのレベルを列挙し終わると、データ・ ソースへの接続が完了し、完全な接続ストリ ングが返されます。 SQL_SUCCESS_WITH_INFO が返された場 合、すべての接続情報が指定され、この時点 でアプリケーションがデータ・ソースに接続 されていることを示しています。	サポートされない	ISO 92		
SQLGetInfo (1.0)	接続に関連付けられたドライバーおよびデー タ・ソースに関する一般情報を返します。	サポートされる	ISO 92		

表 170. solidDB がサポートする ODBC 関数 (続き)

ドライバーが特定の ODBC 関数をサポートするかどうかに関する情報を返します。	サポートされる。この関数 は、ODBC ドライバー・マネ	ISO 92
	ージャー内にインプリメント されています。また、ドライ バー内にもインプリメントで きます。ドライバーに SQLGetFunctions がインプリメ ントされている場合、ドライ バー・マネージャーは、ドラ イバー・マネージャーは、ドラ イバー・マネージャー自体 でこの関数を呼び出します。それ以外の場合、ドライバー・マネージャー自体 でこの関数を実行します。 solidDB の場合、この関数はドライバー内にインプリメント されているため、ドライバー にリンクしたアプリケーションは、アプリケーションは、アプリケーションは、アプリケーションができます。	
データ・ソースでサポートされているデータ型に関する情報を返します。ドライバーは、SQL 結果セットの形式で情報を返します。このデータ型は、データ定義言語 (DDL) ステートメントで使用するためのものです。	サポートされる	ISO 92
ドライバーとデータ・ソースに関するヤ	情報の取得	
データ・ソースに関する情報を返します。	サポートされる。この関数は、ODBC ドライバー・マネージャー内にインプリメントされています。 Microsoft ODBC ドライバー・マネージャーを持たない Windows 以外のプラットフォ	ISO 92
	型に関する情報を返します。ドライバーは、SQL 結果セットの形式で情報を返します。このデータ型は、データ定義言語 (DDL) ステートメントで使用するためのものです。	SQLGetFunctions がインプリメントされている場合、ドライバー・マネージャーは、ドライバー内でこの関数を呼び出します。それ以外の場合、ドライバー・マネージャー自体でこの関数を実行します。 solidDB の場合、この関数はドライバー内にインブリメントされているため、ドライバーにリンクしたアプリケーションは、アプリケーションは、アプリケーションは、アプリケーションは、アプリケーションは、アプリケーションは、アプリケーションは、アプリケーションは、アプリケーションは、アプリケーションは、アプリケーションは、アプリケーショントの関数を呼び出すことができます。 サポートされる ドライバーとデータ・ソースに関する情報の取得 データ・ソースに関する情報を返します。 ドライバーとデータ・ソースに関する情報の取得 ボートされる。この関数は、ODBC ドライバー・マネージャー内にインプリメントされています。 Microsoft ODBC ドライバー・マネージャーを持たない

表 170. solidDB がサポートする ODBC 関数 (続き)

関数名/導入されたバージョン 1	目的	ODBC の使用時の可用性	規格適合 2
SQLDrivers (2.0)	ドライバーの説明とドライバー属性キーワー ドをリストします。	サポートされる。この関数 は、ODBC ドライバー・マネ ージャー内にインプリメント されています。	ODBC
		Windows では、solidDB に接続するアプリケーションが OLE DB または ADO API を使用する場合、またはドライバー・マネージャーを必要とするデータベース・ツール (Microsoft Access、FoxPro、Crystal Reports など)を使用する場合、ドライバー・マネージャーが必要になります。 Windows 以外のプラットフォームでは、ドライバー・マネージャーは、iODBC、Merant、UnixODBC などのベンダーから提供されます。	
SQLGetConnectAttr (3.0)	接続属性の値を返します。	サポートされる	ISO 92
SQLSetConnectAttr (3.0)	接続属性を設定します。	サポートされる	ISO 92
SQLGetEnvAttr (3.0)	環境属性の値を返します。	サポートされる	ISO 92
SQLSetEnvAttr (3.0)	環境属性を設定します。	サポートされる	ISO 92
SQLGetStmtAttr (3.0)	ステートメント属性の値を返します。	サポートされる	ISO 92
SQLSetStmtAttr (3.0)	ステートメント属性を設定します。	サポートされる	ISO 92
SQLSetConnectOption (1.0)	N/A	推奨されない	N/A
SQLGetConnectOption (1.0)		(SQLSetConnectAttr で置き換え)	N/A
		推奨されない (SQLGetConnectAttr で置き換え)	
SQLGetStmtOption (1.0) SQLSetStmtOption (1.0)	N/A N/A	推奨されない (SQLGetStmtAttr で置き換え) 推奨されない (SQLSetStmtAttr で置き換え)	N/A N/A

表 170. solidDB がサポートする ODBC 関数 (続き)

関数名/導入されたバージョン 1	目的	ODBC の使用時の可用性	規格適合 2
SQLGetDescField (3.0) SQLSetDescField (3.0)	単一記述子フィールドの現行の設定または値を返します。 記述子レコードの単一フィールドの値を設定します。	サポートされる サポートされる	ISO 92 ISO 92
SQLGetDescRec (3.0) SQLSetDescRec (3.0)	記述子レコードの複数フィールドの現行の設定または値を返します。返されたフィールドは、列またはパラメーターのデータの名前、データ型、およびストレージを記述します。 列またはパラメーターのデータにバインドされているデータ型とバッファーに影響を与える複数の記述子フィールドを設定します。	サポートされる サポートされる	ISO 92 ISO 92
SQLCopyDesc (3.0)	1 つの記述子ハンドルから別の記述子ハンド ルに記述子情報をコピーします。	サポートされる	ISO 92
	SQL 要求の準備		
SQLAllocStmt (1.0)	N/A	推奨されない (SQLAllocHandle で置き換え)	N/A
SQLPrepare (1.0)	後で実行するために SQL ステートメントを 準備します。	サポートされる	ISO 92
SQLBindParameter (2.0)	SQL ステートメントのパラメーター用のストレージを割り当てます。	サポートされる 注: この関数は、X/Open 標準 および ISO 標準にはあるが、 ODBC 2.x に存在しなかった SQLBindParam に代わるもので す。	ODBC
SQLGetCursorName (1.0) SQLSetCursorName (1.0)	ステートメント・ハンドルに関連したカーソル名を返します。 アクティブ・ステートメントでカーソル名を指定します。アプリケーションが SQLSetCursorName を呼び出さない場合、ドライバーは、SQL ステートメント処理の必要に応じてカーソル名を生成します。	サポートされる サポートされる	ISO 92 ISO 92
SQLParamOptions (1.0)	N/A	推奨されない (SQLSetStmtAttr で置き換え)	N/A
SQLSetParam (1.0)	N/A	推奨されない (SQLBindParameter で置き換え)	N/A
SQLSetScrollOptions (1.0)	カーソル動作を制御するオプションを設定します。	推奨されない (SQLGetInfo お よび SQLSetStmtAttr で置き換 え)	ODBC

表 170. solidDB がサポートする ODBC 関数 (続き)

関数名/導入されたバージョン 1	目的	ODBC の使用時の可用性	規格適合 2			
要求のサブミット						
SQLExecute (1.0)	ステートメント内にいずれかのパラメータ ー・マーカーが存在する場合、そのパラメー ター・マーカー変数の現行値を使用して準備 済みステートメントを実行します。	サポートされる	ISO 92			
SQLExecDirect (1.0)	ステートメント内にいずれかのパラメーターが存在する場合、そのパラメーター・マーカー変数の現行値を使用して準備可能ステートメントを実行します。SQLExecDirect は、一回限りの実行のために SQL ステートメントをサブミットする最も迅速な方法です。	サポートされる	ISO 92			
SQLNativeSQL (1.0)	ドライバーによって変更された SQL ストリングを返します。SQLNativeSQL は、SQL ステートメントを実行しません。	インプリメントされない。 solidDB は、この機能をサポー トしません。	N/A			
SQLDescribeParam (1.0)	ドライバーによって変換された SQL ステートメントのテキストを返します。この情報は、IPD のフィールドでも入手できます。	サポートされる	ODBC			
SQLNumParams (1.0)	SQL ステートメント内のパラメーター数を返します。	サポートされる	ISO 92			
SQLParamData (1.0)	SQLPutData と組み合わせて使用され、実行時 にパラメーター・データを提供します。(長い データ値の場合に便利です。)	サポートされる	ISO 92			
SQLPutData (1.0)	アプリケーションは、ステートメント実行時に、パラメーターまたは列のデータをドライバーに送信できます。この関数を使用して、文字、バイナリー、またはデータ・ソース固有のデータ型 (例えば、SQL_LONGVARBINARY 型またはSQL_LONGVARCHAR型のパラメーター)の列に文字データ値またはバイナリー・データ値を部分単位で送信できます。	サポートされる	ISO 92			
	結果および結果に関する情報のリト	リーブ				
SQLRowCount (1.0)	UPDATE、INSERT、または DELETE のステートメントによって影響を受ける行の数を返します。	サポートされる	ISO 92			
SQLNumResultCols (1.0)	結果セット内の列数を返します。	サポートされる	ISO 92			

表 170. solidDB がサポートする ODBC 関数 (続き)

関数名/導入されたバージョン 1	目的	ODBC の使用時の可用性	規格適合 2
SQLDescribeCol (1.0)	結果セット内の 1 つの列に対する結果記述子 (列名、型、列サイズ、小数桁数、および NULL 可能性)を返します。この情報は、IRD のフィールドでも入手できます。 注:ドライバーは、現在、 SQL_DESC_LABEL、 SQL_DESC_NAME、 SQL_DESC_SCHEMA_NAME、 SQL_DESC_SCHEMA_NAME、 SQL_DESC_BASE_COLUMN_NAME、 および SQL_DESC_BASE_TABLE_NAME の各属性に 関して、バイト数の代わりに文字数を返します。 これは、ODBC 標準により厳密に準拠しており、ADO、VB、OLE-DB、および ODBC の呼び出しを使用して正確に機能します。ただし、これは Microsoft Visual DataBase Project の障害の原因となることに注意してください。レコードの更新/挿入後、そのレコードが 保存されず、「the table does not exist」とい		ISO 92
	うエラーが表示されます。		
SQLColAttributes (1.0)	N/A	推奨されない (SQLColAttribute で置き換え)	N/A
SQLColAttribute (3.0)	結果セット内の列の属性を記述します。 注: ドライバーは、現在、 SQL_DESC_LABEL、 SQL_DESC_NAME、 SQL_DESC_SCHEMA_NAME、 SQL_DESC_CATALOG_NAME、 SQL_DESC_BASE_COLUMN_NAME、 および SQL_DESC_BASE_TABLE_NAME の各属性に 関して、バイト数の代わりに文字数を返します。 これは、ODBC 標準により厳密に準拠しており、ADO、VB、OLE-DB、および ODBC の呼び出しを使用して正確に機能します。ただし、これは Microsoft Visual DataBase Projectの障害の原因となることに注意してください。レコードの更新/挿入後、そのレコードが保存されず、「the table does not exist」とい	サポートされる	ISO 92
SOI BindCol (10)	うエラーが表示されます。 結果列用にストレージを割り当て、データ型	サポートされる	150 03
SQLBindCol (1.0)	お果列用にストレージを割り当て、アータ型 を指定します。	リルートられる	ISO 92
SQLFetch (1.0)	複数の結果行を返します。その際、結果セットから次のデータ行セットをフェッチし、すべてのバインド済み列のデータを返します。	サポートされる	ISO 92
SQLExtendedFetch (2.0)	N/A	SQLFetchScroll で置き換え	N/A

表 170. solidDB がサポートする ODBC 関数 (続き)

関数名/導入されたバージョン 1	目的	ODBC の使用時の可用性	規格適合 2
SQLFetchScroll (3.0)	スクロール可能な結果行を返します。その際、結果セットから指定されたデータ行セットをフェッチし、すべてのバインド済み列のデータを返します。ブロック・カーソルのサポートにより、アプリケーションは、単一フェッチで複数の行をアプリケーション・バッファーにフェッチできます。 ODBC 2.x ドライバーで作業する場合、ドライバー・マネージャーは、この関数をSQLExtendedFetch にマップします。	サポートされる 注: 現在、solidDB ODBC ド ライバーはブックマークをサ ポートしていないため、 SQLFetchScroll で SQL_FETCH_BOOKMARK オ プションをサポートすること はできません。	ISO 92
SQLGetData (1.0)	結果セットの 1 行の 1 列の一部または全部 を返します。複数回呼び出して可変長データ を部分単位でリトリーブすることができるた め、長いデータ値の場合に便利です。	サポートされる	ISO 92
SQLSetPos (1.0)	フェッチしたデータ・ブロック内にカーソルを位置付け、アプリケーションが行セット内のデータのリフレッシュや、結果セット内のデータの更新または削除を行えるようにします。	サポートされる。以下のすべ てのオプションと一緒にサポ ートされます。 SQL_POSITION、 SQL_DELETE、および SQL_UPDATE	ODBC
SQLBulkOperations (3.0)	バルク挿入、およびブックマークによる更 新、削除、フェッチを含むバルク・ブックマ ーク操作を実行します。	solidDB は、SQL_ADD オプションを使用する場合に限ってサポートします。	ODBC
SQLMoreResults (1.0)	SELECT、UPDATE、INSERT、または DELETE のステートメントを含むステートメントで使用できる結果がまだあるかどうかを 判別し、もしあれば、それらの結果の処理を 初期化します。	サポートされない solidDB は、複数の結果をサポ ートしません。	ODBC
SQLGetDiagField (3.0)	追加の診断情報 (指定したハンドルに関連付けられた診断データ構造の単一フィールド) を返します。この情報には、エラー、警告、および状況情報が含まれます。	サポートされる	ISO 92
SQLGetDiagRec (3.0)	追加の診断情報 (診断データ構造の複数フィールド) を返します。1 回の呼び出しに対して 1 つの診断フィールドを返す SQLGetDiagField とは異なり、SQLGetDiagRec は、SQLSTATE、ネイティブ・エラー・コード、および診断メッセージ・テキストなど、診断レコードで一般的に使用されている複数のフィールドを返します。	サポートされる	ISO 92
SQLError (1.0)	N/A	推奨されない (SQLGetDiagRec で置き換え)	N/A

表 170. solidDB がサポートする ODBC 関数 (続き)

関数名/導入されたバージョン ¹	目的	ODBC の使用時の可用性	規格適合 2		
データ・ソースのシステム表に関する情報の取得					
SQLColumnPrivileges (1.0)	指定された表の列とそれに関連した特権のリストを返します。ドライバーは、指定されたStatementHandle に対する結果セットとして、情報を返します。この関数は、該当する SQLの実行を通してサポートされます。	サポートされる	ODBC		
SQLColumns (1.0)	指定された表の列とそれに関連した特権のリストを返します。ドライバーは、指定された StatementHandle に対する結果セットとして、情報を返します。この関数は、該当する SQL の実行を通してサポートされます。	サポートされる	X/Open		
SQLForeignKeys (1.0)	以下の 2 つのタイプのリストを返します。	サポートされる	ODBC		
	指定された表内の外部キー (他の表の主キーを参照する、指定された表内の列)				
	指定された表の主キーを参照する、他の表 内の外部キー				
	ドライバーは、指定されたステートメントに 対する結果セットとして、各リストを返しま す。				
SQLPrimaryKeys (1.0)	表の主キーを構成する列名のリストを返します。ドライバーは、結果セットとして情報を返します。この関数では、単一の呼び出しで複数の表から主キーを返すことはサポートされていません。	サポートされる	ODBC		
SQLProcedureColumns (1.0)	指定したプロシージャーの入出力パラメーターのリスト、および結果セットを構成する列を返します。ドライバーは、指定されたステートメントに対する結果セットとして、情報を返します。	サポートされる	ODBC		
SQLProcedures (1.0)	特定のデータ・ソースに保管されたプロシージャー名のリストを返します。プロシージャーは、実行可能オブジェクト、または入出力パラメーターを使用して実行できる名前付きエンティティーを示す総称です。	サポートされる	ODBC		

表 170. solidDB がサポートする ODBC 関数 (続き)

関数名/導入されたバージョン 1	目的	ODBC の使用時の可用性	規格適合 2
SQLSpecialColumns (1.0)	指定した表内の列に関して、以下の情報を返 します。	サポートされる	X/Open
	表内の行をユニークに識別する最適な列セット ・		
	トランザクションによって行内の値が更新 された場合に自動的に更新される列		
SQLStatistics (1.0)	単一の表およびその表に関連した索引のリストに関する統計を返します。ドライバーは、 結果セットとして情報を返します。	サポートされる	ISO 92
SQLTablePrivileges (1.0)	表のリストおよび各表に関連した特権のリストを返します。ドライバーは、指定されたステートメントに対する結果セットとして、情報を返します。	サポートされる	ODBC
SQLTables (1.0)	特定のデータ・ソースに保管された表名、カタログ名、またはスキーマ名、および表タイプのリストを返します。	サポートされる	X/Open
	ステートメントの終了		
SQLFreeStmt (1.0)	ステートメント処理を終了し、保留中の結果を破棄し、またオプションでステートメント・ハンドルに関連付けられたすべてのリソースを解放します。	サポートされる 注: SQL_DROP オプション付 きの SQLFreeStmt は、 SQLFreeHandle で置き換えら れています。	ISO 92
SQLCloseCursor (3.0)	ステートメントに対してオープンされていた カーソルをクローズし、保留中の結果を破棄 します。	サポートされる	ISO 92
SQLCancel (1.0)	SQL ステートメントに対する処理を取り消します。	サポートされる	ISO 92
SQLEndTran (3.0)	接続に関連付けられたすべてのステートメントに対するトランザクションのコミットまたはロールバックを要求します。また、SQLEndTranは、環境に関連付けられたすべての接続に関して、コミット操作またはロールバック操作を実行するよう要求できます。	サポートされる	ISO 92
SQLTransact (1.0)	N/A	推奨されない (SQLEndTran で置き換え)	N/A
	接続の終了		

表 170. solidDB がサポートする ODBC 関数 (続き)

関数名/導入されたバージョン 1	目的	ODBC の使用時の可用性	規格適合 ²
SQLDisconnect (1.0)	特定の接続ハンドルに関連付けられた接続を 閉じます。	サポートされる	ISO 92
SQLFreeConnect (1.0)	N/A	推奨されない (SQLFreeHandle で置き換え)	N/A
SQLFreeEnv (1.0)	N/A	推奨されない (SQLFreeHandle で置き換え)	N/A
SQLFreeHandle (3.0)	特定の環境、接続、ステートメント、または 記述子のハンドルに関連付けられたリソース を解放します。	サポートされる	ISO 92

- ¹ 導入されたバージョンとは、関数が最初に ODBC API に追加された時点のバージ ョンです。
- 2 規格適合レベルは、以下のいずれかにすることができます。
- ISO 92 (X/Open は ISO 92 の完全なスーパーセットであるため、X/Open バージ ョン 1 にもあります)
- X/Open (ODBC 3.x は X/Open バージョン 1 の完全なスーパーセットであるた め、ODBC 3.x にもあります)
- ODBC (ISO 92 または X/Open のどちらにもありません)
- N/A (ODBC 3.x では推奨されません)

付録 B. solidDB ODBC ドライバー 3.5.1 属性のサポート

このトピックでは、solidDB ODBC ドライバー 3.5.1 の属性について説明します。

属性は、以下のカテゴリーにグループ化されています。

- 環境レベルの属性
- 接続レベルの属性
- ステートメント・レベルの属性
- 列レベルの属性

表 171. 001 環境レベル

属性	値 (オプション)	ドライバー・マネージャー	ドライバー単独	コメント
SQL_ATTR_ CONNECTION_ POOLING	SQL_CP_OFF SQL_CP_ ONE_PER_DRIVER SQL_CP_ ONE_PER_HENV	すべての値がサポ ートされる	すべての値がドラ イバーに適用され ない	すべての値が ODBC ドライバー に適用されず、ド ライバー・マネ で ジャーにます。 した サンカーにます。の は、ンが ODBC DM にリンクーロート ションはでで ションは、で ションは、で ションは、で ションは、 ションに ションに シャーに シャーに シャーに シャーに シャーに シャーに カック シャーに シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック シャーに カック カック カック カック カック カック カック カック カック カック
SQL_ATTR_CP_MATCH	SQL_CP_ STRICT_MATCH SQL_CP_ RELAXED_MATCH	すべての値がサポ ートされる	すべての値がドラ イバーに適用され ない	すべての値が ODBC ドライバー に適用されず、ド ライバー・よれで、ネー ジャーによす。した 理されて、プリンと は、ンが ODBC DM にリンクーロート ションはででで ションは、では ションは、では ションは、では ションは、では ションは、では ションは、でした ションは、でした ションは、でした ションは、だっした。 ションは、だった。 ションは、だった。 ションは、たった。 ションは、たった。 といった。 とった。 とった。 とった。 といった。 とった。 とった。 とった。 とった。 とった。 とった。 とった。 と

表 171. 001 環境レベル (続き)

属性	値 (オプション)	ドライバー・ マネージャー	ドライバー単独	コメント
SQL_ATTR_ ODBC_VERSION	SQL_OV_ODBC3 SQL_OV_ODBC2	サポートされる サポートされない	サポートされる サポートされない	ユーザーはバージョンを 2 に設定して取得できますが、動作は 3.0 以上に従って行われます。
SQL_ATTR_ OUTPUT_NTS	SQL_TRUE SQL_FALSE	サポートされる サポートされない	サポートされる サポートされない	

表 172.002 接続レベル

		ドライバー・		
属性	値 (オプション)	マネージャー	ドライバー単独	コメント
SQL_ATTR_ODBC_CURSORS	SQL_CUR_IF_NEEDED SQL_FETCH_PRIOR	すべての値がサポ ートされない	すべての値がサポ ートされない	
	SQL_CUR_USE_ODBC			
	SQL_CUR_ USE_DRIVER			
SQL_ATTR_ACCESS_MODE	SQL_MODE_ READ_ONLY	すべての値がサポ ートされない	すべての値がサポ ートされない	
	SQL_MODE_ READ_WRITE			
SQL_ATTR_ASYNC_ENABLE	SQL_ASYNC_ ENABLE_OFF	すべての値がサポ ートされない	すべての値がサポ ートされない	
	SQL_ASYNC_ ENABLE_ON			
SQL_ATTR_AUTO_IPD	SQL_TRUE	すべての値がサポ ートされない	すべての値がサポ ートされない	
	SQL_FALSE			
SQL_ATTR_AUTOCOMMIT	SQL_ATTR_ AUTOCOMMIT_OFF	すべての値がサポ ートされる	すべての値がサポ ートされる	
	SQL_ATTR_ AUTOCOMMIT_ON			

表 172. 002 接続レベル (続き)

属性	値 (オプション)	ドライバー・ マネージャー	ドライバー単独	コメント
SQL_ATTR_ CONNECTION_ TIMEOUT	秒単位のタイムアウト値	サポートされる	サポートされる	
SQL_ATTR_ CURRENT_CATALOG	カタログ名	サポートされる	サポートされる	
SQL_ATTR_ LOGIN_TIMEOUT	秒単位のタイムアウト値	サポートされる	サポートされる	
SQL_ATTR_ METADATA_ID	SQL_TRUE SQL_FALSE	すべての値がサポ ートされない	すべての値がサポ ートされない	
SQL_ATTR_PACKET_SIZE	バイト単位のパケット・ サイズ	要求サイズ	サポートされない	
SQL_ATTR_QUIET_MODE	NULL 設定	設定と取得が可能	サポートされない	
SQL_ATTR_TRACE	SQL_TRACE_OFF SQL_TRACE_ON	すべての値がサポ ートされる	すべての値がサポ ートされない	すべての値が、ド ライバーではな く、DM によって 処理されます。
SQL_ATTR_TRACEFILE	トレース・ファイル名を 指すポインター	サポートされる	サポートされない	ドライバーではな く、DM によって 処理されます。
SQL_ATTR_TRNSLATE_LIB	lib のポインター名	サポートされる	サポートされない	ドライバーではな く、DM によって 処理されます。
SQL_ATTR_TXN_ISOLATION	SQL_TXN_ SERIALIZABLE SQL_TXN_READ_ UNCOMMITTED SQL_TXN_READ_ COMMITTED SQL_TXN_ REPEATABLE_ READ	以下を除くすべて の値がサポートさ れる SQL_TXN_ READ_ UNCOMMITTED	以下を除くすべて の値がサポートさ れる SQL_TXN_ READ_ UNCOMMITTED	solidDB サーバーは、 READ_ UNCOMMITTED 機能をサポートしません。

属性 SQL_ATTR_ CONCURRENCY	値 (オプション) SQL_CONCUR_ READ_ONLY SQL_CONCUR_LOCK SQL_CONCUR_ROWVER	ドライバ ー・マネージャー すべての値がサポートされる	ドライバ 一単独 すべての 値がサれ っトされる	コメント SQL_CONCUR_READ_ONLY については、設定と取得がサポートされます。その他のすべて の値については、設定はサポートされますが、取得では READ_ONLY が返されます。
SQL_ATTR_ CURSOR_TYPE	SQL_CONCUR_VALUES SQL_CURSOR_ FORWARD_ONLY SQL_CURSOR_ KEYSET_DRIVEN SQL_CURSOR_DYNAMIC SQL_CURSOR_STATIC	サれる 強制と 強制と 動的 強制と が 動いる 動いる 動いる 動いる 動いる 動いる 動いる 動いる 動いる のいる のいる のいる のいる のいる のいる のいる のいる のいる の	サさ 強動る 強動る 強動る 強動る	
SQL_ATTR_MAX_LENGTH	バイト単位の長さ	サポートさ れない	サポート されない	長さに関係なく、デフォルト (0) にのみ設定されます。
SQL_ATTR_MAX_ROWS	行の最大数	サポートさ れない	サポート されない	長さに関係なく、デフォルト (0) にのみ設定されます。
SQL_ATTR_ RETRIEVE_DATA	SQL_RD_OFF SQL_RD_ON	サポートさ れない サポートさ れる	サポート されない サポート される	SQL_RD_ON にのみ設定されます。
SQL_ATTR_ USE_BOOKMARKS	SQL_UB_OFF SQL_UB_ON	すべての値 がサポート されない	すべての 値がサポ ートされ ない	
SQL_ATTR_ ROW_ARRAY_SIZE	SQLFetch または SQLFetchScroll の呼び出し 後、行状況値の入った SQLUSMALLINT 値の配列 を指す SQLUSMALLINT* 値	サポートさ れる	サポート される	この配列のエレメントの数は、 行セット内にある行の数と同じ です。

表 173. 03 ステートメント・レベル (続き)

		ドライバー・マネー	ドライバ	
属性	値 (オプション)	ジャー	ー単独	コメント
SQL_ATTR_ROWS_ FETCHED_PTR	SQLFetch または SQLFetchScroll の呼び出し 後、フェッチした行の数を 返すバッファーを指す SQLUINTEGER* 値	サポートさ れる	サポート される	
SQL_ATTR_ ROW_STATUS_PTR	SQLFetch または SQLFetchScroll の各呼び出 しで返される行数を指定す る SQLUINTEGER 値	サポートさ れる	サポート される	
SQL_ROWSET_SIZE	返される行数	サポートさ れる	サポート される	ODBC アプリケーションは、1 より大きい値を設定できます。
SQL_ASYNC_ENABLE	SQL_ASYNC_ ENABLE_ON SQL_ASYNC_ ENABLE_OFF	すべての値 がサポート されない	すべての 値がサポ ートされ ない	
SQL_BIND_TYPE	SQL_BIND_BY_COLUMN	サポートさ れない	サポート されない	
SQL_ATTR_KEYSET_SIZE	サイズ	サポートさ れない	サポートされない	サイズに関係なく、デフォルト (0) にのみ設定されます。
SQL_ATTR_NOSCAN	SQL_NOSCAN_OFF SQL_NOSCAN_ON	サポートさ れない サポートさ れない	サポート されない サポート されない	SQL_NOSCAN_OFF にのみ設定 されます。
SQL_ATTR_ SIMULATE_CURSOR	SQL_SC_NON_UNIQUE SQL_SC_TRY_UNIQUE SQL_SC_UNIQUE	すべての値 がサポート されない	すべての 値がサポ ートされ ない	すべての値が、solidDB ドライ バーに関連しません。
SQL_ATTR_ APP_PARAM_DESC	SQL_NULL_HDESC	サポートさ れない	サポート されない	
SQL_ATTR_ APP_ROW_DESC	SQL_NULL_HDESC	サポートさ れない	サポートされない	

表 173.03 ステートメント・レベル (続き)

属性	値 (オプション)	ドライバ ー・マネー ジャー	ドライバ ー単独	コメント
SQL_ATTR_ CURSOR_SCROLLABLE	SQL_SCROLLABLE SQL_NONSCROLLABLE	サポートされない	サポートされない	SQL_NONSCROLLABLE にの み設定されます。
		サポートさ れない	サポート されない	
SQL_ATTR_ CURSOR_SENSITIVITY	SQL_UNSPECIFIED SQL_INSENSITIVE	サポートさ れない	サポート	SQL_UNSPECIFIED にのみ設定されます。
	SQL_SENSITIVE	サポートさ れない	サポートされない	
		サポートされない	サポート されない	
SQL_ATTR_ROW_NUMBER	現在行数	サポートさ れる	サポート される	ユーザーは行数を取得できます。読み取り専用プロパティーなので、設定はできません。
SQL_ATTR_ ENABLE_AUTO_IPD	SQL_TRUE SQL_FALSE	両方の値が サポートさ れない	両方の値 がサポー トされな い	
SQL_ATTR_METADATA_ID	SQL_TRUE SQL_FALSE	両方の値が サポートさ れない	両方の値 がサポー トされな い	
SQL_ATTR_PARAM_ BIND_OFFSET_PTR	SQL_DESC_DATA_PTR SQL_DESC_ INDICATOR_PTR	すべての値 がサポート される	すべての 値がサポ ートされ る	
	SQL_DESC_ OCTET_LENGTH_PTR			
	SQL_DESC_ BIND_OFFSET_PTR			
SQL_ATTR_PARAM_ OPERATION_PTR	無視されるパラメーターの リストを含む配列を指すポ インター		サポート される	

表 173.03 ステートメント・レベル (続き)

属性	値 (オプション)	ドライバ ー・マネー ジャー	ドライバ ー単独	コメント
SQL_ATTR_PARAMS_ PROCESSED_PTR	SQLExecute または SQLExecDirect を通して実行される SQL ステートメントによって処理されたパラメーターのセット数を返す符号なし整数ポインター	サポートさ れる	サポート される	

表 174. 04 列属性

属性	値 (オプション)	ドライバー・ マネージャー	ドライバー単独	コメント
SQL_DESC_BASE_COLUMN_NAME		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_BASE_TABLE_NAME		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_DISPLAY_SIZE		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_NAME				
SQL_DESC_NULLABLE		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_OCTET_LENGTH		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_PRECISION		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_SCALE		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_UPDATABLE		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_FIXED_PREC_SCALE		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_TABLE_NAME		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_TYPE		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_UNNAMED		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_SCHEMA_NAME		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_LOCAL_TYPE_NAME		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_LABEL		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_TYPE_NAME		サポートされる	サポートされる	

表 174. 04 列属性 (続き)

属性	値 (オプション)	ドライバー・ マネージャー	ドライバー単独	コメント
SQL_DESC_AUTO_UNIQUE_VALUE		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_CONCISE_TYPE		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_LITERAL_PREFIX		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_UNSIGNED		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_LITERAL_PREFIX		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_UNSIGNED		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_LITERAL_SUFFIX		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_CATALOG_NAME		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_COUNT		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_SEARCHABLE		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_LENGTH		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_CASE_SENSITIVE		サポートされる	サポートされる	
SQL_DESC_NUM_PREX_RADIX		サポートされる	サポートされる	

付録 C. エラー・コード

このトピックでは、SQLGetDiagRec 関数用にドライバーから返される可能性のある SQLSTATE 値を記載したエラー・コード表を示します。

注: SQLGetDiagRec および SQLGetDiagField は、X/Open (現 Open Group) の「Data Management: Structured Query Language (SQL), Version 2 (3/95)」に準拠する SQLSTATE 値を返します。

エラー・コード表の規約

表 175. エラー・コード・クラス値

クラス値	意味
01	警告を表し、SQL_SUCCESS_WITH_INFO の 戻りコードを含みます。
01, 07, 08, 21, 22, 25, 28, 34, 3C, 3D, 3F, 40, 42, 44, HY	SQL_ERROR の戻り値を含むエラーを表します。
IM	ODBC から派生した警告およびエラーを表します。

注: 一般に、関数は、実行が成功すると $SQL_SUCCESS$ 値を返します。しかし、場合によっては、関数は SQLSTATE 000000 を返すこともあり、同様に実行が成功したことを表します。

SQLSTATE ⊐−ド

表 176. SQLSTATE コード

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
01000	通常の警告	以下を除くすべての ODBC 関数
01000		STEWN GOVERNMENT
		SQLGetDiagField
		SQLGetDiagRec
01001	カーソル操作の競合	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLParamData
		SQLSetPos
01002	切断エラー	SQLDisconnect
01003	set 関数内で NULL 値を除去	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLParamData

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
01004	ストリング・データ、右側の切り	SQLColAttribute
01004	捨て	SQLDataSources
		SQLDescribeCol
		SQLDriverConnect
		SQLDrivers
		SQLExecDirect
		• SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		• SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLGetConnectAttr
		SQLGetCursorName
		SQLGetData
		SQLGetDescField
		SQLGetDescRec
		SQLGetEnvAttr
		SQLGetInfo
		SQLGetStmtAttr
		SQLParamData
		SQLPutData
		SQLSetCursorName
01006	特権が取り消されない	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLParamData
01007	特権が付与されない	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLParamData
01S00	接続ストリング属性が無効	SQLDriverConnect
		SQLSetPos
01S01	行内のエラー	SQLExtendedFetch
		SQLConnect
01S02	オプション値の変更	SQLDriverConnect
		SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLParamData
		SQLPrepare
		SQLSetConnectAttr
		SQLSetDescField
		SQLSetEnvAttr
		SQLSetStmtAttr
	結果セットが最初の行セットを返	SQLExtendedFetch
01S06	す前にフェッチを試行	SQLEXIENCEUTEICH

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
01S07	小数部の切り捨て	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLGetData
		SQLParamData
		SQLSetPos
01S08	ファイル DSN の保存エラー	SQCriverConnect
01S09	無効なキーワード	SQLDriverConnect
07001	パラメーター数の誤り	SQLExecDirect
		SQLExecute
07002	COUNT フィールドが不正	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLParamData
07005	準備済みステートメントがカーソ ル指定ではない	SQLColAttribute
	か担任でなない。	SQLDescribeCol
07006	制限付きデータ型属性違反	SQLBindCol
		SQLBindParameter
		SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLGetData
		SQLParamData
		SQLPutData

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
07009	無効な記述子索引	SQLBindCol
		SQLBindParameter
		SQLColAttribute
		SQLDescribeCol
		SQLDesribeParam
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLGetData
		SQLGetDescField
		SQLParamData
		SQLSetDescField
		SQLSetDescRec
		SQLSetPos
07S01	デフォルト・パラメーターの無効 な使用	SQLExecDirect
	74 DZ/11	SQLExecute
		SQLParamData
		SQLPutData
08001	クライアントが接続を確立できない	SQLConnect
	V-1	SQLDriverConnect
08002	接続名は使用中	SQLConnect
		SQLDriverConnect
		SQLSetConnectAttr
08003	接続が存在しない	SQLAllocHandle
		SQLDisconnect
		SQLEndTran
		SQLGetConnectAttr
		SQLGetInfo
		SQLSetConnectAttr
08004	サーバーが接続を拒否	SQLConnect
		SQLDriverConnect
08007	トランザクション中の接続障害	SQLEndTran

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
08S01	通信リンク障害	SQLColumnPrivileges
08301	適用ラマン中日	SQLColumns
		SQLConnect
		• SQLConnect
		SQLCopyDesc
		SQLDescribeCol
		SQLDescribeParam
		SQLDriverConnect
		SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		• SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLForeignKeys
		SQLGetConnectAttr
		• SQLGetData
		SQLGetDescField
		SQLGetDescRec
		SQLGetFunctions
		SQLGetInfo
		SQLGetTypeInfo
		SQLMoreResults
		SQLNumParams
		SQLNumResultCols
		SQLParamData
		SQLPrepare
		SQLPrimaryKeys
		SQLProcedureColumns
		SQLProcedures
		SQLPutData
		SQLSetConnectAttr
		SQLSetDescField
		SQLSetDescRec
		SQLSetEnvAttr
		SQLSetStmtAttr
		SQLSpecialColumns
		SQLStatistics
		SQLTablePrivileges
		• SQLTables
21S01	挿入値リストと列リストが一致し	SQLExecDirect
	ない	SQLPrepare
21S02	派生表の次数と列リストが一致し	SQLExecDirect
	ない	SQLExecute
		SQLParamData
		SQLPrepare

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
22001	ストリング・データ、右側の切り	SQLExecDirect
	捨て	SQLExecute
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLParamData
		SQLPutData
		SQLSetDescField
		SQLSetPos
22002	標識変数が必要であるが、提供さ	SQLExecDirect
	れていない	SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLGetData
		SQLParamData
22003	範囲外の数値	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLGetData
		SQLGetInfo
		SQLParamData
		SQLPutData
		SQLSetPos
22007	無効な日時フォーマット	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLGetData
		SQLParamData
		SQLPutData
		SQLSetPos

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
22008	日時フィールドのオーバーフロー	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLParamData
		SQLPutData
22012	ゼロ除算	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLGetData
		SQLParamData
		SQLPutData
22015	インターバル・フィールドのオー	SQLExecDirect
	バーフロー	SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLGetData
		SQLParamData
		SQLPutData
		SQLSetPos
22018	キャスト指定に関する無効文字値	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLGetData
		SQLParamData
		SQLPutData
		SQLSetPos
22019	無効なエスケープ文字	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLPrepare

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	E コート (続ざ) エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
22025	無効なエスケープ・シーケンス	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLPrepare
22026	ストリング・データ、長さの不一 致	SQLParamData
23000	保全性制約違反	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLParamData
		SQLSetPos
24000	無効なカーソル状態	SQLCloseCursor
		SQLColumnPrivileges
		SQLColumns
		SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLForeignKeys
		SQLGetData
		SQLGetStmtAttr
		SQLGetTypeInfo
		SQLPrepare
		SQLPrimaryKeys
		SQLProcedureColumns
		SQLProcedures
		SQLConnectAttr
		SQLSetCursorName
		SQLSetPos
		SQLSpecialColumns
		SQLStatistics
		SQLTablePrivileges
		SQLTables
25000	無効なトランザクション状態	SQLDisconnect
25S01	トランザクション状態	SQLEndTran
25802	トランザクションが引き続きアク ティブ	SQLEndTran

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
25803	トランザクションがロールバック されている	SQLEndTran
28000	無効な許可指定	SQLConnect
		SQLDriverConnect
34000	無効なカーソル名	SQLExecDirect
		SQLPrepare
		SQLSetCursorName
3C000	重複カーソル名	SQLSetCursorName
3D000	無効なカタログ名	SQLExecDirect
		SQLPrepare
		SQLSetConnectAttr
3F000	無効なスキーマ名	SQLExecDirect
		SQLPrepare
40001	逐次化障害	SQLColumnPrivileges
		SQLColumns
		SQLEndTran
		SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLForeignKeys
		SQLGetTypeInfo
		SQLMoreResults
		SQLParamData
		SQLPrimaryKeys
		SQLProcedureColumns
		SQLProcedures
		SQLSetPos
		SQLSpecialColumns
		SQLStatistics
		SQLTablePrivileges
		SQLTables
40002	保全性制約違反	SQLEndTran

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
40003	ステートメントの完了が不明	SQLColumnPrivileges
		SQLColumns
		SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLGetTypeInfo
		SQLForeignKeys
		SQLMoreResults
		SQLPrimaryKeys
		SQLProcedureColumns
		SQLProcedures
		SQLParamData
		SQLSetPos
		SQLSpecialColumns
		SQLStatistics
		SQLTables
42000	構文エラーまたはアクセス違反	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLParamData
		SQLPrepare
		SQLSetPos
42S01	基本表またはビューが既に存在す	SQLExecDirect
	<u>る</u>	SQLPrepare
42S02	基本表またはビューが検出されな	SQLExecDirect
	7)	SQLPrepare
42S11	索引が既に存在する	SQLExecDirect
		SQLPrepare
42S12	索引が検出されない	SQLExecDirect
		SQLPrepare
42S21	列が既に存在する	SQLExecDirect
		SQLPrepare
42822	列が検出されない	SQLExecDirect
		SQLPrepare

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
SQESTATE		IN JULY CEEP VIII I VIII VIII VIII VIII VIII VIII
44000	WITH CHECK OPTION 違反	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLParamData
HY000	一般エラー	以下を除くすべての ODBC 関数
		SQLGetDiagField
		SQLGetDiagRec
HY001	メモリー割り振りエラー	以下を除くすべての ODBC 関数
		SQLGetDiagField
		SQLGetDiagRec
HY003	無効なアプリケーション・バッフ ァー型	SQLBindCol
	, 1	SQLBindParameter
		SQLGetData
HY004	無効な SQL データ型	SQLBindParameter
		SQLGetTypeInfo
HY007	関連付けられたステートメントが 準備されていない	SQLCopyDesc
	T min C T o C T o C T	SQLGetDescField
		SQLGetDescRec

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
HY008	操作の取り消し	非同期に処理可能なすべての ODBC 関数
		SQLColAttribute
		SQLColumnPrivileges
		SQLColumns
		SQLDescribeCol
		SQLDescribeParam
		SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLForeignKeys
		SQLGetData
		SQLGetTypeInfo
		SQLMoreResults
		SQLNumParams
		SQLNumResultCols
		SQLParamData
		SQLPrepare
		SQLPrimaryKeys
		SQLProcedureColumns
		SQLProcedures
		SQLPutData
		SQLSetPos
		SQLSpecialColumns
		SQLStatistics
		SQLTablePrivileges
		SQLTables

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
HY009	NULL ポインターの無効な使用	SQLAllocHandle
		SQLBindParameter
		SQLColumnPrivileges
		SQLColumns
		SQLExecDirect
		SQLForeignKeys
		SQLGetCursorName
		SQLGetData
		SQLGetFunctions
		SQLPrepare
		SQLPrimaryKeys
		SQLProcedureColumns
		SQLProcedures
		SQLPutData
		SQLSetConnectAttr
		SQLSetCursorName
		SQLSetEnvAttr
		SQLSetStmtAttr
		SQLSpecialColumns
		SQLStatistics
		SQLTablePrivileges
		SQLTables

表 176. SOLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
HY010	関数のシーケンス・エラー	SQLAllocHandle
111010		SQLBindCol
		SQLBindParameter
		SQLCloseCursor
		SQLColAttribute
		SQLColumnPrivileges
		SQLColumns
		SQLCopyDesc
		SQLDescribeCol
		SQLDescribeParam
		SQLDisconnect
		SQLEndTran
		SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLForeignKeys
		SQLFreeHandle
		SQLFreeStmt
		SQLGetConnectAttr
		SQLGetCursorName
		SQLGetData SQLGetData
		SQLGetDescField SQLGetDescPeed
		SQLGetDescRec SQLGetEmetions
		SQLGetFunctions
		SQLGetStmtAttr
		SQLGetTypeInfo
		SQLMoreResults
		SQLNumParams
		SQLNumResultCols
		SQLParamData
		SQLPrepare
		SQLPrimaryKeys
		SQLProcedureColumns
		SQLProcedures
		SQLPutData
		SQLRowCount
		SQLSetConnectAttr
		SQLSetCursorName
		SQLSetDescField
		SQLSetEnvAttr
		SQLSetDescRec
		• SQLSetPos
		SQLSetStmtAttr
		SQLSpecialColumns
		SQLStatistics
		SQLTablePrivileges
		• SQLTables

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
HY011	現在、属性を設定できない	SQLParamData
		SQLSetConnectAttr
		SQLSetPos
		SQLSetStmtAttr
HY012	無効なトランザクション命令コー ド	SQLEndTran
HY013	メモリー管理エラー	以下を除くすべての ODBC 関数
		SQLGetDiagField
		SQLGetDiagRec
HY014	ハンドル数の制限を超過	SQLAllocHandle
HY015	使用可能なカーソル名が存在しな い	SQLGetCursorName
HY016	インプリメンテーション行記述子 を変更できない	SQLCopyDesc
		SQLSetDescField
		SQLSetDescRec
HY017	自動的に割り振られた記述子ハン	SQLFreeHandle
	ドルの無効な使用	SQLSetStmtAttr
HY018	サーバーが取り消し要求を拒否	SQLCancel
HY019	文字以外およびバイナリー以外の データが断片で送信された	SQLPutData
HY020	NULL 値の連結を試行した	SQLPutData
HY021	不整合な記述子情報	SQLBindParameter
		SQLCopyDesc
		SQLGetDescField
		SQLSetDescField
		SQLSetDescRec
HY024	無効な属性値	SQLSetConnectAttr
		SQLSetEnvAttr
		SQLSetStmtAttr

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
HY090	ストリングまたはバッファーの長	SQLBindCol
	さが無効	SQLBindParameter
		SQLBrowseConnect
		SQLColAttribute
		SQLColumnPrivileges
		SQLColumns
		SQLConnect
		SQLDataSources
		SQLDescribeCol
		SQLDriverConnect
		SQLDrivers
		SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLForeignKeys
		SQLGetConnectAttr
		SQLGetCursorName
		SQLGetData
		SQLGetDescField
		SQLGetInfo
		SQLGetStmtAttr
		SQLParamData
		SQLPrepare
		SQLPrimaryKeys
		SQLProcedureColumns
		SQLProcedures
		SQLPutData
		SQLSetConnectAttr
		SQLSetCursorName
		SQLSetDescField
		SQLSetDescRec
		SQLSetEnvAttr
		SQLSetStmtAttr
		• SQLSetPos
		SQLSpecialColumns
		SQLTablePrivileges
		SQLStatistics
		SQLTables
HY091	無効な記述子フィールド ID	SQLColAttribute
		SQLGetDescField
		SQLSetDescField

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
HY092	無効な属性/オプション ID	SQLAllocHandle
		SQLCopyDesc
		SQLDriverConnect
		SQLEndTran
		SQLFreeStmt
		SQLGetConnectAttr
		SQLGetEnvAttr
		SQLGetStmtAttr
		SQLParamData
		SQLSetConnectAttr
		SQLSetDescField
		SQLSetEnvAttr
		SQLSetPos
		SQLSetStmtAttr
HY095	関数型が範囲外	SQLGetFunctions
HY096	無効な情報タイプ	SQLGetInfo
HY097	列型が範囲外	SQLSpecialColumns
HY098	有効範囲タイプが範囲外	SQLSpecialColumns
HY099	NULL 可能タイプが範囲外	SQLSpecialColumns
HY100	ユニーク性オプション・タイプが 範囲外	SQLStatistics
HY101	確度オプション・タイプが範囲外	SQLStatistics
HY103	無効なリトリーブ・コード	SQLDataSources
		SQLDrivers
HY104	無効な精度または位取りの値	SQLBindParameter
HY105	無効なパラメーター型	SQLBindParameter
		SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLParamData
		SQLSetDescField
HY106	フェッチ・タイプが範囲外	SQLExtendedFetch
		SQLFetchScroll

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
HY107	行値が範囲外	SQLExtendedFetch
		SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLSetPos
HY109	無効なカーソル位置	SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLGetData
		SQLGetStmtAttr
		SQLParamData
		SQLSetPos
HY110	無効なドライバー完了	SQLDriverConnect
HY111	無効なブックマーク値	SQLExtendedFetch
		SQLFetchScroll

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
HIVOOO	オプション機能がインプリメント	SQLBindCol
HYC00	されない	SQLBindParameter
		SQLColAttribute
		SQLColumnPrivileges
		SQLColumns
		SQLDriverConnect
		SQLEndTran
		SQLConnect
		SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		• SQLFetch
		SQLFetchScroll
		SQLForeignKeys
		SQLGetConnectAttr
		SQLGetData
		SQLGetEnvAttr
		• SQLSetPos
		SQLGetInfo
		SQLGetStmtAttr
		SQLGetTypeInfo
		SQLParamData
		SQLPrepare
		SQLPrimaryKeys
		SQLProcedureColumns
		SQLProcedures
		SQLSetConnectAttr
		SQLSetEnvAttr
		SQLSetStmtAttr
		SQLSpecialColumns
		SQLStatistics
		SQLTablePrivileges
		• SQLTables

表 176. SQLSTATE コード (続き)

SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
НҮТ00	タイムアウトの期限切れ	SQLBrowseConnect
		SQLColumnPrivileges
		SQLColumns
		SQLConnect
		SQLDriverConnect
		SQLExecDirect
		SQLExecute
		SQLExtendedFetch
		SQLForeignKeys
		SQLGetTypeInfo
		SQLParamData
		SQLPrepare
		SQLPrimaryKeys
		SQLProcedureColumns
		SQLProcedures
		SQLSetPos
		SQLSpecialColumns
		SQLStatistics
		SQLTablePrivileges
		SQLTables
НҮТ01	接続タイムアウトの期限切れ	以下を除くすべての ODBC 関数
		SQLDrivers
		SQLDataSources
		SQLGetEnvAttr
		SQLSetEnvAttr
IM001	ドライバーはこの関数をサポート	以下を除くすべての ODBC 関数
	しない	SQLAllocHandle
		SQLDataSources
		SQLDrivers
		SQLFreeHandle
		SQLGetFunctions
IM002	データ・ソース名が検出されず、 デフォルト・ドライバーが指定さ	SQLConnect
	オフォルト・トライハーが指定されていない	SQLDriverConnect
IM003	指定されたドライバーをロードで きなかった	SQLConnect

表 176. SQLSTATE コード (続き)

	1	
SQLSTATE	エラー	該当エラーを返す可能性のある関数
IM004	SQL_HANDLE_ENV に対するドラ イバーの SQLAllocHandle が失敗	SQLDriverConnec
		SQLConnect
		SQLDriverConnect
IM005	SQL_HANDLE_DBC に対するドラ イバーの SQLAllocHandle が失敗	SQLConnect
		SQLDriverConnect
IM006	ドライバーの SQLSetConnectAttr が失敗	SQLConnect
		SQLDriverConnect
IM007	データ・ソースまたはドライバー が指定されていない。ダイアログ が禁止される	SQLDriverConnect
IM008	ダイアログの失敗	SQLDriverConnect
IM009	変換 DLL をロードできない	SQLConnect
		SQLDriverConnect
		SQLSetConnectAttr
IM010	データ・ソース名が長すぎる	SQLConnect
		SQLDriverConnect
IM011	ドライバー名が長すぎる	SQLDriverConnect
IM012	DRIVER キーワードの構文エラー	SQLDriverConnect
IM013	トレース・ファイル・エラー	すべての ODBC 関数
IM014	無効なファイル DSN 名	SQLDriverConnect
IM015	ファイル・データ・ソースが破損	SQLDriverConnect

付録 D. ODBC に関する SQL 文法の最小要件

このセクションでは、ODBC ドライバーがサポートしなければならない SQL-92 エントリー・レベル構文の最小サブセットについて説明します。この構文を使用するアプリケーションは、任意の ODBC 準拠ドライバーでサポートされます。

アプリケーションから SQL_SQL_CONFORMANCE を指定して SQLGetInfo を呼び出すことにより、このセクションに記載されていない SQL-92 の追加機能がサポートされているかどうか判断できます。

注: ドライバーが読み取り専用データ・ソースのみをサポートする場合、データの変更に適用される SQL 構文は、このドライバーには適用されません。データ・ソースが読み取り専用かどうか判断するには、アプリケーションで

SQL_DATA_SOURCE_READ_ONLY 情報タイプを指定して SQLGetInfo を呼び出す 必要があります。

SQL ステートメント

このセクションでは、SQL ステートメントとエレメントのサブセットについて説明 します。

```
create-table-statement ::=
     CREATE TABLE base_table_name
     (column identifier data type [, column identifier data type]...)
```

重要: アプリケーションは、create_table_statement 内の data_type として、SQLGetTypeInfo から返される結果セットの TYPE_NAME 列のデータ型を要求します。

```
delete statement searched ::=
        DELETE FROM table name [WHERE search condition]
drop_table statement ::=
        DROP TABLE base table name
select statement ::=
        SELECT [ALL | DISTINCT] select list
        FROM table reference list
        [WHERE search condition]
        [order_by_clause]
statement ::= create_table_statement |
       delete statement searched
        drop table statement
        insert stetement
        select statement
       update_statement_searched
Update statement searched ::=
   UPDATE table name
   SET column identifier = {expression |
         NULL}
   [, column_identifier = {expression |
         NULL}]...
   [WHERE search condition]
```

SQL ステートメントのエレメント

```
base table identifier ::= user defined name
base_table_name ::= base_table_identifier
boolean factor ::= [NOT] boolean primary
boolean_primary ::= predicate | ( search_condition )
boolean_term ::= boolean_factor [AND boolean_term]
文字セット内の任意の文字です。character string literal
内に単一リテラル引用文字 (') を含めるには、
リテラル引用文字を 2 つ使用します [""]。)
column_identifier ::= user_defined_name
column\_name ::= [table\_name.]column\_identifier \\ comparison\_operator ::= < | > | <= | >= | = | <> \\
comparison predicate ::= expression comparison operator expression
data_type ::= character_string_type
(character string type は、SQLGetTypeInfo から返される結果セット内の
 「DATA TYPE」列が SQL CHAR または SQL VARCHAR のどちらかである、
任意のデータ型です。)
digit ::= 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9
dynamic parameter ::= ?
expression ::= term \mid expression \{+\mid -\} term
factor ::= [+|-]primary
insert\_value ::= dynamic\_parameter \ | \ literal \ | \ NULL \ | \ USER
letter ::= lower_case_letter | upper_case_letter
literal ::= character_string_literal
lower case letter ::= a | b | c | d | e | f | g
  h | i | j | k | 1 | m | n | o | p | q | r | s |
  t | u | v | w | x | y | z
order by clause ::= ORDER BY sort specification [, sort specification]...
primary ::= column_name | dynamic_parameter | literal | ( expression )
search_condition ::= boolean_term [OR search_condition]
select_list ::= * | select_sublist [, select_sublist]...
(select_list は、パラメーターを含むことはできません。)
select sublist ::= expression
sort specification ::= {unsigned integer | column name } [ASC | DESC]
table identifier ::= user defined name
table name ::= table identifier
table_reference ::= table_name
table_reference ::= table_name [,table_reference]...
term ::= factor | term {*|/} factor
unsigned integer ::= {digit}
upper_case_letter ::= A | B | C | D | E | F | G
H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | S
T | U | V | W | X | Y | Z
user defined name ::= letter[ digit | letter | ]...
```

制御ステートメント (論理条件)

このトピックでは、solidDB データベース・プロシージャーで使用可能な制御ステートメントのサマリーを記載します。

これらの制御ステートメントについて詳しくは、「solidDB SQL ガイド」でストアード・プロシージャーの説明を参照してください。

表 177. 制御ステートメント

制御ステートメント	説明
set variable = expression	変数に値を割り当てます。この値には、リテラル値 (例えば、10 や 'text') または別の変数のいずれかを使用できます。パラメーターは、通常の変数と解釈されます。
variable := expression	変数に値を割り当てるための代替構文。
boolean_expr	「true」または「false」として評価されるブール式。この式は、=、>、< などの比較演算子、および AND、OR、NOT などの論理演算子を含むことができます。
statement_list	ブール式の結果に従って実行される有効なプ ロシージャー・ステートメント。
while boolean_expr loop statement_list end loop	式が true の間ループします。WHILE ループ内の有効な括弧の使用例については、「solidDB SQL ガイド」のストアード・プロシージャーの説明を参照してください。
leave	最も内側の while ループを抜け、キーワード end loop の後の次のステートメントからプロシージャーの実行を継続します。
<pre>if boolean_expr then statement_list1 else statement_list2 end if</pre>	boolean_expr が true の場合、statement_list1を実行します。その他の場合には、 statement_list2 を実行します。IF ステートメント内の有効な括弧の使用例については、 「solidDB SQL ガイド」のストアード・プロシージャーの説明を参照してください。
<pre>if boolean_expr1 then statement_list1 elseif boolean_expr2 then statement_list2 end if</pre>	boolean_exprl が true の場合、statement_listl を実行します。boolean_expr2 が true の場合、statement_list2 を実行します。このステートメントは、オプションで複数の elseif ステートメントを含むことができ、また else ステートメントを 1 つ含むことができます。IF ステートメント内の有効な括弧の使用例については、「solidDB SQL ガイド」のストアード・プロシージャーの説明を参照してください。
return	出力パラメーターの現行値を返し、プロシージャーを終了します。プロシージャーに return row ステートメントが含まれる場合、return は return norow のように動作します。

表 177. 制御ステートメント (続き)

制御ステートメント	説明
return sqlerror of cursor_name	カーソルに関連付けられた sqlerror を返し、 プロシージャーを終了します。
return row	出力パラメーターの現行値を返し、プロシージャーの実行を継続します。return row はプロシージャーを終了せず、呼び出し元に制御を返しません。
return norow	セットの終了を返し、プロシージャーを終了 します。

データ型のサポート

ODBC ドライバーは、少なくとも SQL_CHAR または SQL_VARCHAR のどちらか をサポートする必要があります。

その他のデータ型のサポートは、ドライバーまたはデータ・ソースの SQL-92 適合 レベルによって決まります。ドライバーまたはデータ・ソースの SQL-92 適合レベ ルを判断するには、アプリケーションから SQLGetTypeInfo を呼び出す必要があり ます。

パラメーター・データ型

このトピックでは、パラメーターのデータ型を判断する方法、およびパラメータ ー・マーカーのサポートについて説明します。

SQLBindParameter で指定する各パラメーターは SQL データ型を使用して定義され るにもかかわらず、SOL ステートメント内のパラメーターは組み込みのデータ型を 持ちません。したがって、ステートメント内の別のオペランドからパラメーター・ マーカーのデータ型を推論できる場合のみ、SOL ステートメントにパラメーター・ マーカーを組み込むことができます。例えば、? + COLUMN1 のような算術式で は、パラメーターのデータ型は、COLUMN1 で表される名前付き列のデータ型から 推論できます。アプリケーションは、データ型を判断できない場合、パラメータ ー・マーカーを使用できません。

以下の表では、いくつかのタイプのパラメーターについて、SQL-92 標準に従ってデ ータ型を判断する方法を説明します。パラメーター型を推論するための総合的な情 報については、SQL-92 仕様を参照してください。

表 178. いくつかのタイプのパラメーターについてデータ型を判断する方法

パラメーターの位置	想定データ型
2 進算術計算演算子または比較演算子の一方のオペランド	他方のオペランドと同じ

表 178. いくつかのタイプのパラメーターについてデータ型を判断する方法 (続き)

パラメーターの位置	想定データ型
BETWEEN 節の第 1 オペランド	第 2 オペランドと同じ
BETWEEN 節の第 2 または第 3 オペランド	第 1 オペランドと同じ
IN で使用される式	最初の値または副照会の結果列と同じ
IN で使用される値	式と同じ、または式にパラメーター・マーカ ーが存在する場合には最初の値と同じ
LIKE で使用されるパターン値	VARCHAR
UPDATE で使用される更新値	更新列と同じ

パラメーター・マーカー

SQL-92 仕様に従うと、アプリケーションは、以下の位置にパラメーター・マーカーを配置することはできません。

- SELECT リスト内
- comparison predicate の両方の expression として
- ・ 2 項演算子の両方のオペランドとして
- BETWEEN 演算の第 1 および第 2 オペランドの両方として
- BETWEEN 演算の第 1 および第 3 オペランドの両方として
- IN 演算の式および最初の値の両方として
- 単項の + または 演算のオペランドとして
- set-function-reference の引数として

総合的なリストと詳細については、SQL-92 仕様を参照してください。

ODBC のリテラル

このセクションでは、ドライバー作成者が、文字ストリング型から数値型またはインターバル型への変換を行う際、または数値型またはインターバル型から文字ストリング型への変換を行う際に役立つ情報を記載します。

インターバル・リテラル構文

以下の構文は、ODBC のインターバル・リテラルで使用されます。

```
years value ::= datetime value
months value ::= datetime value
days value ::= datetime value
hours_value ::= datetime_value
minutes value ::= datetime value
seconds value ::= seconds integer value [.[seconds fraction] ]
seconds integer value ::= unsigned integer
seconds fraction ::= unsigned integer
datetime_value ::= unsigned_integer
interval_qualifier ::= start_field TO end_field
     | single datetime field
start field ::= non second datetime field
     [(interval_leading_field_precision )]
end_field ::= non_second_datetime_field
     | SECOND[(interval_fractional_seconds_precision)]
single datetime field ::= non second datetime field
     [(interval_leading_field_precision)]
       SECOND[(interval_leading_field precision
      [, (interval fractional seconds precision)]
datetime_field ::= non_second_datetime_field | SECOND non_second_datetime_field ::= YEAR | MONTH | DAY | HOUR | MINUTE
interval fractional seconds precision ::= unsigned integer
interval_leading_field_precision ::= unsigned_integer
quote ::= '
unsigned integer ::= digit...
```

数値リテラル構文

以下の構文は、ODBC の数値リテラルで使用されます。

```
numeric literal ::= signed numeric literal | unsigned numeric literal
signed numeric literal ::= [sign] unsigned numeric literal
unsigned numeric literal ::= exact_numeric_literal
     approximate numeric literal
exact_numeric_literal ::= unsigned_integer [period[unsigned_integer]]
    period_unsigned_integer
sign ::= plus sign | minus sign
approximate numeric literal ::= mantissa E exponent
mantissa ::= exact numeric literal
exponent ::= signed integer
signed integer ::= [sign] unsigned integer
unsigned_integer ::= digit...
plus sign ::= +
minus sign ::=
digit ::= 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 0
period ::= .
```

予約キーワードのリスト

コア SOL 文法をサポートするドライバーとの互換性を確保するため、アプリケー ションで使用を回避すべきキーワードが存在します。

これらの単語は、最小 SQL 文法を制約しません。#define 値 SQL ODBC KEYWORDS には、これらのキーワードのリストがコンマ区切りで含 まれています。

複数の SQL 標準および solidDB ODBC API の予約キーワードの完全なリストにつ いては、「IBM solidDB SQL ガイド」の『予約語』を参照してください。

表 179. 予約キーワードのリスト

キーワード	キーワード	キーワード	キーワード
ABSOLUTE	ACTION	ADA	ADD
ALL	ALLOCATE	ALTER	AND
ANY	ARE	AS	ASC
ASSERTION	AT	AUTHORIZATION	AVG
BEGIN	BETWEEN	BIT	BIT_LENGTH
вотн	BY	CASCADE	CASCADED
CASE	CAST	CATALOG	CHAR
CHAR_LENGTH	CHARACTER	CHARACTER_LENGTH	CHECK
CLOSE	COALESCE	COLLATE	COLLATION
COLUMN	COMMIT	CONNECT	CONNECTION
CONSTRAINT	CONSTRAINTS	CONTINUE	CONVERT
CORRESPONDING	COUNT	CREATE	CROSS
CURRENT	CURRENT_DATE	CURRENT_TIME	CURRENT_TIMESTAMP
CURRENT_USER	CURSOR	DATE	DAY
DEALLOCATE	DEC	DECIMAL	DECLARE
DEFAULT	DEFERRABLE	DEFERRED	DELETE
DESC	DESCRIBE	DESCRIPTOR	DIAGNOSTICS
DISCONNECT	DISTINCT	DOMAIN	DOUBLE
DROP	ELSE	END	END-EXEC
ESCAPE	EXCEPT	EXCEPTION	EXEC
EXECUTE	EXISTS	EXTERNAL	EXTRACT
FALSE	FETCH	FIRST	FLOAT
FOR	FOREIGN	FORTRAN	FOUND
FROM	FULL	GET	GLOBAL
GO	GOTO	GRANT	GROUP

表 179. 予約キーワードのリスト (続き)

キーワード	キーワード	キーワード	キーワード
HAVING	HOUR	IDENTITY	IMMEDIATE
IN	INCLUDE	INDEX	INDICATOR
INITIALLY	INNER	INPUT	INSENSITIVE
INSERT	INT	INTEGER	INTERSECT
INTERVAL	INTO	IS	ISOLATION
JOIN	KEY	LANGUAGE	LAST
LEADING	LEFT	LEVEL	LIKE
LOCAl	LOWER	МАТСН	MAX
MIN	MINUTE	MODULE	MONTH
NAMES	NATIONAL	NATURAL	NCHAR
NEXT	NO	NONE	NOT
NULL	NULLIF	NUMERIC	OCTET_LENGTH
OF	ON	ONLY	OPEN
OPTION	OR	ORDER	OUTER
OUTPUT	OVERLAPS	PASCAL	POSITION
PRECISION	PREPARE	PRESERVE	PRIMARY
PRIOR	PRIVILEGES	PROCEDURE	PUBLIC
READ	REAL	REFERENCES	RELATIVE
RESTRICT	REVOKE	RIGHT	ROLLBACK
ROWS	SCHEMA	SCROLL	SECOND
SECOND	SECTION	SELECT	SESSION
SESSION_USER	SET	SIZE	SMALLINT
SOME	SPACE	SQL	SQLCA
SQLCODE	SQLERROR	SQLSTATE	SQLWARNING
SUBSTRING	SUM	SYSTEM_USER	TABLE

表 179. 予約キーワードのリスト (続き)

キーワード	キーワード	キーワード	キーワード
TEMPORARY	THEN	TIME	TIMESTAMP
TIMEZONE_HOUR	TIMEZONE_MINUTE	ТО	TRAILING
TRANSACTION	TRANSLATE	TRANSLATION	TRIM
TRUE	UNION	UNIQUE	UNKNOWN
UPDATE	UPPER	USAGE	USER
USING	VALUE	VALUES	VARCHAR
VARYING	VIEW	WHEN	WHENEVER
WHERE	WITH	WORK	WRITE
YEAR	ZONE		-

付録 E. データ型

このセクションでは、ODBC データ型について説明します。

ODBC では、以下の一連のデータ型が定義されています。

- SQL データ型。データ・ソース (例えば、solidDB サーバー) に格納されるデータのデータ型を示します。
- C データ型。アプリケーション・バッファーに格納されるデータのデータ型を示します。

各 SQL データ型は、ODBC C データ型に対応しています。データ・ソースからデータを返す前に、ドライバーは、指定された C データ型にそのデータを変換します。データ・ソースにデータを送信する前に、ドライバーは、指定された C データ型からそのデータを変換します。

ドライバー固有の SQL データ型については、ドライバーの資料を参照してください。

SQL データ型

各 DBMS は、SQL-92 標準に従って、独自の SQL データ型セットを定義しています。SQL-92 標準の各 SQL データ型について、型 ID と呼ばれる #define 値が ODBC 関数の引数として渡され、また結果セットのメタデータ内で返されます。

ドライバーは、データ・ソース固有の SQL データ型を ODBC SQL データ型 ID およびドライバー固有の SQL データ型 ID にマップします。SQL データ型は、インプリメンテーション記述子の SQL_DESC_CONCISE_TYPE フィールドに格納されます。

solidDB の ODBC ドライバーは、以下の SQL_92 データ型をサポートしません。

- BIT
- BIT_VARYING
- TIME WITH TIMEZONE
- TIMESTAMP WITH TIMEZONE
- NATIONAL CHARACTER

C データ型

ODBC は、C データ型と、それに対応する ODBC 型 ID を定義します。

アプリケーションは、以下の関数の 1 つを呼び出します。

• SQLBindCol または SQLGetData を呼び出して、適用可能な C 型 ID を TargetType 引数で受け渡します。このようにして、アプリケーションは、結果セット・データを受け取るバッファーの C データ型を指定します。

• SQLBindParameter を呼び出して、該当する C 型 ID を ValueType 引数で受け渡 します。このようにして、アプリケーションは、ステートメント・パラメーター を含むバッファーの C データ型を指定します。

C データ型は、アプリケーション記述子の SQL DESC CONCISE TYPE フィール ドに格納されます。

注: ドライバー固有の C データ型は存在しません。

データ型 ID

データ型 ID は、記述子の SOL DESC CONCISE TYPE フィールドに格納されま す。アプリケーション内のデータ型 ID は、ドライバーに対して自身のバッファー を記述します。

また、ドライバーから結果セットに関するメタデータをリトリーブし、したがって アプリケーションは、データ・ストレージに使用する C バッファーの型を認識でき ます。アプリケーションは、以下の関数を呼び出すことにより、データ型 ID を使 用してこれらのタスクを実行します。

- アプリケーション・バッファーの C データ型を記述するために、アプリケーショ ンは、SQLBindParameter、SQLBindCol、および SQLGetData を呼び出します。
- 動的パラメーターの SOL データ型を記述するために、アプリケーションは、 SQLBindParameter を呼び出します。
- 結果セット列の SQL データ型をリトリーブするために、アプリケーションは、 SQLColAttribute および SQLDescribeCol を呼び出します。
- パラメーターの SQL データ型をリトリーブするために、アプリケーションは、 SQLDescribeParameter を呼び出します。
- 各種スキーマ情報の SOL データ型をリトリーブするために、アプリケーション は、SQLColumns、SQLProcedureColumns、および SQLSpecialColumns を呼び出し ます。
- サポートされているデータ型のリストをリトリーブするために、アプリケーショ ンは、SQLGetTypeInfo を呼び出します。

さらに、上記のタスクの実行に、SQLSetDescField および SQLSetDescRec の記述子 関数も使用されます。詳しくは、SQLSetDescField 関数と SQLSetDescRec 関数を参 照してください。

SQL データ型

指定したドライバーおよびデータ・ソースが、ODBC 文法で定義されているすべて の SQL データ型をサポートしているとは限りません。また、ドライバー固有の追 加の SOL データ型をサポートしている場合もあります。

ドライバーのサポートは、SQL-92 準拠のレベルにより決まります。ドライバーがど のデータ型をサポートするかを判別するには、アプリケーションで SQLGetTypeInfo を呼び出します。 291 ページの『SQLGetTypeInfo 結果セットの例』を参照してく ださい。ドライバー固有の SQL データ型については、ドライバーの資料を参照し てください。

ドライバーは、以下の関数を使用して列およびパラメーターのデータ型を記述する際にも SQL データ型を返します。

- SQLColAttribute
- SQLColumns
- SQLDescribeCol
- SQLDescribeParam
- SQLProcedureColumns
- SQLSpecialColumns

注:

SQL データ型の値および特性を格納しているフィールドについて詳しくは、301ページの『データ型 ID および記述子』を参照してください。

以下の表は、SQL データ型の総合的なリストではありませんが、よく使用される名前、範囲、および制限が示されています。データ・ソースが表にリストされたデータ型の一部のみサポートする場合や、ご使用のドライバーによっては、データ型の特性が表の説明と異なる場合があります。この表では、適宜 SQL-92 の関連データ型も説明しています。

表 180. 一般的な SQL データ型の名前、範囲、および制限

SQL型ID[1]	一般的な SQ L データ型 [2]	一般的な型の説明
SQL_CHAR	CHAR(n)	固定ストリング長が n の文字ストリング。
SQL_VARCHAR	VARCHAR(n)	最大ストリング長が n の可変長文字ストリング。
SQL_LONGVARCHAR	LONG VARCHAR	可変長文字データ。最大長は、データ・ソースに依存 します。[3]
SQL_WCHAR	WCHAR(n)	固定ストリング長が n の Unicode 文字ストリング。
SQL_WVARCHAR	VARWCHAR(n)	最大ストリング長が n の Unicode 可変長文字ストリング。
SQL_WLONGVARCHAR	LONGWVARCHAR	Unicode 可変長文字データ。最大長は、データ・ソースに依存します。
SQL_DECIMAL	DECIMAL(p, s)	精度が p で位取りが s の符号付きの厳密な数値。(最大精度は、ドライバーにより定義されます。) (1 <= p <= 16、 s <= p) [4]
SQL_NUMERIC	NUMERIC(p,s)	精度が p で位取りが s の符号付きの厳密な数値。 $(1 <= p <= 16, s <= p) [4]$

表 180. 一般的な SQL データ型の名前、範囲、および制限 (続き)

SQL 型 ID [1]	一般的な SQL データ型 [2]	一般的な型の説明
SQL_SMALLINT	SMALLINT	精度が 5 で位取りが 0 の厳密な数値。
		(符号付き: -32,768 <= n <= 32,767、符号なし: 0 <= n <= 65,535)
		solidDB では、SMALLINT は符号付きのもののみをサポートし、符号なしのものをサポートしません。[5]
SQL_INTEGER	INTEGER	精度が 10 で位取りが 0 の厳密な数値。(符号付き: $-2^{31} <= n <= 2^{31} -1$ 、符号なし: $0 <= n <= 2^{32} -1$) solidDB では、INTEGER は符号付きのもののみをサポートし、符号なしのものをサポートしません。[5]
SQL_REAL	REAL	バイナリー精度が 24 の符号付き近似数値 (ゼロまた は 10 ⁻³⁸ から 10 ³⁸ の絶対値)。
SQL_FLOAT	FLOAT(p)	バイナリー精度が p 以上の符号付き近似数値。(最大精度は、ドライバーにより定義されます。) [6]
SQL_DOUBLE	DOUBLE PRECISION	バイナリー精度が 53 の符号付き近似数値 (ゼロまた は 10 ⁻³⁰⁸ から 10 ³⁰⁸ の絶対値)。
SQL_BIT	BIT	単一ビットのバイナリー・データ。注: solidDB は、 BIT/SQL_BIT をサポートしていません。 [7]
SQL_TINYINT	TINYINT	精度が 3 で位取りが 0 の厳密な数値。 (符号付き :-128 <= n <= 127、符号なし: 0 <= n <= 255) solidDB では、TINYINT は符号付きのもののみをサポートし、符号なしのものをサポートしません。[5]
SQL_BIGINT	BIGINT	精度が 19 (符号付きの場合) または 20 (符号なしの場合) で位取りが 0 の厳密な数値。(符号付き: -2^{63} <= n <= 2^{63} - 1、符号なし: 0 <= n <= 2^{64} - 1)
		solidDB では、BIGINT は符号付きのもののみをサポートし、符号なしのものをサポートしません。[3]、[5]
SQL_BINARY	BINARY(n)	固定長が n のバイナリー・データ。[3]
SQL_VARBINARY	VARBINARY(n)	最大長が n の可変長バイナリー・データ。最大長は、ユーザーが設定します。[3]
SQL_LONGVARBINARY	LONG VARBINARY	可変長バイナリー・データ。最大長は、データ・ソースに依存します。[3]
SQL_TYPE_DATE [8]	DATE	グレゴリオ暦のルールによる年、月、および日のフィールド。(306 ページの『グレゴリオ暦の制約』を参照してください。)

表 180. 一般的な SQL データ型の名前、範囲、および制限 (続き)

SQL型ID[1]	一般的な SQL データ型 [2]	一般的な型の説明
SQL_TYPE_TIME [8]	TIME(p)	時、分、および秒のフィールド。時の有効値は、00から 23です。分の有効値は、00から 59です。秒の有効値は、00から 59です。秒の有効値は、00から 61(60および 61は、「うるう秒」処理用)です(http://tycho.usno.navy.mil/leapsec.htmlを参照してください)。精度 p は、秒フィールドの精度を示します。
SQL_TYPE_TIMESTAMP [8]	TIMESTAMP(p)	日付および時刻のデータ型に定義されている有効値を 持つ年、月、日、時、分、および秒のフィールド。

注:

- [1] これは、SQLGetTypeInfo の呼び出しにより DATA_TYPE 列に返される値です。
- [2] これは、SQLGetTypeInfo の呼び出しにより NAME 列および CREATE PARAMS 列に返される値です。 NAME 列には、例えば CHAR のような指定が返され、CREATE PARAMS 列には、精度、位取り、および長さのような作成パラメーターのコンマ区切りリストが返されます。
- [3] このデータ型に対応するものは、SQL-92 にはありません。
- [4] $SQL_DECIMAL$ データ型と $SQL_NUMERIC$ データ型との違いは、精度のみです。DECIMAL(p,s) の精度が、インプリメンテーションで定義された p 以上の 10 進数精度であるのに対し、NUMERIC(p,s) の精度は p に完全に等しくなります。
- [5] アプリケーションは SQLGetTypeInfo または SQLColAttribute を使用して、結果セット内の特定のデータ型や列が符号なしであるかどうかを判別します。
- [6] インプリメンテーションによって、SQL_FLOAT の精度は 24 または 53 のいずれかになります。24 である場合、SQL_FLOAT データ型は SQL_REAL と同じになり、53 である場合、SQL_FLOAT データ型は SQL_DOUBLE と同じになります。
- [7] SQL_BIT データ型の特性は、SQL-92 の BIT 型と異なります。
- [8] このデータ型に対応するものは、SQL-92 にはありません。

SQLGetTypeInfo 結果セットの例

アプリケーションは、SQLGetTypeInfo の結果セットを呼び出し、指定データ・ソースに対してサポートされたデータ型およびその特性のリストを調べます。

あるデータ・ソースに対し SQLGetTypeInfo により返されるデータ型の例を以下に示します。このデータ・ソースでは、「DATA_TYPE」に示されたすべてのデータ型がサポートされています。

この例は、ページ幅に収まるよう 3 つのセクションに分割されています。実際には、すべてが 1 つの例です。

表 181. SQLGetTypeInfo が返すデータ型 (1)

TYPE_ NAME	DATA_TYPE	COLUMN_ SIZE	LITERAL_ PREFIX	LITERAL_ SUFFIX	CREATE_ PARAMS	NULLABLE
"char"	SQL_CHAR	255	""	""	"length"	SQL_TRUE
"text"	SQL_LONG VARCHAR	2147483647	""		<null></null>	SQL_TRUE

表 181. SQLGetTypeInfo が返すデータ型 (1) (続き)

TYPE_ NAME	DATA_TYPE	COLUMN_ SIZE	LITERAL_ PREFIX	LITERAL_ SUFFIX	CREATE_ PARAMS	NULLABLE
"decimal"	SQL_DECIMAL	18 [a]	<null></null>	<null></null>	"precision, scale"	SQL_TRUE
"real"	SQL_REAL	7	<null></null>	<null></null>	<null></null>	SQL_TRUE
"datetime"	SQL_TYPE_ TIMESTAMP	29 [b]	""	""	<null></null>	SQL_TRUE

表 182. SQLGetTypeInfo が返すデータ型 (2)

(続き)	CASE_ SENSITIVE	SEARCHABLE	UNSIGNED_ ATTRIBUTE	FIXED_ PREC_ SCALE	AUTO_ UNIQUE_ VALUE	LOCAL_ TYPE_ NAME
SQL_CHAR	SQL_FALSE	SQL_ SEARCHABLE	<null></null>	SQL_FALSE	<null></null>	"char"
SQL_LONG VARCHAR	SQL_FALSE	SQL_PRED_ CHAR	<null></null>	SQL_FALSE	<null></null>	"text"
SQL_DECIMAL	SQL_FALSE	SQL_PRED_ BASIC	SQL_FALSE	SQL_FALSE	SQL_FALSE	"decimal"
SQL_REAL	SQL_FALSE	SQL_PRED_ BASIC	SQL_FALSE	SQL_FALSE	SQL_FALSE	"real"
SQL_TYPE_ TIMESTAMP	SQL_FALSE	SQL_ SEARCHABLE	<null></null>	SQL_FALSE	<null></null>	"datetime"

表 183. SQLGetTypeInfo が返すデータ型 (3)

(続き)	MINIMUM_ SCALE	MAXIMUM_ SCALE	SQL_DATA_ TYPE	SQL_ DATETIME_ SUB	NUM_ PREC_ RADIX	INTERVAL_ PRECISION
SQL_CHAR	<null></null>	<null></null>	SQL_CHAR	<null></null>	<null></null>	<null></null>
SQL_LONG VARCHAR	<null></null>	<null></null>	SQL_LONG VARCHAR	<null></null>	<null></null>	<null></null>
SQL_DECIMAL	0	16	SQL_ DECIMAL	<null></null>	10	<null></null>
SQL_REAL	<null></null>	<null></null>	SQL_REAL	<null></null>	10	<null></null>
SQL_TYPE_ TIMESTAMP	3	3	SQL_ DATETIME	SQL_CODE_ TIMESTAMP	<null></null>	12

上記の表の脚注番号に関する説明

[a] 16 桁、小数点は 1 つ、負の数値に対しオプションの符号文字

C データ型

ODBC ドライバーは、すべての C 型と SQL 文字型との変換の必要性に対応する ため、すべての C データ型をサポートしています。

C データ型は以下の関数で指定されます。

- TargetType 引数を指定した SQLBindCol および SQLGetData 関数
- ValueType 引数を指定した SQLBindParameter
- ARD1 または APD2 の SQL_DESC_CONCISE_TYPE フィールドを設定する SQLSetDescField
- Type 引数、SubType 引数 (必要な場合)、および ARD または APD のハンドル に設定された DescriptorHandle 引数を指定した SQLSetDescRec
 - ARD: アプリケーション行記述子は、SQL ステートメントによって返される列 にバインドされているアプリケーション変数に関する情報を含んでいます。こ の情報には、バインドされた変数のアドレス、長さ、および C データ型が含まれます。
 - APD: アプリケーション・パラメーター記述子には、以下のような SQL ステートメントで使用されるパラメーター・マーカー (?) にバインドされたアプリケーション変数に関する情報が含まれています。例:

SELECT * FROM table1 WHERE id = ?

記述子内の情報には、バインドされた変数のアドレス、長さ、C データ型が含まれます。

以下の表には次の3つの列があります。

1. 最初の列には、C 型 ID が含まれています。 これら C 型 ID は SQLBindCol などの関数に渡され、列にバインドされる変数の型を示します。以下の例では、 SQL_C_DECIMAL が C 型 ID です。

```
// MySharedVariable を結果セットの列 1 にバインドします。
// (列 1 は DECIMAL 列です。) C 型 ID である SQL_C_DECIMAL は、
// 変数 MySharedVariable が DECIMAL と同等の型であることを示します。
SQLBindCol(..., 1, SQL_C_DECIMAL, &MySharedVariable, ...);
```

2. 2番目の列は、C型ID それぞれに関連付けられている ODBC C データ型を示します。この ODBC C データ型は、ODBC プログラムで変数を定義する際に使用する「typedef」です。これによって、プラットフォーム固有の要件からプログラムを分離することができます。例えば、SQL FLOAT型の列があり、その列に変数をバインドすると仮定します。以下のように、変数を SQLFLOAT型と宣言することができます。

SQLFLOAT MySharedVariable; // SQL FLOAT 型の列にバインドできます。

3. 3 番目の列には、ODBC C データ型「typdef」に対応する C 型定義の例が含まれています。この列の例は、32 ビット・プラットフォームで最も頻繁に使用される定義を示すものです。この列で指定されているデータ型は一例で、プラットフォームに依存します。

```
// SQL FLOAT 型の列にバインドする変数の移植可能な宣言の方法です。
SQLFLOAT MySharedSQLFLOATVariable = 0.0;
// SQL INTEGER 型の列にバインドする変数の移植不可能な宣言の方法です。
// この宣言はほとんどの 32 ビット・プラットフォームでは正しく機能しますが、
```

```
// 64 ビット・プラットフォームでは失敗することがあります。
long int MySharedSQLINTEGERVariable = 0;
// MySharedSQLFLOATVariable を結果セットの列 1 にバインドします。
SQLBindCol(..., 1, SQL_C_DOUBLE, &MySharedSQLFLOATVariable, ...);
// MySharedSQLINTEGERVariable を結果セットの列 2 にバインドします。
SQLBindCol(..., 2, SQL_C_SLONG, &MySharedSQLINTEGERVariable, ...);
```

C型IDとODBCC型は、必ずしも類似した名前を持つとは限りません。C型 ID の名前は C 言語データ型 (「float」など) を基にしており、ODBC C typedef の 名前は、SQL データ型を基にしています。C 言語の「float」は SQL の「REAL」 に対応しているため、表では「SQL_C_FLOAT」を ODBC C typedef「SQLREAL」 に対応する C型 ID としてリストしています。

表 184. C と ODBC の名前の対応

C 型 ID	ODBC C typedef	C 型
SQL_C_CHAR	SQLCHAR	unsigned char
SQL_C_STINYINT	SCHAR	char
SQL_C_UTINYINT [i]	UCHAR	unsigned char
SQL_C_SSHORT [h]	SQLSMALLINT	short int
SQL_C_USHORT [h] [i]	SQLUSMALLINT	unsigned short int
SQL_C_SLONG [h]	SQLINTEGER	long int
SQL_C_ULONG [h] [i]	SQLUINTEGER	unsigned long int
SQL_C_SBIGINT	SQLBIGINT	_int64 [g]
SQL_C_UBIGINT [i]	SQLUBIGINT	unsigned _int64 [g]
		solidDB はこのような符号なし データ型をサポートしていませ ん。
SQL_C_FLOAT	SQLREAL	float
SQL_C_DOUBLE	SQLDOUBLE SQLFLOAT	double
SQL_C_NUMERIC	SQLNUMERIC	unsigned char [f]
SQL_C_DECIMAL	SQLDECIMAL	unsigned char [f]
SQL_C_BINARY	SQLCHAR *	unsigned char *
SQL_C_TYPE_DATE [c]	SQL_DATE_STRUCT	struct tagDATE_STRUCT{ SQLSMALLINT year; SQLUSMALLINT month; SQLUSMALLINT day; } DATE_STRUCT; [a]

表 184. C と ODBC の名前の対応 (続き)

C 型 ID	ODBC C typedef	C 型
SQL_C_TYPE_TIME [c]	SQL_TIME_STRUCT	<pre>struct tagTIME_STRUCT { SQLUSMALLINT hour; SQLUSMALLINT minute;[d] SQLUSMALLINT second;[e] }</pre>
SQL_C_TYPE_TIMESTAMP [c]	SQL_TIMESTAMP_STRUCT	<pre>struct tagTIMESTAMP_STRUCT { SQLSMALLINT year; [a] SQLUSMALLINT month; [b] SQLUSMALLINT day; [c] SQLUSMALLINT hour; SQLUSMALLINT minute; [d] SQLUSMALLINT second;[e] SQLUINTEGER fraction; }</pre>

C 型 C型ID ODBC C typedef

注:

[a] C の日時データ型の year、month、day、hour、minute、および second のフィールドの値 は、グレゴリオ暦の制約に準拠している必要があります。(306ページの『グレゴリオ暦の 制約』を参照してください。)

[b] fraction フィールドの値は、0 から 999,999,999 (10 億から 1 を引いた値) の範囲のナノ 秒 (10 億分の 1 秒) の数です。例えば、fraction フィールドの値は、2 分の 1 秒の場合は 500,000,000、1,000 分の 1 秒 (1 ミリ秒) の場合は 1,000,000、100 万分の 1 秒 (1 マイク 口秒) の場合は 1,000、10 億分の 1 秒 (1 ナノ秒) の場合は 1 です。

[c] ODBC 2.x では、C の日付、時刻、およびタイム・スタンプのデータ型は SQL_C_DATE、SQL_C_TIME、および SQL_C_TIMESTAMP です。

[d] SQL_NUMERIC_STRUCT 構造体の val フィールドには、位取り整数としてリトル・エ ンディアン・モード (左端のバイトが最下位バイト) で数値が格納されています。例えば、 数値 10.001 基数 10 に 4 桁の位取りを指定すると、100010 という整数に位取りされま す。これは 16 進形式では 186AA なので、SQL_NUMERIC_STRUCT の値は「AA 86 01 |00 00 ... 00|| となり、SQL_MAX_NUMERIC_LEN #define で定義されたバイト数になりま す。

[e] SQL_C_NUMERIC データ型の precision および scale のフィールドは、ドライバーから アプリケーションへの出力専用で、アプリケーションからの入力に使用されることはありま せん。ドライバーが数値を SQL_NUMERIC_STRUCT に書き込む際、ドライバー固有のデフ ォルトを precision フィールドの値として使用し、scale フィールドには、アプリケーション 記述子の SQL_DESC_SCALE フィールドの値 (デフォルトは 0) を使用します。アプリケー ションは、アプリケーション記述子の SQL_DESC_PRECISION および SQL_DESC_SCALE のフィールドを設定して、精度および位取りに独自の値を提供することができます。

[f] DECIMAL および NUMERIC のデータ型には、1 バイト/1 文字より多くが必要です。デ ータ型は実際には、列に必要な精度に基づき、配列として宣言されます。例えば、SQL DECIMAL(10,4) 型の列は、10 桁、符号文字、小数点文字、およびストリング終止符を考慮 して、SQL_DECIMAL[13] として宣言されます。

[g] コンパイラーによっては、_int64 が提供されない場合があります。

[h] _SQL_C_SHORT、SQL_C_LONG、および SQL_C_TINYINT は ODBC では符号付きお よび符号なしの型 SQL_C_SSHORT と SQL_C_USHORT、SQL_C_SLONG と SQL C_ULONG、および SQL C_STINYINT と SQL C_UTINYINT に置き換えられます。 ODBC 2.x アプリケーションと連携する ODBC 3.x ドライバーは、 SQL_C_SHORT、SQL_C_LONG、および SQL_C_TINYINT をサポートしていなければなり ません。これらを呼び出すと、ドライバー・マネージャーがドライバーに渡すからです。

|fi| solidDB は符号なし SOL データ型をサポートしていません。符号なし C データ型を符 号付き SQL 列にバインドできますが、SQL 列と C 変数に格納された値が、両方のデータ 型の有効範囲にない場合はバインドしないでください。例えば、符号付き TINYINT 列には -128 から +127 の値が含まれ、符号なし SQL_C_UTINYINT 変数に 0 から 255 の値が含 まれているため、値を正しく解釈させるには、列とバインドされた変数には 0 から +127 までの値しか格納できません。

64 ビットの整数構造体

On Microsoft C コンパイラーでは、C データ型 ID の SQL_C_SBIGINT と SQL_C_UBIGINT は _int64 として定義されます。 Microsoft 以外の C コンパイラーを使用する場合は、C 型は異なることがあります。使用しているコンパイラーが 64 ビット整数をネイティブにサポートしている場合、ドライバーまたはアプリケーションの ODBCINT64 をネイティブな 64 ビット整数型として定義します。使用しているコンパイラーが 64 ビット整数をネイティブにサポートしていない場合は、以下の構造体を定義して、これらの C 型に確実にアクセスできるようにします。

```
typedef struct{
SQLUINTEGER dwLowWord;
SQLUINTEGER dwHighWord;
} SQLUBIGINT

typedef struct {
SQLUINTEGER dwLowWord;
SQLINTEGER sdwHighWord;
} SQLBIGINT
```

64 ビット整数は 8 バイト境界に位置合わせされるので、これらの構造体を必ず 8 バイト境界に位置合わせしておいてください。

注:

solidDB は符号付き BIGINT はサポートしていますが、符号なし BIGINT はサポートしていません。

デフォルト C データ型

SQLBindCol、SQLGetData、または SQLBindParameter で SQL_C_DEFAULT を指定 するアプリケーションでは、ドライバーは出力バッファーまたは入力バッファーの C データ型が、バッファーのバインド先である列やパラメーターの SQL データ型 に対応していると仮定します。

重要: さまざまなプラットフォームを使用する際の互換性の問題を回避するために、SQL_C_DEFAULT の使用を避けることを強く推奨します。代わりに使用中のバッファーの C 型を指定してください。

ドライバーは以下の理由で正しいデフォルト C 型を判断できない場合があります。

- DBMS によって、列またはパラメーターの SQL データ型がプロモートされていることがあります。この場合、ドライバーは元の SQL データ型を判別できず、そのため、対応するデフォルト C データ型を判別できません。
- DBMS によって、列またはパラメーターのデータ型が符号付きか、符号なしかが 判別されています。この場合、ドライバーは特定の SQL データ型についてこの 判別を行えず、そのため、対応するデフォルト C データ型についてこの判別を行えません。

307 ページの『SQL から C データ型へのデータ変換』を参照してください。

SQL_C_TCHAR

SQL_C_TCHAR 型 ID は Unicode に使用します。この ID は、ASCII と Unicode の文字セットの両方を使用するようにコンパイルされる、文字データの転送用アプ

リケーションで使用します。SQL_C_TCHAR は従来の意味の型 ID ではなく、 Unicode 変換用にヘッダー・ファイルに含まれているマクロであることに注意して ください。SQL C CHAR または SQL C WCHAR は、UNICODE #define の設定に 応じて SQL_C_TCHAR の代わりとなります。

数値リテラル

文字ストリングに数値データ値を格納するには、数値リテラルを使用します。

数値リテラルの構文は、以下の変換中にターゲットに何を格納するかを指定しま す。

- SQL データから SQL C CHAR ストリングへの変換
- C データから SOL CHAR または SOL VARCHAR のストリングへの変換

構文は、以下の変換中にソースに何が格納されているかの検証もします。

- SQL_C_CHAR ストリングとして格納されている数値から数値 SQL データへの 変換
- SQL_CHAR ストリングとして格納されている数値から数値 C データへの変換 詳しくは、282ページの『数値リテラル構文』を参照してください。

変換ルール

以下のルールは数値リテラルを伴う変換に適用されます。このトピックでは以下の 用語を使用しています。

表 185. 数値リテラルを伴う変換

用語	意味
ストア割り当て	SQLExecute および SQLExecDirect の呼び出しの際に、データベース内の表の列にデータを送信することを指します。ストア割り当て中は、「ターゲット」はデータベース列を、「ソース」はアプリケーション・バッファーのデータを指します。
リトリーブ割り当て	SQLFetch、SQLGetData、および SQLFetchScroll の呼び出しの際に、データベースからアプリケーション・バッファーにデータをリトリーブすることを指します。リトリーブ割り当て中は、「ターゲット」はアプリケーション・バッファーを、「ソース」はデータベース列を指します。
CS	文字ソース内の値。
NT	数値ターゲット内の値。
NS	数値ソース内の値。
СТ	文字ターゲット内の値。
厳密な数値リテラルの精度	リテラルに含まれている桁数。

表 185. 数値リテラルを伴う変換 (続き)

用語	意味
厳密な数値リテラルの位取り	明示的または暗黙の小数点以下の桁数。
近似数値リテラルの精度	リテラルの小数部の精度。

文字ソースから数値ターゲットへの変換のルール

以下は、文字ソース (CS) から数値ターゲット (NT) への変換時のルールです。

1.

CS 内の先行スペースまたは末尾スペースを除去して得た値に CS を置き換えます。CS が有効な数値リテラルでない場合は、SQLSTATE 22018 (キャスト指定に関する無効な文字値) が返されます。

2.

小数点より前の先行ゼロ、小数点の後の後続ゼロ、あるいはその両方を除去して 得た値に CS を置き換えます。

3.

CS を NT に変換します。変換によって有効数字が失われる場合は、SQLSTATE 22003 (範囲外の数値) が返されます。変換によって無効数字が失われる場合は、SOLSTATE 01807 (小数部の切り捨て) が返されます。

以下は、数値ソース (NS) から文字ターゲット (CT) への変換時のルールです。

1.

LT が CT の文字数の長さであるとします。

リトリーブ割り当てでは、LT は文字数で表したバッファーの長さから、この文字セットの NULL 終了文字のバイト数を差し引いたものと等しくなります。

2.

NS の型に応じて、以下のいずれかのアクションを実行します。

•

NS が厳密な数値型の場合は、YP が厳密な数値リテラルの定義に準拠する最短の文字ストリングであるとして、YP の位取りが NS の位取りと同じであり、YP の解釈値が NS の絶対値になるようにします。

•

NS が近似数値型の場合は、YP が以下のような文字ストリングであるとします。

ケース:

a. NS が 0 に等しい場合、YP はストリング「0」です。

- b. YSN が厳密な数値リテラルの定義に準拠する最短の文字ストリングであると して、その解釈値が NS の絶対値になるようにします。YSN の長さが NS のデータ型の (精度 + 1) よりも短い場合は、YP が YSN と等しくなるもの とします。
- c. それ以外の場合は、YP は近似数値リテラルの定義に準拠する最短文字ストリ ングで、その解釈値が NS の絶対値であり、その小数部が「0」以外の 1 桁 の数字とそれに続くピリオドおよび符号なし整数からなります。
- 3. NS が 0 未満の場合は、Y が以下の結果であるとします。

'-' || YP

ここで「Ⅱ」は、ストリング連結演算子です。

それ以外の場合は、YがYPと等しくなるものとします。

4.

LY が Y の文字数の長さであるとします。

- 5. LY の値に応じて、以下のいずれかのアクションを実行します。
 - LY が LT と等しい場合は、CT は Y に設定されます。
 - LY が LT より小さい場合は、CT は適切なスペースの数だけ右側に拡張され たYに設定されます。
 - それ以外の場合 (LY > LT) は、Y の最初の LT 文字を CT にコピーしま す。

ケース:

- これがストア割り当ての場合は、エラー SOLSTATE 22001 (ストリング・ データ、右側切り捨て)を返します。
- これがリトリーブ割り当ての場合は、警告 SOLSTATE 01004 (ストリン グ・データ、右側切り捨て)を返します。コピーによって(後続ゼロ以外 の) 小数桁を失うことになる場合は、ドライバー定義によって、以下のいず れかのアクションが発生します。
- a. ドライバーは Y のストリングを適切な位取りに合わせて切り捨て (ゼロの 場合もある)、結果を CT に書き込みます。
- b. ドライバーは Y のストリングを適切な位取りに合わせて丸め (ゼロの場合 もある)、結果を CT に書き込みます。
- c. ドライバーは切り捨てや丸めは行わず、Y の最初の LT 文字を CT にコピ ーするだけです。

数値データ型の精度と位取りのオーバーライド用デフォルト

以下の表には、数値データ型の精度と位取りのオーバーライド用デフォルト値を示します。

表 186.数値データ型の精度と位取りのオーバーライド用	デフォル	ルトル	盾
------------------------------	------	-----	---

関数呼び出し	設定	オーバーライド
SQLBindCol または SQLSetDescField	ARD の SQL_DESC_TYPE フィー ルドは SQL_C_NUMERIC に設定されます。	ARD の SQL_DESC_SCALE フィール ドは 0 に設定され、 SQL_DESC_PRECISION フィールドはド ライバーが定義したデフォルト精度に設 定されます。[a]
SQLBindParameter または SQLSetDescField	APD の SQL_DESC_SCALE フィ ールドは SQL_C_NUMERIC に設定 されます。	ARD の SQL_DESC_SCALE フィールドは 0 に設定され、SQL_DESC_PRECISION フィールドはドライバーが定義したデフォルト精度に設定されます。これは入力、入出力、または出力のパラメーターに適用されます。[a]
SQLGetData	データは SQL_C_NUMERIC 構造体 に返されます。	デフォルトの SQL_DESC_SCALE および SQL_DESC_PRECISION のフィールドが使用されます。[b]

上記の表の脚注番号に関する説明

[a] デフォルトがアプリケーションに受け入れられない場合、アプリケーションは SQLSetDescField または SQLSetDescRec を呼び出して、SQL_DESC_SCALE または SQL_DESC_PRECISION のフィールドを設定します。

[b] デフォルトが受け入れられない場合は、アプリケーションは SQLSetDescRec または SQLSetDescField を呼び出して、フィールドを設定し、次に SQL_ARD_TYPE の TargetType を指定して SQLGetData を呼び出して、記述子フィールドの値を使用します。

データ型 ID および記述子

各 ID が単一のデータ型を参照する「簡易」SQL データ型および C データ型とは異なり、記述子は、すべての場合に単一値を使用してデータ型を識別するとは限りません。場合によっては、記述子は、詳細データ型および型のサブコードを使用します。大部分のデータ型に関して、詳細データ型 ID は、簡易型 ID と一致します。

ただし、日時データ型とインターバル・データ型は例外です。これらのデータ型では、以下のようになります。

- SQL_DESC_TYPE は詳細型 (SQL_DATETIME) を格納します。
- SQL_DESC_CONCISE_TYPE は簡易型を格納します。

フィールドの設定および他のフィールドに対する設定の効果について詳しくは、 Microsoft ODBC の Web サイトで SQLSetDescField 関数の説明を参照してくださ 170

いくつかのデータ型用に SQL_DESC_TYPE フィールドまたは SOL DESC CONCISE TYPE フィールドを設定すると、以下のフィールドは、その データ型に対して適切なデフォルト値に設定されます。

- SQL DESC DATETIME INTERVAL PRECISION
- SQL_DESC_LENGTH
- SQL DESC PRECISION
- SQL_DESC_SCALE

詳しくは、Microsoft ODBC の Web サイトで SQLSetDescField 関数の SQL DESC TYPE フィールドを参照してください。

注: 設定されたデフォルト値が適切ではない場合、アプリケーションで SQLSetDescField を呼び出すことにより、明示的に記述子フィールドを設定できま す。

以下の表に、各 SQL 型 ID および C 型 ID に関して、日時ごとに簡易型 ID、詳 細型 ID、および型のサブコードをリストします。

日時データ型に関して、SQL DESC TYPE は、SQL データ型 (インプリメンテーシ ョン記述子内)と C データ型 (アプリケーション記述子内)の両方に対して同じマ ニフェスト定数を持ちます。

表 187. 日時ごとの簡易型 ID、詳細型 ID、および型のサブコード

簡易 SQL 型	簡易 C 型	詳細型	DATETIME_INTERVAL_CODE (「型のサブコード」とも呼ばれる)
SQL_TYPE_DATE	SQL_C_TYPE_DATE	SQL_DATETIME	SQL_CODE_DATE
SQL_TYPE_TIME	SQL_C_TYPE_TIME	SQL_DATETIME	SQL_CODE_TIME
SQL_TYPE_TIMESTAMP	SQL_C_TYPE_TIMESTAMP	SQL_DATETIME	SQL_CODE_TIME STAMP

疑似型 ID

ODBC は疑似型 ID をいくつか定義しており、状態に応じて、既存のデータ型に解 決されます。これらの ID は、実際のデータ型には対応していませんが、アプリケ ーション・プログラミングの便官のために提供されています。

小数桁数

小数桁数は 10 進数と数値のデータ型に適用されます。これは、小数点以下の最大 桁数、すなわちデータの位取りを指しています。

小数点以下の桁数は固定されていないため、近似浮動小数点数の列やパラメーターに対する位取りは定義されていません。日時データに秒コンポーネントが含まれている場合は、小数桁数はデータの秒コンポーネントの小数点以下の桁数です。

通常、最大位取りは SQL_DECIMAL および SQL_NUMERIC のデータ型の最大精度と一致します。ただし、一部のデータ・ソースには独自の最大位取り制限があります。アプリケーションは SQLGetTypeInfo を呼び出して、データ型に認められている最小および最大の位取りを判別できます。

以下の ODBC 関数は、SQL ステートメント・データ型のパラメーター 10 進数属性を返すか、またはデータ・ソースの 10 進数属性を返します。

表 188. ODBC 関数の戻りパラメーター

ODBC 関数	戻り値
SQLDescribeCol	記述する列の小数桁数
SQLDescribeParam	記述するパラメーターの小数桁数
SQLProcedureColumns	プロシージャーの列の小数桁数
SQLColumns	指定された表 (基本表、ビュー、またはシステム表など) の小数桁数
SQLColAttribute	データ・ソースの列の小数桁数
SQLGetTypeInfo	データ・ソース上の SQL データ型の最小お よび最大の小数桁数

注: SQLBindParameter は SQL ステートメントのパラメーターの小数桁数を設定します。

ODBC 関数が小数桁数について返す値は、ODBC 2.x で定義されている「位取り」に対応しています。

記述子フィールドは、結果セットの特性を記述します。ステートメントの実行前は 有効なデータ値は含まれていません。ただし、SOLColumns、

SQLProcedureColumns、および SQLGetTypeInfo によって返される小数桁数の値は、データ・ソースのカタログからの表の列やデータ型など、データベース・オブジェクトの特性を示すものです。

簡易 SQL データ型ごとに、以下の表に記載の小数桁数定義があります。

表 189. SQL データ型小数桁数

SQL 型 ID	小数桁数							
すべての文字型とバイナリー型 [a]	N/A							

表 189. SQL データ型小数桁数 (続き)

SQL 型 ID	小数桁数
SQL_DECIMAL SQL_NUMERIC	定義された小数点以下の桁数。例えば、NUMERIC(10,3)と定義されている列の位取りは3です。(インプリメンテーションによっては負の数値を使用して、指数表記を使用せずに非常に大きな数値の格納をサポートしている場合もあります。例えば、「12000」は-3の位取りで「12」として格納することができます。ただし、solidDB は負の位取りはサポートしていません。)
SQL_DECIMAL および SQL_NUMERIC 以 外のすべての厳密な数値型 [a]	0
すべての近似データ型 [a] 注: [a] このデータ型では、SQLBindParameter	N/A の DecimalDigits 引数は無視されます。

小数桁数については、返された値は、いずれか 1 つの記述子フィールドの値に対応 しているわけではありません。小数桁数について返される値 (例えば SQLColAttribute での値)は、以下の表に示すように、データ型によって、 SQL_DESC_SCALE フィールドまたは SQL_DESC_PRECISION フィールドの値のい ずれかになります。

表 190. 小数桁数に対応する記述子フィールド

SQL 型 ID	小数桁数に対応する記述子フィールド								
すべての文字型とバイナリー型	N/A								
すべての厳密な数値型	SCALE								
すべての近似数値型	N/A								
すべての日時型	PRECISION								

転送オクテット長

データをデフォルト C データ型に転送すると、アプリケーションは最大バイト数を 受信します。この最大値は列の転送オクテット長と呼ばれています。

文字データの場合は、NULL 終了文字のスペースは転送オクテット長に含まれませ ん。バイト数で表した転送オクテット長は、データ・ソースにデータを格納するた めに必要なバイト数とは異なることがある点に注意してください。

以下の ODBC 関数は、SQL ステートメント・データ型のパラメーター 10 進数属 性を返すか、またはデータ・ソースの 10 進数属性を返します。

表 191. ODBC 関数の戻りパラメーター 10 進数属性

ODBC 関数	戻り値
SQLColumns	指定された表 (基本表、ビュー、またはシステム表など) の列の転送オクテット長
SQLColAttribute	データ・ソースの列の転送オクテット長
SQLProcedureColumns	プロシージャーの列の転送オクテット長

ODBC 関数が転送オクテット長について返す値は、SQL_DESC_LENGTH で返される値には対応していないことがあります。すべての文字型およびバイナリー型については、値は記述子フィールドの SQL_DESC_OCTET_LENGTH の値です。その他のデータ型については、この情報を格納する記述子フィールドはありません。

記述子フィールドは、結果セットの特性を記述します。ステートメントの実行前は 有効なデータ値は含まれていません。結果セット内では、SQLColAttribute はデー タ・ソースの列の転送オクテット長を返します。これらの値は、

SQL_DESC_OCTET_LENGTH 記述子フィールドの値と一致しないことがあります。 記述子フィールドについて詳しくは、Microsoft ODBC の Web サイトで SOLSetDescField 関数に関する説明を参照してください。

簡易 SQL データ型ごとに、以下の表に記載の転送オクテット長定義があります。

表 192. 転送オクテット長

SQL 型 ID	転送オクテット長
すべての文字型とバイナリ 一型 [a]	バイト数で表した、列の定義済みの長さまたは最大の長さ (可変型の場合)。この値は、SQL_DESC_OCTET_LENGTH 記述子フィールドの値と一致します。
SQL_DECIMAL SQL_NUMERIC	文字セットが ASCII の場合は、このデータの文字表現を格納するために必要なバイト数。文字セットが UNICODE の場合は、その倍のバイト数になります。文字表現は、最大桁数に 2を足したものです。データは文字ストリングとして返されますが、ここで桁、符号、小数点の分の文字が必要です。例えば、NUMERIC(10,3) として定義された列の転送長は 12 です。これは、桁に 10 バイト、符号に 1 バイト、小数点に 1 バイトがあるからです。
SQL_TINYINT	1
SQL_SMALLINT	2
SQL_INTEGER	4

表 192. 転送オクテット長 (続き)

SQL 型 ID	転送オクテット長
SQL_BIGINT	文字セットが ASCII の場合は、このデータの文字表現を格納するために必要なバイト数。文字セットが UNICODE の場合は、その倍のバイト数になります。デフォルトでは、このデータ型は文字ストリングとして返されます。文字表現は19桁と符号(符号付きの場合)、または20桁(符号なしの場合)に対する20文字から構成されます。長さは20です。
	solidDB では、BIGINT は符号付きのもののみをサポートし、 符号なしのものをサポートしません。
SQL_REAL	4
SQL_FLOAT	8
SQL_DOUBLE	8
すべてのバイナリー型 [a]	定義済みの数 (固定型の場合) または最大の数 (可変型の場合) の文字を格納するために必要なバイト数。
SQL_TYPE_DATE SQL_TYPE_TIME	6 (構造体 SQL_DATE_STRUCT または SQL_TIME_STRUCT のサイズ)
SQL_TYPE_TIMESTAMP	16 (構造体 SQL_TIMESTAMP_STRUCT のサイズ)

上記の表の脚注番号に関する説明

[a] ドライバーが可変型の列またはパラメーターの長さを判別できない場合は、 SQL_NO_TOTAL が返されます。

グレゴリオ暦の制約

日付および日時のデータ型に関するグレゴリオ暦の制約を以下の表に示します。

表 193. グレゴリオ暦の制約

値	要件
月フィールド	1 から 12 までの値である必要があります。
日フィールド	範囲は 1 からその月の日数までである必要があります。月の日数は年および月のフィールドの値で決まり、28、29、30、または 31 のいずれかになります。うるう年も、月の日数に影響します。
時フィールド	0 から 23 までの値である必要があります。
分フィールド	0 から 59 までの値である必要があります。

表 193. グレゴリオ暦の制約 (続き)

值	要件
	0 から 61.9(n) までの値である必要があります。n は「9」の 位置の桁数を指定するもので、n の値は小数秒精度です。秒の 範囲には、恒星時間との同期を維持するため、最大 2 秒のう るう秒が許可されています。

SQL から C データ型へのデータ変換

このセクションでは、SQL から C データ型へのデータ変換に関する情報を提供します。

アプリケーションが SQLFetch、SQLFetchScroll、または SQLGetData を呼び出すと、ドライバーはデータ・ソースからデータをリトリーブします。ドライバーは、必要であれば、ドライバーがリトリーブしたときのデータ型から、SQLBindCol または SQLGetData の TargetType 引数で指定されたデータ型にデータを変換します。最後に、SQLBindCol または SQLGetData (および ARD の SQL_DESC_DATA_PTR フィールド)の TargetValuePtr 引数が指す場所にデータを格納します。

以下の表には、ODBC SQL データ型から ODBC C データ型へのサポートされている変換を示します。アスタリスクは SQL データ型のデフォルト変換を示します (TargetType の値が SQL_C_DEFAULT の場合に、データの変換先になる C データ型です)。白丸はサポートされている変換を示します。

ODBC 2.x ドライバーと連携している ODBC 3.x アプリケーションでは、ドライバー固有のデータ型からの変換がサポートされない場合があります。

変換されたデータのフォーマットは、Windows の国別設定には影響されません。

solidDB では、整数データ型 (SQL_TINYINT、SQL_SMALLINT、SQL_INTEGER、および SQL_BIGINT) は符号付きのもののみをサポートし、符号なしのものをサポートしません。符号なし C 変数を符号付き SQL 列にバインドできますが、格納する値が両方のデータ型にサポートされている範囲内にあることを確認する必要があります。

solidDB は SQL 列の BIT/SQL_BIT データ型をサポートしていません。ただし、C アプリケーションでは、数値 SQL 列を BIT データ型にバインドすることができます。例えば、データベースで TINYINT 列を使用して、その列を SQL_C_BIT 型の C 変数にバインドすることができます。solidDB ODBC ドライバーはデータベース 内の数値型を、C 変数用に BIT データ型に変換することを試みます。数値データ値は、1、0、または NULL でなければなりません。他の値の場合、データ変換エラーが発生します。以下の表では、BIT/SQL_BIT データ型については説明していません。

注意:

この表には、符号なしデータ型を伴う変換を含む広範な ODBC 変換が示されていますが、solidDB は符号付き整数データ型 (例えば TINYINT、 SMALLINT、INTEGER、および BIGINT など) のみをサポートしています。

表 194. C データ型: データ型が以下の SQL_C_datatype

			S T I	U T I	T I	S	U					S B	U B		D	N U	В			T I M E
	C H A	W C H A	N Y I N	N Y I N	N Y I N	S H O R	S H O R	S H O R	S L O N	U L O N	L O N	I G I N	I G I N	F L O A	O U B L	M E R I	I N A R	D A T	T I M	S T A M
SQL データ型	R	R	Т	Т	Т	Т	Т	Т	G	G	G	Т	Т	Т	Е	С	Y	Е	Е	P
SQL_CHAR	*	o	О	О	О	О	О	О	О	О	О	О	О	0	О	О	О	o	О	О
SQL_VARCHAR	*	О	О	О	О	О	О	О	О	О	О	О	О	0	О	О	О	О	О	О
SQL_LONGVARCHAR	*	О	О	o	О	o	О	О	o	o	О	О	О	0	o	o	О	О	o	О
SQL_WCHAR	o	*	o	o	o	o	o	o	o	o	О	o	o	0	o	o	o	o	o	О
SQL_WVARCHAR	o	*	o	o	О	o	О	o	o	О	o	o	О	o	О	o	o	o	o	О
SQL_WLONGVARCHAR	o	*	o	o	o	o	o	o	o	o	0	o	o	o	o	o	o	o	o	o
SQL_TINYINT (符号付き)	o	o	*	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o			
SQL_TINYINT (符号なし)	o	o	o	*	О	o	o	o	o	o	o	o	О	О	o	o	o			
SQL_SMALLINT (符号付き)	o	o	o	o	o	*	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o			
SQL_SMALLINT (符号なし)	o	o	o	o	o	o	*	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o			
SQL_INTEGER (符号付き)	o	o	o	o	o	o	0	o	*	0	o	o	o	o	o	o	o			
SQL_INTEGER (符号なし)	o	o	o	o	o	o	0	o	o	*	o	o	o	0	О	o	o			
SQL_BIGINT (符号付き)	o	o	o	o	О	o	o	o	o	o	o	*	О	О	o	0				
SQL_BIGINT (符号なし)	o	o	o	0	o	o	o	o	0	o	o	o	*	О	o	О	o			
SQL_REAL	o	o	o	o	o	О	0	0	o	О	o	o	o	*	o	o	0			
SQL_FLOAT	o	0	o	o	o	О	o	o	o	o	o	o	o	o	*	o	o			
SQL_DOUBLE	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	*	o	o			
SQL_DECIMAL	*	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o			
SQL_NUMERIC	*	o	o	o	o	o	О	o	o	o	o	o	o	О	o	o	o			
SQL_BINARY	o	o															*			
SQL_VARBINARY	О	o															*			

表 194. C データ型: データ型が以下の SQL_C_datatype (続き)

																				T
			S	U																I
			T	T	T							S	U			N				M
			I	I	I	S	U					В	В		D	U	В			E
		W	N	N	N	S	S	S	S	U		I	I	F	0	M	I			S
	C	C	Y	Y	Y	H	Н	Н	L	L	L	G	G	L	U	E	N	D	T	T
	Н	H	I	I	I	0	0	0	0	0	O	I	I	O	В	R	A	A	I	A
	A	A	N	N	N	R	R	R	N	N	N	N	N	A	L	I	R	T	M	M
SQL データ型	R	R	T	T	T	T	T	T	G	G	G	T	T	Т	E	C	Y	E	E	P
SQL_LONGVARBINARY	o	o															*			
SQL_TYPE_DATE	o	o															o	*		o
SQL_TYPE_TIME	О	0															o		*	0
SQL_TYPE_TIMESTAMP	О	o															o	o	o	*

* これらのデータ型は、データ型の名前に「TYPE」の語を含んでいます。例えば、SQL_C_TYPE_DATE、SQL_C_TYPE_TIME、および SQL_C_TYPE_TIMESTAMP のようになります。

凡例:

- * デフォルトの変換
- o サポートされている変換

SQL から C へのデータ変換表

以下のセクションの表では、ドライバーまたはデータ・ソースがデータ・ソースからリトリーブしたデータを変換する方法を示します。ドライバーは、サポートしている ODBC SQL データ型から、すべての ODBC C データ型への変換をサポートする必要があります。

変換表の説明 (SQL から C への変換)

表には以下の列が含まれています。

- 特定の ODBC SQL データ型では、表の最初の列には、SQLBindCol および SQLGetData の TargetType 引数の有効な入力値がリストされています。
- 2 番目の列にはテストの結果がリストされています。このテストでは、 SQLBindCol または SQLGetData で指定された BufferLength 引数が使用されることが多く、ドライバーは、データを変換できるかどうかを判断するためにこのテストを行います。
- 結果ごとに、3番目と4番目の列には、ドライバーがデータの変換を試みた後に、バッファーに入れられた値がリストされています。これらのバッファーは、SQLBindCol または SQLGetData で指定された TargetValuePtr および StrLen_or_IndPtr の引数によって指定されます。(StrLen_or_IndPtr 引数は、ARDの SQL DESC OCTET LENGTH PTR フィールドに対応しています。)

• 最後の列には、SQLFetch、SQLFetchScroll、または SQLGetData により結果ごと に返される SQLSTATE がリストされます。

SQLBindCol または SQLGetData の TargetType 引数に、特定の ODBC SQL デー タ型について表には記載されていない ODBC C データ型の値が含まれている場 合、SQLFetch、SQLFetchScroll、または SQLGetData は SQLSTATE 07006 (制限付 きデータ型属性違反) を返します。TargetType 引数にドライバー固有の SQL デー タ型から ODBC C データ型への変換を指定する値が含まれており、ドライバーが この変換をサポートしていない場合は、SQLFetch、SQLFetchScroll、または SQLGetData は SQLSTATE HYC00 (オプション機能がインプリメントされない) を 返します。

表には記載されていませんが、ドライバーは SQL データ値が NULL の場合は、 StrLen_or_IndPtr 引数によって指定されたバッファーに、SQL_NULL_DATA を返し ます。StrLen or IndPtr で指定される長さには、NULL 終了バイトは含まれません。 TargetValuePtr が NULL ポインターの場合は、SOLGetData は、SOLSTATE HY009 (NULL ポインターの無効な使用)を返します。SQLBindCol では、これによって列 がアンバインドされます。

これらの表では以下の用語と規則を使用します。

- データがアプリケーションに返される前に切り捨てられるかどうかに関係なく、 データのバイト長は *TargetValuePtr で返すことのできる C データのバイト数で す。ストリング・データの場合、これには NULL 終了文字のスペースは含まれま せん。
- 文字バイト長は、データを文字フォーマットで表示するために必要な合計バイト 数です。
- イタリックで記載した語は、SQL 文法の関数引数または要素を示します。文法要 素の構文については、277ページの『付録 D. ODBC に関する SOL 文法の最小 要件』を参照してください。

SQL から C への変換: 文字

文字 ODBC SQL データ型は、以下のとおりです。

SQL CHAR

SQL VARCHAR

SQL LONGVARCHAR

SQL WCHAR

SQL WVARCHAR

SQL WLONGVARCHAR

以下の表には、文字 SQL データから変換することができる ODBC C データ型を 記載します。表中の列および用語の説明は、 309 ページの『変換表の説明 (SOL か ら C への変換)』を参照してください。

表 195. 文字 SQL データから ODBC C データ型への変換

C 型 ID	テスト	*TargetValuePtr	*StrLen_or_IndPtr	SQLSTATE
SQL_C_CHAR	データのバイト長 < BufferLength データのバイト長 >= BufferLength	データ 切り捨てデータ	データの長さ (バイト 数) データの長さ (バイト 数)	N/A 01004
SQL_C_WCHAR	データの文字長 < BufferLength (データの文字長) >= BufferLength	データ 切り捨てデータ	データの長さ (文字数) データの長さ (文字数)	
EXACT NUMERIC TYPES [h] SQL_C_STINYINT SQL_C_UTINYINT SQL_C_TINYINT SQL_C_SSHORT SQL_C_USHORT SQL_C_SHORT SQL_C_SLONG SQL_C_LONG SQL_C_ULONG SQL_C_ULONG SQL_C_LONG SQL_C_NUMERIC	切り捨てなしで変換したデータ [b] 小数桁を切り捨てて変換したデータ [a] データ変換の結果、(小数桁ではなく)整数桁が失われる [b] データは数値リテラルではない [b]		C データ型のバイト数C データ型のバイト数未定義未定義	
APPROXIMATE NUMERIC TYPES [h] SQL_C_FLOAT SQL_C_DOUBLE SQL_C_BINARY	データは数値が変換されるデータ型の範囲内 [a] データは数値が変換されるデータ型の範囲外 [a] データは数値リテラルではない [b] データのバイト長 <= BufferLength データのバイト長 >	データ 未定義 未定義 データ 切り捨てデータ	C データ型のサイズ未定義未定義データの長さデータの長さ	N/A 2003 22018 N/A 01004

表 195. 文字 SQL データから ODBC C データ型への変換 (続き)

C 型 ID	テスト	*TargetValuePtr	*StrLen_or_IndPtr	SQLSTATE
SQL_C_TYPE_DATE	データ値は有効な日付値 [a]	データ	6 [b]	N/A
	データ値は有効なタイム・ス タンプ値で、時刻部分はゼロ [a]	データ 切り捨てデータ	6 [b] 6 [b]	N/A 01S07
	データ値は有効なタイム・ス タンプ値で、時刻部分はゼロ 以外 [a]、[c]	未定義	未定義	22018
	データ値は有効な日付値また はタイム・スタンプ値ではな い [a]			
SQL_C_TYPE_TIME	データ値は有効な時刻値で、 小数秒値は 0 [a] データ値は有効なタイム・ス	データ	6 [b]	N/A N/A
	で、小数秒部分はゼロ[a]、[d]	切り捨てデータ 未定義	6 [b] 未定義	01S07 22018
	データ値は有効なタイム・ス タンプ値で、小数秒部分はゼ ロ以外 [a]、[d]、[e]			
	データ値は有効なタイム・ス タンプ値または時刻値ではな い [a]			
SQL_C_TYPE_TIMESTAMP	データ値は有効なタイム・スタンプ値または有効な時刻値で、小数秒部分は切り捨てられない [a]、[d]	データ 切り捨てデータ データ [f]	16 [b] 16 [b] 16 [b]	N/A 01S07 N/A
	データ値は有効なタイム・スタンプ値または有効な時刻値で、小数秒部分は切り捨てられる[a]	データ [g] 未定義	16 [b] 未定義	N/A 22018
	データ値は有効な日付値 [a] データ値は有効な時刻値 [a]			
	データ値は有効な日付値、時 刻値、またはタイム・スタン プ値ではない [a]			

表 195. 文字 SQL データから ODBC C データ型への変換 (続き)

	C 型 ID	テスト	*TargetValuePtr	*StrLen_or_IndPtr	SQLSTATE
--	--------	-----	-----------------	-------------------	----------

注:

- [a] BufferLength の値はこの変換では無視されます。ドライバーは、*TargetValuePtr のサイズが C データ型のサイズ であると想定します。
- [b] これは対応する C データ型のサイズです。
- [c] タイム・スタンプ値の時刻部分は切り捨てられます。
- [d] タイム・スタンプ値の日付部分は無視されます。
- [e] タイム・スタンプの小数秒部分は切り捨てられます。
- [f] タイム・スタンプ構造体の時刻フィールドはゼロに設定されます。
- [g] タイム・スタンプ構造体の日付フィールドは現在日付に設定されます。
- [h] 厳密な数値型には、NUMERIC/DECIMAL と整数が含まれます。これらのデータ型は、データ型の精度範囲内であれば、指定した値をそのまま格納します。近似データ型には FLOAT/REAL が含まれており、指定した値の近似値のみを格納します (場合によっては、最下位桁が、実際に指定したものとは若干異なることがあります)。

文字 SQL データを数値、日付、時刻、またはタイム・スタンプの C データに変換すると、前後のスペースが無視されます。

SQL から C への変換: 数値

SQL_DECIMAL SQL_BIGINT
SQL_NUMERIC SQL_REAL
SQL_TINYINT SQL_FLOAT
SQL_SMALLINT SQL_DOUBLE
SQL_INTEGER

以下の表には、数値 SQL データから変換することができる ODBC C データ型を記載します。表中の列および用語の説明は、 309 ページの『変換表の説明 (SQL から C への変換)』を参照してください。

表 196. 数値 SQL データから ODBC C データ型への変換

C 型 ID	テスト	*TargetValuePtr	*StrLen_or_IndPtr	SQLSTATE
SQL_C_CHAR	文字のバイト長 < BufferLength (小数桁ではなく) 整数桁の数 < BufferLength (小数桁ではなく) 整数桁の数 ≥	データ 切り捨てデータ 未定義	データの長さ (バイト 数) データの長さ (バイト 数)	N/A 01004 22003
	BufferLength		未定義	

表 196. 数値 SQL データから ODBC C データ型への変換 (続き)

C 型 ID	テスト	*TargetValuePtr	*StrLen_or_IndPtr	SQLSTATE
SQL_C_WCHAR EXACT NUMERIC	文字の長さ < BufferLength (小数桁ではなく) 整数桁の数 < BufferLength (小数桁ではなく) 整数桁の数 ≥ BufferLength 切り捨てなしで変換したデータ	データ 切り捨てデータ 未定義 データ	データの長さ (バイト 数) データの長さ (バイト 数) 未定義 C データ型のサイズ	N/A 01004 22003 N/A
TYPES [c] SQL_C_STINYINT SQL_C_UTINYINT SQL_C_SBIGINT SQL_C_SBIGINT SQL_C_UBIGINT SQL_C_SSHORT SQL_C_SHORT SQL_C_USHORT SQL_C_SLONG SQL_C_LONG SQL_C_ULONG SQL_C_LONG SQL_C_NUMERIC	[a] 小数桁を切り捨てて変換したデータ [a] データ変換の結果、(小数桁ではなく) 整数桁が失われる [a]	切り捨てデータ未定義	C データ型のサイズ 未定義	01S07 22003
APPROXIMATE NUMERIC TYPES [c] SQL_C_FLOAT SQL_C_DOUBLE	データは数値が変換されるデータ型の範囲内 [a] データは数値が変換されるデータ型の範囲外 [a]	データ未定義	C データ型のサイズ 未定義	N/A 22003
SQL_C_BINARY	データの長さ ≤ BufferLength データの長さ > BufferLength	データ未定義	データの長さ 未定義	N/A 22003

表 196. 数値 SQL データから ODBC C データ型への変換 (続き)

Talget value i u Strengor indi u Strengor indi u Strengor indi u Strengor indi u	C 型 ID	テスト	*TargetValuePtr	*StrLen_or_IndPtr	SQLSTATE
--	--------	-----	-----------------	-------------------	----------

注:

- [a] BufferLength の値はこの変換では無視されます。ドライバーは、*TargetValuePtr のサイズが C データ型のサイズ であると想定します。
- [b] これは対応する C データ型のサイズです。
- [c] 厳密な数値型には、NUMERIC/DECIMAL と整数が含まれます。これらのデータ型は、データ型の精度範囲内であれば、指定した値をそのまま格納します。近似データ型には FLOAT/REAL が含まれており、指定した値の近似値のみを格納します (場合によっては、最下位桁が、実際に指定したものとは若干異なることがあります)。

SQL から C への変換: バイナリー

バイナリー ODBC SQL データ型は、以下のとおりです。

SQL_BINARY SQL_VARBINARY SQL_LONGVARBINARY

以下の表には、バイナリー SQL データから変換することができる ODBC C データ型を記載します。表中の列および用語の説明は、 309 ページの『変換表の説明 (SQL) から (SQL) から (SQL) な参照してください。

表 197. バイナリー SQL データから ODBC C データ型への変換

C 型 ID	テスト	*TargetValuePtr	*StrLen_or_IndPtr	SQLSTATE
SQL_C_CHAR	(データのバイト長) * 2 < BufferLength (データのバイト長) * 2 >= BufferLength	データ 切り捨てデータ	データの長さ (バイト 数) データの長さ (バイト 数)	N/A 01004
SQL_C_WCHAR	(データの文字長) * 2 < BufferLength (データの文字長) * 2 >= BufferLength	データ 切り捨てデータ	データの長さ (バイト 数) データの長さ (バイト 数)	N/A 01004
SQL_C_BINARY	データのバイト長 <= BufferLength データのバイト長 > BufferLength	データ 切り捨てデータ	データの長さ (バイト 数) データの長さ (バイト 数)	N/A 01004

バイナリー SQL データを文字の C データに変換すると、ソース・データの各バイト (8 ビット) は 2 つの ASCII 文字として表現されます。これらの文字は、16 進形式での数値の ASCII 文字表現です。例えば、バイナリー 000000001 は「01」に、バイナリー 111111111 は「FF」に変換されます。

ドライバーは常に個々のバイトを 16 進数字のペアに変換し、NULL バイトで文字ストリングを終了します。このため、BufferLength が偶数で、変換後のデータの長さよりも短い場合は、*TargetValuePtr バッファーの最後のバイトは使用されません。(変換済みのデータでは、偶数バイトが必要で、最後から 2 番目のバイトがNULL バイトであり、最後のバイトが使用できません。)

アプリケーション開発者には、文字 C データ型へのバイナリー SQL データのバインドを避けることを推奨します。この変換は普通、非効率で低速です。

SQL から C への変換: 日付

日付 ODBC SQL データ型は、以下のとおりです。 SQL DATE

以下の表には、日付 SQL データから変換することができる ODBC C データ型を記載します。表中の列および用語の説明は、 309 ページの『変換表の説明 (SQL から C への変換)』を参照してください。

表 198. 日付 SQL データから ODBC C データ型への変換

C 型 ID	テスト	*TargetValuePtr	*StrLen_or_IndPtr	SQLSTATE
SQL_C_CHAR	BufferLength > 文字のバイト長	データ	10	N/A
	11 <= BufferLength <= 文字の	切り捨てデータ	データの長さ (バイト	01004
	バイト長	未定義	数)	22003
	BufferLength < 11		未定義	
SQL_C_WCHAR	BufferLength > 文字の長さ	データ	10	N/A
	11 <= BufferLength <= 文字の	切り捨てデータ	データの長さ (バイト	01004
	長さ	未定義	数)	22003
	BufferLength < 11		未定義	
SQL_C_BINARY	データのバイト長 <=	データ	データの長さ (バイト 数)	N/A
	BufferLength	未定義	奴)	22003
	データのバイト長 >		未定義	
	BufferLength			
SQL_C_DATE	なし [a]	データ	6 [c]	N/A
SQL_C_TIMESTAMP	なし [a]	データ [b]	16 [c]	N/A

注:

- [a] BufferLength の値はこの変換では無視されます。ドライバーは、*TargetValuePtr のサイズが C データ型のサイズ であると想定します。
- [b] タイム・スタンプ構造体の時刻フィールドはゼロに設定されます。
- [c] これは対応する C データ型のサイズです。

日付 SQL データを文字 C データに変換すると、結果ストリングは「yyyy-mm-dd」フォーマットになります。このフォーマットは Windows の国別設定には影響されません。

SQL から C への変換: 時刻

時刻 ODBC SQL データ型は、以下のとおりです。 SQL_TIME

以下の表には、時刻 SQL データから変換することができる ODBC C データ型を記載します。表中の列および用語の説明は、 309 ページの『変換表の説明 (SQL から C への変換)』を参照してください。

表 199. 時刻 SQL データから ODBC C データ型への変換

C 型 ID	テスト	*TargetValuePtr	*StrLen_or_IndPtr	SQLSTATE
SQL_C_CHAR	BufferLength > 文字のバイト長 9 <= BufferLength <= 文字のバイト長 BufferLength < 9	データ 切り捨てデータ [a] 未定義	データの長さ (バイト数) データの長さ (バイト数) 未定義	N/A 01004 22003
SQL_C_WCHAR	BufferLength > 文字のバイト長 9 <= BufferLength <= 文字のバイ ト長 BufferLength < 9	データ 切り捨てデータ [a] 未定義	データの長さ (文字 数) データの長さ (文字 数) 未定義	N/A 01004 22003
SQL_C_BINARY	データのバイト長 <= BufferLength データのバイト長 > BufferLength	データ未定義	データの長さ (バイ ト数) 未定義	N/A 22003
SQL_C_DATE SQL_C_TIMESTAMP	なし [a]	データ データ [b]	6 [c]	N/A N/A

注:

[a]: 時刻の小数秒は切り捨てられます。

[b]: BufferLength の値はこの変換では無視されます。ドライバーは、*TargetValuePtr のサイズが C データ型のサイズ であると想定します。

[c]: タイム・スタンプ構造体の日付フィールドは、現在日付に設定され、タイム・スタンプ構造体の小数秒フィールドはゼロに設定されます。

[d]: これは対応する C データ型のサイズです。

時刻 SQL データを文字の C データに変換すると、結果ストリングは「hh:mm:ss」 フォーマットになります。

SQL から C への変換: タイム・スタンプ

タイム・スタンプ ODBC SQL データ型は、以下のとおりです。 $SQL_TIMESTAMP$

以下の表には、タイム・スタンプ SQL データから変換することができる ODBC C データ型を記載します。表中の列および用語の説明は、 309 ページの『変換表の説明 (SQL から C への変換)』を参照してください。

表 200. タイム・スタンプ SQL データから ODBC C データ型への変換

C 型 ID	テスト	*TargetValuePtr	*StrLen_or_IndPtr	SQLSTATE
SQL_C_CHAR	BufferLength > 文字のバイト 長 20 <= BufferLength <= 文字	データ 切り捨てデータ [b]	データの長さ (バイト数) データの長さ (バイ	N/A 01004
	のバイト長 BufferLength < 20	未定義	ト数) 未定義	22003
SQL_C_WCHAR	BufferLength > 文字のバイト 長 20 <= BufferLength <= 文字 のバイト長	データ 切り捨てデータ [b] 未定義	データの長さ (文字 数) データの長さ (文字 数)	N/A 01004 22003
SQL_C_BINARY	BufferLength < 20 データのバイト長 <= BufferLength データのバイト長 >	データ未定義	未定義 データの長さ (バイ ト数) 未定義	N/A 22003
SQL_C_TYPE_DATE	BufferLength タイム・スタンプの時刻部分はゼロ [a] タイム・スタンプの時刻部分はゼロ以外 [a]	データ 切り捨てデータ [c]	6 [f] 6 [f]	N/A 01S07
SQL_C_TYPE_TIME	タイム・スタンプの小数秒部分はゼロ [a] タイム・スタンプの小数秒部分はゼロ以外 [a]	データ [d] 切り捨てデータ [d]、[e]	6 [f] 6 [f]	N/A 01S07
SQL_C_TYPE_TIMESTAMP	タイム・スタンプの小数秒部 分は切り捨てられない [a] タイム・スタンプの小数秒部 分は切り捨てられる [a]	データ [e] 切り捨てデータ [e]	6 [f] 6 [f]	N/A 01S07

表 200. タイム・スタンプ SQL データから ODBC C データ型への変換 (続き)

	C 型 ID	テスト	*TargetValuePtr	*StrLen_or_IndPtr	SQLSTATE
--	--------	-----	-----------------	-------------------	----------

注:

- [a] BufferLength の値はこの変換では無視されます。ドライバーは、*TargetValuePtr のサイズが C データ型のサイズ であると想定します。
- [b] タイム・スタンプの小数秒は切り捨てられます。
- [c] タイム・スタンプの時刻部分は切り捨てられます。
- [d] タイム・スタンプの日付部分は無視されます。
- [e] タイム・スタンプの小数秒部分は切り捨てられます。
- [f] これは対応する C データ型のサイズです。

タイム・スタンプ SQL データを文字 C データに変換すると、結果ストリングは「yyyy-mm-dd hh:mm:ss [.f ...]」フォーマットになります。ここで、小数秒には最大 9 桁を使用できます。このフォーマットは Windows の国別設定には影響されません。(小数点と小数秒を除いて、タイム・スタンプ SQL データ型の精度に関係なく、フォーマット全体を使用する必要があります。)

SQL から C へのデータ変換例

以下の例では、ドライバーによる SQL データから C データへの変換方法を示します。

表 201. SQL から C へのデータ変換例

			バッファー			
SQL 型 ID	SQL データ値	C 型 ID	長	*TargetValuePtr	SQLSTATE	
SQL_CHAR	abcdef	SQL_C_CHAR	7	abcdef¥0 [a]	N/A	
SQL_CHAR	abcdef	SQL_C_CHAR	6	abcde¥0 [a]	01004	
SQL_DECIMAL	1234.56	SQL_C_CHAR	8	1234.56¥0 [a]	N/A	
SQL_DECIMAL	1234.56	SQL_C_CHAR	5	1234¥0 [a]	01004	
SQL_DECIMAL	1234.56	SQL_C_CHAR	4		22003	
SQL_DECIMAL	1234.56	SQL_C_FLOAT	無視	1234.56	N/A	
SQL_DECIMAL	1234.56	SQL_C_SSHORT	無視	1234	01S07	
SQL_DECIMAL	1234.56	SQL_C_STINYINT	無視		22003	
SQL_DOUBLE	1.2345678	SQL_C_DOUBLE	無視	1.2345678	N/A	
SQL_DOUBLE	1.2345678	SQL_C_FLOAT	無視	1.234567	N/A	

表 201. SQL から C へのデータ変換例 (続き)

COL #U ID	col = hts	C W D	バッファー	*TP	COL CTATE
SQL 型 ID	SQL データ値	C 型 ID	長	*TargetValuePtr	SQLSTATE
SQL_DOUBLE	1.2345678	SQL_C_STINYINT	無視	1	N/A
SQL_TYPE_DATE	1992-12-31	SQL_C_CHAR	11	1992-12-31¥0 [a]	N/A
SQL_TYPE_DATE	1992-12-31	SQL_C_CHAR	10		22003
SQL_TYPE_DATE	1992-12-31	SQL_C_ TIMESTAMP	無視	1992,12,31, 0,0,0,0 [b]	N/A
SQL_TYPE_TIMESTAMP	1992-12-31 23:45:55.12	SQL_C_CHAR	23	1992-12-31 23:45:55.12¥0 [a]	N/A
SQL_TYPE_TIMESTAMP	1992-12-31 23:45:55.12	SQL_C_CHAR	22	1992-12-31 23:45:55.1¥0 [a]	01004
SQL_TYPE_TIMESTAMP	1992-12-31 23:45:55.12	SQL_C_CHAR	18		22003

[a] 「¥0」は NULL 終了バイトを表します。ドライバーは常に SQL C CHAR デー 夕を NULL で終了します。

[b] このリストの数値は、TIMESTAMP_STRUCT 構造体のフィールドに格納される 数値です。

C から SQL データ型へのデータ変換

このセクションでは、C から SQL データ型へのデータ変換に関する情報を提供し ます。

アプリケーションが SQLExecute または SQLExecDirect を呼び出すと、ドライバー はアプリケーションのストレージ・ロケーションから SQLBindParameter にバイン ドされたパラメーターのデータをリトリーブします。実行時データのパラメーター については、アプリケーションは SQLPutData によってパラメーター・データを送 信します。必要であれば、ドライバーは SQLBindParameter の ValueType 引数で指 定されたデータ型から、SQLBindParameter の ParameterType 引数で指定されたデー タ型にデータを変換します。最後に、ドライバーはデータ・ソースにデータを送信 します。

以下の表には、ODBC C データ型から ODBC SQL データ型へのサポートされてい る変換を示します。アスタリスクは SOL データ型のデフォルト変換を示します (ValueType または SQL_DESC_CONCISE_TYPE 記述子フィールドの値が SQL C DEFAULT の場合に、データの変換元になる C データ型です)。白丸はサポ ートされている変換を示します。

変換されたデータのフォーマットは、Windows の国別設定には影響されません。

solidDB では、整数データ型 (SQL_TINYINT、SQL_SMALLINT、SQL_INTEGER、および SQL_BIGINT) は符号付きのもののみをサポートし、符号なしのものをサポートしません。符号なし C 変数を符号付き SQL 列にバインドできますが、格納する値が両方のデータ型にサポートされている範囲内にあることを確認する必要があります。

solidDB は SQL 列の BIT/SQL_BIT データ型をサポートしていません。ただし、C アプリケーションでは、数値 SQL 列を BIT データ型にバインドすることができます。例えば、データベースで TINYINT 列を使用して、その列を SQL_C_BIT 型の C 変数にバインドすることができます。solidDB ODBC ドライバーはデータベース 内の数値型を、C 変数用に BIT データ型に変換することを試みます。数値データ値は、1、0、または NULL でなければなりません。他の値の場合、データ変換エラーが発生します。以下の表では、BIT/SQL_BIT データ型については説明していません。

注意:

以下の表には、符号なしデータ型を伴う変換を含む広範な ODBC 変換が示されて いますが、solidDB は符号付き整数データ型 (例えば TINYINT、 SMALLINT、 INT、および BIGINT など) のみをサポートしています。

表 202. SQL データ型: データ型が以下の SQL_datatype

L L L N N N N L L T T T M M N I I I I I G G I I I N N N N N D B B B B E E R G G I I I N N N N N D B B B B E E R G G I I I N N N N N N N N N N N N N N N		Π		Ι		Ι															Т		L			
R							137					c	c										1			
R				т						т	т			т	T								-			
R R R W R R R W R R R D C D N D N D N D D N D D N D D N D D D D																R	R						1			
Range							_															V	1			_
V V V V V D N I I I I I I G G G I I						w																l :				1 1
R R R W R R C M T T T R R T T T R R L U N N N N N E E E N N N D I I I I I S S S S S S S S S S S S S S			v					D	N														1			1 1
R							1					-					-			D	В					1 1
C プロス の の の の の の の の の の の の の の の の の の の					w			l											F				1			1 1
H		C								l	l .			l		l		R		_			1	D	Т	-
R R R R R R R R R R R R R R R R R R R		Н	Н	Н	Н	Н	Н	M	R									l	o	В	A	A	A	A	I	A
SQL_C_CHAR * * * * 0 0 0 * * * 0 0 0 0 0 0 0 0 0		A	A	A	A	A	A	A	I	付	な	付	な	付	な	付	な	A	A	L	R	R	R	T	M	M
SQL_WCHAR O O O * * * * * O O O O O O O O O O O	C データ型	R	R	R	R	R	R	L	C	き)	し)	き)	し)	き)	し)	き)	し)	L	T	E	Y	Y	Y	E	E	P
SQL_WCHAR O O O * * * * * O O O O O O O O O O O																										
SQL_C_NUMERIC * 0 <	SQL_C_CHAR	*	*	*	О	o	o	*	*	o	o	o	o	o	0	o	o	o	0	o	o	o	О	o	О	o
SQL_C_NUMERIC * 0 <																										
SQL_C_STINYINT 0	SQL_WCHAR	0	0	0	*	*	*	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SQL_C_STINYINT 0		١.																								
SQL_C_UTINYINT 0	SQL_C_NUMERIC	*	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					_	Ш
SQL_C_UTINYINT 0	COL C CTINIVINE		_		_		_		_			_			_					_						
SQL_C_TINYINT 0 <	SQL_C_STINYIN1	0	0	0	0	0	0	0	0	т —	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					<u> </u>	Ш
SQL_C_TINYINT 0 <	SOL C LITINVINT										*															
SQL_C_SSHORT 0 <t< td=""><td>SQL_C_UTINTINT</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td><u> </u></td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>_</td><td>\vdash</td></t<>	SQL_C_UTINTINT	0	0	0	0	0	0	0	0	0	<u> </u>	0	0	0	0	0	0	0	0	0					_	\vdash
SQL_C_SSHORT 0 <t< td=""><td>SOL C TINYINT</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></t<>	SOL C TINYINT	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						
SQL_C_USHORT 0 <t< td=""><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>Н</td></t<>																										Н
SQL_C_USHORT 0 <t< td=""><td>SOL C SSHORT</td><td>0</td><td>o</td><td>o</td><td>o</td><td>0</td><td>o</td><td>o</td><td>o</td><td>o</td><td>0</td><td>*</td><td>0</td><td>o</td><td>0</td><td>o</td><td>0</td><td>o</td><td>0</td><td>o</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></t<>	SOL C SSHORT	0	o	o	o	0	o	o	o	o	0	*	0	o	0	o	0	o	0	o						
SQL_C_SHORT																										\vdash
	SQL_C_USHORT	О	О	О	o	О	o	О	o	О	О	o	*	О	o	О	О	o	О	О						
																										\square
SQL_C_SLONG	SQL_C_SHORT	О	o	О	О	О	o	О	О	o	o	o	o	o	o	o	О	О	О	o						
SQL_C_SLONG 0 0 0 0 0 0 0 0 0																										
	SQL_C_SLONG	О	О	О	o	О	О	О	o	o	o	o	o	*	0	o	О	o	О	О						

表 202. SQL データ型: データ型が以下の SQL_datatype (続き)

					_											_				_	_		_	_	
																						L			
						W					S	S										0			
			L			L			T	T	M	M	I	I		_						N			
			O N			O N			I N	I N	A L	A L	N T	N T	B I	B I					X 7	G V			Т
			G		w	G			Y	Y	L	L	E	E	G	G					V A	A			I
		\mathbf{v}	V		v	V	D	N	I	I	I	I	G	G	I	I					R	R			M
		A	A		A	A	E	U	N	N	N	N	E	E	N	N			D	В	В	В			E
		R	R	w	R	R	C	M	Т	Т	Т	Т	R	R	Т	Т		F	o	I	I	I			S
	C	C	C	C	C	C	I	E	(符	R	L	U	N	N	N	D	Т	T							
	Н	Н	Н	Н	Н	Н	M	R	号	号	号	号	号	号	号	号	E	o	В	A	A	A	A	I	A
	A	A	A	A	A	A	A	I	付	な	1	な	付	な	付	な	A	A	L	R	R	R	Т	M	M
C データ型	R	R	R	R	R	R	L	C	き)	し)	き)	し)	き)	し)	き)	し)	L	Т	E	Y	Y	Y	E	E	P
SQL_C_ULONG	o	0	o	0	0	0	o	0	o	o	o	o	o	*	o	o	o	o	o						
SQL_C_LONG	0	0	0	0	0	0	0	0	0	o	0	0	o	o	o	o	o	o	0						
SQL_C_SBIGINT	o	0	o	0	0	0	o	0	o	o	o	o	o	0	*	*	0	o	0						
SQL_C_UBIGINT	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	*	o	o	o						
SQL_C_FLOAT	0	0	0	0	0	0	0	0	o	o	o	o	o	0	0	0	*	o	О						
SQL_C_DOUBLE	0	0	0	0	0	0	0	0	o	o	o	o	0	0	0	0	0	*	*						
SQL_C_BINARY	0	0	0	0	0	0	0	0	o	o	o	0	o	o	o	o	o	o	О	*	*	*	o	О	o
SQL_C_DATE	o	o	o	o	o	o																	*		o
SQL_C_TIME	o	o	o	o	o	o																		*	o
SQL_C_TIMESTAMP	О	o	О	o	o	o																	o	О	*

凡例:

- * デフォルトの変換
- o サポートされている変換

C から SQL へのデータ変換表

以下のセクションの表では、ドライバーまたはデータ・ソースがデータ・ソースに 送信されたデータを変換する方法を示します。ドライバーは、すべての ODBC C データ型から、サポートしている ODBC SQL データ型への変換をサポートする必 要があります。

変換表の説明 (C から SQL への変換)

表には以下の列が含まれています。

• 特定の ODBC C データ型では、表の最初の列には、SQLBindParameter の ParameterType 引数の有効な入力値がリストされます。

- 2 番目の列には、ドライバーがデータを変換できるかどうかを判断するために行 うテストの結果がリストされています。
- 3 番目の列には、SQLExecDirect、SQLExecute、または SQLPutData により結果ご とに返される SQLSTATE がリストされます。SQL_SUCCESS が返される場合に のみ、データがデータ・ソースに送信されます。

SQLBindParameter 内の ParameterType 引数に特定の C データ型について表には記載されていない ODBC SQL データ型の値が含まれている場合は、

SQLBindParameter は SQLSTATE 07006 (制限付きデータ型属性違反) を返します。 ParameterType 引数にドライバー固有の値が含まれており、ドライバーが特定の ODBC C データ型からそのドライバー固有の SQL データ型への変換をサポートしていない場合は、SQLBindParameter は SQLSTATE HYC00 (オプション機能がインプリメントされない) を返します。

SQLBindParameter で指定された ParameterValuePtr および StrLen_or_IndPtr の引数 が両方とも NULL ポインターである場合、その関数は SQLSTATE HY009 (NULL ポインターの無効な使用) を返します。表には示されていませんが、アプリケーションは、SQLBindParameter の StrLen_or_IndPtr 引数が指す値、または

StrLen_or_IndPtr 引数の値を SQL_NULL_DATA に設定して、NULL SQL データ値を指定します。(StrLen or IndPtr 引数は、APD の

SQL_DESC_OCTET_LENGTH_PTR フィールドに対応しています。) アプリケーションはこれらの値を SQL_NTS に設定して、SQLBindParameter の

*ParameterValuePtr、または (APD の SQL_DESC_DATA_PTR フィールドが指している) SQLPutData の *DataPtr の値を NULL 終了ストリングとして指定します。

表では以下の用語が使用されています。

- データのバイト長 は、データ・ソースへの送信前にデータを切り捨てるかどうかに関係なく、データ・ソースに送信することができる SQL データのバイト数です。ストリング・データの場合は、これには NULL 終了文字は含まれません。
- *列のバイト*長 は、データ・ソースでデータを格納するために必要なバイト数です。
- 文字のバイト長は、文字形式でデータを表示するために必要な最大バイト数です。
- 桁数 は、負符号 (-)、小数点、指数 (必要な場合) など、数値を表現するために使用される文字数です。
- イタリックの語は、ODBC SQL 文法の要素を表します。文法要素の構文については、277ページの『付録 D. ODBC に関する SQL 文法の最小要件』を参照してください。

C から SQL への変換: 文字

文字 ODBC C データ型は、以下のとおりです。

SQL_C_CHAR SQL_C_WCHAR

以下の表には、C 文字データから変換することができる ODBC SQL データ型を記載します。表中の列および用語の説明は、322ページの『変換表の説明 (C から SQL への変換)』を参照してください。

注: 文字 C データを Unicode SQL データに変換する場合は、Unicode データ型の 長さは偶数でなければなりません。

表 203. C 文字データから ODBC SQL データ型への変換

SQL 型 ID	テスト	SQLSTATE
SQL_CHAR	データのバイト長 <= 列の長さ	N/A
SQL_VARCHAR	データのバイト長 > 列の長さ	22001
SQL_LONGVARCHAR		
SQL_WCHAR	データの文字長 <= 列の長さ	N/A
SQL_WVARCHAR	データの文字長 > 列の長さ	22001
SQL_WLONGVARCHAR		
SQL_DECIMAL	切り捨てなしで変換したデータ	N/A
SQL_NUMERIC	 小数桁を切り捨てて変換したデータ	22001
SQL_TINYINT	[e]	22001
SQL_SMALLINT	データ変換の結果、(小数桁ではなく) 整数桁が失われる [e]	22018
SQL_INTEGER	 データ値は数値リテラル ではない	
SQL_BIGINT		
SQL_REAL	データは数値が変換されるデータ型の	N/A
SQL_FLOAT	範囲内	22003
SQL_DOUBLE	データは数値が変換されるデータ型の 範囲外	22005
	データ値は数値リテラル ではない	
SQL_BIT	データは O または 1	N/A
	データは 0 より大きく、2 未満で、1	22001
	とは等しくない	22003
	データは 0 未満、または 2 以上	22018
	データは数値リテラル ではない	
	注: solidDB は SQL_BIT をサポート していません。	
SQL_BINARY	(データのバイト長)/2 <= 列のバイト	N/A
SQL_VARBINARY	長	22001
SQL_LONG-VARBINARY	(データのバイト長)/2 > 列のバイト長	22018
	データ値は 16 進値ではない	

表 203. C 文字データから ODBC SQL データ型への変換 (続き)

SQL 型 ID	テスト	SQLSTATE
SQL_TYPE_DATE	データ値は有効な ODBC_date_literal	N/A
	データ値は有効な	N/A
	ODBC_timestamp_literal。時刻部分は ゼロ	22008
	データ値は有効な ODBC_timestamp_literal。時刻部分は ゼロ以外 [a]	22018
	データ値は有効な <i>ODBC_date_literal</i> または <i>ODBC_timestamp_literal</i> では ない	
SQL_TYPE_TIME	データ値は有効な ODBC_time_literal	N/A
	データ値は有効な	N/A
	ODBC_timestamp_literal。小数秒部分はゼロ [b]	22008
	データ値は有効な	22018
	ODBC_timestamp_literal。小数秒部分 はゼロ以外 [b]	
	データ値は有効な <i>ODBC_time_literal</i> または <i>ODBC_timestamp_literal</i> では ない	
SQL_TYPE_TIMESTAMP	データ値は有効な	N/A
	<i>ODBC_timestamp_literal</i> 。小数秒部分 は切り捨てられない	22008
	データ値は有効な	N/A
	<i>ODBC-timestamp-literal</i> 。小数秒部分は 切り捨てられる	N/A
	データ値は有効な <i>ODBC-date-literal</i> [c]	22018
	データ値は有効な <i>ODBC-time-literal</i> [d]	
	データ値は有効な <i>ODBC-date-literal</i> 、 <i>ODBC-time-literal</i> 、または <i>ODBC-timestamp-literal</i> ではない	

表 203. C 文字データから ODBC SQL データ型への変換 (続き)

SQL 型 ID	テスト	SQLSTATE

注:

- [a] タイム・スタンプの時刻部分は切り捨てられます。
- [b] タイム・スタンプの日付部分は無視されます。
- [c] タイム・スタンプの時刻部分はゼロに設定されます。
- [d] タイム・スタンプの日付部分は現在日付に設定されます。
- [e] ドライバー/データ・ソースは、変換実行を試みる前に、(SQLPutData を呼び出して、文字データを分割送信する 場合でも)ストリング全体を受信するまで実際上は待機しています。

文字 C データを数値、日付、時刻、またはタイム・スタンプの SQL データに変換 すると、前後のブランクは無視されます。

文字 C データをバイナリー SOL データに変換すると、文字データの各 2 バイト はバイナリー・データの 1 バイト (8 ビット) に変換されます。文字データの各 2 バイトは、16 進形式の数値を表します。例えば、「01」はバイナリー 00000001 に、「FF」はバイナリー 11111111 に変換されます。

ドライバーは常に 16 進数字のペアを個々のバイトに変換して、NULL 終了バイト を無視します。このため、文字ストリングの長さが奇数の場合は、ストリングの最 後のバイト (NULL 終了バイトが存在する場合はそのバイトを除く) は変換されま せん。

注: 文字 C データをバイナリー SQL データ型にバインドすることは非効率で低速 なので、このようなバインドは避けてください。

C から SQL への変換: 数値

数値 ODBC C データ型は、以下のとおりです。

- SQL_C_STINYINT
- SQL_C_SLONG
- SQL_C_UTINYINT
- SQL_C_ULONG
- SQL_C_TINYINT
- SQL C LONG
- SQL_C_SSHORT
- SQL_C_FLOAT
- SQL_C_USHORT
- SQL_C_DOUBLE
- SQL_C_SHORT
- SQL_C_NUMERIC
- SQL_C_SBIGINT

• SQL_C_UBIGINT

SQL_C_TINYINT、SQL_C_SHORT、および SQL_C_LONG のデータ型について詳しくは、293 ページの『C データ型』を参照してください。以下の表には、数値 C データから変換することができる ODBC SQL データ型を記載します。表中の列および用語の説明は、322 ページの『変換表の説明 (C から SQL への変換)』を参照してください。

表 204. 数値 C データから ODBC SQL データ型への変換

SQL 型 ID	テスト	SQLSTATE
SQL_CHAR	 桁数 <= 列のバイト長	N/A
SQL_VARCHAR	桁数 > 列のバイト長	22001
SQL_LONGVARCHAR		
SQL_WCHAR	文字数 <= 列の文字長	N/A
SQL_WVARCHAR	文字数 > 列の文字長	22001
SQL_WLONGVARCHAR		
SQL_DECIMAL [a] SQL_NUMERIC [a] SQL_TINYINT [a] SQL_SMALLINT [a] SQL_INTEGER [a] SQL_BIGINT [a]	切り捨てなしで変換したデータ、または小数桁を切り捨てて変換したデータ 整数桁を切り捨てて変換したデータ	N/A 22003
SQL_REAL SQL_FLOAT SQL_DOUBLE	データは数値が変換されるデータ型の範囲内 データは数値が変換されるデータ型の範囲外	N/A 22003

注:

[a] 「N/A」の場合は、ドライバーは小数部分の切り捨てがある場合に、オプションで SQL_SUCCESS_WITH_INFO および 01S07 を返すことがあります。

数値 C データ型からデータを変換する際にドライバーは長さまたは標識値を無視し、データ・バッファーのサイズが数値 C データ型のサイズであると想定します。 長さまたは標識値は、SQLPutData の StrLen_or_IndPtr 引数、および SQLBindParameter の StrLen_or_IndPtr 引数で指定されたバッファーに渡されます。 データ・バッファーは、SQLPutData の DataPtr 引数、および SQLBindParameter の ParameterValuePtr 引数で指定されます。

C から SQL への変換: ビット

ビット ODBC C データ型は、以下のとおりです。 SQL_C_BIT

以下の表には、ビット C データから変換することができる ODBC SQL データ型 を記載します。表の列と用語についての説明は、322ページの『変換表の説明 (C から SQL への変換)』を参照してください。

表 205. ビット C データから ODBC SQL データ型への変換

SQL 型 ID	テスト	SQLSTATE
SQL_CHAR	なし	N/A
SQL_VARCHAR		
SQL_LONGVARCHAR		
SQL_WCHAR		
SQL_WVARCHAR		
SQL_WLONGVARCHAR		
SQL_DECIMAL	なし	N/A
SQL_NUMERIC		
SQL_TINYINT		
SQL_SMALLINT		
SQL_INTEGER		
SQL_BIGINT		
SQL_REAL		
SQL_FLOAT		
SQL_DOUBLE		

ビット C データ型からデータを変換する際に、ドライバーは長さまたは標識値を無 視し、データ・バッファーのサイズがビット C データ型のサイズであると想定しま す。長さまたは標識値は、SQLPutData の StrLen_or_Ind 引数、および SQLBindParameter の StrLen_or_IndPtr 引数で指定されたバッファーに渡されます。 データ・バッファーは、SQLPutData の DataPtr 引数、および SQLBindParameter の ParameterValuePtr 引数で指定されます。

C から SQL への変換: バイナリー

バイナリー ODBC C データ型は、以下のとおりです。

SQL_C_BINARY

以下の表には、バイナリー C データから変換することができる ODBC SQL データ型を記載します。表中の列および用語の説明は、322 ページの『変換表の説明 (Cから SQL への変換)』を参照してください。

表 206. バイナリー C データから ODBC SQL データ型への変換

SQL 型 ID	テスト	SQLSTATE
SQL_CHAR SQL_VARCHAR SQL_LONGVARCHAR	データのバイト長 <= 列のバイト長 イト長 データのバイト長 > 列の長 さ	N/A 22001
SQL_WCHAR SQL_WVARCHAR SQL_WLONGVARCHAR	データの文字長 <= 列の文字 長 データの文字長 > 列の文字 長	N/A 22001
SQL_DECIMAL SQL_NUMERIC SQL_TINYINT SQL_SMALLINT SQL_INTEGER SQL_BIGINT SQL_REAL SQL_FLOAT SQL_DOUBLE SQL_TYPE_DATE SQL_TYPE_TIME SQL_TYPE_TIME SQL_TYPE_TIMESTAMP	データのバイト長 = SQL デ ータの長さ データの長さ ◇ SQL デー タの長さ	N/A 22003
SQL_BINARY SQL_VARBINARY SQL_LONGVARBINARY	データの長さ <= 列の長さ データの長さ > 列の長さ	N/A 22001

C から **SQL** への変換: 日付

日付 ODBC C データ型は、以下のとおりです。 SQL_C_DATE

以下の表には、日付 C データから変換することができる ODBC SQL データ型を 記載します。表中の列および用語の説明は、322ページの『変換表の説明 (C から SQL への変換)』を参照してください。

表 207. 日付 C データから ODBC SQL データ型への変換

SQL 型 ID	テスト	SQLSTATE
SQL_CHAR	列のバイト長 >= 10	N/A
SQL_VARCHAR	列のバイト長 < 10	22001
SQL_LONGVARCHAR	データ値は有効な日付ではない	22008
SQL_CHAR	列の文字長 >= 10	N/A
SQL_VARCHAR	列の文字長 < 10	22001
SQL_LONGVARCHAR	データ値は有効な日付ではない	22008
SQL_TYPE_DATE	データ値は有効な日付	N/A
	データ値は有効な日付ではない	22007
SQL_TYPE_TIMESTAMP	データ値は有効な日付 [a]	N/A
	データ値は有効な日付ではない	22007
注: [a] タイム・スタンプの時	刻部分はゼロに設定されます。	,

SQL C TYPE DATE 構造体で有効な値については、293ページの『C データ型』 を参照してください。

日付 C データを文字 SQL データに変換すると、結果の文字データは 「yyyy-mm-dd」フォーマットになります。

日付 C データ型からデータを変換する際に、ドライバーは長さまたは標識値を無視 し、データ・バッファーのサイズが日付 C データ型のサイズであると想定します。 長さまたは標識値は、SQLPutData の StrLen_or_Ind 引数、および SQLBindParameter の StrLen_or_IndPtr 引数で指定されたバッファーに渡されます。 データ・バッファーは、SQLPutData の DataPtr 引数、および SQLBindParameter の ParameterValuePtr 引数で指定されます。

C から SQL への変換: 時刻

時刻 ODBC C データ型は、以下のとおりです。

SQL C TIME

以下の表には、時刻 C データから変換することができる ODBC SQL データ型を記載します。表中の列および用語の説明は、 322 ページの『変換表の説明 (C から SQL への変換)』を参照してください。

表 208. 時刻 C データから ODBC SQL データ型への変換

SQL 型 ID	テスト	SQLSTATE
SQL_CHAR	列のバイト長 >= 8	N/A
SQL_VARCHAR	列のバイト長 < 8	22001
SQL_LONGVARCHAR	データ値は有効な時刻ではな い	22008
SQL_WCHAR	列の文字長 >= 8	N/A
SQL_WVARCHAR	列の文字長 < 8	22001
SQL_WLONGVARCHAR	データ値は有効な時刻ではな い	22008
SQL_TYPE_TIME	データ値は有効な時刻	N/A
	データ値は有効な時刻ではな い	22007
SQL_TYPE_TIMESTAMP	データ値は有効な時刻 [a]	N/A
	データ値は有効な時刻ではな い	22007

注: [a] タイム・スタンプの日付部分は現在日付に設定され、タイム・スタンプの小数秒部分はゼロに設定されます。

SQL_C_TYPE_TIME 構造体で有効な値については、 293 ページの『C データ型』を参照してください。

時刻 C データを文字 SQL データに変換すると、結果の文字データは $\lceil hh:mm:ss \rceil$ フォーマットになります。

時刻 C データ型からデータを変換する際に、ドライバーは長さまたは標識値を無視し、データ・バッファーのサイズが時刻 C データ型のサイズであると想定します。 長さまたは標識値は、SQLPutData の StrLen_or_Ind 引数、および SQLBindParameter の StrLen_or_IndPtr 引数で指定されたバッファーに渡されます。 データ・バッファーは、SQLPutData の DataPtr 引数、および SQLBindParameter の ParameterValuePtr 引数で指定されます。

C から SQL への変換: タイム・スタンプ

タイム・スタンプ ODBC C データ型は、以下のとおりです。

SQL_C_TIMESTAMP

以下の表には、タイム・スタンプ C データから変換することができる ODBC SQL データ型を記載します。表中の列および用語の説明は、322ページの『変換表の説 明 (C から SQL への変換)』を参照してください。

表 209. タイム・スタンプ C データから ODBC SQL データ型への変換

SQL 型 ID	テスト	SQLSTATE	
SQL_CHAR	列のバイト長 >= 文字のバイ	N/A	
SQL_VARCHAR	卜長	22001	
SQL_LONGVARCHAR	19 <= 列のバイト長 < 文字 のバイト長	22001	
	列のバイト長 < 19	22008	
	データ値は有効な日付ではな い		
SQL_WCHAR	列の文字長 >= データの文字	N/A	
SQL_WVARCHAR	長	22001	
SQL_WLONGVARCHAR	19 <= 列の文字長 < データ	22001	
	列の文字長 < 19	22008	
	データ値は有効なタイム・ス タンプではない		
SQL_TYPE_DATE	時刻フィールドがゼロ	N/A	
	時刻フィールドがゼロ以外	22008	
	データ値には有効な日付が含 まれていない	22007	
SQL_TYPE_TIME	小数秒フィールドはゼロ [a]	N/A	
	小数秒フィールドはゼロ以外	22008	
		22007	
	データ値に有効な時刻が含ま れていない		
SQL_TYPE_TIMESTAMP	小数秒フィールドは切り捨て	N/A	
	られない	22008	
	小数秒フィールドは切り捨て られる	22007	
	データ値は有効なタイム・ス タンプではない		
注: [a] タイム・スタンプ構造体の日付フィールドは無視されます。			

SQL_C_TIMESTAMP 構造体で有効な値については、 293 ページの『C データ型』を参照してください。

タイム・スタンプ C データを文字 SQL データに変換すると、結果の文字データは「yyyy-mm-dd hh:mm:ss [.f. ..]」フォーマットになります。

タイム・スタンプ C データ型からデータを変換する際に、ドライバーは長さまたは標識値を無視し、データ・バッファーのサイズがタイム・スタンプ C データ型のサイズであると想定します。長さまたは標識値は、SQLPutData の StrLen_or_Ind 引数、および SQLBindParameter の StrLen_or_IndPtr 引数で指定されたバッファーに渡されます。データ・バッファーは、SQLPutData の DataPtr 引数、および SQLBindParameter の ParameterValuePtr 引数で指定されます。

C から SQL へのデータ変換例

以下の例では、ドライバーによる C データから SQL データへの変換方法を示します。

表 210. C データから SQL データへの変換

С データ型	C データ値	SQL データ型	列の長さ	SQL データ値	SQLSTATE
SQL_C_CHAR	abcdef¥0 [a]	SQL_CHAR	6	abcdef	N/A
SQL_C_CHAR	abcdef¥0 [a]	SQL_CHAR	5	abcde	22001
SQL_C_CHAR	1234.56¥0 [a]	SQL_DECIMAL	8 [b]	1234.56	N/A
SQL_C_CHAR	1234.56¥0 [a]	SQL_DECIMAL	7 [b]	1234.5	22001
SQL_C_CHAR	1234.56¥0 [a]	SQL_DECIMAL	4		22003
SQL_C_FLOAT	1234.56	SQL_FLOAT	適用外	1234.56	N/A
SQL_C_FLOAT	1234.56	SQL_INTEGER	適用外	1234	22001
SQL_C_FLOAT	1234.56	SQL_TINYINT	適用外		22003
SQL_C_TYPE_DATE	1992,12,31 [c]	SQL_CHAR	10	1992-12-31	N/A
SQL_C_TYPE_DATE	1992,12,31 [c]	SQL_CHAR	9		22003
SQL_C_TYPE_DATE	1992,12,31 [c]	SQL_TIMESTAMP	適用外	1992-12-31 00:00:00.0	N/A
SQL_C_TYPE TIMESTAMP	1992,12,31, 23,45,55, 120000000 [d]	SQL_CHAR	22	1992-12-31 23:45:55.12	N/A
SQL_C_TYPE TIMESTAMP	1992,12,31, 23,45,55, 120000000 [d]	SQL_CHAR	21	1992-12-31 23:45:55.1	22001

表 210. C データから SQL データへの変換 (続き)

C データ型	C データ値	SQL データ型	列の長さ	SQL データ値	SQLSTATE
SQL_C_TYPE TIMESTAMP	1992,12,31, 23,45,55, 120000000 [d]	SQL_CHAR	18		22003

注:

- [a] 「¥0」は NULL 終了バイトを表します。NULL 終了バイトは、データの長さが SQL_NTS の場合に限り必要で す。
- [b] 数値のバイトに加えて、符号と小数点にそれぞれ 1 バイトずつ必要です。
- [c] このリストの数値は、SQL_DATE_STRUCT 構造体のフィールドに格納される数値です。
- [d] このリストの数値は、SQL_TIMESTAMP_STRUCT 構造体のフィールドに格納される数値です。

付録 F. スカラー関数

このセクションでは、ODBC スカラー関数の追加情報を示します。

ODBC は、5 つのタイプのスカラー関数を指定します。

- ストリング関数
- 数字関数
- 日時関数
- システム関数
- データ型変換関数

スカラー関数は、照会の各行に対する値を 1 つ返す関数です。SQRT() や ABS() のような関数は、スカラー関数です。SUM() や AVG() のような関数は、複数の行を処理する場合であっても単一の値を返すので、スカラー関数ではありません。

このセクションに、各スカラー関数カテゴリーの表を記載します。各表内では、 SQL-92 に合わせて ODBC 3.0 に関数が追加されています。また、各表には関数が 導入された時点のバージョン番号が記載されています。

ODBC および SQL-92 のスカラー関数

このトピックでは、ODBC および SQL-92 のスカラー関数についての情報を提供します。

関数はデータ・ソース固有の場合が多いので、ODBC はスカラー関数からの戻り値のデータ型を必要としません。データ型変換を強制するには、アプリケーションで CONVERT スカラー関数を使用する必要があります。

注:

ODBC および SQL-92 は関数を異なる方法で分類します。ODBC はスカラー関数を 引数の型で分類しますが、SQL-92 は戻り値で分類します。例えば、ODBC では EXTRACT 関数は日時関数として分類されます。これは、extract-field 引数が日時キーワードで、extract_source 引数が日時またはインターバルの表現だからです。ところが SQL-92 では、戻り値が数値なので、EXTRACT 関数は数値スカラー関数として分類されます。

アプリケーションは SQLGetInfo を呼び出して、ドライバーがサポートしているスカラー関数を判別する必要があります。スカラー関数の分類用に、ODBC および SQL-92 の情報タイプが使用可能です。ODBC および SQL-92 は異なる分類を使用しているので、同じ関数の情報タイプが ODBC と SQL-92 で異なっていることがあります。例えば、EXTRACT 関数のサポートを確認するには、ODBC では SQL_TIMEDATE_FUNCTIONS、SQL-92 では

SQL_SQL92_NUMERIC_VALUE_FUNCTIONS の情報タイプが必要です。

ストリング関数

このトピックではストリング処理関数をリストします。

アプリケーションは、SQL STRING FUNCTIONS 情報タイプを指定して SQLGetInfo を呼び出し、ドライバーがサポートしているストリング関数を判別する ことができます。

ストリング関数引数

表 211. ストリング関数引数

表示引数	定義
string_exp	これらの引数は、列の名前、ストリング・リテラル、または別のスカラー関数の結果のいずれかであり、基礎となるデータ型は SQL_CHAR、SQL_VARCHAR、または SQL_LONGVARCHAR で表すことができます。
start、length、または count	これらの引数は、数値リテラル、または別のスカラー関数の結果であり、基礎となるデータ型は SQL_TINYINT、SQL_SMALLINT、または SQL_INTEGER で表すことができます。
character_exp	これらの引数は可変長の文字ストリングです。

以下のストリング関数は 1 を基数としたもので、ストリングの先頭文字は文字 1 で、文字 0 ではありません。

注: ODBC 3.0 では、SQL-92 との整合性のために、BIT_LENGTH、 CHAR_LENGTH、CHARACTER_LENGTH、OCTET_LENGTH、および POSITION のストリング・スカラー関数が追加されました。

ストリング関数のリスト

表 212. ストリング関数のリスト

関数	説明
ASCII(string_exp) (ODBC 1.0)	string_exp の左端の文字の ASCII コード値を整数として返します。
BIT_LENGTH(string_exp)	ストリング式の長さをビット数で返します。
(ODBC 3.0)	
CHAR(code) (ODBC 1.0)	code によって ASCII コード値が指定されている文字を返します。 <i>code</i> の値は 0 と 255 の間でなければなりません。それ以外の場合は戻り値はデータ・ソースに依存します。

表 212. ストリング関数のリスト (続き)

関数	説明
CHAR_LENGTH(string_exp) (ODBC 3.0)	ストリング式が文字データ型の場合は、ストリング式の長さを文字数で返します。それ以外の場合は、ストリング式の長さをバイト数で返します (ビット数を 8 で除算した数値以上の最小の整数)。(この関数は CHARACTER_LENGTH 関数と同じです。)
CHARACTER_LENGTH(string_exp) (ODBC 3.0)	ストリング式が文字データ型の場合は、ストリング式の長さを文字数で返します。それ以外の場合は、ストリング式の長さをバイト数で返します (ビット数を 8 で除算した数値以上の最小の整数)。(この関数は CHAR_LENGTH 関数と同じです。)
CONCAT(string_exp1, string_exp2) (ODBC 1.0)	string_exp2 を string_exp1 に連結した結果の文字ストリングを返します。結果ストリングは DBMS に依存します。
DIFFERENCE(string_exp1, string_exp2) (ODBC 2.0)	この関数は、2 つの文字式の soundex (以下の soundex 関数を参照) の値の違いを整数として返します。返される整数は、soundex の値内で同じ文字の数です。戻り値は 0 から 4 の間で、0 は類似性がほとんどまたはまったくないことを、4 は類似性が高いか、値が同一であることを示します。
INSERT(string_exp1, start, length, string_exp2) (ODBC 1.0)	start から開始して string_expl から length 文字が削除され、 start から開始して string_exp に string_exp2 が挿入された文字ストリングを返します。
LCASE(string_exp) (ODBC 1.0)	string_exp と同等のストリングを、すべての大文字を小文字に変換して返します。
LEFT(string_exp, count) (ODBC 1.0)	string_exp の文字の左端の count を返します。
LENGTH(string_exp) (ODBC 1.0)	末尾ブランクを除外して、string_exp の文字数を返します。

表 212. ストリング関数のリスト (続き)

関数	説明
LOCATE(string_exp1, string_exp2[, start])	string_exp2 内で string_exp1 の最初のオカレンスの開始位置を返します。オプションの引数である start が指定されていない限り、string_exp1 の最初のオカレンスの検索は、string_exp2 内の先頭文字位置から開始します。start を指定すると、検索は start の値で示される文字位置から開始します。 string_exp2の先頭文字位置は値 1 で示されます。 string_exp1が string_exp2 で見つからないと、値 0 が返されます。
	アプリケーションが string_exp1、string_exp2、および start の引数を指定して LOCATE スカラー関数を呼び出すことができる場合は、SQL_STRING_FUNCTIONS オプションを指定して SQLGetInfo が呼び出されると、ドライバーは SQL_FN_STR_LOCATE を返します。アプリケーションが、string_exp1 および string_exp2 の引数でしか LOCATE スカラー関数を呼び出すことができない場合は、SQL_STRING_FUNCTIONS オプションを指定して SQLGetInfo が呼び出されると、ドライバーは SQL_FN_STR_LOCATE_2 を返します。これら 2 つまたは 3 つの引数を指定した LOCATE 関数の呼び出しをサポートするドライバーは、SQL_FN_STR_LOCATE および SQL_FN_STR_LOCATE_2 の両方を返します。
LTRIM(string_exp) (ODBC 1.0)	先行ブランクを除外して string_exp の文字を返します。
OCTET_LENGTH(string_exp) (ODBC 3.0)	ストリング式の長さをバイト数で返します。結果 は、ビット数を 8 で除算した数値以上の最小の整数 です。
POSITION(character_exp IN character_exp) (ODBC 3.0)	2 番目の文字式での、先頭文字式の位置を返します。結果は、インプリメンテーションで定義された精度および 0 の位取りを持つ厳密な数値です。
REPEAT(string_exp, count) (ODBC 1.0)	count 回繰り返された string_exp から構成される文字ストリングを返します。
REPLACE(string_exp1, string_exp2, string_exp3) (ODBC 1.0)	string_exp1 内で string_exp2 のオカレンスを検索し、string_exp3 に置き換えます。

表 212. ストリング関数のリスト (続き)

関数	説明
RIGHT(string_exp, count)	string_exp の文字の右端の count を返します。
(ODBC 1.0)	
RTRIM(string_exp)	末尾ブランクを除外して string_exp の文字を返します。
(ODBC 1.0)	
SOUNDEX(string_exp1) (ODBC 2.0)	引数の音声表現を含む文字ストリングを返します。 この関数によって、スペルは違うけれども、発音が 似ている英語の単語を比較することができます。 Soundex に単語を提供すると、米国国勢調査局が 1930 年代以降使用している 4 文字の音声コードが 返されます。
SPACE(count) (ODBC 2.0)	count 個のスペースから成る文字ストリングを返します。
SUBSTRING(string_exp, start, length) (ODBC 1.0)	string_exp から派生した、start で指定された文字位置から length 文字分の文字ストリングを返します。
TRIM(string_exp)	先行ブランクおよび末尾ブランクを除外して string_exp の文字を返します。
UCASE(string_exp) (ODBC 1.0)	string_exp と同等のストリングを、すべての小文字を大文字に変換して返します。

数字関数

このトピックでは、ODBC スカラー関数セットに含まれている数字関数について説 明します。

アプリケーションは、SQL_NUMERIC_FUNCTIONS 情報タイプを指定して SQLGetInfo を呼び出し、ドライバーがサポートしている数字関数を判別することが できます。

ABS、ROUND、TRUNCATE、SIGN、FLOOR、および CEILING (入力パラメーター と同じデータ型の値を返す)を除き、すべての数字関数はデータ型 SQL_FLOAT の 値を返します。

数字関数引数

表 213. 数字関数引数

表示引数	定義
numeric_exp	これらの引数は、列の名前、別のスカラー関数の結果、または数値リテラルであり、基礎となるデータ型はSQL_NUMERIC、SQL_DECIMAL、SQL_TINYINT、SQL_SMALLINT、SQL_INTEGER、SQL_BIGINT、SQL_FLOAT、SQL_REAL、またはSQL_DOUBLEで表すことができます。
float_exp	これらの引数は、列の名前、別のスカラー関数の結果、または数値リテラルであり、基礎となるデータ型は SQL_FLOAT で表すことができます。
integer_exp	これらの引数は、列の名前、別のスカラー関数の結果、または数値リテラルであり、基礎となるデータ型は SQL_TINYINT、SQL_SMALLINT、 SQL_INTEGER、または SQL_BIGINT で表すことができます。

数字関数のリスト

表 214. 数字関数のリスト

関数	説明
ABS(numeric_exp)	numeric_exp の絶対値を返します。
(ODBC 1.0)	
ACOS(float_exp)	float_exp の逆余弦を、ラジアンで表した角度として返します。
(ODBC 1.0)	
ASIN(float_exp)	float_exp の逆正弦を、ラジアンで表した角度として返します。
(ODBC 1.0)	
ATAN(float_exp)	float_exp の逆正接を、ラジアンで表した角度として返します。
(ODBC 1.0)	
ATAN2(float_exp1, float_exp2)	$float_exp1$ および $float_exp2$ でそれぞれ指定された x 座標お よび y 座標の逆正接を、ラジアンで表した角度として返しま す。
(ODBC 2.0)	9.
CEILING(numeric_exp)	numeric_exp 以上の最小の整数を返します。戻り値は、入力パラメーターと同じデータ型です。
(ODBC 1.0)	ファーラー こ回しナーク室です。

表 214. 数字関数のリスト (続き)

関数	説明	
COS(float_exp)	float_exp の余弦を返します。ここで float_exp はラジアンで表	
(ODBC 1.0)	した角度です。	
COT(float_exp)	float_exp の余接を返します。ここで float_exp はラジアンで表	
(ODBC 1.0)	した角度です。	
DEGREES(numeric_exp)	numeric_exp ラジアンから変換された度数を返します。	
(ODBC 2.0)		
EXP(float_exp)	float_exp の指数値を返します。	
(ODBC 1.0)	Jioun_exp V/H	
	ハアの日上の熱料などによる。 言いせいしょ しゅっ	
FLOOR(numeric_exp)	numeric_exp 以下の最大の整数を返します。戻り値は入力パラ メーターと同じデータ型です。	
(ODBC 1.0)		
LOG(float_exp)	float_exp の自然対数を返します。	
(ODBC 1.0)		
LOG10(float_exp)	float_exp の基底 10 の対数を返します。	
(ODBC 2.0)		
MOD(integer_exp1,	integer_exp2 で除算された integer_exp1 の剰余 (モジュラス)	
integer_exp2)	を返します。	
(ODBC 1.0)		
PI()	パイの定数値を浮動小数点値として返します。	
(ODBC 1.0)		
POWER(numeric_exp,	numeric_exp の値の integer_exp 乗を返します。	
integer_exp)		
RADIANS(numeric_exp)	numeric_exp 度から変換されたラジアン数を返します。	
(ODBC 2.0)		
ROUND(numeric_exp,	小数点以下 integer_exp 桁に丸められた numeric_exp を返しま	
integer_exp)	す。 <i>integer_exp</i> が負の数の場合、 <i>numeric_exp</i> は小数点以 <i>linteger_exp</i> 桁に丸められます。	
(ODBC 2.0)	mmeger_expr Tipterton Dates 3 o	

表 214. 数字関数のリスト (続き)

関数	説明
SIGN(numeric_exp) (ODBC 1.0)	numeric_exp の標識つまり符号を返します。 numeric_exp がゼロより小さいと、-1 が返されます。 numeric_exp がゼロの場合は、0 が返されます。 numeric_exp がゼロより大きいと、1 が返されます。
SIN(float_exp) (ODBC 1.0)	float_exp の正弦を返します。ここで float_exp はラジアンで表した角度です。
SQRT(float_exp) (ODBC 1.0)	float_exp の平方根を返します。
TAN(float_exp) (ODBC 1.0)	float_exp の正接を返します。ここで float_exp はラジアンで表した角度です。
TRUNCATE(numeric_exp, integer_exp) (ODBC 2.0)	小数点以下 integer_exp 桁に切り捨てられた numeric_exp を返します。 integer_exp が負の数の場合、numeric_exp は、小数点以上 linteger_expl 桁に切り捨てられます。

日時関数

このセクションでは、ODBC スカラー関数セットに含まれる日時関数をリストしま す。

アプリケーションは、SQL_TIMEDATE_FUNCTIONS 情報タイプを指定して SQLGetInfo を呼び出し、ドライバーがサポートしている日時関数を判別することが できます。

日時関数引数

表 215. 日時関数引数

表示引数	定義
timestamp_exp	これらの引数は、列の名前、別のスカラー関数の結果、もしくは <i>ODBC_time_escape、ODBC_date_escape、</i> または <i>ODBC_timestamp_escape</i> であり、基礎となるデータ型は SQL_CHAR、 SQL_VARCHAR、 SQL_TYPE_TIME、 SQL_TYPE_DATE、 または SQL_TYPE_TIMESTAMP で表すことができます。
date_exp	これらの引数は、列の名前、別のスカラー関数の結果、もしくは <i>ODBC_date_escape</i> または <i>ODBC_timestamp_escape</i> であり、基礎となるデータ型は SQL_CHAR、 SQL_VARCHAR、 SQL_TYPE_DATE、または SQL_TYPE_TIMESTAMP で表すことができます。

表 215. 日時関数引数 (続き)

表示引数	定義
time_exp	これらの引数は、列の名前、別のスカラー関数の結果、もしくは <i>ODBC_time_escape</i> または <i>ODBC_timestamp_escape</i> であり、基礎となるデータ型は SQL_CHAR、 SQL_VARCHAR、 SQL_TYPE_TIME、または SQL_TYPE_TIMESTAMP で表すことができます。

日時関数のリスト

表 216. 日時関数のリスト

関数	説明
CURRENTTIME [(time_precision)]	現在の現地時間を時刻値として返します。 <i>time_precision</i> 引数 (0-6) により、戻り値のミリ秒精度が決まります。
(ODBC 3.0)	値 0 は、タイム・スタンプまたは時刻の小数部が表示されないことを意味します。値を指定しない場合は、値 0 が使用されます。
CURRENT_TIMESTAMP [(timestamp_precision)] (ODBC 3.0)	現在の現地日付および現地時間をタイム・スタンプ値として返します。 timestamp_precision 引数 (0-6) により、返されるタイム・スタンプのミリ秒精度が決まります。 値 0 は、タイム・スタンプまたは時刻の小数部が表示されないことを意味します。値を指定しない場合は、値 0 が使
	用されます。
CURDATE()	現在日付を返します。
(ODBC 1.0)	
CURTIME[(time_precision)] (ODBC 1.0)	現在の現地時間を返します。 <i>time_precision</i> 引数 (0-6) により、戻り値のミリ秒精度が決まります。
(ODBC 1.0)	値 0 は、タイム・スタンプまたは時刻の小数部が表示されないことを意味します。値を指定しない場合は、値 0 が使用されます。
DAYNAME(date_exp) (ODBC 2.0)	date_exp の日部分に対するデータ・ソース固有の曜日の名称 (例えば、データ・ソースで英語が使用されている場合は Sunday から Saturday または Sun. から Sat.、ドイツ語が使用されている場合は Sonntag から Samstag) を含む文字ストリングを返します。
DAYOFMONTH(date_exp) (ODBC 1.0)	date_exp の月の何日目かを示す値を 1 から 31 までの範囲の整数値として返します。

表 216. 日時関数のリスト (続き)

関数	説明
DAYOFWEEK(date_exp) (ODBC 1.0)	date_exp の週フィールドに基づき、曜日を 1 から 7 までの 範囲の整数値として返します。1 は日曜日を表します。
DAYOFYEAR(date_exp) (ODBC 1.0)	date_exp の年フィールドに基づき、年間通算日を 1 から 366 までの範囲の整数値として返します。
EXTRACT(extract_field FROM extract_source) (ODBC 3.0)	extract_source の extract_field 部分を返します。 extract_source 引数は、日時またはインターバルの式です。 extract_field 引数は、以下のキーワードのうちの 1 つです。 YEAR MONTH DAY HOUR MINUTE SECOND 戻り値の精度は、インプリメンテーションで定義されます。
	SECOND が指定されていない限り、位取りは 0 ですが、指定されている場合は、位取りは extract_source フィールドの小数秒精度以上です。
HOUR(time_exp) (ODBC 1.0)	time_exp の時フィールドに基づき、時刻を 0 から 23 までの範囲の整数値として返します。
MINUTE(time_exp) (ODBC 1.0)	time_exp の分フィールドに基づき、分を 0 から 59 までの 範囲の整数値として返します。
MONTH(date_exp) (ODBC 1.0)	date_exp の月フィールドに基づき、月を 1 から 12 までの 範囲の整数値として返します。
MONTHNAME(date_exp) (ODBC 2.0)	date_exp の月部分に対するデータ・ソース固有の月の名称 (例えば、データ・ソースで英語が使用されている場合は January から December または Jan. から Dec.、ドイツ語が 使用されている場合は Januar から Dezember) を含む文字ストリングを返します。
NOW [(timestamp_precision)] (ODBC 1.0)	現在の日付および時刻をタイム・スタンプ値として返します。 <i>timestamp_precision</i> 引数 (0-6) により、返されるタイム・スタンプのミリ秒精度が決まります。
	値 0 は、タイム・スタンプまたは時刻の小数部が表示されないことを意味します。値を指定しない場合は、値 0 が使用されます。

表 216. 日時関数のリスト (続き)

関数	説明
QUARTER(date_exp) (ODBC 1.0)	date_exp の四半期を 1 から 4 までの範囲の整数値として返します。 1 は 1 月 1 日から 3 月 31 日までを表します。
SECOND(time_exp) (ODBC 1.0)	time_exp の秒を 0 から 59 までの範囲の整数値として返します。
TIMESTAMPADD(interval, integer_exp, timestamp_exp) (ODBC 2.0)	interval 型の integer_exp インターバルを timestamp_exp に加算して計算したタイム・スタンプを返します。 interval の有効値は、以下のキーワードです。 SQL_TSI_FRAC_SECOND SQL_TSI_SECOND SQL_TSI_SI_MINUTE SQL_TSI_HOUR SQL_TSI_HOUR SQL_TSI_MONTH SQL_TSI_QUARTER SQL_TSI_VEAR 小数秒は、10 億分の 1 秒 (ナノ秒) で表されます。例えば、以下の SQL ステートメントは、各従業員の名前および一周年記念日を返します。 SELECT NAME、{fn TIMESTAMPADD(SQL_TSI_YEAR, 1, HIRE_DATE)} FROM EMPLOYEES timestamp_exp に時刻値を指定し、 interval に日、週、月、四半期、または年を指定した場合、 timestamp_exp の日付部分は、結果のタイム・スタンプを計算する前は現在日付に設定されます。 timestamp_exp に日付値を指定し、interval に小数秒、秒、分、または時間を指定した場合、 timestamp_exp の時刻部分は、結果のタイム・スタンプを計算する前は 0 に設定されます。 アプリケーションは、SQL_TIMEDATE_ADD_INTERVALSオプションを使用して SQLGetInfo を呼び出し、データ・ソースがどのインターバルをサポートしているかを判別します。

表 216. 日時関数のリスト (続き)

関数	説明
TIMESTAMPDIFF(interval, timestamp_exp1,	timestamp_exp1 と timestamp_exp2 の間の interval 型の単位 間隔の数 (整数) を返します。
timestamp_exp2) (ODBC 2.0)	アプリケーションが古い TIMESTAMPDIFF セマンティクス に従っている場合は、solid.ini ファイルの SQL セクショ ンに以下の構成設定をすることにより、古い動作をエミュレ ートすることができます。
	[SQL] EmulateOldTIMESTAMPDIFF=YES
	古いセマンティクスでは、 <i>timestamp_exp2</i> が <i>timestamp_exp1</i> よりどれだけ大きいかを示す interval 型のインターバル数の整数を返すことに注意してください。
	interval の有効値は、以下のキーワードです。
	SQL_TSI_FRAC_SECOND SQL_TSI_SECOND SQL_TSI_MINUTE SQL_TSI_HOUR SQL_TSI_DAY SQL_TSI_WEEK SQL_TSI_WONTH SQL_TSI_QUARTER SQL_TSI_YEAR
	小数秒は、10 億分の 1 秒 (ナノ秒) で表されます。例えば、以下の SQL ステートメントは、各従業員の名前および 勤続年数を返します。
	SELECT NAME, {fn TIMESTAMPDIFF(SQL_TSI_YEAR, {fn CURDATE()}, HIRE_DATE)} FROM EMPLOYEES
	どちらかのタイム・スタンプ式に時刻値を指定し、interval に日、週、月、四半期、または年を指定した場合、そのタイム・スタンプの日付部分は、タイム・スタンプ間の差を計算する前は現在日付に設定されます。
	どちらかのタイム・スタンプ式に日付値を指定し、interval に小数秒、秒、分、または時間を指定した場合、そのタイム・スタンプの時刻部分は、タイム・スタンプ間の差を計算する前は 0 に設定されます。
	アプリケーションは、SQL_TIMEDATE_DIFF_INTERVALS オプションを使用して SQLGetInfo を呼び出し、データ・ソ ースがどのインターバルをサポートしているかを判別しま す。
WEEK(date_exp)	date_exp の週フィールドに基づき、年間通算週を 1 から 53
(ODBC 1.0)	あくい 近四ツ正双胆COCMOあり。

表 216. 日時関数のリスト (続き)

関数	説明
YEAR(date_exp)	date_exp の年フィールドに基づき、年を整数値として返しま
(ODBC 1.0)	す。範囲は、データ・ソースに依存します。

システム関数

このセクションでは、ODBC スカラー関数セットに含まれるシステム関数をリスト します。

アプリケーションは、SQL_SYSTEM_FUNCTIONS 情報タイプを指定して SQLGetInfo を呼び出し、ドライバーがサポートしているシステム関数を判別するこ とができます。

システム関数引数

表 217. システム関数引数

表示引数	定義	
exp	これらの引数は、列の名前、別のスカラー関数の結果、または リテラルであり、基礎となるデータ型は SQL_NUMERIC、 SQL_DECIMAL、 SQL_TINYINT、 SQL_SMALLINT、 SQL_INTEGER、 SQL_BIGINT、 SQL_FLOAT、 SQL_REAL、 SQL_DOUBLE、 SQL_TYPE_DATE、 SQL_TYPE_TIME、 または SQL_TYPE_TIMESTAMP で表す ことができます。	
value	これらの引数はリテラル定数であり、基礎となるデータ型は SQL_NUMERIC、 SQL_DECIMAL、 SQL_TINYINT、 SQL_SMALLINT、 SQL_INTEGER、 SQL_BIGINT、 SQL_FLOAT、 SQL_REAL、 SQL_DOUBLE、 SQL_TYPE_DATE、 SQL_TYPE_TIME、 または SQL_TYPE_TIMESTAMP で表すことができます。	
integer_exp	これらの引数は、列の名前、別のスカラー関数の結果、または数値リテラルであり、基礎となるデータ型は SQL_TINYINT、SQL_SMALLINT、 SQL_INTEGER、または SQL_BIGINT で表すことができます。	

戻り値は、ODBC データ型として表されます。

システム関数のリスト

表 218. システム関数のリスト

関数	説明
DATABASE() (ODBC 1.0)	接続ハンドルに対応するデータベースの名前を返します。(データベース名は、SQL_CURRENT_QUALIFIER 接続オプションを指定して SQLGetConnectOption を呼び出すことでも入手できます。)
IFNULL(exp, value) (ODBC 1.0)	exp が NULL の場合、value が返されます。exp が NULL でない場合、exp が返されます。value のデータ型は、exp のデータ型と互換性のあるものである必要があります。
USER() (ODBC 1.0)	DBMS 内のユーザーの名前を返します。(ユーザーの許可名は、情報タイプの SQL_USER_NAME を指定した SQLGetInfoによって入手することもできます。) これは、ログイン時と異なる場合があります。

明示的なデータ型変換

明示的なデータ型変換は、 SQL データ型定義に関連して指定されます。

明示的なデータ型変換関数用の ODBC 構文では、変換の制限がありません。1 つの データ型から別のデータ型への特定の変換の妥当性検査は、各ドライバー固有のイ ンプリメンテーションによります。ドライバーは ODBC 構文をネイティブの構文に 変換するので、ODBC 構文で有効であるとしても、データ・ソースによってサポー トされていない変換は拒否します。アプリケーションは、ODBC 関数の SQLGetInfo を呼び出し、データ・ソースがサポートしている変換について問い合わせることが できます。

CONVERT 関数のフォーマットは以下のとおりです。

CONVERT(*value_exp*, *data_type*)

この関数は、指定された data_type に変換された、value_exp によって指定された値 を返します。data_type は以下のキーワードのうちの 1 つです。

- SQL BIGINT
- SQL_SMALLINT
- SQL_BINARY
- SQL_DATE
- SQL_CHAR
- SQL_TIME
- SQL_DECIMAL
- SQL_TIMESTAMP
- SQL_DOUBLE
- SQL_TINYINT

- SQL_FLOAT
- SQL_VARBINARY
- SQL_INTEGER
- SQL_VARCHAR
- SQL_LONGVARBINARY
- SQL_WCHAR
- SQL_LONGVARCHAR
- SQL WLONGVARCHAR
- SOL NUMERIC
- SQL_WVARCHAR
- SQL REAL

明示的なデータ型変換関数用の ODBC 構文では、変換フォーマットの指定がサポートされていません。基礎となるデータ・ソースが明示的なフォーマットの指定をサポートしている場合、ドライバーはデフォルト値を指定するか、またはフォーマット指定をインプリメントする必要があります。

引数 value_exp は、列の名前、別のスカラー関数の結果、もしくは数値リテラルまたはストリング・リテラルです。以下は、CURDATE スカラー関数の出力を文字ストリングに変換する例です。

{ fn CONVERT({ fn CURDATE() }, SQL_CHAR) }

ODBC では、スカラー関数からの戻り値にデータ型を必要としません (多くの場合、関数がデータ・ソース固有であるからです)。アプリケーションは、データ型変換を強制的に行う際、可能であれば CONVERT スカラー関数を使用する必要があります。

以下の 2 つの例で、CONVERT 関数の使用方法を説明します。これらの例では、型が SQL_SMALLINT の EMPNO 列および型が SQL_CHAR の EMPNAME 列を持つ EMPLOYEES と呼ばれる表の存在が前提となっています。

アプリケーションで以下を指定した場合、

SELECT EMPNO FROM EMPLOYEES WHERE {fn CONVERT(EMPNO, SQL CHAR)}LIKE '1%'

solidDB ODBC ドライバーは、この要求を以下のように変換します。

SELECT EMPNO FROM EMPLOYEES WHERE CONVERT CHAR(EMPNO) LIKE '1%'

SQL-92 CAST 関数

ODBC CONVERT 関数に相当する SQL-92 の関数が、CAST 関数です。

この互いに同等な関数の構文は、以下のとおりです。

{ fn CONVERT (value_exp, data_type)} /* ODBC */
CAST (value_exp AS data_type) /* SQL 92 */

CAST 関数は、FIPS Transitional レベルでサポートします。CAST 関数内のデータ型変換について詳しくは、SQL-92 仕様書を参照してください。

アプリケーションが CAST 関数をサポートしているかどうかを判別するには、 SQL_SQL_CONFORMANCE 情報タイプを指定して SQLGetInfo を呼び出します。 情報タイプに対する戻り値が以下の場合、CAST 関数はサポートされています。

- SQL_SC_FIPS127_2_TRANSITIONAL
- SQL_SC_SQL92_INTERMEDIATE
- SQL_SC_SQL92_FULL

戻り値が SQL_SC_ENTRY または 0 の場合、SQL_SQL92_VALUE_EXPRESSIONS 情報タイプを指定して SQLGetInfo を呼び出します。SQL_SVE_CAST ビットが設 定されていれば、CAST 関数はサポートされています。

付録 G. タイムアウト制御

solidDB では、アクションによってはタイムアウトになる場合があります。タイムアウトは、メイン・サーバー、クライアント・ドライバー、1 次サーバーまたは 2 次サーバー、もしくはマスター・サーバーまたはレプリカ・サーバーによってアクティブにすることができます。

タイムアウトにはデフォルトのファクトリー値が存在し、通常は異なる.ini パラメーターにより設定することができます。いくつかの始動時のデフォルト値は、SQLを使用するかドライバー・インターフェースおよび接続ストリング・パラメーターを使用することにより、異なる制御によって動的に変更することができます。

クライアント・タイムアウト

このトピックでは、データベース・クライアントに関連したタイムアウトについて 説明します。

ログイン・タイムアウト

このタイムアウトは、ドライバーがログイン (SQLConnect) の成功を待つ秒数です。デフォルト値はドライバーに依存します。値 (または ODBC の ValuePtr) が 0 の場合、タイムアウトは無効となり、接続試行は無期限に待機することになります。指定したタイムアウトがデータ・ソース内の最大ログイン・タイムアウトを超えた場合、ドライバーはその値を代用し SQLSTATE 01S02 (オプション値の変更)を返します。

このタイムアウトは、TCP プロトコルのみに適用されます。

表 219. ログイン・タイムアウト

INI パラメーター	SQL による オーバーラ イド	ドライバー	接続ストリ ング
		ODBC: SQL_ATTR_LOGIN_TIMEOUT (秒単位) SQL_ATTR_LOGIN_TIMEOUT_MS (ミリ秒単位、非標準) JDBC: メソッド (JDBC 2.0) DriverManger.setLoginTimeout(seconds); 接続プロパティー (非標準) "solid_login_timeout_ms" (ミリ秒)	-c milliseconds

表 219. ログイン・タイムアウト (続き)

	SQL による オーバーラ	ピニノバ	接続ストリング
INI パラメーター	イド	ドライバー	20
クライアント・サイド:			
[Com] ConnectTimeout=milliseconds			
または			
オプション -cmilliseconds を指定した			
Com.Connect パラメーター			
例えば、以下のようにします。			
[Com] Connect=tcp -c1000 1315			

タイムアウトのエラー・コードおよびメッセージ:

ODBC:

HYT00 タイムアウトの期限切れ

接続タイムアウト

このタイムアウトは、ドライバーが接続上の要求の完了を待つ秒数 (またはミリ秒 数)です。このタイムアウトは、照会実行やログインには関連付けられていませ ん。タイムアウトになると、ドライバーは solidDB サーバーから切断されます。

サーバーに接続できないことをクライアントが確実に検出できる場合、クライアン トはタイムアウトの期限切れまで待機しません。この状況は、例えばサーバーが同 じホストで稼働することが予期されている場合に、サーバーが稼働していないこと をクライアントが検出すると、発生する可能性があります。

ドライバーは、照会実行やログインに関連しない場合にタイムアウトになることが 可能であれば SQLSTATE HYT00 (タイムアウトの期限切れ) を返します。値 (また は ODBC の ValuePtr) が 0 (デフォルト値) の場合、タイムアウトは発生しませ h.

このタイムアウトは、以下に挙げた以外のすべての ODBC関数 (ODBC 3.5 仕様) に適用されます。

SQLDrivers

SQLDataSources

SQLGetEnvAttr

SQLSetEnvAttr

表 220. 接続タイムアウト

INI パラメーター	SQL による オーバーラ イド	ドライバー	接続ストリン グ
クライアント・サイド: [Com] ClientReadTimeout=milliseconds または オプション -rmilliseconds を指定し た Com.Connect パラメーター 例えば、以下のようにします。 [Com] Connect=tcp -r1000 1315		ODBC: SQL_ATTR_CONNECTION_TIMEOUT (秒単位) SQL_ATTR_CONNECTION_TIMEOUT_MS (ミリ秒単位、非標準) JDBC: 非標準の接続プロパティー: "solid_connection_timeout_ms" (ミリ秒) またはメソッド: SolidConnection.setConnectionTimeout() (ミリ秒単位)	-r milliseconds

タイムアウトのエラー・コードおよびメッセージ:

ODBC:

HYT01 接続タイムアウトの期限切れ

以下も参照してください。

SOLID Server Error 14518:

Connection to the server is broken, connection lost.

SOLID Communication Error 21328 and SOLID Session Error 20024: Timeout while resolving host name.

SOLID Communication Error 21329 and SOLID Session Error 20025: Timeout while connecting to a remote host.

照会タイムアウト

このタイムアウトは、ドライバーが SQL ステートメントの実行を待つ秒数です。 値 (または ODBC の ValuePtr) が 0 (デフォルト値) の場合、タイムアウトは発生 しません。

指定したタイムアウトがデータ・ソース内の最大タイムアウトを超えた場合、また は指定したタイムアウトが最小タイムアウトより小さい場合、SQLSetStmtAttr はそ の値を代用し SQLSTATE 01S02 (オプション値の変更) を返します。

このタイムアウトは、以下の ODBC 関数 (ODBC 3.5 仕様) に適用されます。

SQLBrowseConnect

SQLBulkOperations

SQLColumnPrivileges

SQLColumns

SQLConnect

SQLDriverConnect

SQLExecDirect

SQLExecute

SQLExtendedFetch

SQLForeignKeys

SQLGetTypeInfo

SQLParamData

SQLPrepare

SQLPrimaryKeys

SQLProcedureColumns

SQLProcedures

SQLSetPos

SQLS pecial Columns

SQLStatistics

SQLTablePrivileges

SQLTables

注: SELECT ステートメントがタイムアウトになった際にステートメントを再使用 する場合、アプリケーションは SQLCloseCursor を呼び出す必要はありません。こ のステートメント属性に設定された照会タイムアウトは、同期モードおよび非同期 モードのどちらでも有効です。

表 221. 照会タイムアウト

INI パラメ ーター	SQL による オーバーラ イド	ドライバー	接続ストリング
		ODBC: SQL_ATTR_QUERY_TIMEOUT (秒単位) SQL_ATTR_QUERY_TIMEOUT_MS (ミリ 秒単位、非標準)	

タイムアウトのエラー・コードおよびメッセージ:

ODBC:

HYT00 タイムアウトの期限切れ

サーバー・タイムアウト

このトピックでは、データベース・サーバーに関連したタイムアウトについて説明 します。

SQL ステートメント実行タイムアウト

1 つの SQL ステートメントの実行に費やす時間をサーバーで制御することができ ます。時間が過ぎた場合、サーバーはステートメントを終了し、対応するエラー・ コードを返します。このタイムアウトは、以下の呼び出し (ODBC 3.5 仕様) に適用 されます。

- SQLExecute()
- SQLExecDirect()
- SQLPrepare()
- SQLForeignKeys()
- SQLColumns()
- SQLProcedureColumns()
- SQLSpecialColumns()
- SQLStatistics()
- SQLPrimaryKeys()
- SQLProcedures()
- SQLTables()
- SQLTablePrivileges()
- SQLColumnPrivileges()
- SQLGetTypeInfo()

このタイムアウトは、対応する JDBC 呼び出しにも適用されます。

表 222. SQL ステートメント実行タイムアウト

INI パラ	SQL による	ドライバー	接続ストリ
メーター	オーバーライド		ング
	SET STATEMENT MAXTIME minutes	ODBC: SQL_ATTR_QUERY_TIMEOUT (秒単位) SQL_ATTR_QUERY_TIMEOUT_MS (ミリ秒単位、非標準) JDBC: statement.setQueryTimeout()	

タイムアウトのエラー・コードおよびメッセージ:

HYT00 タイムアウトの期限切れ

以下も参照してください。

SOLID Server Error 14518:

Connection to the server is broken, connection lost.

SOLID Server Error 14529: The operation timed out.

ロック待機タイムアウト

ロック待機タイムアウト では、エンジンがロック解除を待つ時間を秒単位 (または ミリ秒単位) で指定します。タイムアウト・インターバルに達すると、solidDB はタ イムアウトになったトランザクションを終了します。デフォルト値は 30 秒です。

ロック待機タイムアウトは、デッドロックの解決に使用されます。その場合、デッ ドロックになっている最も古いトランザクションが中止されます。

表 223. ロック待機タイムアウト

INI パラメーター	SQL によるオーバーライド	ドライバー	接続ストリング
[General] LockWaitTimeOut=seconds	SET LOCK TIMEOUT		
	{seconds milliseconds MS}		

タイムアウトのエラー・コードおよびメッセージ:

SOLID Database Error 10006:

Concurrency conflict, two transactions updated or deleted the same row.

オプティミスティック・ロック・タイムアウト

オプティミスティック・ロック・タイムアウト では、オプティミスティック・ロッ ク・タイムアウトを秒単位 (またはミリ秒単位) で指定します。オプティミスティッ ク・ロックとは、オプティミスティック並行制御方式において SELECT FOR UPDATE による更新が常に成功するように実施される追加のロックです。デフォル

トはゼロです。この場合、オプティミスティック・ロックは使用されず、トランザクション妥当性検査が早まるため、各ステートメントの後でトランザクションが中止される場合があります。タイムアウトをゼロ以外の値に設定した場合、SELECT FOR UPDATE はロック取得まで待つか、タイムアウトになり異常終了します。タイムアウトが設定されると、DELETE および UPDATE のステートメントもすべて影響を受けます。

表 224. オプティミスティック・ロック待機タイムアウト

INI パラ メーター	SQL によるオーバーライド	ドライ バー	接続ストリング
	SET OPTIMISTIC LOCK TIMEOUT {seconds milliseconds MS}		

タイムアウトのエラー・コードおよびメッセージ:

SOLID Database Error 10006:

Concurrency conflict, two transactions updated or deleted the same row.

表ロック待機タイムアウト

トランザクションが表に対する排他ロックを取得することがあります。これは、ロック・エスカレーションまたは ALTER TABLE ステートメント実行の試行の結果、もしくは拡張レプリケーション・コマンドの副次作用です。表レベルの競合がある場合、この設定は、排他または共有ロックの解除までのトランザクションの待機時間を示します。単位は秒で、デフォルト値は 30 秒であり、パラメーターのアクセス・モードは読み取り/書き込みです。

具体的には、表レベル・ロックは、PESSIMISTIC キーワードが以下のコマンドで明示的に指定された場合に使用されます。

IMPORT SUBSCRIPTIONMESSAGE message_name EXECUTE (NO EXECUTE オプションがある場合のみ)
MESSAGE message_name FORWARD
MESSAGE message_name GET REPLY
DROP SUBSCRIPTION.

表 225. 表ロック待機タイムアウト

	SQL による オーバーライド	ドライバー	接続ストリング
[General] TableLockWaitTimeout=seconds			

タイムアウトのエラー・コードおよびメッセージ:

SOLID Database Error 10006:

Concurrency conflict, two transactions updated or deleted the same row.

トランザクション・アイドル・タイムアウト

トランザクション・アイドル・タイムアウト では、アイドル・トランザクションが中止されるまでの時間を分単位で指定します。負の値またはゼロを指定すると無限になります。デフォルト値は 120 分です。

表 226. トランザクション・アイドル・タイムアウト

INI パラメーター	SQL によるオーバ ーライド	ドライバー	接続ストリング
[Srv] AbortTimeOut			

タイムアウトのエラー・コードおよびメッセージ:

SOLID Database Error 10026: Transaction is timed out.

接続アイドル・タイムアウト

接続アイドル・タイムアウト では、(サーバーにより) 接続がドロップされるまでの 継続したアイドル時間を分単位 (またはステートメントの場合、秒かミリ秒単位) で 指定します。負の値またはゼロを指定すると無限値になります。デフォルト値は 480 分です。

表 227. 接続アイドル・タイムアウト

INI パラメーター	SQL によるオーバーライド	ドライバー	接続ストリング
[Srv] ConnectTimeOut=minutes	SET IDLE TIMEOUT {seconds milliseconds MS}	JDBC: 接続プロパティー (非標準): "solid_idle_timeout_min"	

タイムアウトのエラー・コードおよびメッセージ:

SOLID Communication Error 21308: Connection is broken (protocol read/write operation failed with code internal code).

solmsg.out ファイルも参照してください。

SET IDLE TIMEOUT が設定されていて、トランザクションが指定時間アイドルだ った場合、以下のエラーが表示されます。

SOLID Database Error 10026: Transaction is timed out

HotStandby タイムアウト

このトピックでは、HotStandby サーバーに関連したタイムアウトについて説明しま す。

接続タイムアウト

HotStandby.ConnectTimeout パラメーターで接続タイムアウト値を指定すること で、HotStandby 接続操作におけるリモート・マシン接続の最大待機時間をミリ秒単 位で設定できます。HotStandby.ConnectTimeout パラメーターを使用するのは、以 下の ADMIN COMMAND のサブセットに対してのみです。

hotstandby connect hotstandby switch primary hotstandby switch secondary

表 228. 接続タイムアウト

INI パラメーター	SQL による オーバーライド	ドライバー	接続ストリング
[HotStandby] ConnectTimeout=milliseconds			

ping タイムアウト

HotStandby.PingTimeout パラメーターは、サーバーが、相手のサーバーが故障また はアクセス不能であると判断するまでの待機時間をミリ秒単位で指定します。

表 229. ping タイムアウト

	SQL による オーバーライド	ドライバー	接続ストリング
[HotStandby] PingTimeout=milliseconds			

付録 H. クライアント・サイド構成パラメーター

クライアント・サイド構成パラメーターは、クライアント・サイドの solid.ini 構成ファイルに保管されており、クライアントの始動時に読み取られます。

ほとんどの場合、ファクトリー値設定のままで最善のパフォーマンスと操作容易性が得られますが、特別なケースではパラメーターを変更すると、パフォーマンスが向上します。solid.ini 構成ファイルを編集することで、パラメーターを変更できます。

クライアント・サイドの構成ファイルに設定するパラメーター値は、アプリケーションが SqlConnect ODBC 関数の呼び出しを発行するときに、毎回有効になります。プログラムの実行時にファイルの値を変更すると、その変更はその後に確立された接続に影響します。

solid.ini 構成ファイルを使用したクライアント・サイド・パラメーターの設定

このトピックでは、solid.ini 構成ファイルについて詳しく説明します。

solidDB は、始動時に構成ファイル solid.ini を開こうとします。このファイルが存在しない場合、solidDB は、パラメーターにファクトリー値を使用します。 solid.ini ファイルが存在する場合でも、その中の特定のパラメーターに値が設定されていない場合、solidDB は、そのパラメーターにファクトリー値を使用します。ファクトリー値は、使用するオペレーティング・システムに依存する場合があります。

デフォルトでは、クライアントは現行作業ディレクトリーで solid.ini ファイルを検索しますが、通常、これはクライアントを始動したディレクトリーです。solidDBは、ファイルの検索時に以下の優先順位に従います (上から下)。

- SOLIDDIR 環境変数によって指定された場所 (この環境変数が設定されている場合)
- 現行作業ディレクトリー

クライアント・サイドの solid.ini ファイルのフォーマット設定のルール

クライアント・サイドの solid.ini ファイルのフォーマット設定には、サーバー・サイドの solid.ini ファイルの場合と同じルールが適用されます。詳しくは、「*IBM solidDB 管理者ガイド*」の『solid.ini ファイルのフォーマット設定のルール』のセクションを参照してください。

クライアント・サイドの solid.ini ファイル

[Com]

;データ・ソースのないこの接続ストリングを使用します。 Listen = tcp host1.acme.com 1315 [Client]

;SQLConnect で、この時間 (ms) の後タイムアウトになります。 ConnectTimeout = 5000

;ODBC ネットワーク要求で、この時間 (ms) の後タイムアウトになります。 ClientReadTimeout = 10000

[DataSources]

Primary_Server = tcp irix1 1315, The Primary Server Secondary_Server = tcp irix2 1315, The Secondary Server

Client セクション

表 230. Client パラメーター

[Client]	説明	ファクトリー値
ExecRowsPerMessage	このパラメーターは、SELECT ステートメントでの SQLExecute 呼び出しの応答として、クライアント・ドライバーに送信(プリフェッチ)する結果行の数を指定します。その後に、結果行は、最初のSQLFetch 呼び出しを発行したアプリケーションに返されます。デフォルト値は2で、単一行の結果をプリフェッチすることが可能です。SELECT ステートメントから返される行の数が通常多い場合は、これを適切な値に設定すれば、パフォーマンスを大幅に向上できます。	サーバーが判断
NoAssertMessages	このパラメーターは、Windows プラット フォームのみに関係します。Yes に設定す ると、Windows のランタイム・エラーの ダイアログが表示されなくなります。	No

表 230. Client パラメーター (続き)

[Client]	説明	ファクトリー値
ODBCCharBinding	文字データのバインディング方式を定義し ます。	locale
	以下のオプションが使用できます。	
	• raw (バイナリー)	
	• locale (現在のクライアント・ロケール が使用されます。)	
	• locale: <locale name=""> (特定のコード・ページが使用されます。)</locale>	
	<locale name=""> の規則は、オペレーティング・システムにより異なります。例えば、Linux 環境では、中国語 (簡体字)/中国のコード・ページ GB18030 のロケール名はzh_CN.gb18030 です。 Windows 環境では、フィンランド語/フィンランドのLatin1 コード・ページのロケール名はfin_fin.1252 です。</locale>	
	値「raw」は、バージョン 6.3 またはそれ 以前の solidDB で使用しているバインデ ィングをデータベースで使用する場合に利 用できます。	
RowsPerMessage	SQLFetch 呼び出しが実行されたとき (およびプリフェッチ行がない場合)、1 件のネットワーク・メッセージにサーバーから返される行の数を指定します。	サーバーが判断
	ExecRowsPerMessage 構成パラメーターも 参照してください。	
StatementCache	ステートメント・キャッシュとは、以前の準備済み SQL ステートメントを数件ほど格納する内部メモリーです。このパラメーターを使用すると、セッションごとにキャッシュに入れるステートメントの数を設定することができます。	6
UseEncryption	このパラメーターは、パスワードを暗号化 するかどうかを定義します。「No」に設定 すると、パスワードが暗号化されなくなり ます。	Yes

Com セクション

表 231. Com パラメーター

[Com]	説明	ファクトリー値
ClientReadTimeout	このパラメーターは、接続(読み取り)のタイムアウトをミリ秒単位で定義します。指定した時間の間に応答を受け取らない場合、ネットワーク要求は失敗します。0の値を指定すると、タイムアウトは無限に設定されます。この値は、接続ストリング・オプション・rを指定するとオーバーライドすることができます。さらに、ODBC属性SQL_ATTR_CONNECTION_TIMEOUTと組み合わせてもオーバーライドできます。	0 (無限)
	注: TCP プロトコルの場合にのみ当てはまります。	
Connect	Connect パラメーターは、クライアントがサーバーとの接続を確立する際に、デフォルトで接続するネットワーク名 (接続ストリング) を定義します。	tcp localhost 1964
	接続ストリングのフォーマットは以下のとおりです。	
	<pre>protocol_name [options] [host_computer_name] server_name</pre>	
	options と server_name は、通信プロトコルによって異なります。詳しくは、「 $IBM\ solidDB\ 管理者ガイド」の『ネットワーク接続の管理』を参照してください。$	
	この値は、SQLConnect() 呼び出しが空のデータ・ソース名で発行された場合も使用されます。	
ConnectTimeout	ConnectTimeout パラメーターは、ログインのタイムアウトをミリ秒単位で 定義します。	OS 固有
	この値は、接続ストリング・オプション -c を指定するとオーバーライド することができます。さらに、ODBC 属性 SQL_ATTR_LOGIN_TIMEOUT を組み合わせてもオーバーライドできます。	
	注: TCP プロトコルの場合にのみ当てはまります。	
ODBCHandleValidation	ODBCHandleValidation パラメーターは、ODBC ハンドル妥当性検査のオン/オフを切り替えます。	No
	SQL_ATTR_HANDLE_VALIDATION ODBC 属性について詳しくは、「 <i>IBM</i> solidDB プログラマー・ガイド」の『 <i>ODBC ハンドル妥当性検査</i> 』のセクションも参照してください。	
Trace	このパラメーターを yes に設定すると、確立済みのネットワーク接続のネットワーク・メッセージに関するトレース情報が、TraceFile パラメーターで指定したファイルに書き込まれます。TraceFile パラメーターのファクトリー値は、soltrace.out です。	no

表 231. Com パラメーター (続き)

[Com]	説明	ファクトリー値
TraceFile	Trace パラメーターを yes に設定した場合に、ネットワーク・メッセージ に関するトレース情報が、この TraceFile パラメーターで指定したファイルに書き込まれます。	soltrace.out (トレースがサーバーまたはクライアントのいずれで開始されたかに応じて、いずれかの現行作業ディレクトリーに書き込まれます)

Data Sources

表 232. Data Sources パラメーター

[Data Sources]	説明	ファクトリー値	アクセス・ モード
logical name = network name, Description	クライアント・アプリケーションの solid.ini ファイル の中で、これらのパラメーターを使用すると、solidDB サ ーバーに論理名を与えることができます。		N/A

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アドホック照会 コード例 52 アプリケーション開発 テストとデバッグ 60 HotStandby 作成 52 アプリケーション行記述子 (ARD) 293 アプリケーション・パラメーター記述子 (APD) 293 エラー サンプル・メッセージ 49 メッセージの処理 51 JDBC ドライバー 102 Light Client API 関数 66 SA 関数 145 オクテット長 304 オプティマイザー・ヒント 33 オプティミスティック・ロック・タイムアウト 356

[力行] カーソル サポートしているタイプ 43,44 自動コミット 28 使用 41 静的 43 前方 43 タイプの指定 43 動的 43 ブロック・カーソル 41 両方向スクロール 43 関数 システム関数 347 スカラー 16,335 日時 342 非 ODBC 関数 SQLFetchPrev 91 SQLGetAnyData 92 SQLGetCol 92 SQLSetParamValue 92 非同期実行 30 プロトタイプ 16 戻りコード 18 呼び出しのガイドライン 16

ABS 340

関数 (続き) ACOS 340 ASCII 336 ASIN 340 ATAN 340 ATAN2 340 BIT_LENGTH 336 CAST 349 CEILING 340 CHAR 336 CHARACTER_LENGTH 337 CHAR_LENGTH 337 CONCAT 337 CONVERT 348 COS 341 COT 341 CURDATE 343 CURRENTTIME 343 CURRENT_TIMESTAMP 343 CURTIME 343 DATABASE 348 DAYNAME 343 DAYOFMONTH 343 DAYOFWEEK 344 DAYOFYEAR 344 DEGREES 341 DIFFERENCE 337 EXP 341 EXTRACT 344 FLOOR 341 HOUR 344 IFNULL 348 INSERT 337 LCASE 337 LEFT 337 LENGTH 337 Light Client 70 LOCATE 338 LOG 341 LOG10 341 LTRIM 338 MINUTE 344 MOD 341 MONTH 344 MONTHNAME 344 NOW 344 OCTET_LENGTH 338 PI 341 POSITION 338

POWER 341

QUARTER 345

関数 (続き)	関数 (続き)
RADIANS 341	SQLGetFunctions 238
REPEAT 338	SQLGetInfo 237
REPLACE 338	SQLGetStmtAttr 239
RIGHT 339	SQLGetStmtOption 239
ROUND 341	SQLGetTypeInfo 238
RTRIM 339	SQLMoreResults 243
SECOND 345	SQLNativeSQL 241
SIGN 342	SQLNumParams 241
SIN 342	SQLNumResultCols 89, 241
SOUNDEX 339	SQLParamData 241
SPACE 339	SQLParamOptions 240
SQL に対する追加の拡張機能 38	SQLPrepare 89, 240
SQLAllocConnect 75, 237	SQLPrimaryKeys 244
SQLAllocEnv 76, 237	SQLProcedureColumns 244
SQLAllocHandle 237	SQLProcedures 244
SQLAllocStmt 77, 240	SQLPutData 241
SQLBindCol 242	SQLRowCount 90, 241
SQLBindParameter 240	SQLSetConnectAttr 239
SQLBrowseConnect 237	SQLSetConnectOption 239
SQLBulkOperations 243	SQLSetCursorName 90, 240
SQLCancel 245	SQLSetDescField 240
SOLCloseCursor 245	SQLSetDescRec 240
SQLColAttribute 242	SQLSetEnvAttr 239
SQLColAttributes 242	SQLSetParam 240
SQLColumnPrivileges 244	SQLSetPos 243
SQLColumns 244	SQLSetScrollOptions 240
SQLConnect 77, 237	SQLSetStmtAttr 239
SQLCopyDesc 240	SQLSetStmtOption 239
SQLDataSources 238	SQLSpecialColumns 245
SQLDescribeCol 78, 242	SQLStatistics 245
SQLDescribeParam 241	SQLTablePrivileges 245
SQLDisconnect 80, 246	SQLTables 245
SQLDriverConnect 237	SQLTransact 91, 245
SQLDrivers 239	SQRT 342
SQLEndTran 245	SUBSTRING 339
SQLError 243	TAN 342
SQLExecDirect 81, 241	TIMESTAMPADD 345
SQLExecute 82, 241	TIMESTAMPDIFF 346
SQLExtendedFetch 242	TRIM 339
SQLFetch 82, 242	TRUNCATE 342
SQLFetch 82, 242 SQLFetchScroll 243	UCASE 339
SQLFetchScion 243 SQLForeignKeys 244	Unicode ストリング 223
SQLFreeConnect 83, 246	USER 348
SQLFreeEnv 83, 246	WEEK 346
SQLFreeHandle 246	
	YEAR 347 行セット 42
SQLFreeStmt 84, 245 SQLGetConnectAttr 239	ストレージの割り当て 42
	クライアント・サイド構成パラメーター 361
SQLGetConnectOption 239	
SQLGetCursorName 85, 240	クライアント・タイムアウト 351
SQLGetData 85, 243	位取り
SQLGetDescField 240	列
SQLGetDescRec 240	結果セット 80
SQLGetDiagField 243	結果セット
SQLGetDiagRec 243	Light Client API 関数 66
SQLGetEnvAttr 239	

構成 接続ストリング (続き) クライアント・サイド構成ファイル 5 使用 19 デフォルト設定 5 接続タイムアウト 352, 358 パラメーター設定 5 前方スクロールのカーソル 43 ファクトリー値 5 solid.ini 5 [夕行] 構成ファイル クライアント・サイド 5,361 タイムアウト制御 351 タイム・スタンプ・データ [サ行] 変換の指定 SQLGetData 87, 93 サーバー・タイムアウト 355 データ型 287 サンプル・プログラムの作成 明示的な変換 348 データの変換 Light Client 63 変換の指定 SA 144 時刻データ SQLGetData 87, 93 変換の指定 C から SQL データ型 320 SQL から C データ型 307 SQLGetData 87, 93 自動コミット テスト SELECT ステートメントに関する警告 28 アプリケーション 60 自動コミット・モード デバッグ アプリケーション 60 カーソル 28 トランザクション 28 転送オクテット長 304 JDBC ドライバー 102 動的ライブラリー 11 Light Client API 関数 66 ドライバー・インターフェース (JDBC) 照会タイムアウト 353 メソッド 105 数字関数 トランザクション 自動コミット・モード 28 ODBC 339 数値データ 終了 51 変換の指定 読み取り専用コミット 28 SQLGetData 87, 93 JDBC ドライバー 102 スカラー関数 16 Light Client API 関数 66 ネイティブ 16 トランザクション・アイドル・タイムアウト 357 ODBC 335 SQL-92 335 「ナ行] ストアード・プロシージャー JDBC ドライバー 105 長さ、列 ストリング関数 結果セット 78 ODBC 336 ネイティブ・スカラー関数 16 整数データ ネットワーク名 19 変換の指定 SQLGetData 87, 93 [八行] 静的 SOL コード例 52 バイナリー・データ 静的カーソル 43 部分単位でのリトリーブ 88,93 静的ライブラリー 11 変換の指定 精度 SQLGetData 87, 93 バインディング 結果セット 80 行セットへのストレージの割り当て 42 制約 行方向 42 グレゴリオ暦 306 列方向 42 接続 Unicode 223 終了 51 パラメーター 接続アイドル・タイムアウト 358 クライアント・サイド 361 接続インターフェース 105

接続ストリング 3

非標準動作	В
ODBC 6	_
表ロック待機タイムアウト 357	BIGINT データ型
ヒント 33	Light Client (サポートされない) 69, 79
ブックマーク	BIT 79
使用 49	SQL_BIT 307, 320
説明 49	BIT_LENGTH (関数) 336
浮動小数点データ	BLOB (バイナリー・ラージ・オブジェクト)
変換の指定	インターフェース 105
SQLGetData 87, 93	
プロシージャー	C
ODBC での呼び出し 31	C
プロシージャーの呼び出し 31	C データ型
ブロック・カーソル 41	変換の指定
ヘッダー・ファイル 16	SQLGetData 87, 93
変換	CallableStatement インターフェース 105
明示的なデータ型 348	CAST (関数)
Unicode 列への影響 223	説明 349
変数	CEILING (関数) 340
Unicode 223	CHAR (関数) 336
	CHARACTER_LENGTH (関数) 337
[マ行]	CHAR_LENGTH (関数) 337
[X 1]]	ClientReadTimeout (パラメーター) 364
文字データ	CLOB データ型
部分単位でのリトリーブ 88,93	JDBC インターフェース 105
変換の指定	CONCAT (関数) 337
SQLGetData 87, 93	Connect (パラメーター) 364
戻りコード	ConnectionPoolDataSource API 関数
関数 18	コンストラクター 118
	getConnectionURL 118
F = /= 1	getDescription 118
[ラ行]	getLoginTimeout 118
両方向スクロール・カーソル 43	getLogWriter 118
ログイン	getPassword 118
タイムアウト 351	getPooledConnection 118
ロック待機タイムアウト 356	getURL 118
	getUser 118
	setConnectionURL 118
A	setDescription 118
	setLoginTimeout 118
ABS (関数) 340	setLogWriter 118
ACOS (関数) 340	setPassword 118
APD (アプリケーション・パラメーター記述子) 293	setURL 118
API	setUser 118
JDBC ドライバー 99	ConnectTimeOut (パラメーター) 364
Light Client 63	CONVERT (関数)
ARD (アプリケーション行記述子) 293	説明 348
Array インターフェース 105	COS (関数) 341
ASCII (関数) 336	COT (関数) 341
ASIN (関数) 340	CURDATE (関数) 343
ATAN (関数) 340	CURRENTTIME (関数) 343
ATAN2 (関数) 340	CURRENT_CATALOG() スカラー関数 18
	CURRENT_SCHEMA() スカラー関数 18
	CURRENT_TIMESTAMP (関数) 343
	CURTIME (関数) 343

D	Java インターフェース (続き) DatabaseMetaData 105
Data Sources	Naming and Directory Interface 128
カタログ情報のリトリーブ 30	PreparedStatement 105
空のデータ・ソース名 23	Ref 105
接続 19	ResultSet 105
solid.ini での定義 22	ResultSet クラス 105
Windows 用に構成 24	ResultSetMetaData 105
DATABASE (関数) 348	SQLData 105
DatabaseMetaData インターフェース	SQLInput 105
メソッド 105	SQLOutput 105
DATE データ型	Statement 105
変換の指定	Struct 105
SQLGetData 87, 93	Java トランザクション API (JTA) 112
DAYNAME (関数) 343	JDBC 接続のプーリング 118
DAYOFMONTH (関数) 343	ConnectionPoolDataSource 118
DAYOFWEEK (関数) 344	PooledConnection 118
DAYOFYEAR (関数) 344	JDBC ドライバー
DEGREES (関数) 341	コード例 128
DIFFERENCE (関数) 337	JNDI 128
	JTA (Java トランザクション API) 112
E	
END LOOP 270	L
END LOOP 279	
ExecRowsPerMessage (パラメーター) 362	LCASE (関数) 337
EXP (関数) 341	LEFT (関数) 337
EXTRACT (関数) 344	LENGTH (関数) 337
	Light Client
F	BIGINT 79
	SQL_BIGINT 79
FLOOR (関数) 341	listen 名 19
fn	LOCATE (関数) 338
{fn func_name} での使用法 16, 345	LOG (関数) 341
	LOG10 (関数) 341
Ц	LOGIN_CATALOG() スカラー関数 18
п	LOOP 279
HotStandby	LTRIM (関数) 338
タイムアウト 358	
HOUR (関数) 344	M
	MaxSpace (パラメーター) 229
1	MINUTE (関数) 344
•	MOD (関数) 341
IFNULL (システム関数) 348	MONTH (関数) 344
INSERT (ストリング関数) 337	MONTH (景数) 344 MONTHNAME (関数) 344
	MONTHVAME (NIXX) 344
J	
	N
Java インターフェース	NoAssertMessages (パラメーター) 362
データベース・アクセス 99	NOW (関数) 344
ドライバー 105	NULL 可能性
Array 105	列 80
Blob 105	
CallableStatement 105	
Clob 105	
Connection 105	

0	SIN (関数) 342		
	Solid SA		
OCTET_LENGTH (関数) 338 ODBC	関数リファレンス 154		
拡張機能 31	solidDB JDBC ドライバー		
関数のサポート 237	概要 100		
ドライバー 16	型変換マトリックス 140		
非標準動作 6	クラスおよびメソッド 105		
のDBC API に対する solidDB 拡張機能 38	説明 7, 99		
SQL に対する追加の関数 38	データベースへの接続 102		
SQL に対する追加の関数 36 ODBC ハンドル 27	登録 102		
ODBC ハントル 27 ODBCCharBinding (パラメーター) 363	DatabaseMetaData インターフェース 105		
ODBCHandleValidation (パラメーター) 364	Driver クラス 105		
ODDCHandievandation (7777 7) 304	PreparedStatement インターフェース 105 Ref インターフェース 105		
Р	ResultSet インターフェース 105		
r	ResultSetMetaData インターフェース 105		
PI (関数) 341	SQLData インターフェース 105		
ping タイムアウト 359	SQLInput インターフェース 105		
PooledConnection API 関数	SQLOutput インターフェース 105		
addConnectionEventListener 118	Statement インターフェース 105		
close 118	Struct インターフェース 105		
getConnection 118	Unicode 223		
removeConnectionEventListener 118	solidDB Light Client 3, 19		
POSITION (関数) 338	開発環境のセットアップ 63		
POWER (関数) 341	概要 63		
PreparedStatement インターフェース	型変換マトリックス 91		
メソッド 105	サンプル 72		
, , , ,	サンプル・プログラムの作成 63		
	説明 7,63		
Q	データ・フェッチにおけるネットワーク・トラフィック 69		
	非 ODBC 関数 91		
QUARTER (関数) 345	標準的な ODBC アプリケーションのマイグレーション 69		
	Unicode 69		
R	solidDB ODBC API		
11	Unicode 223		
RADIANS (関数) 341	solidDB ODBC 関数 237		
Ref インターフェース	solidDB ODBC ドライバー		
メソッド 105	インストール 13		
REPEAT (関数) 338	使用 13		
REPLACE (関数) 338	説明 14		
ResultSet インターフェース	ドライバー・マネージャー 16		
メソッド 105	ファイル 14		
ResultSetMetaData インターフェース	Microsoft Windows 上 14		
メソッド 105	Unicode 223		
RIGHT (関数) 339	solidDB SA		
ROUND (関数) 341	開発環境のセットアップ 144		
RowsPerMessage (パラメーター) 363	概要 144		
RTRIM (関数) 339	更新 145		
	削除 145		
	サンプル・プログラムの作成 144		
S	説明 143		
SaErrorInfo	データベースへの接続 144		
solidDB SA 145	データベース・エラーの処理 145		
SECOND (関数) 345	トランザクションと自動コミット・モード 145		
SET LOGREADER BATCH (ステートメント) 235	SQL ステートメントの実行 145		
SIGN (関数) 342	SQL を使用しないデータの書き込み 145		
01011 (1/190) 072			

solidDB SA (続き) **SQLError** SQL を使用しないデータの読み取り 145 solidDB Light Client API 66 solidDB SQL エディター 219 SQLError (関数) 243 solidDB エクスポート SQLExecDirect (関数) 81, 241 Unicode 219 SQLExecute (関数) 82, 241 solidDB データ・ディクショナリー SQLExtendedFetch (関数) 41, 43, 242 SOLFetch (関数) 41, 82, 242 Unicode 219 solidDB への接続 SQLFetchPrev (関数) 91 サンプル・アプリケーションの使用 144 SQLFetchScroll (関数) 41, 43, 243 SQLForeignKeys (関数) 244 solid.ini 361 構成パラメーター 361 SQLFreeConnect (関数) 83, 246 solid.jdbc.SolidBaseRowSet 127 SOLFreeEnv (関数) 83, 246 SOUNDEX (関数) 339 SQLFreeHandle (関数) 246 SPACE (関数) 339 SQLFreeStmt (関数) 41, 84, 245 Speed Loader SQLGetAnyData (関数) 92 SQLGetCol Unicode 219 SQL ステートメント 型変換マトリックス 91 solidDB Light Client 上での実行 66 関数の説明 92 SQL ステートメント実行タイムアウト 355 Light Client 91 SQL データ型 SQLGetConnectAttr (関数) 239 変換の指定 SQLGetConnectOption (関数) 239 SQLGetCursorName (関数) 85, 240 SQLGetData 87, 93 SQLGetData (関数) 85, 243 別 結果セット 78 SQLGetDescField (関数) 240 SQLAllocConnect SQLGetDescRec (関数) 240 関数の説明 75 SQLGetDiagField (関数) 243 SQLAllocConnect (関数) 237 SQLGetDiagRec (関数) 243 SQLAllocEnv (関数) 76, 237 SQLGetEnvAttr (関数) 239 SQLAllocHandle (関数) 237 SQLGetFunctions (関数) 238 SOLAllocStmt SQLGetInfo (関数) 237 関数の説明 77 SQLGetStmtAttr (関数) 239 SQLAllocStmt (関数) 240 SQLGetStmtOption (関数) 239 SQLBindCol SQLGetTypeInfo (関数) 238 SQLInput インターフェース 関数の説明 42 SQLBindCol (関数) 242 メソッド 105 SQLBindParameter (関数) 240 SQLMoreResults (関数) 243 SOLBrowseConnect (関数) 237 SQLNativeSQL (関数) 241 SQLBulkOperations (関数) 243 SQLNumParams (関数) 241 SQLCancel (関数) 245 SQLNumResultCols (関数) 89, 241 SOLCloseCursor (関数) 245 SQLOutput インターフェース SOLColAttribute (関数) 242 メソッド 105 SQLColAttributes (関数) 242 SQLParamData (関数) 241 SQLColumnPrivileges (関数) 244 SQLParamOptions (関数) 240 SQLColumns (関数) 244 SQLPrepare (関数) 89, 240 SQLConnect (関数) 77, 237 SQLPrimaryKeys (関数) 244 SQLCopyDesc (関数) 240 SQLProcedureColumns (関数) 244 SQLData インターフェース SQLProcedures (関数) 244 メソッド 105 SQLPutData (関数) 241 SQLDataSources (関数) 238 SQLRowCount (関数) 90, 241 SQLDescribeCol (関数) 78, 242 SQLSetConnectAttr (関数) 239 SQLDescribeParam (関数) 241 SQLSetConnectOption (関数) 239 SQLDisconnect (関数) 80, 246 SOLSetCursorName (関数) 90, 240 SQLDriverConnect (関数) 237 SQLSetDescField (関数) 240 SQLDrivers (関数) 239 SQLSetDescRec (関数) 240 SQLEndTran (関数) 245 SQLSetEnvAttr (関数) 239 SQLSetParam (関数) 240

SQLSetParamValue Unicode 関数の説明 92 エンコード形式 216 Light Client 91 準拠 215 SQLSetPos (関数) 41, 243 ストリング関数 223 SQLSetScrollOptions (関数) 240 セットアップ 217, 223 SQLSetStmtAttr (関数) 42, 239 説明 215 動的カーソル 43 データ格納用の列の作成 217 データのロード 217, 219 SQLSetStmtOption (関数) 239 データベース・エンティティー名での使用 217 SQLSpecialColumns (関数) 245 SQLStatistics (関数) 245 標準 216 SQLTablePrivileges (関数) 245 変換 221 変数とバインディング 223 SQLTables (関数) 245 SQLTransact (関数) 91, 245 文字変換 223 SQL_BIGINT ユーザー名とパスワード 217 solidDB Light Client によるサポート対象外 79 solidDB JDBC ドライバー 223 SQL_BIT 79 solidDB ODBC API 223 solidDB ODBC ドライバー 223 SQL_CLOSE SQLFreeStmt() 関数呼び出しのオプション 41 solidDB SQL エディター 219 SQL_C_BIT solidDB エクスポート 219 SQL_C_BIT 型の C 変数のバインディング 307, 320 solidDB データ・ディクショナリー 219 solidDB リモート制御 219 SQL_C_DEFAULT 使用の回避 297 Speed Loader 219 unixODBC 25 SQL_DELETE SQLSetPos() 関数呼び出しのオプション 41 UseEncryption (パラメーター) 363 SQL_NTS USER (関数) 348 NULL 終了ストリング 333 UTF-16 SQL_POSITION 説明 216 SQLSetPos() 関数呼び出しのオプション 41 UTF-8 SQL_ROWSET_SIZE 説明 216 SQLSetStmtAttr() 関数呼び出しのオプション 42 SQL_UPDATE W SQLSetPos() 関数呼び出しのオプション 41 SQRT (関数) 342 WebSphere Statement インターフェース 互換性 112 メソッド 105 WEEK (関数) 346 StatementCache (パラメーター) 363 Struct インターフェース solidDB JDBC ドライバー 105 SUBSTRING (関数) 339 YEAR (関数) 347 Т TAN (関数) 342

TAN (関数) 342 TC 情報 19 TIMESTAMPADD (関数) 345 TIMESTAMPDIFF (関数) 346 Trace (パラメーター) 364 TraceFile (パラメーター) 365 TRIM (関数) 339 TRUNCATE (関数) 342

U

UCASE (関数) 339

特記事項

Copyright © Solid Information Technology Ltd. 1993, 2010.

All rights reserved.

Solid Information Technology Ltd. または International Business Machines Corporation の書面による明示的な許可がある場合を除き、本製品のいかなる部分も、いかなる方法においても使用することはできません。

本製品は、米国特許

6144941、7136912、6970876、7139775、6978396、7266702、7406489、7502796、および 7587429 により保護されています。

本製品は、米国輸出規制品目分類番号 ECCN=5D992b に指定されています。

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

₹242-8502

神奈川県大和市下鶴間1623番14号 日本アイ・ビー・エム株式会社 法務・知的財産 知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。 IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的 に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。 IBM は予告なしに、随 時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を 行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のた め記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありませ ん。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありませ ん。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うこと のない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとしま す。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプロ グラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の 相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする 方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Limited Office of the Lab Director 8200 Warden Avenue Markham, Ontario L6G 1C7 CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができま すが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、 IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれ と同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定された ものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。 一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値 が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一 部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があ ります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要がありま す。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公 に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っ ておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要 求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製 品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回 される場合があり、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的 創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

- © (お客様の会社名) (西暦年)。このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。
- © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

商標

IBM、IBM ロゴ、ibm.com®、Solid、solidDB、InfoSphere、DB2®、Informix®、および WebSphere は、International Business Machines Corporation の米国およびその他の国 における商標です。これらおよび他の IBM 商標に、この情報の最初に現れる個所で商標表示(® または ™) が付されている場合、これらの表示は、この情報が公開された時点で、米国において、IBM が所有する登録商標またはコモン・ロー上の商標であることを示しています。このような商標は、その他の国においても登録商標またはコモン・ロー上の商標である可能性があります。現時点での IBM の商標リストについては、「Copyright and trademark information」(www.ibm.com/legal/copytrade.shtml) をご覧下さい。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Sun Microsystems, Inc.の米国およびその他の国における商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft および Windows は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

IBW.

Printed in Japan

SC88-8167-01



日本アイ·ビー・エム株式会社 〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21